

熊本県合志町文化財調査報告第2集

豊岡宮本横穴群

豊岡小学校跡地法面保護工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2006

合志町教育委員会

熊本県合志町文化財調査報告第2集

豊岡宮本横穴群

豊岡小学校跡地法面保護工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2006

合志町教育委員会



豊岡宮本横穴群全景



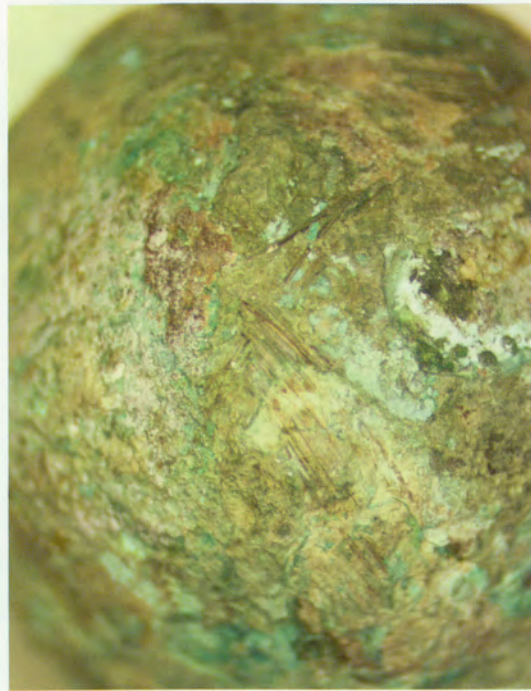
3号墓右屍床人骨・遺物出土状況



装身具



2号墓左屍床出土鉄鏃31茎部(矢柄)



3号墓右屍床出土空玉15



3号墓左屍床出土錫製耳環片35



11号墓右屍床出土耳環2

序 文

平成15年10月、旧豊岡小学校用地の北側を町が擁壁工事のために法面の掘削を始めたところ、防空壕に似た空洞が数基確認されました。町では古墳の可能性があると見て工事を一時中断し、県文化課の診断を仰いだところ墳墓跡だとの判断をいただき、擁壁工事を延期して調査を行いました。

豊岡宮本横穴群と命名をして調査を始めたのは、平成16年3月からであります。12基の横穴が確認され、横穴の中からは人骨を始め副葬品と思われる装身具や当時の生活用品など多数出土しました。この横穴群を調査していただいた山口県土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長の松下孝幸先生や筑波大学の澤田正昭教授の鑑定によると、非常に価値のある横穴群だとの評価を頂いております。現在、教育委員会ではこの貴重な文化財である「豊岡宮本横穴群」を住民の皆様にも常時見ていただけるような保存方法を検討しているところであります。

本冊子は8ヶ月にわたる調査の結果を纏めたもので、調査員の米村大氏や杉井涼子氏のお手を煩わせました。この報告書が横穴群の理解を深めるとともに、町民の皆様が文化財の理解が更に深まることを期待するものであります。

最後に、本横穴群の調査に多くの方のご協力を賜りました。紙上を借りて厚くお礼を申し上げます。

平成18年2月

合志町教育委員会教育長 藤 井 鴻

例 言

1. 本書は、熊本県菊池郡合志町豊岡312-2番地に所在する豊岡宮本横穴群についての埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成16年3月1日～10月29日にかけて継続的に行った。
3. 発掘調査は合志町教育委員会が実施した。調査担当は米村大(文化財調査員)、杉井涼子(文化財調査補助員)である。
4. 調査地における実測作業は主に杉井、米村が行い、調査区の遺構配置図は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
5. 出土した人骨の実測と取り上げは松下孝幸氏(土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長)に依頼した。
6. 調査地における写真撮影は米村が行い、主な遺構は熊本県文化課に御協力頂いた。空中写真は九州航空株式会社に委託した。
7. 整理作業は合志町総合センターヴィーブルにおいて行った。
8. 遺物の実測は米村、杉井で行い、浄書を杉井が行った。
9. 鉄製品のX線撮影と蛍光X線分析は福岡市埋蔵文化財センターに依頼し、遺物の保存処理は熊本県文化財資料室に依頼した。
10. 遺物の写真撮影は熊本県文化課に御協力頂いた。巻頭図版4は福岡市埋蔵文化財センターの実体顕微鏡による撮影である。
11. 遺物、写真、図面は合志町総合センターヴィーブル資料館収蔵庫において保管している。
12. 土色などの色調は、『新版 標準土色帖』(1967年 日本色研事業株式会社発行)に従った。
13. 本書の執筆は第I章第1節を坂本浩一郎が担当し、第III章第3節の各出土遺物・第4節の3. 副葬品を杉井が担当し、その他を米村が担当し編集した。附章は松下孝幸氏(土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長)より賜った。

凡 例

1. 現地での実測図は、以下の縮尺で行い本書収録の際には以下の縮尺で作成した。

| | | |
|---------|----------|----------|
| 遺構配置図 | 現地100分の1 | 本書300分の1 |
| 遺構実測図 | 現地20分の1 | 本書50分の1 |
| 遺物出土状況図 | 現地10分の1 | 本書20分の1 |
2. 本書における遺物は鉄製品2分の1、装身具3分の2、土器3分の1、閉塞石20分の1の縮尺で掲載する。

目 次

巻頭カラー

序文

例言・凡例

第I章 はじめに

| | |
|--------------|---|
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査体制 | 1 |
| 第3節 調査の方法と経過 | 2 |
| 1. 調査の方法 | 2 |
| 2. 調査の経過 | 2 |

第II章 遺跡の環境

| | |
|---------------|---|
| 第1節 遺跡の位置と環境 | 4 |
| 第2節 周辺の古墳について | 5 |

第III章 調査成果

| | |
|---------------|----|
| 第1節 遺跡の概要 | 9 |
| 第2節 遺構の名称 | 11 |
| 第3節 横穴と出土遺物 | 12 |
| 第4節 まとめ | 50 |
| 1. 研究史 | 50 |
| 2. 形態分類と築造の変遷 | 50 |
| 3. 副葬品 | 51 |
| 4. 階層性 | 52 |
| 5. 埋葬様式 | 52 |
| 6. 築造時期 | 53 |
| 7. おわりに | 53 |

| | |
|---|----|
| 附 章 熊本県合志町豊岡宮本横穴群出土の古墳人骨(土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 松下孝幸) | 57 |
|---|----|

写真図版

あとがき

報告書抄録

挿図目次

| | | | | | |
|------|------------------|----|------|--------------------------------|----|
| 第1図 | 遺跡分布図 | 6 | 第29図 | 5号墓右屍床出土遺物 | 32 |
| 第2図 | 遺跡周辺図 | 9 | 第30図 | 5号墓左屍床出土遺物 | 33 |
| 第3図 | 豊岡宮本横穴群遺構配置図 | 10 | 第31図 | 5号墓奥屍床出土遺物 | 33 |
| 第4図 | 横穴の部分名称 | 11 | 第32図 | 5号墓通路部出土遺物 | 34 |
| 第5図 | 1号墓実測図 | 12 | 第33図 | 5号墓出土須恵器 | 34 |
| 第6図 | 2号墓実測図 | 13 | 第34図 | 6号墓実測図 | 35 |
| 第7図 | 2号墓遺物出土状況・土層断面図 | 14 | 第35図 | 7号墓実測図 | 35 |
| 第8図 | 2号墓土層断面図 | 15 | 第36図 | 8号墓実測図 | 36 |
| 第9図 | 2号墓右屍床出土遺物 | 16 | 第37図 | 8号墓遺物出土状況・土層断面図 | 37 |
| 第10図 | 2号墓左屍床出土遺物 | 16 | 第38図 | 8号墓出土遺物 | 38 |
| 第11図 | 2号墓奥屍床出土遺物 | 17 | 第39図 | 9号墓実測図 | 39 |
| 第12図 | 2号墓通路部出土遺物 | 17 | 第40図 | 9号墓人骨出土状況・土層断面図 | 39 |
| 第13図 | 3号墓実測図 | 18 | 第41図 | 10号墓実測図 | 40 |
| 第14図 | 3号墓遺物出土状況・土層断面図 | 19 | 第42図 | 10号墓遺物出土状況・土層断面図 | 41 |
| 第15図 | 3号墓土層断面図 | 20 | 第43図 | 10号墓土層断面・炭化物層(21a・b層)及び土器出土状況図 | 42 |
| 第16図 | 3号墓右屍床出土遺物 | 21 | 第44図 | 10号墓奥屍床出土遺物 | 43 |
| 第17図 | 3号墓左屍床出土遺物 | 22 | 第45図 | 10号墓出土土器 | 43 |
| 第18図 | 3号墓奥屍床出土遺物 | 23 | 第46図 | 11号墓実測図 | 43 |
| 第19図 | 3号墓通路部出土遺物 | 23 | 第47図 | 11号墓人骨出土状況図 | 44 |
| 第20図 | 4号墓実測図 | 24 | 第48図 | 11号墓右屍床出土遺物 | 44 |
| 第21図 | 4号墓土層断面図 | 25 | 第49図 | 12号墓実測図 | 45 |
| 第22図 | 4号墓右屍床出土遺物 | 26 | 第50図 | 12号墓人骨出土状況・土層断面図 | 46 |
| 第23図 | 4号墓左屍床出土遺物 | 27 | 第51図 | 12号墓土層断面図 | 47 |
| 第24図 | 4号墓奥屍床出土遺物 | 27 | 第52図 | 12号墓人骨出土状況図 | 47 |
| 第25図 | 4号墓通路部出土遺物 | 27 | 第53図 | 廃土出土須恵器 | 48 |
| 第26図 | 5号墓実測図 | 29 | 第54図 | 閉塞石実測図 | 49 |
| 第27図 | 5号墓遺物出土状況・土層断面図 | 30 | | | |
| 第28図 | 5号墓上層面出土状況・土層断面図 | 31 | | | |

表目次

| | | | | | |
|-----|---------------|----|-----|-------|----|
| 第1表 | 合志町の遺跡 | 7 | 第4表 | 耳環観察表 | 56 |
| 第2表 | 周辺の古墳時代・古代の遺跡 | 8 | 第5表 | 土器観察表 | 56 |
| 第3表 | 玉類観察表 | 55 | | | |

図版目次

- 巻頭図版1 豊岡宮本横穴群全景
- 巻頭図版2 3号墓右屍床人骨・遺物出土状況
- 巻頭図版3 装身具
- 巻頭図版4 2・3・11号墓出土遺物(実体顕微鏡写真)
- 図版 1 (1) 上空より合志町を望む
(2) 豊岡宮本横穴群遠景
- 図版 2 (1) 1号墓
(2) 2号墓羨門側から玄室を覗く
(3) 2号墓左屍床奥側・奥屍床左隅
(4) 2号墓右屍床奥側・奥屍床右隅
- 図版 3 (1) 2号墓右屍床・玄門
(2) 2号墓左屍床・玄門
(3) 2号墓右屍床人骨出土状況
(4) 2号墓左屍床人骨出土状況
- 図版 4 (1) 2号墓奥屍床人骨出土状況
(2) 3号墓前庭部側から玄室を覗く
(3) 3号墓玄室左側
(4) 3号墓玄室右側
- 図版 5 (1) 3号墓右屍床玄門付近
(2) 3号墓左屍床玄門付近
(3) 3号墓右屍床人骨・貝輪出土状況
(4) 3号墓左屍床人骨・遺物出土状況
- 図版 6 (1) 3号墓奥屍床左側人骨出土状況
(2) 4号墓羨門～通路部
(3) 5号墓右屍床
(4) 5号墓左屍床
- 図版 7 (1) 5号墓通路部遺物出土状況
(2) 6号墓
(3) 7号墓
(4) 8号墓
- 図版 8 (1) 9号墓
(2) 9号墓人骨出土状況
(3) 10号墓
(4) 11号墓
- 図版 9 (1) 11号墓人骨出土状況
(2) 12号墓
(3) 12号墓右屍床
(4) 12号墓左屍床
- 図版10 (1) 2号墓右屍床人骨・遺物出土状況
(2) 2号墓右屍床遺物出土状況
(3) 2号墓左屍床人骨出土状況
(4) 2号墓奥屍床人骨・遺物出土状況
(5) 3号墓右屍床遺物出土状況
(6) 4号墓奥屍床遺物出土状況
(7) 4号墓右屍床出土状況
(8) 4号墓左屍床遺物出土状況
- 図版11 (1) 4号墓通路部土層堆積状況
(2) 5号墓右屍床5層上面須恵器出土状況
(3) 5号墓右屍床遺物出土状況
(4) 5号墓右屍床遺物出土状況
(5) 5号墓左屍床人骨・遺物出土状況
(6) 5号墓羨門～玄門通路に設置された石
(7) 7号墓奥屍床
(8) 7号墓側壁工具痕
- 図版12 (1) 8号墓奥屍床人骨・遺物出土状況
(2) 10号墓土層堆積状況
(3) 10号墓21層検出状況
(4) 10号墓奥屍床遺物出土状況
(5) 11号墓右屍床人骨出土状況
(6) 11号墓右屍床人骨・遺物出土状況
(7) 11号墓奥屍床人骨出土状況
(8) 11号墓人骨取り上げ風景
- 図版13 (1) 12号墓左屍床人骨出土状況
(2) 12号墓羨門～玄門通路炭化物・石出土状況
(3) 12号墓通路部人骨出土状況
(4) 12号墓前庭部～墓道部土層堆積状況
(5) 3号墓出土閉塞石1
(6) 廃土出土石材2
(7) 廃土出土石材3
(8) 横穴群発見時全景
- 図版14 (1) 2・3号墓出土鉄鏃
- 図版15 (1) 2・3号墓出土刀子、3号墓出土轡
(2) 4・5号墓出土鉄鏃、5号墓出土刀子
- 図版16 (1) 5・8・10号墓出土鉄製品
- 図版17 (1) 3号墓出土貝輪
(2) 5号墓・廃土出土須恵器

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

今回、調査した豊岡宮本横穴群は町の北部にあり、原口新城跡北側の斜面に位置する。本横穴群は平成15年10月に町企画課において行った原口新城跡の北側斜面における法面保護工事の際に発見された。この工事箇所にあたる急勾配の斜面は竹林となっており、数箇所小規模な崩落が以前より起こっていた。そのため法面保護工事を実施したものであるが、包蔵地外であったため事前の試掘調査等を行っていなかった。不時の発見であったことから県文化課と協議し急遽、発掘調査を開始したものである。

調査開始時の段階では調査後の保存については未定であったが結果的に人骨や副葬品は比較的良好な保存状態で出土したことから保存検討委員会を設けた。本横穴群は、目に見える形で現存する町内唯一の遺跡であり、本町の歴史を検証する上でも貴重な遺跡として捉えることができ、法面整備はもとより周辺の整備も行い地域振興や学習の場として活用を目的として保存を決定した。

第2節 調査体制

発掘調査及び整理報告書作成（平成15・16・17年度）

調査主体 合志町教育委員会

調査責任者 藤井 鴻 （教育長）

調査事務局 合志良一 （前生涯学習課課長）

山戸宇機夫（生涯学習課課長）

青木和子（生涯学習課課長補佐）

中嶋民智（前社会教育係係長）

坂本浩一郎（社会教育係係長）

村上洋美（前文化財担当主事）

仁田真由美（文化財担当主事）

調査担当者 米村 大（文化財調査員）

杉井涼子（文化財調査補助員）

調査指導者 松下孝幸（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）、渡辺一徳（熊本大学）、杉井健（熊本大学）、木下尚子（熊本大学）、中原幹彦（植木町教育委員会）、美濃口雅朗（熊本市教育委員会）、比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）、片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）、朽津信明（東京文化財研究所）

調査協力者 地元の方々、合志中学校生徒のみなさん、勝又俊一、水上浩司、嶋田正守、西住欣一郎、野田拓治、古森政次、中村幸四郎、浦田信智、長谷部善一、池田朋生、宮崎敬士、角田賢治、谷川亜紀子、村田百合子、西慶喜、荒木隆宏、木村龍生、上高原聡、宇多員将、西山由美子、洲崎明子、内田成香、水上大、早田利宏、園田恭子、合志町文化財保護委員会、田島土木（敬称略）

発掘作業員 藤木敏章、嶋田佐和子、青木よし子、青木吉子、松岡千草、坂本妙子

第3節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

本横穴群の名称は熊本県遺跡地図登録において豊岡宮本横穴群（とよおかみやもとよこあなぐん）としてすでに登録されていたこと、学史的に「横穴」ということから登録した名称を用いた。ただし字名の「宮本」を地元の人は「みやのもと」と呼んでいることから本来はこれに従うべきであるが変更は行っていない。本横穴群はいずれも埋葬施設と判断し「〇〇号墓」としている。

調査対象面積は約1000㎡、最終的に確認された横穴は12基である。調査期間は平成16年3月1日～10月29日である。横穴群は現地盤より約2mの崖面中位にほぼ列を成すことから足場を組み、さらに調査が行いやすいように踊り場を各横穴の高さに合わせ設置した。また保存の方向で検討していたことから風雨や陽射しを避ける目的で天幕状の屋根を設ける。調査は横穴の工事廃土を除去し手前の羨門側より流入土を半裁し土層堆積を記録するとともに通路部の追葬面の有無を確認し、屍床部における堆積土を比較しながら掘り進めた。各屍床部を4分割しさらに縦・横断面の土層堆積を確認し層位ごとに排土を現地で洗浄した。通路部においてもこの方法を行った。屍床部において出土した遺物は出土位置を図面・写真で記録後、取り上げた。人骨については松下孝幸氏（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）に取り上げを依頼した。各屍床の計測値は最大長で計測を行い、工具痕の観察により築造方法及び構造について捉えることを努めた。

2. 調査の経過

2月第4週（23～28日）2月24日お祓い（真教寺住職）

3月第1週（1～5日）4・5号墓羨門～玄門通路流入土の半裁、1・6・7・8・9号墓廃土除去、11号墓の人骨を確認、2・3・11号墓の埋土掘削、ブルーシートを各横穴に設置

第2週（8～13日）4級基準点測量及び遺構配置図のためポイント取り込み（埋蔵文化財サポートシステム）
各横穴の主軸線を設定、13日2・3・11号墓人骨出土状況撮影

第3週（15～18日）15日2号墓人骨取り上げ（松下孝幸氏）2・3・11号墓羨門～玄門通路半裁、3・11号墓屍床部掘削、2号墓横断図作成・3号墓通路部縦断図作成、合志町議会議員視察

第4週（22～30日）22～25日3・11号墓人骨取り上げ（松下孝幸氏）

4月第1・2週（1～9日）2・3号墓遺物出土状況図作成

第3週（12～16日）15日2・9号墓人骨取り上げ（松下孝幸氏）

第4週（19～22日）22日合志小学校6年生見学、2・3号墓屍床部掘削、2号墓左屍床出土状況図作成、3号墓左屍床出土状況図作成

第5週（26～28日）27日2・3号墓撮影

5月第2週（6～7日）2号墓右屍床ガラス玉の検出、3号墓遺物取り上げ、3号墓屍床部掘削、鉄製品の保存処理を熊本県文化課に依頼

第3週（10～14日）10日2号墓奥屍床、3号墓左屍床、11号墓屍床部の掘削、合志中学生見学

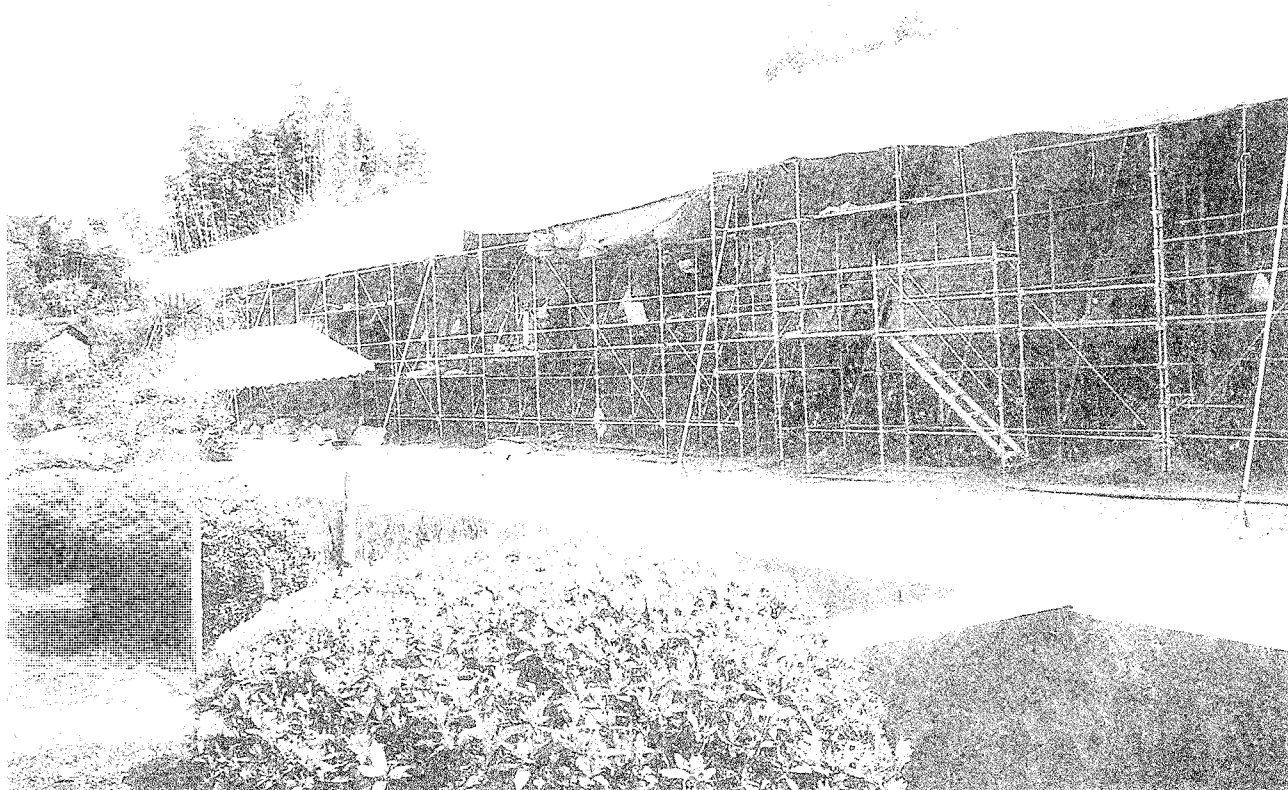
第4週（17～21日）19日3号墓撮影、2・4・5・9号墓縦断図作成、2・3号墓通路部掘削、2・4・5号墓羨門～玄門通路半裁

第5週（24～30日）24日YMCA児童見学、25日いきいき体験教室、26日ふるさと探訪バスツアー、2・4・5号墓羨門～玄門通路掘削、2号墓遺構実測、4・5号墓縦断図作成、11号墓完掘、27日2・11号墓撮影30日上庄区住民現地説明会

6月第1週（1～4日）10号墓炭化物層(21層)を検出、10号墓平面図及び断面図作成、5号墓通路部において人骨を確認

第2週（7～10日）8日町内の区長・公民館長見学、3号墓遺構実測、5・10号墓の屍床部掘削

- 第3週 (14～19日) 4・5・10号墓屍床部掘削、17日町議会議員視察、19日三つの木の家児童見学、3号墓遺構実測
- 第4・5週 (22～30日) 4・5・10号墓屍床部掘削
- 7月 第1週 (1～2日) 5号墓遺構実測、4号墓屍床部完掘
- 第2週 (5～9日) 10号墓土層断面図作成、10号墓完掘、4号墓遺構実測、7日女性セミナー見学、8号墓土層断面図作成、10号墓遺物出土状況図、5号墓屍床部下位層掘削
- 第3週 (12～16日) 7・8号墓屍床部掘削・完掘
- 第4週 (20～24日) 4・5号墓遺物取り上げ、24日町民現地説明会
- 第5週 (26～30日) 4・5・7・8号墓屍床部床面検出
- 8月 第1週 (2～5日) 4・5・10号墓完掘、4・7号墓遺構実測
- 第2週 (9～12日) 5号墓羨門～通路部完掘、7・10号墓遺構実測
- 第3週 (17～20日) 19～20日台風通過、6号墓掘削
- 第4週 (24～27日) 25日5・7～11号墓撮影、2号墓遺構実測、6号墓掘削、4号墓通路部完掘
- 9月 第1週 (2～3日)
- 第2週 (6～10日) 12号墓廃土除去、2号遺構実測
- 第3週 (13～17日) 14日福岡市埋蔵文化財センターにて鉄製品X線撮影、12号墓人骨検出、3号墓遺構実測
- 第4週 (21～25日) 25日現地説明会 (104名来訪)
- 10月 第1・2週 (1・4～8日) 6日12号墓人骨受け渡し (松下孝幸氏)、5号墓実測
- 第3週 (11～15日) 12号墓掘削、東壁面土層断面図、3号墓遺構実測
- 第4週 (18～22日) 18日2～5号墓主軸ポイント取り込み (埋蔵文化財サポートシステム)、1・6号墓遺構実測
- 第5週 (25～29日) 26日菊池史談会、28日合志中部保育園見学、29日片付け



第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と環境

合志台地は透水性が強く、雨水は地下に浸透することから、起伏の少ない傾斜の緩やかな地形である。菊池川水系である合志川は阿蘇外輪山の鞍岳を源とし、その合志川に流れ込む支流は台地を侵食する谷地形を形成している。本横穴群はこの侵食作用によって形成された台地の斜面部に位置し、北側には合志川支流である芋扱川が流れる。

台地上で営まれる農業は現在、水利が発達し水田化されるが、近年まで畑作であった。本横穴群から見下ろせる谷地形では以前から水田化されていたようである。

以下の文章における遺跡名〈番号〉は第1表 合志町の遺跡、第2表 周辺の高墳時代・古代の遺跡番号を指す。また位置については第1図 遺跡分布図を参照されたい。

町内では旧石器時代の遺跡は発見されておらず、縄文時代早期の押型文土器が出土した轟遺跡〈24〉、野付遺跡〈8〉が最古となっている。御手洗遺跡は縄文時代後期「御手洗式土器」の標式遺跡である。桑鶴遺跡では縄文晩期～弥生時代にかけての住居跡が確認されており、坂本経亮氏の記録によれば、縄文後期の粘土の圧痕が残る土器片が出土したとある。

弥生時代において菊池川流域では県下でも支石墓が集中する地域であり、伯楽屋敷跡の安山岩の露頭はこの支石墓の可能性が指摘されている。弥生後期の甕棺より南海産のゴホウラ製腕輪が出土した御領遺跡〈23〉、弥生時代中期～後期の集落があったと考えられる陣ノ内遺跡〈10〉・宮ノ前遺跡〈11〉がある。木瀬遺跡では弥生時代後期の住居跡から「S字文」鏡が出土している。近接する蛇ノ尾城跡〈26〉からも弥生時代終末～高墳時代初頭の住居跡が確認されている。水場の近い台地縁辺部に集落が複数営まれていたと推測される（註1）。

豊岡宮本横穴群〈25〉の位置する芋扱川から鶴川と合流する付近で名称を変える塩浸川上流域右岸には中林古墳〈1〉が造営され円墳が2基認められる。また上庄川流域右岸の後川辺にはヤンボシ塚古墳〈5〉を含む円墳2基と道路工事の際に石蓋土壙墓が発見されている。千経塚遺跡〈7〉では発掘調査が行われ方形周溝墓6基検出されている。地元で「虚空蔵さん」と呼ばれる虚空蔵横穴〈15〉には虚空蔵菩薩が祀られており、形状から横穴ではないかと推測されている（註2）。

貞観元（859）年合志郡から山本郡が分立し肥後国は14郡になる（『日本三代実録』巻2）。『和名類聚抄』によれば合志郡は合志郷、小川郷、山道郷、鳥嶋郷、口益郷、鳥取郷の6郷からなり比定地は諸説あり定まっていない。郡衙の推定地は西合志町大字合生字小合志〈42〉をはじめ奈良時代の銅製帯金具（丸鞆）や骨臓器が出土した高木原遺跡〈41〉（西合志町）、方形に巡る溝、掘建柱建物、骨臓器、円面硯、輸入陶磁器が出土した千束遺跡〈27〉（合志町）、9世紀中頃の口字形の配置をもつ掘建柱建物群が検出され、「正」「大正」「西正」「生」などの墨書土器が大量に出土した上鶴頭遺跡〈39〉（七城町）などが挙げられる（註3）。古代寺院では9世紀後半代頃創建の坂口廃寺〈43〉（泗水町）がある。

古代の官道では延喜式駅路成立以前の鞠智城に通ずるルートの「車路」が現在国道387号線（菊池往還）に想定されている。高木原台地に立地する高木原遺跡〈41〉と千束遺跡〈27〉の間に車路が考えられており、菊池街道と近世の植木―大津街道は大池付近で交差し群山の北側を通るルートが延喜式駅路豊肥支路と推定されている（註4）。正暦三（992）年に合志荘が太宰府安楽寺の荘園となり長徳三（997）年には堯海上人が護王山医音寺を開く。

中世には竹迫氏が12世紀末合志郡地頭職に就く。その後竹迫城を築城し永正七（1510）年合志氏が入城する。原口新城は一部、発掘調査が行われ15世紀～16世紀と思われる掘建柱建物が確認されている。竹迫城絵図（文政八年）は竹迫～合志氏に至る時代の城跡や館跡、堀跡などが記されており現況でも確認できる痕跡が認められる。

第2節 周辺の古墳について

ここでは合志川流域における古墳時代の古墳・横穴について概観したい。

塩浸川下流域左岸では黒松古墳群<⑫>をはじめ小合志古墳<⑯>、アブミ塚古墳群<⑪>、立割横穴群<⑮>、荻の迫横穴群<⑳>、塚口横穴群<㉑>、平野横穴群<⑩>がみられる。黒松古墳群<⑫>は6基から成り、1号墓のヌレ観音古墳は直径約40m、高さ約7mで規模の大きい円墳である。

その対岸にあたり合志川に挟まれた高木原台地の丘陵には生坪古墳群<⑬>（生坪塚山古墳、生坪石立古墳、生坪箱式石棺）、迫原長塚古墳<⑭>、迫原ハヤマ古墳<⑰>、迫原箱式石棺<⑱>からは直刀など多数の副葬品が出土している。八反田遺跡、八反原遺跡<⑦>では発掘調査が行われ円形・方形周溝墓が検出されている。

上庄川右岸には後川辺のヤンボシ塚古墳に近接する合志川との合流付近に南原古墳1・2号<⑳・㉑>、西谷古墳<㉒>が立地する。

上生川流域左岸では瀬吐古墳<④>、永田石棺<③>、汐浸石棺<⑤>の対岸に笹塚古墳<⑥>があり、城敷古墳<②>と集中する。その上流部にフタゴ塚古墳<⑧>がある。上生上ノ原遺跡<①>では発掘調査が行われ箱式石棺より短甲が出土している。

小野川流域では前方後円墳が集中する地域であり塚園古墳群、石川山古墳群、横山古墳さらに上生川合流付近に高熊古墳がある。

合志川流域右岸の北住吉では現状では確認できないが狐塚古墳<⑳>、備後塚古墳<㉑>、長塚古墳<㉒>があり対岸に南住吉古墳が立地する。また平町横穴群、硯町横穴群<㉓>、今寺横穴群<㉔>が富納側にかけて残る。さらに右岸の久米から田島にかけて村古古墳<㉕>、富出分古墳<㉖>、久米若宮古墳<㉗>、高江出分塚山古墳<㉘>、陣塚古墳、岡山大塚古墳<㉙>、岡山小塚古墳<㉚>が点在している。久米若宮古墳では家形石棺から馬具が出土しており5世紀後半の時期が比定されている。

合志川流域の古墳・横穴については調査事例が少ないことや未調査であることから不明な点が多いが現況での分布を見る限りでは流域ごとにある程度のまとまりがあることはいえよう。本横穴群の周囲には小規模な古墳が点在する程度であって塩浸川下流域の黒松古墳群<⑫>、生呼古墳群<⑬>からは4.5kmの距離にある。塩浸川流域においては横穴群の分布が左岸に限られることは興味深い。また、山本郡の分立した合志郡の範囲（合志・西合志・泗水・旭志・菊陽・大津町）において前方後円墳は認められない。

『日本書記』によれば持統十（696）年「追大弑を以って、伊豫国風速郡の物部薬と肥後国皮石郡の人壬生諸石に授く。並びに人ごとに、緇四匹、糸十紵、布廿口、稲一千束、水田四町を賜ふ。戸の調役を復す。以って久しく唐地に苦しむを慰む。」白村江の戦いに出兵し、唐軍の捕虜となり33年を経て帰国した皮石郡の壬生諸石の労に報いた記事がある。壬生部は『日本書記』推古十五（607）年に設置されたとある。また、壬生部は6世紀後半代に置かれたという見解もある（註5）。壬生部の推定される位置は字名から植木町亀甲の及（明治には生部）、西合志町の「上生」、「生坪」、「弘生」、合志町町内でも「弘生」、「上生道」がみられる（註6）。七城町上鶴頭遺跡出土の墨書土器には「生」の文字がみられ、壬生部との関連性が窺える。

註

（註1）合志町史編纂協議会1988「文化財編」『合志町史』合志町

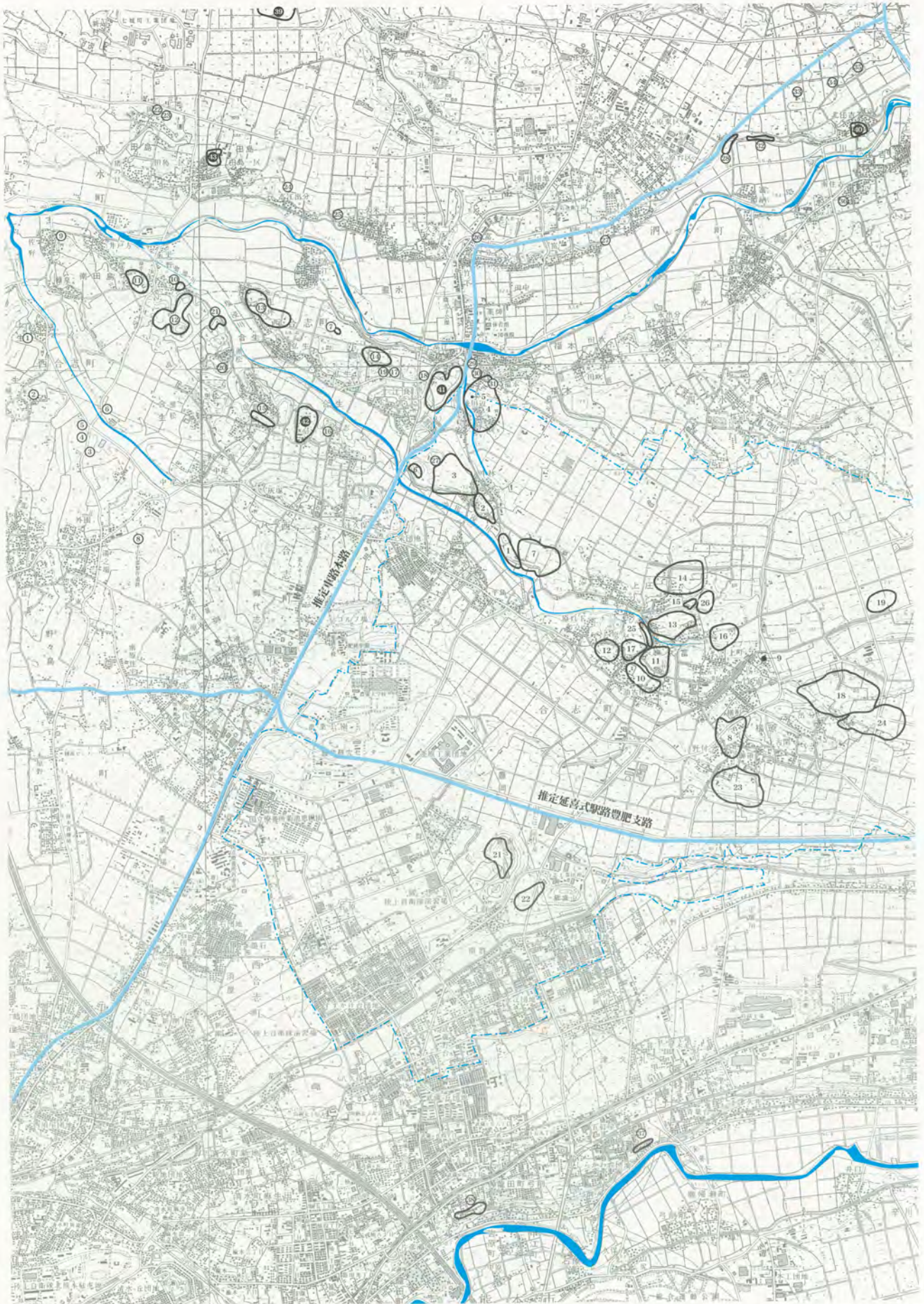
（註2）虚空蔵菩薩を祀る穴は横長のプランであり周囲の崖面は凝灰岩が露出しており見る限りでは横穴が埋没している状況は見受けられない。中世の墓地である「やぐら」の可能性があると美濃口雅朗氏にご教示頂いた。

（註3）橋本康夫・鶴嶋俊彦1983『上鶴頭遺跡』熊本県教育委員会

（註4）鶴嶋俊彦1997「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』第7号

（註5）岸俊男1996「光明立後の史的意義」『日本古代政治研究』

（註6）西合志町史編纂委員会1995「第6章 合志郡の設置」『西合志町史』2巻 西合志町



第1図 遺跡分布図

(S: 1/50,000)

第1表 合志町の遺跡

| No. | 市町村 | 遺跡番号 | 遺跡名 | 所在地 | 時代 | 種別 | 備考 |
|-----|-----|------|---------|---------------|-------|-----|-----------------------|
| 1 | 405 | 1 | 中林古墳 | 合志町 栄(通称中林) | 古墳 | 古墳 | 円墳2基、うち1基は勢将塚と呼ばれている |
| 2 | 405 | 2 | 中林遺跡 | 合志町 栄(通称中林) | 縄文 | 包蔵地 | 御領式土器 |
| 3 | 405 | 3 | 中林西原遺跡 | 合志町 栄 西原 | 弥生 | 包蔵地 | 須玖式土器 |
| 4 | 405 | 4 | 後川辺遺跡 | 合志町 栄(通称後川辺) | 古墳 | 包蔵地 | 後川辺権現原遺跡、野辺田式土器 |
| 5 | 405 | 5 | ヤンボシ塚古墳 | 合志町 栄 村園 | 古墳 | 古墳 | 円墳 |
| 6 | 405 | 6 | 千束城跡 | 合志町 栄 城山 | 中世 | 城 | |
| 7 | 405 | 7 | 千経塚遺跡 | 合志町 上庄 千経塚 | 弥生・他 | 集落 | 県調査 |
| 8 | 405 | 8 | 野付遺跡 | 合志町 福原 野付 | 縄文・他 | 包蔵地 | 押型文、黒髪式甕棺 |
| 9 | 405 | 9 | 医音寺跡 | 合志町 竹迫 屋敷 | 中世 | 寺院 | 古塔、一字一石経塔 |
| 10 | 405 | 10 | 陣ノ内遺跡 | 合志町 幾久富 陣ノ内 | 弥生・他 | 集落 | 甕棺、環壕集落 |
| 11 | 405 | 11 | 宮ノ前遺跡 | 合志町 上庄 宮前 | 弥生 | 包蔵地 | 須玖式・黒髪式土器・土師器 |
| 12 | 405 | 12 | 小園遺跡 | 合志町 豊岡 小園 | 縄文～弥生 | 包蔵地 | 御領式土器、石器・弥生土器 |
| 13 | 405 | 13 | 竹迫城跡 | 合志町 上庄 城山 | 中世 | 城 | 中世城 |
| 14 | 405 | 14 | 木瀬遺跡 | 合志町 上庄(通称木瀬) | 弥生 | 包蔵地 | 竪穴式住居跡、S字文鏡、重弧文土器・石包丁 |
| 15 | 405 | 15 | 虚空蔵横穴 | 合志町 上庄 | 古墳? | 古墳? | 中世のやぐらの可能性あり |
| 16 | 405 | 16 | 御手洗遺跡 | 合志町 幾久富 御手洗 | 縄文・他 | 包蔵地 | 縄文後期・御手洗式土器・土師器 |
| 17 | 405 | 17 | 原口新城跡 | 合志町 豊岡 宮本 | 中世 | 城 | 県調査 |
| 18 | 405 | 18 | 桑鶴遺跡 | 合志町 竹迫 福原 | 縄文・弥生 | 包蔵地 | 昭和50年圃場整備、盛土で残す |
| 19 | 405 | 19 | 八久保遺跡 | 合志町 竹迫(通称八久保) | 縄文 | 包蔵地 | 阿高式・御領式 |
| 20 | 405 | 20 | 竹迫宇土遺跡 | 合志町 竹迫 宇土 | 縄文 | 包蔵地 | 県調査、三方田式、遺跡分布図未掲載 |
| 21 | 405 | 21 | 群山遺跡 | 合志町 豊岡(通称群山) | 古代・中世 | 包蔵地 | 骨蔵器 |
| 22 | 405 | 22 | 飯高山遺跡 | 合志町 幾久富 飯高 | 弥生 | 包蔵地 | |
| 23 | 405 | 23 | 御領遺跡 | 合志町 竹迫・福原 | 縄文～弥生 | 包蔵地 | 土偶・御領式土器、甕棺よりゴホウラ製貝輪 |
| 24 | 405 | 24 | 霽遺跡 | 合志町 豊岡・福原 | 弥生 | 包蔵地 | 押型文・黒髪式土器 |
| 25 | 405 | 25 | 豊岡宮本横穴群 | 合志町 豊岡 宮本 | 古墳 | 古墳 | 12基 |
| 26 | 405 | 26 | 蛇ノ尾城跡 | 合志町 上庄(通称蛇ノ尾) | 弥生 | 包蔵地 | 竪穴式住居跡、中世城の可能性 |
| 27 | 405 | | 千束遺跡 | 合志町 栄 城山 | 古代 | | 県調査 |

※市町村・遺跡番号は熊本県編纂の遺跡地図番号に対応

第2表 周辺の古墳時代・古代の遺跡

| No. | 市町村 | 遺跡番号 | 遺跡名 | 所在地 | 時代 | 種別 | 備考 |
|-----|-----|------|----------|--------------|-------|-----|-----------------------|
| ① | 406 | 8 | 上生上ノ原遺跡 | 西合志町上生上ノ原 | 古墳、他 | 古墳 | 円形周溝墓4基、箱式石棺 |
| ② | 406 | 11 | 城敷古墳 | 西合志町上生城敷 | 古墳 | 古墳 | |
| ③ | 406 | 16 | 永田石棺 | 西合志町野々島永田 | 古墳 | 埋葬 | |
| ④ | 406 | 17 | 瀬吐古墳 | 西合志町野々島永田 | 古墳 | 古墳 | |
| ⑤ | 406 | 18 | 汐浸石棺 | 西合志町上生汐浸 | 古墳 | 埋葬 | |
| ⑥ | 406 | 19 | 笹塚古墳 | 西合志町上生笹塚 | 古墳 | 古墳 | 円墳 |
| ⑦ | 406 | 41 | 八反原遺跡 | 西合志町合生弘生 | 弥生・古墳 | 集落 | 方形周溝墓10基、円墳19基、箱式石棺2基 |
| ⑧ | 406 | 44 | フタゴ塚古墳 | 西合志町野々島天神免 | 古墳 | 古墳 | |
| ⑨ | 406 | 2 | 長塚古墳 | 泗水町南田島北原 | 古墳 | 古墳 | |
| ⑩ | 406 | 25 | 平野横穴群 | 泗水町南田島羽山 | 古墳 | 古墳 | |
| ⑪ | 406 | 26 | アブミ塚古墳群 | 泗水町南田島宮の迫 | 古墳 | 古墳 | |
| ⑫ | 407 | 27 | 黒松古墳群 | 西合志町合生黒松 | 古墳 | 古墳 | |
| | 407 | | 1号墳 | 西合志町合生黒松 | 古墳 | 古墳 | 円墳直径40m、高さ7m ヌレ観音古墳 |
| | 407 | | 2号墳 | 西合志町合生黒松 | 古墳 | 古墳 | 円墳 |
| | 407 | | 3号墳 | 西合志町合生黒松 | 古墳 | 古墳 | 円墳 |
| | 407 | | 4号墳 | 西合志町合生黒松 | 古墳 | 古墳 | 円墳、鬼塚古墳 |
| | 407 | | 5号墳 | 西合志町合生黒松 | 古墳 | 古墳 | 円墳、塚口古墳 |
| | 407 | | 6号墳 | 西合志町合生黒松 | 古墳 | 古墳 | 円墳、稲荷さん古墳 |
| ⑬ | 407 | 28 | 生坪古墳群 | 西合志町合生 | 古墳 | 古墳 | |
| | 407 | | 生坪塚山古墳 | 西合志町合生漆崎 | 古墳 | 古墳 | 全長約60m、前方後円墳の可能性 |
| | 407 | | 生坪石立古墳 | 西合志町合生石立 | 古墳 | 古墳 | |
| | 407 | | 生坪箱式石棺 | 西合志町合生 | 古墳 | 埋葬 | |
| ⑭ | 407 | 32 | 迫原遺跡 | 西合志町合生迫原 | 古墳、古代 | 集落 | 方形周溝墓11基 |
| ⑮ | 407 | 30 | 立割横穴群 | 西合志町合生立割 | 古墳 | 古墳 | |
| ⑯ | 407 | 31 | 小合志古墳 | 西合志町合生小合志原 | 古墳 | 古墳 | |
| ⑰ | 407 | 33 | 迫原ハヤマ古墳 | 西合志町合生迫原 | 古墳 | 古墳 | 円墳、箱式石棺 |
| ⑱ | 407 | 35 | 迫原長塚古墳 | 西合志町合生迫原 | 古墳 | 古墳 | 箱式石棺 |
| ⑲ | 407 | | 迫原箱式石棺 | 西合志町合生迫原 | 古墳 | 埋葬 | 3号石棺より内行花文鏡出土 |
| ⑳ | 407 | | 萩の迫横穴群 | 西合志町合生萩迫 | 古墳 | 古墳 | |
| ㉑ | 407 | 40 | 塚口横穴群 | 西合志町合生塚口 | 古墳 | 古墳 | |
| ㉒ | 406 | 8 | 岡山大塚古墳 | 泗水町田島岡原 | 古墳 | 古墳 | |
| ㉓ | 406 | 9 | 岡山小塚古墳 | 泗水町田島岡原 | 古墳 | 古墳 | |
| ㉔ | 406 | 15 | 高江出分塚山古墳 | 泗水町豊水東原 | 古墳 | 古墳 | 家形石棺 |
| ㉕ | 406 | 18 | 久米若宮古墳 | 泗水町豊水西宅地 | 古墳 | 古墳 | 円墳 |
| ㉖ | 406 | 30 | 富出分古墳 | 泗水町吉富(通称宝町) | 古墳 | 古墳 | 箱式石棺 |
| ㉗ | 406 | 32 | 村吉古墳 | 泗水町吉富西宅地 | 古墳 | 古墳 | 石棺 |
| ㉘ | 406 | 34 | 今寺横穴群 | 泗水町富納野添 | 古墳 | 古墳 | |
| ㉙ | 406 | 39 | 西谷古墳 | 泗水町福本西谷 | 古墳 | 古墳 | |
| ㉚ | 406 | 40 | 南原古墳2号 | 泗水町福本南原(西) | 古墳 | 古墳 | 円墳 |
| ㉛ | 406 | 41 | 南原古墳1号 | 泗水町福本南原(東) | 古墳 | 古墳 | 箱式石棺 |
| ㉜ | 406 | 51 | 碓町横穴群 | 泗水町住吉碓町 | 古墳 | 古墳 | 須恵器 |
| ㉝ | 406 | 53 | 狐塚古墳 | 泗水町住吉狐塚 | 古墳 | 古墳 | |
| ㉞ | 406 | 54 | 備後塚古墳 | 泗水町住吉備後塚 | 古墳 | 古墳 | |
| ㉟ | 406 | 55 | 長塚古墳 | 泗水町住吉西古閑 | 古墳 | 古墳 | |
| ㊱ | 406 | 59 | 南住吉古墳 | 泗水町住吉古閑 | 古墳 | 古墳 | 石棺 |
| ㊲ | 404 | 20 | 今石横穴群 | 菊陽町津久礼今石 | 古墳 | 古墳 | |
| ㊳ | 201 | 96 | 弓削小坂横穴群 | 熊本市龍山町弓削小坂屋敷 | 古墳 | 古墳 | |
| ㊴ | 401 | 37 | 上鶴頭遺跡 | 七城町小野崎上鶴頭 | 古代 | 官衙 | |
| ㊵ | 406 | 58 | 住吉日吉神社 | 泗水町住吉北小路 | 古墳～中世 | 包蔵地 | |
| ㊶ | 407 | 36 | 高木原遺跡 | 西合志町合生高木 | 古代、他 | 包蔵地 | 縄文後期、奈良時代、出土品大量 |
| ㊷ | 407 | 37 | 合志郡衙推定地 | 西合志町合生玉連寺 | 古代 | 包蔵地 | |
| ㊸ | 406 | 10 | 田島魔寺 | 泗水町田島坂口 | 古代 | 寺社 | 土師器・須恵器 |

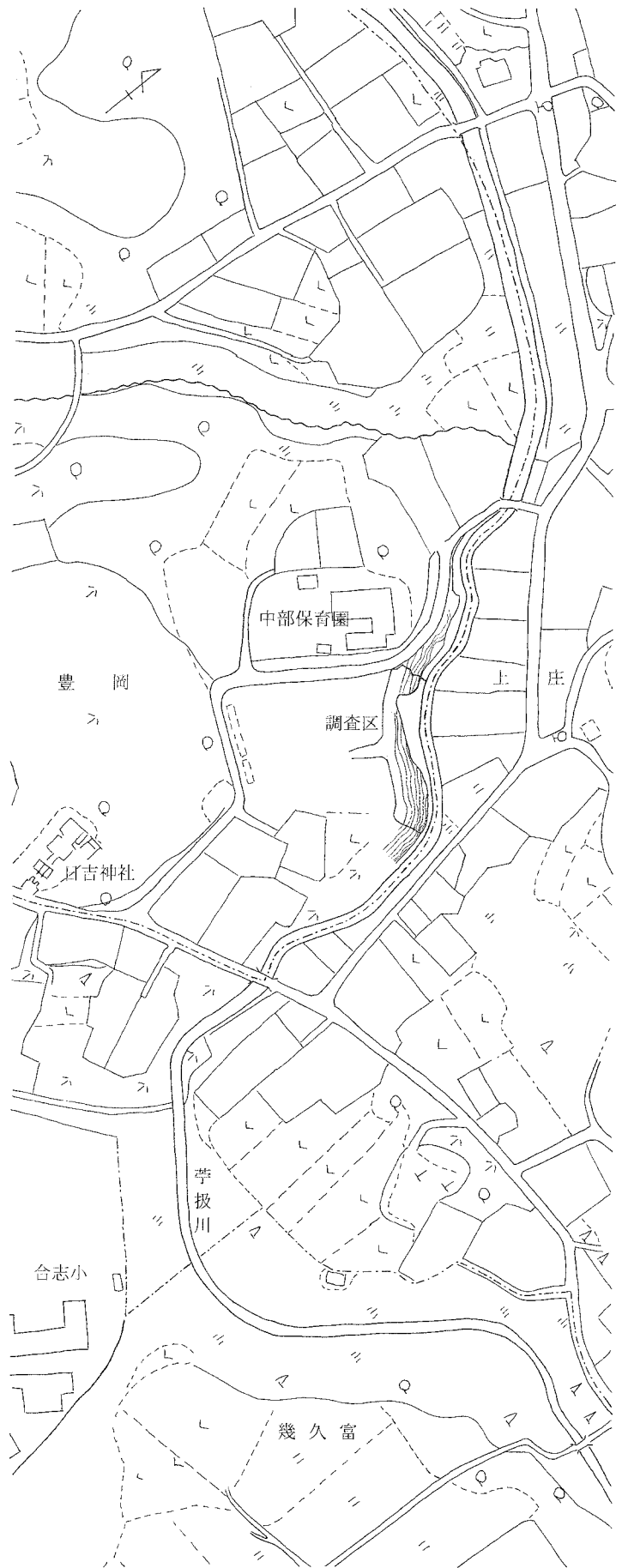
第Ⅲ章 調査成果

第1節 遺跡の概要

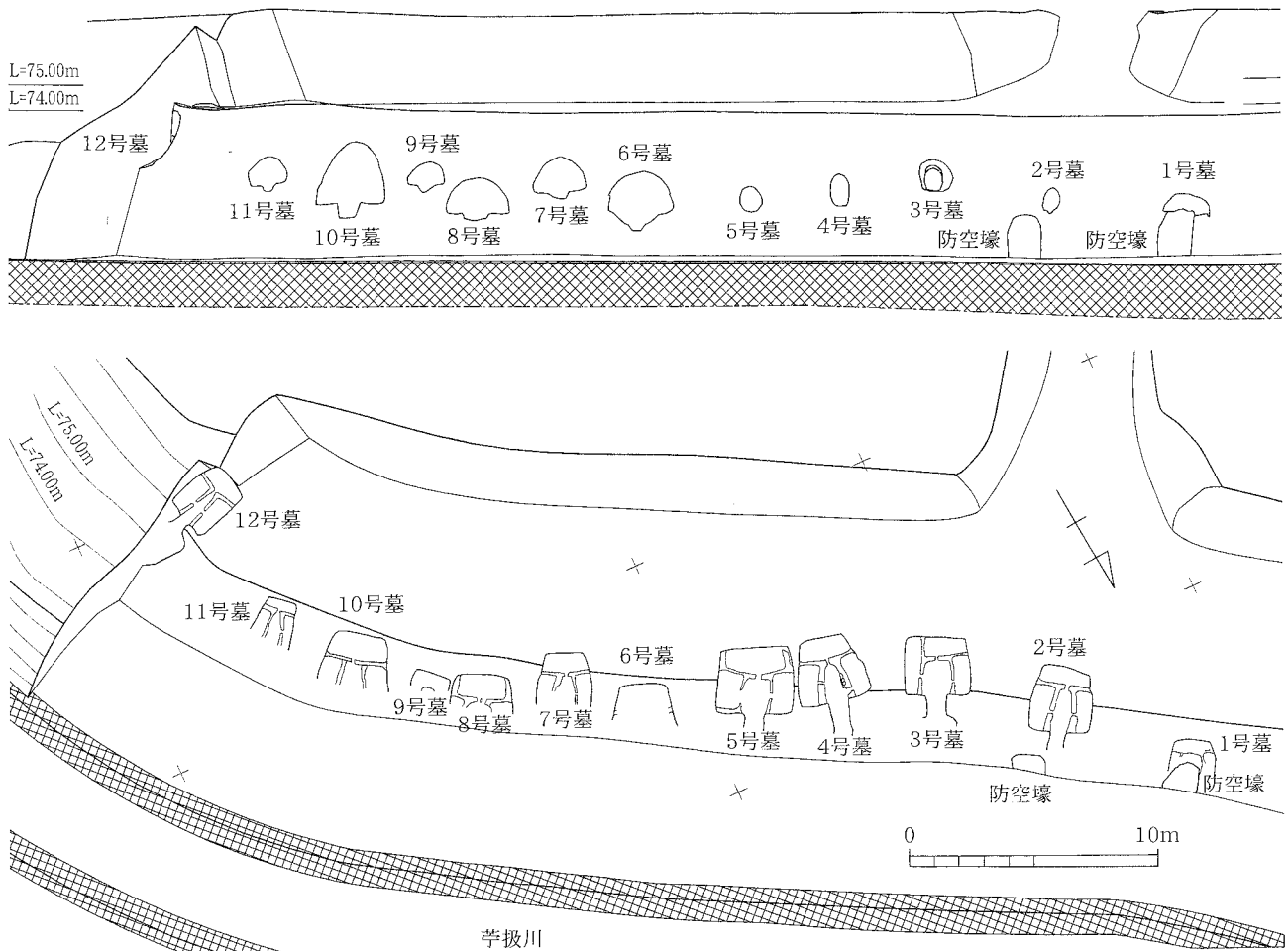
豊岡宮本横穴群の造営される崖面は白色の軽石、火山灰、石質岩片がほとんど無理層の堆積物が観察され、軽石中には角閃石結晶が含まれ、阿蘇-4火砕流堆積物の非溶結部であることが認められる。非溶結の火砕流堆積物は河川によって急速に下刻される性質があり、侵食は比較的短期間に進むことが明らかにされている。台地の形成過程と阿蘇-4火砕流堆積物の年代（約9万年前）を考慮すると横穴の存在する火砕流台地の崖面の原型は7-8万年前に形成されていたと考えられる（註1）。

本横穴の北側に流れる小河川の芋抜川は水源に近く侵食谷の奥に位置する。北側には竹迫城跡があり、その間の窪む地形は竹迫城の堀として利用されていた。崖面上段は原口新城跡があり、新城跡に伴う施設と考えられる高台は畑の肥料として「しらつち」を掘削していたようで消滅する。また上段には旧豊岡小学校が所在していた。崖面の東側には戦時中の防空壕2基が造られている。

本横穴の存在していた崖面は法面工事の際に掘削され、残存していた横穴12基を長さ45mにわたり確認した。1号墓より西側も約30m掘削されており、現状では横穴を確認できない。崖面は西側にかけて低くなり橋の付近で認められなくなることから横穴群が1号墓より西側に大きく広がりをもつことは考え難い。現状での旧地形は不明であるが調査区東壁の土層堆積を観察すると羨門天井より上は傾斜のきつい崖面となり前庭部は平坦面を形成しており墓道部の可能性のある部分は緩やかな斜面になっている。この斜面部の下方は河川の擁壁工事において掘削されているものと思われる。今回、調査を行った12基は複数の段を形成するものではなく、ほぼ一列に並ぶ配置である（第3図）。墓室の位置には高低差があり、開口方向は概ね北北東であるが一定ではない。また墓室の構造や規模は異なり第IV章において若干の検討を行った。



第2図 遺跡周辺図



第3図 豊岡宮本横穴群遺構配置図

工事の削平により前庭部～墓道は消滅するなかで2・3・4・5・12号墓は羨門～玄門通路より玄室が残存する。その他の横穴は工事掘削が玄室にまで及ぶ。墓室の遺存状態は比較的良好であったが天井部の崩落は全ての横穴で認められ、天井部では地下水が浸入した際の穴とわかる痕跡もあった。12号墓に関しては調査終盤で検出され、工事により天井部が掘削され、内部は埋められていた。保存協議の最中であり人骨や副葬品の劣化を恐れ、調査を決定した。本横穴群の出土人骨と副葬品の遺存状態は比較的良好であり、副葬品は墓室によって所有量、内容の差を確認できる。2・3・5号墓の屍床部では赤色顔料が検出されている。人骨は計31体が確認でき1・6・7号墓では皆無であった。人骨の分析については附章に譲る。

全体を通して玄室壁面では黄白色の部分が認められ、床面においても同様であったことから羨門側からの水の流入後の浸透や天井部より地下水が沁み出した結果、凝灰岩の成分が粘土化したのではないかと現場では考えていたが理由は定かでない。また屍床面及び通路部基底面においても同様の色調をした粘質の強い層が全て例外なく確認されており骨粉層との判別が付きにくかった。

工事削平によって閉塞状態は不明となった3号墓のみ閉塞石が残存していた。12号墓開口している様子を現地で確認され流入土も通路に堆積する。屍床部では天井崩落土に覆われた人骨が残存していた。遺存状態の非常に良好であった9・11号墓の人骨もまた天井崩落土に覆われていた。2・3号墓では鉄製品の遺存状況は良く、人骨もかろうじて残存する。閉塞状況と人骨・副葬品の保存状態の相関関係は必ずしもあるとはいえず、閉塞されてなくとも屍床部において天井崩落土が人骨・副葬品をパックする状態にあって浸水を免れれば残存する可能性もありえると考えられる。また4・5号墓では外部からの流入土が屍床部まで及んでおり人骨はほとんど残存しておらず、鉄製品の遺存状態も良好ながら2・3号墓ほどではない。さらに10号墓は中世に再利用された痕跡を確認した。浸水や流入土が確認できる4・5・10号墓は開口していた可能性が高いにも関わらず、遺物が残存することや今回工事中に不時の発見となった横穴群は地元

で知られていなかったことから推測すると大方が未盗掘と判断される。合志中学校の生徒の協力により、工事廃土からは須恵器や閉塞に使用されたと思われる石材が採取され、本報告書に廃土出土遺物として掲載している。

第2節 遺構の名称

横穴（墓）は明治時代に吉見百穴を巡り坪井正五郎氏の穴居説と白井光太郎氏の墓穴説の論争に始まり、次第に埋葬施設として認識される。呼称については「横穴（墓）」や「横穴古墳」と混在する時期もあったが現在では「横穴墓」が主体となっている。本報告書において第I章第3節の理由から「横穴」という名称を用いる。

横穴は古墳時代後期～終末期に盛行する墓制で、崖面に穴を穿って構築する墓室である。家族墓としての性格を有する点でいわゆる群集墳と同質にも捉えることができる。古墳の内部構造における送葬も共通するが外部構造の墳丘を構築する点で異なる。

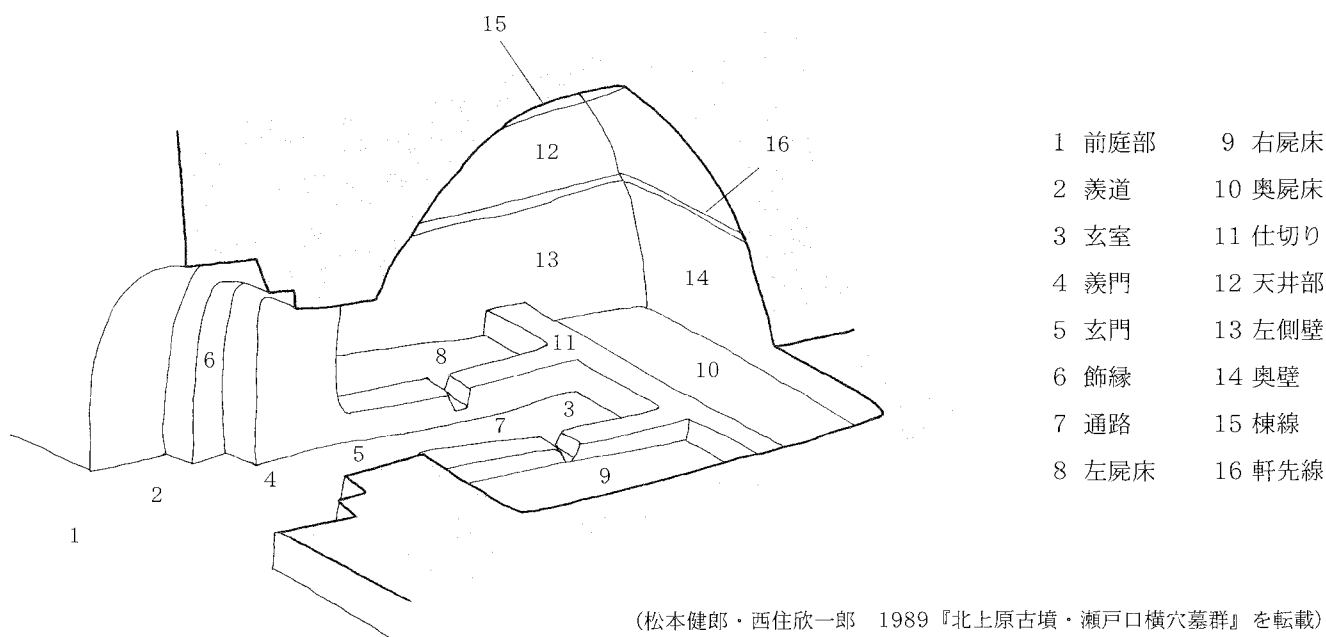
当該地域における横穴の特徴である玄室方形の平面プラン・コ字形屍床配置は「肥後型」と規定され、横穴式石室の影響を指摘される（註2）。前庭部は墓の入口部前方に設けられた空間で送葬儀礼などを行ったと考えられている（註3）。この前庭部は地域によって構造が異なることから名称は定まっていない。「つつじヶ丘横穴群」報告書において当該地域の横穴は前庭部と羨門との間にアーチ状の天井に覆われた空間が存在しこれを「羨道」と呼称する点他地域と異なることから、他地域で呼ばれる「羨道」は当該地域の羨門～玄門にあたり「羨門～玄門通路」と呼称したいとあり、本報告書もこれに倣う。屍床部の名称は羨門の入り口側から左右と奥屍床と呼ぶ。本報告書では利用する部分名称については第4図を参照されたい。

註

（註1）熊本大学 渡辺一徳教授（地質学）のご教示による。

（註2）小田富士雄 1975「九州の横穴墓序説」『九州考古学研究古墳時代編』

（註3）池上悟 1984「横穴墓」『考古学ライブラリー6』



第4図 横穴の部分名称

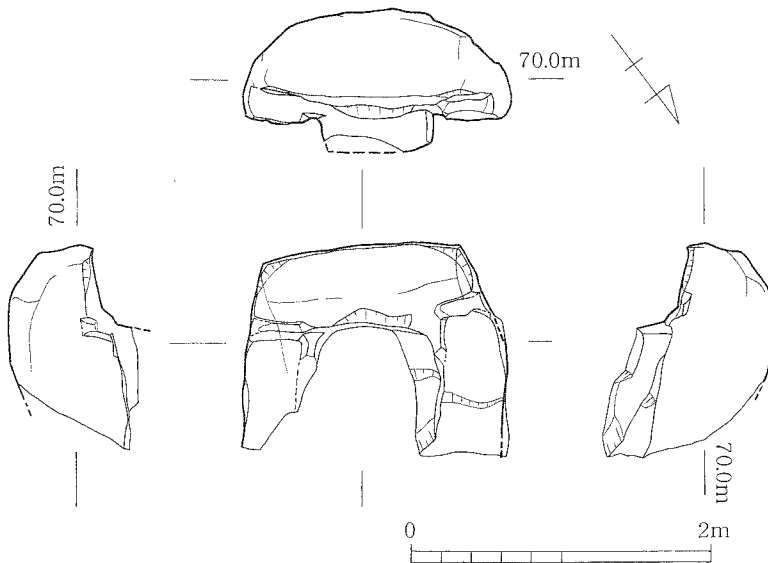
第3節 横穴と出土遺物

1号墓

規模・構造（第5図）

防空壕と重複しており防空壕の天井部により通路部はすでに崩壊している。防空壕の再利用は確認されなかった。

主軸方向はN37° Eで北東に開口する。平面形は奥屍床右側がすばまる。玄室規模は奥行1.35m以上、幅は1.74mを測る。天井断面形はアーチ形の天井を呈し、寄棟の屋根型と推測される。天井高は0.95mを測り、低い天井が特徴的な横穴である。天井部の中央付近は平坦になる形状が認められる。四隅には線



第5図 1号墓実測図

刻が施されており壁面はやや湾曲ぎみである。通路幅は0.74mで玄室の規模に対してやや広く、通路基底面から仕切り上端面までの高さは低い。左右屍床に対し奥屍床の隔絶性が認められる。屍床部の高さは左屍床に比べ右屍床が高く、さらに奥屍床が高い。右屍床の長軸長0.9m以上、短軸長0.4m、左屍床の長軸長0.7m以上、短軸長0.35m、奥屍床の長軸長1.38m、短軸長0.39mを測る。出土遺物は無い。

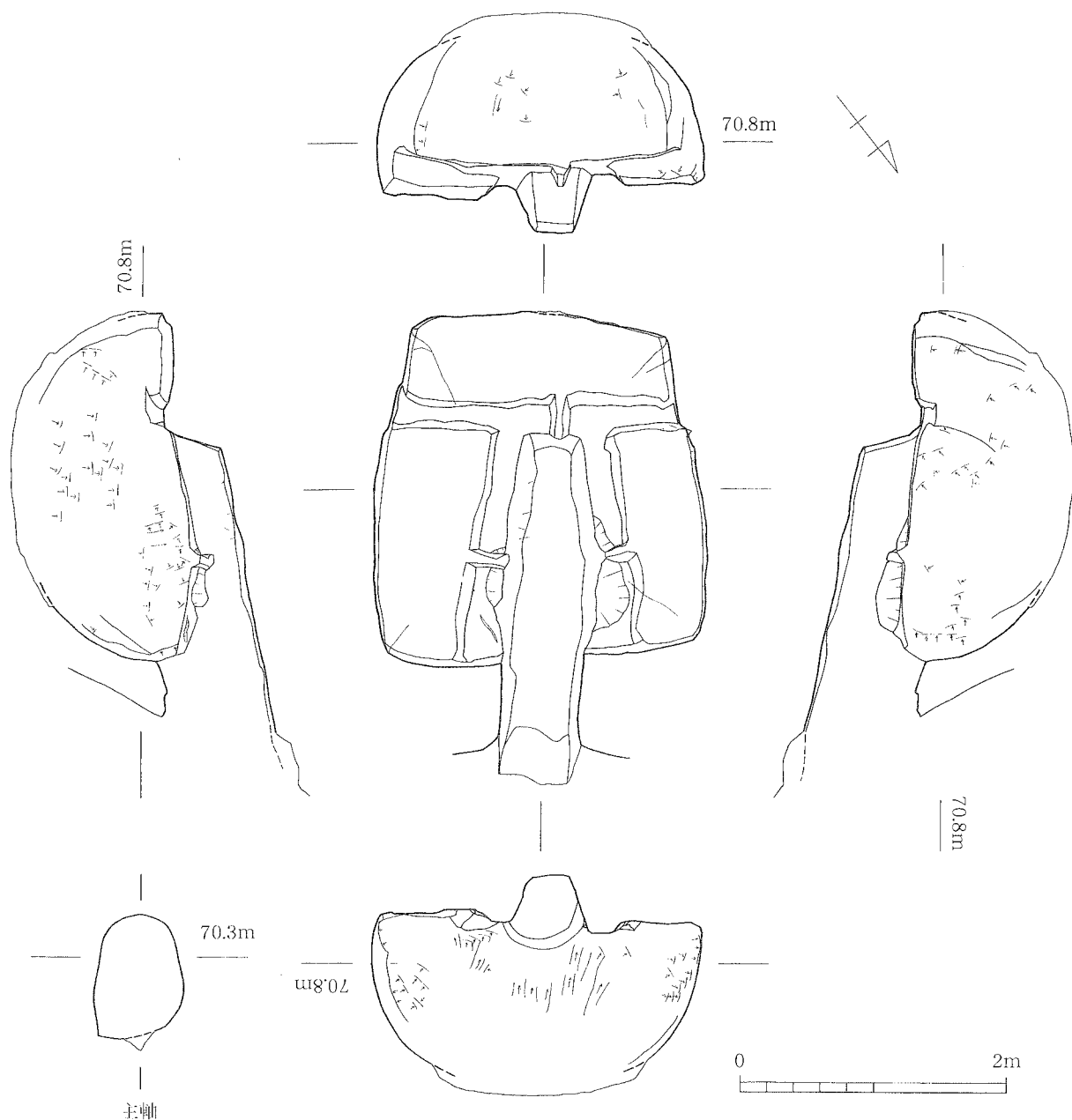
2号墓

規模・構造（第6図）

主軸方向はN42° Eで北東に開口する。玄室の平面形は奥屍床が狭くなり台形状を呈する。規模は奥行き2.6m、幅2.45mを測る。天井の頂部は崩落するものの天井断面形はアーチ形を呈していたものと推測され、天井高は1.66mを測る。壁面四隅の境の線が認められる。崩落しているものの寄棟の屋根型であったと推定される。壁面は直立に近い角度で短く立ち上がり、天井部へ緩やかに続く。左側壁の左屍床面からの立ち上がりは若干外側に開くのに対し右側壁は湾曲する挟りが認められた。奥壁は全体的に壁面と床面の境が曖昧である。玄門の壁面は左壁面が角度をもって立ち上がるのに対し、右壁面は緩やかに立ち上がっている。

各屍床部床面においては右屍床が左屍床より高く、奥屍床が右屍床よりわずかに高い。右屍床は左屍床に比べ狭く、左右屍床ともに玄門側が狭い。左右屍床の仕切りは排水溝が低い位置に設けられ、奥屍床・玄門側にそれぞれ高くなっている。左右屍床部の仕切り上端面は奥屍床の上端面に連続しており、仕切りにおける奥屍床の隔絶は認められない。また、奥屍床の仕切り上端面の両端は緩やかに上がる。右屍床長軸長1.6m、短軸長0.55m、左屍床長軸長1.72m、短軸長0.75m、奥屍床長軸長1.8m、短軸長0.62mを測る。通路幅は0.58mと狭く、床面から仕切りまでの高さが0.43mを測り、床面は緩やかに玄門側に傾斜する。羨門側の床面では工事掘削後の斜面に雨水が流れ落ちた結果、挟られたと考えられる窪みが認められた。

左右屍床の仕切りに対して奥屍床の仕切りの立ち上がりは雑然としており、特に右側では正面に対し斜めの工具痕が認められる。また、通路部右壁面にあたる仕切りの仕上げは丁寧であり、左壁面では奥屍床に類似する斜め方向の工具痕が残存していた。奥屍床床面では左右屍床に対して凹凸が多い。工具痕は比較的良く残存しており幅約10cmを測り、上方や斜め上方から施される。奥屍床の左右壁面においては左壁面を正面にみて右斜め下方への痕跡が残存し、右壁面では左斜め下方への痕跡が確認される。また、左壁面上部では斜めではなく上部からの工具痕が認められる。以上のように左右屍床及び壁面では形態や工具痕のあり方が異なる様子が窺える。



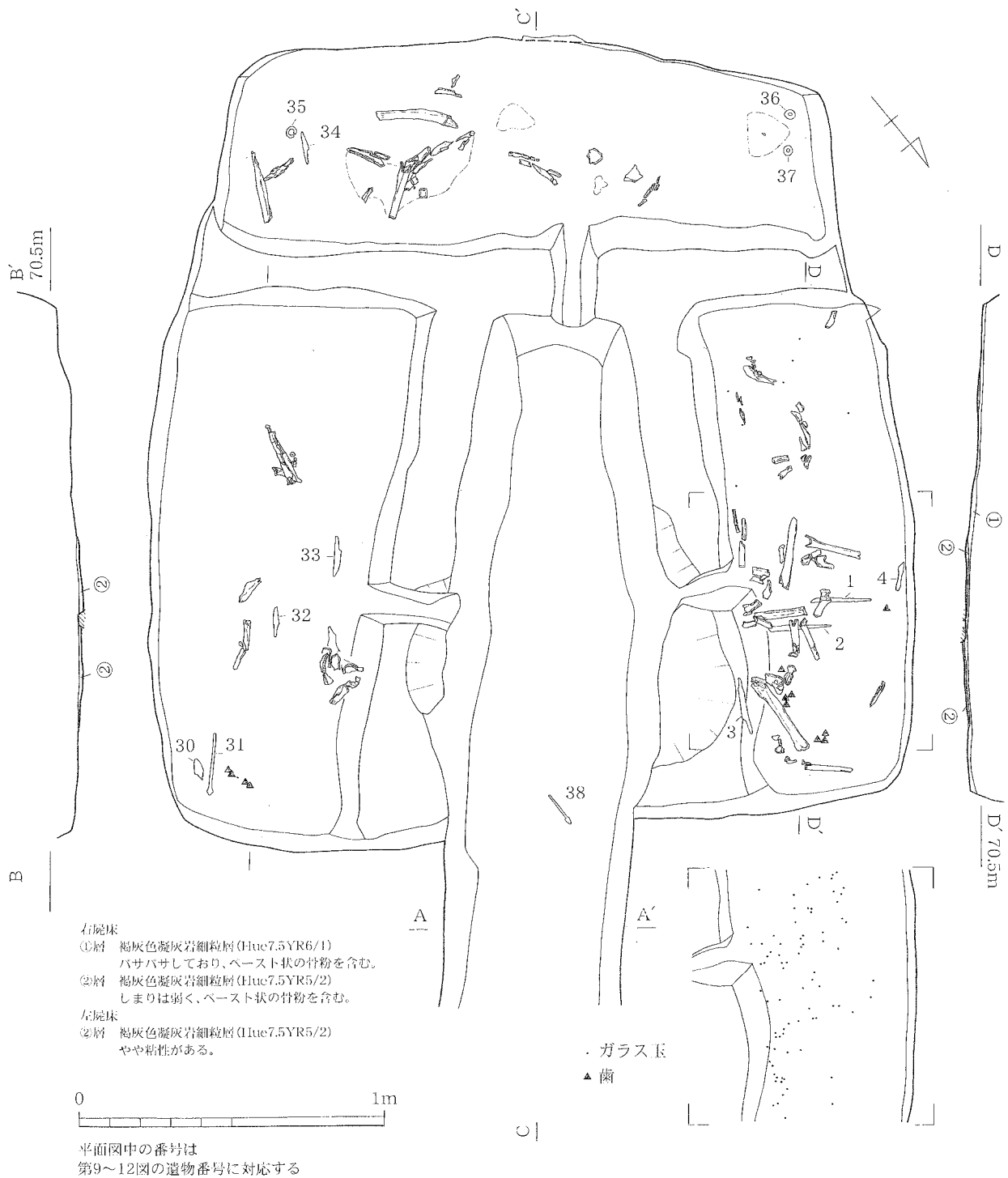
第6図 2号墓実測図

出土状況 (第7図)

埋葬人骨

発見時より人骨は露出しており、散在した状態で検出された。遺存状況はあまり良好ではない。各屍床で確認された人骨は奥屍床2体、左屍床2体、右屍床2体の計6体である。屍床部において認められる堆積土は天井崩落土、外部からの流入土や浸水層、風化層に限られる。人骨は浸水、植物根、小動物による自然作用や追葬時の片付け・改葬などの人為的作用の要因により移動することが想定され、帰属を確定することは極めて難しい。2号墓においても出土状況や層位から判断できる程、遺存状況は恵まれていない。

床面にはペースト状の骨粉層が認められるが、凝灰岩中に含まれる成分が浸水に伴い浮き出した可能性もあり判断は避けた。ただし右屍床では骨片を伴う厚みのある層が認められることから骨粉層と考えられる。人骨の出土状況は自然作用か人為的作用によるものかについて判断は難しいが右屍床の玄門側においてはイゲタ状に置かれているように見受けられ、3号墓右屍床と同位置において共通する。左右屍床玄門側には遊離歯が出土しており右屍床では両

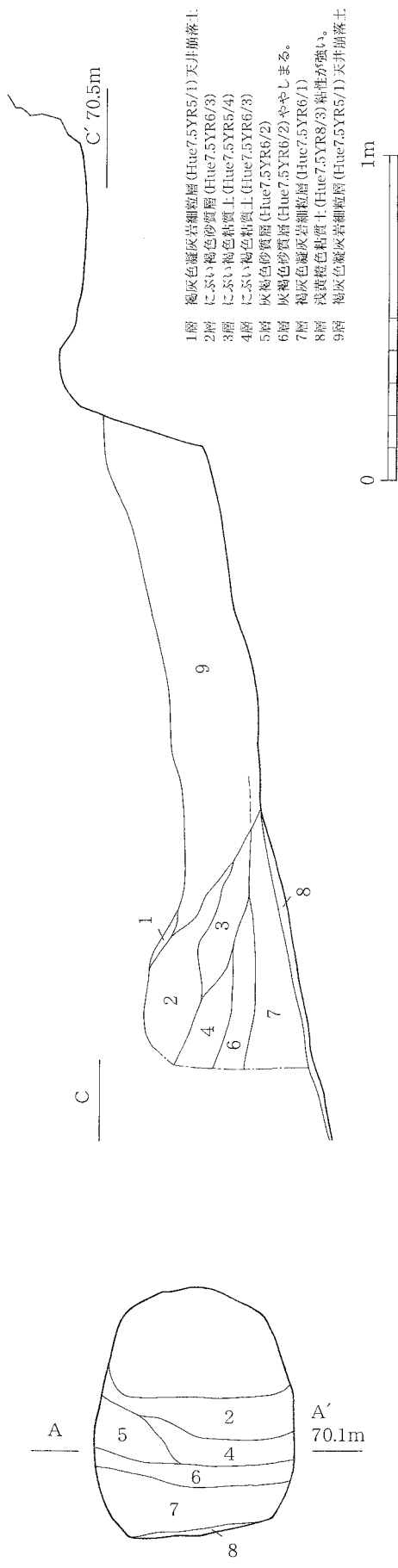


第7図 2号墓遺物出土状況・土層断面図

側において下顎骨が認められることから両側に頭位があった可能性がある。取り上げを行った人骨の出土レベルは一定であり右屍床では①層から上に堆積していた天井崩落土にかけて、左屍床では②層の上に認められた天井崩落土より出土している。

副葬品

奥屍床では右端において耳環36・37が並び、37は床面直上より出土した。左端からは耳環35、刀子34が確認された。耳環の出土状況から両側に頭位があった可能性がある。左右屍床では中央より玄門側にかけて遺物が集中する。右屍床のガラス玉は広く分布する。長頸鎌1～3、刀子4の刃部先端の方向は一定ではない。左屍床では鉄鎌30・31、刀子32・33においても1次葬に伴う原位置ではない。左屍床の出土遺物は②層の上位にあたる天井崩落層中より



第8図 2号墓土層断面図

確認され、右屍床の遺物は①層より出土している。遺物、人骨ともに床面直上からの出土はほとんど無く約5~10cm程浮いた状態で検出されている。また、遺物が玄門側に偏る出土状況のあり方は3号墓と共通する。また屍床部ではベンガラ粒が検出された。

通路部からはほぼ床面直上より長頸鎌38が出土している。羨門~玄門通路には流入土が堆積し、その後に堆積した天井崩落土がみられたが追跡面を確認することはできなかった。

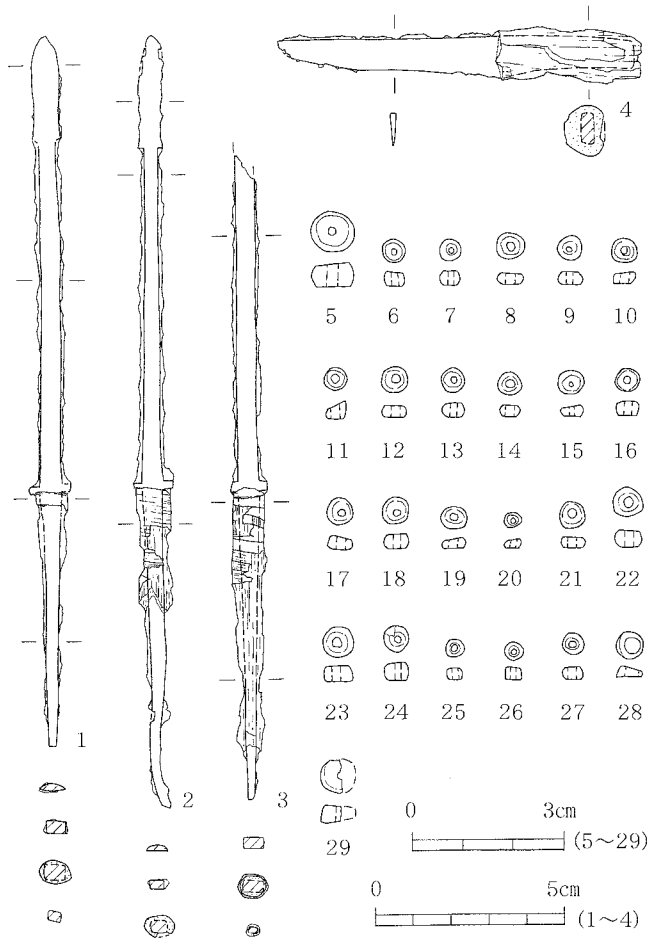
右屍床出土遺物 (第9図、第3表)

鉄鎌3点、刀子1点、ガラス小玉90点が出土した。1・2は長頸鎌で、頸部の関は棘関である。1は全長18.9cm、身部長2.7cm、頸部長9.5cm。身部は長三角形をした片丸造である。茎部には幅4mmの樹皮巻が1単位残存する。2は全長20.6cm、身部長3.0cm、頸部長9.1cm。身部は細身の長三角形をした片丸造であり、刃部の劣化が激しい。茎部には矢柄の木質と樹皮巻が残存する。樹皮は残存状態が悪く、単位幅は観察できない。3は身部を欠損する長頸鎌である。残存長17.1cm。頸部の関は棘関である。茎部には矢柄の木質と幅3mmの樹皮巻が残存する。樹皮巻の表面には一部水銀朱が付着している。4は全長9.6cm、刃部長5.9cm、棟幅0.2cmの刀子である。茎部には鹿角製の装具が比較的良好に残存する。柄部の最大径は1.4cm。関の形状は不明である。5~29はガラス小玉である。ガラス小玉は右屍床から90点が検出された。そのほとんどが排水溝付近の約80cmの範囲に散在する。(第7図)色調別に個数を挙げると、青1点(5)、緑12点(6~18)、水色2点(19・20)、黄緑69点(21~24)、黄3点(25~27)、赤茶2点(28・29)である。最も個数の多い黄緑色のガラス小玉は風化し、全体に細かい亀裂が入り非常にもろい状態である。本報告書では、完形で取り上げることができた4点のみを図示している。図示できなかった黄緑色のガラス小玉片の法量は径3.5~5.5mm、厚さ2.5~5.0mmと、やや大きめの丸みをもつ形状をなすのに比べ、他の色のガラス小玉は径4.5~5.5mm、厚さ2.0~3.0mmと厚みの薄いものが多い。図示していないガラス小玉も含め、厚みを計測できた56個をつなぎ合わせると長さは15.45cmとなる。後述する通路部出土のガラス玉3点も含めると長さ17.6cmとなる。

左屍床出土遺物 (第10図)

鉄鎌2点、刀子2点が出土した。30は平根系の三角形鎌である。残存長7.2cm、身部長4.1cm。頸部の関は角関である。31は長頸鎌である。残存長14.8cm、身部長2.4cm、頸部長8.5cm。身部は長三角形をした両丸造りであり、劣化が激しく刃部がかなり欠ける。頸部の関は棘関である。茎部には矢柄の木質が残存しており、矢柄には関から2.3cmの範囲にわたり糸が31条巻かれる。32・33は刀子である。32は

全長9.7cm、刃部長5.6cm、棟幅0.3cm。茎部には鹿角製装具が残存する。関は片関である。33は全長12.7cm、刃部長8.3cm、棟幅0.4cmの比較的大型の刀子である。関は両関である。



第9図 2号墓右屍床出土遺物

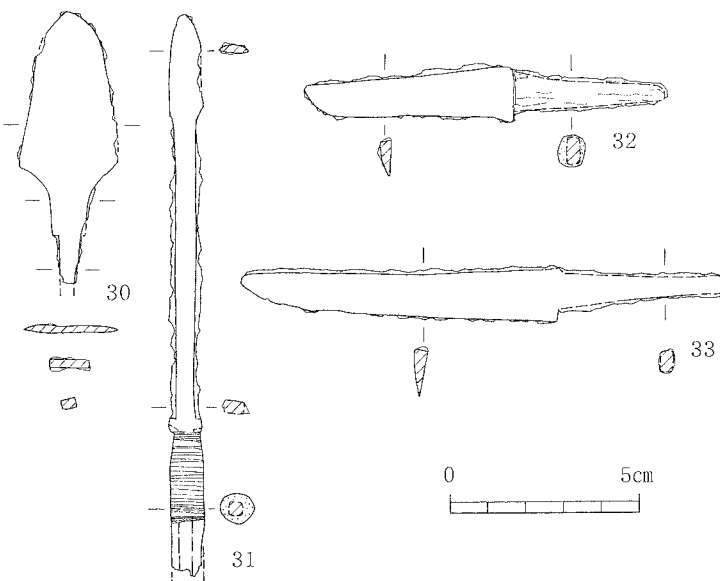
奥屍床出土遺物 (第11図、第4表)

刀子1点、耳環3点が出土した。34は刀子である。全長10.0cm、刃部長5.7cm、棟幅0.2cm。刃部には木質が残存し、その上に幅0.6cm、厚さ1mmの環状の金具が装着される。茎部には木質が残存していないことから、鞘の木質と鞘金具と考えられる。35は銅芯の上に銀薄板を被せた太型の耳環である。金メッキが施されていた可能性があり、残存状態の良い部分の色調は白味の強い白金色である。縦幅3.1cm、横幅3.4cm、断面径0.8cm。開口部には銀薄板のシワがみられる。36・37は銅芯の上に銀薄板を被せ、金メッキを施した太型の耳環である。残存状態の良い部分の色調は黄色味の強い金色である。36は縦幅2.7cm、横幅2.9cm、断面径0.7cm。開口部は銀薄板を折りたたむ。37は縦幅2.7cm、横幅3.1cm、断面径0.7cm。開口部の造りは確認できなかった。36・37は材質と法量が似通うこと、出土位置が近いことからセット関係を持つと考えられる。

通路部出土遺物 (第12図、第3表)

鉄鎌1点、ガラス管玉1点、ガラス小玉2点が出土した。38は長頸鎌である。残存長13.9cm、身部長2.9cm、頸部長9.1cm。身部は長三角形の片丸造である。身部の関の形状はX線観察でも不明瞭であった。頸部の関は棘

関で、茎部には幅2.5mm程度の樹皮巻が残存する。矢柄の径は0.8cm。39は青色のガラス管玉である。図の下端部分が欠損するが、わずかに端面が残存する。長さ13mm、径5.0mm、孔径1.0mm。40・41はガラス小玉である。40は径6.5mm、厚さ6.0mm、孔径1.5mmと大型で色調は青である。41は径4.5mm、厚さ2.5mm、孔径1.0mm。色調は緑である。通路部から出土した玉はこの3点のみであり、右屍床に副葬された玉が落ちた可能性が高いと考えられる。



第10図 2号墓左屍床出土遺物

3号墓

規模・構造 (第13図)

主軸方向はN30° Eで北東に開口する。玄室の平面形は方形プランである。規模は奥行き

2.28m、幅2.57mを測る。左屍床は仕切りが奥壁まで続く特異な構造である。天井部は高さ1.68mを測る寄棟の天井を呈する。天井頂部では平坦面がわずかに確認できる。右側壁の床面からの立ち上がりは抉られることによって内湾しさらに直立しながら天井部に続く。これに対し左側壁では床面よりほぼ直立するがすぐに内傾し天井部に続くことから天井部の円弧は右よりも強いようである。奥壁の床面との境は右屍床の延長上付近において右側が明瞭に造り出されるのに対し左側は緩やかではっきりしない。ほぼ直立して立ち上がる壁面には軒先線が残存する。軒先線はほぼ水平に巡るが玄門側の壁面において両隅より玄門にかけて緩やかに下がる。壁面の四隅の境の線が確認でき、右壁面において谷線として表現されており左側壁は線刻であり異なる。壁面にはベンガラが全体に点在することから全面に塗布されていたと考えられる。玄門両縁には柱状の造り出しが施されている。

奥屍床の仕切り上端面は左右屍床の仕切り上端面に連続しており隔絶しない。屍床面の高さは左、右、奥屍床の順で高くなる。右屍床長軸長1.45m、短軸長0.52m、左屍床長軸長2.06m、短軸長0.54m、奥屍床長軸長1.53m、短軸長0.62mを測る。通路部の幅は約0.9~1.1mと広く、通路基底面から仕切り上端面までの高さは低い。通路部中央では幅約40cmの浅い溝状の窪みが認められる。

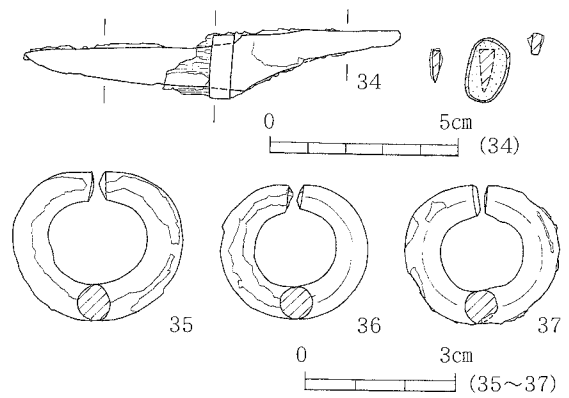
羨門~玄門通路は高さ0.8m、長さ0.85m、羨門幅0.75m、玄門幅0.86mを測る。羨門では本横穴群で唯一、掘削をまぬがれた閉塞石が残存していたが、調査開始時には内部の確認の為はずされていた。よって詳しい閉塞状況については不明であるが、除去する前の写真をみると閉塞石の下部に塊石を詰めていた様子がわかる。羨門はアーチ状を呈し、高さ0.9m、幅0.74mを測る。外側の飾り縁と思われる部分は掘削によって上部と左側の1/2程が失われているが、残存する幅は約1.3mを確認することができる。

工具痕については2号墓より明瞭ではなかったが観察を行った。左玄門付近では軒先線を造り出した幅1cm単位の細かい工具痕が認められ、壁面に残る幅約10cmの工具痕とは異なるようである。玄門側の壁面においても上方からの工具痕がみられ両縁の柱状の造り出しは左側が顕著である。以上のように左右における築造形態の差が2号墓同様に確認できそうである。

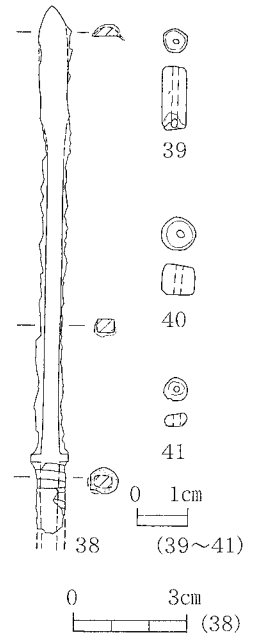
出土状況 (第14図)

埋葬人骨

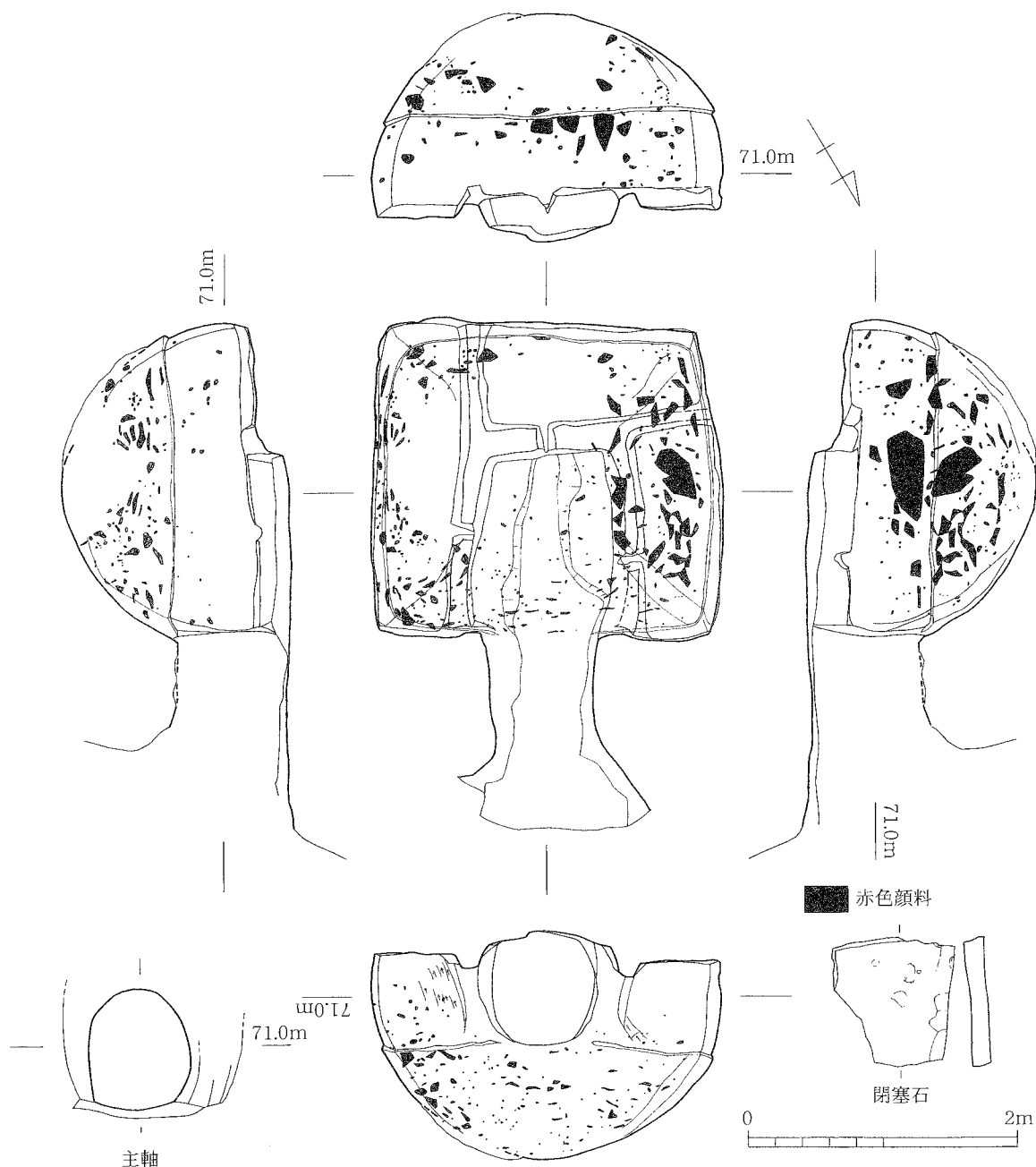
発見時より人骨は露出しており、散在する様子から埋葬時の状態を保っていないと推測される。奥屍床4体、右屍床2体、左屍床2体の計8体が確認される。各屍床ともに床に貼りついたペースト状の骨粉層がみられた。右屍床の人骨は遺物と頭蓋骨、遊離歯の出土から頭位は奥屍床側と玄門側にあったものと推測される。人骨は散在する状態にあるが右屍床において玄門側の大腿骨は貝輪を囲むような配置とみることもできそうであり、2号墓右屍床の同位置において共通性がある。左・奥屍床の四肢骨はほぼ長軸に平行する。左屍床では頭蓋骨は玄門側に出土し、奥屍床で顎骨が両端に検出される。取り上げを行った人骨の出土レベルはほぼ一定であった。右屍床では③層上位から③層上面にかけて出土する。左屍床では②層下位から上面にかけて出土している。各屍床とも散在する遊離歯については最下層からほとんどが出土した。



第11図 2号墓奥屍床出土遺物



第12図 2号墓通路部出土遺物

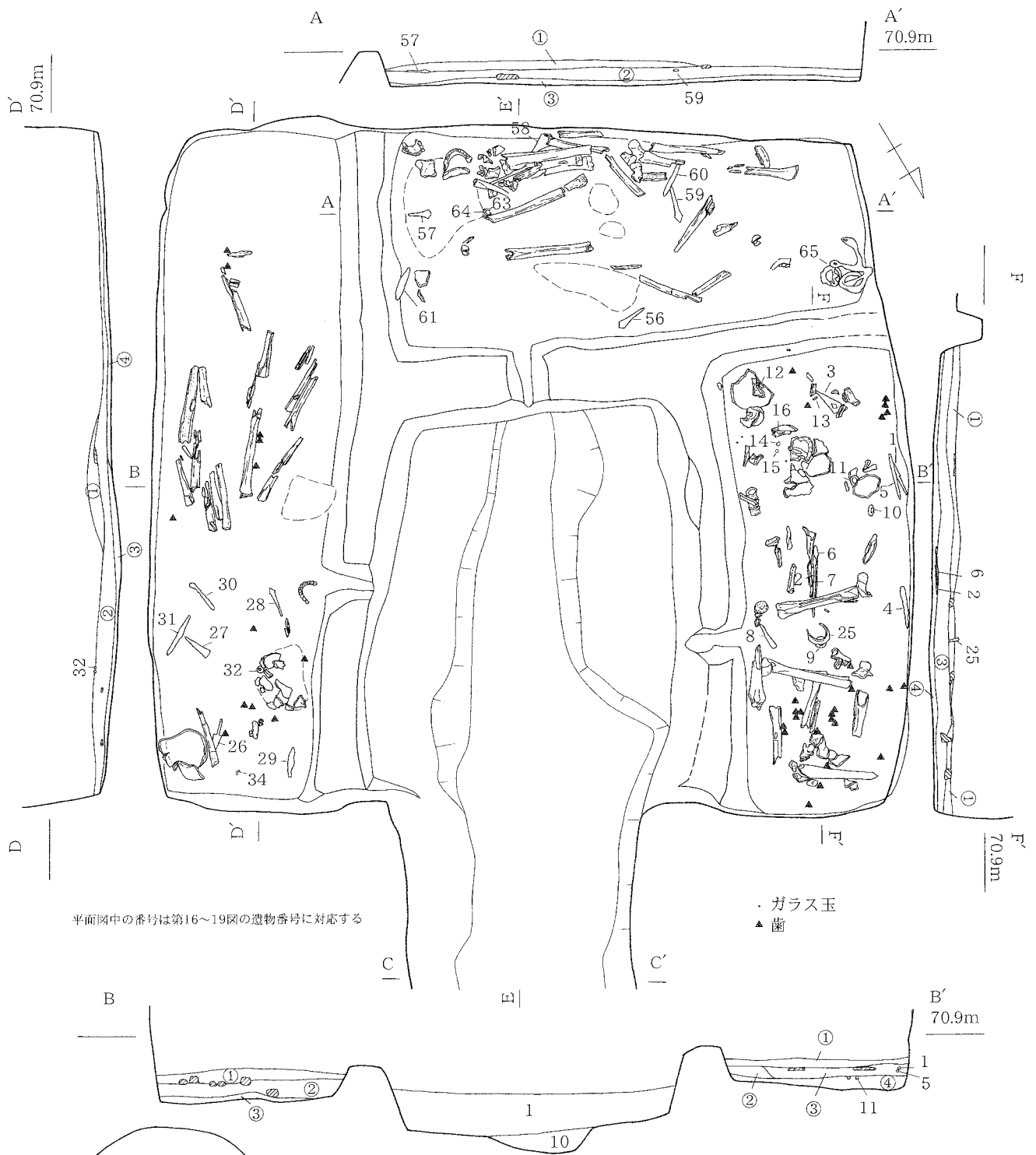


第13図 3号墓実測図

副葬品

遺物の取り上げは層位を確認することが困難であることから、出土レベルを押さえ層位との比較を行った。また刃部先端の方向については一部取り上げ時に怠った為、不明である遺物がある。

右屍床では④層上位～①層下位、左屍床では③・④層上位～②層上位、奥屍床では③層上位～②層上位にかけて出土している。遺物は1～5cm程、床面より浮く状態であった。右屍床において③層中として確認された遺物は中央に長頸鎌6・7、方頭鎌2、耳環11が認められる。耳環9・10と耳環11・12はそれぞれセット関係と考えられるが離れた位置にある。耳環9はイモガイ製貝輪の直下の③層上位から出土している。3・8以外の鉄鎌は刃部先端の方向が奥壁側を向き長軸に平行しており、特に中央の鉄鎌2・6・7の3本は揃っている点や左隅の勾玉16、ガラス玉、空玉14・15が集中する位置にあることなどから遺物は比較的、最終埋葬時の原位置に近い状態を保っている可能性を考えている。ただし耳環のように離れている位置の出土状況は人為的作用が働いたと思われるが自然作用による移動も考慮せねばならず断定は避けたい。右屍床②層黒褐色粘質土は骨粉をほとんど含まず、幅約10cm、長さ約15cmの薄い層が仕切り



平面図中の番号は第16~19図の遺物番号に対応する

● ガラス玉
▲ 歯

- 1 層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1) 天井崩落土
- 3 層 にぶい褐色粘質土 (Hue7.5YR5/4)
- 3' 層 褐色砂質土 (Hue7.5YR4/3)
- 5 層 明褐色シルト (Hue7.5YR7/1)
- 6 層 灰褐色砂質土 (Hue7.5YR5/2)
- 8 層 褐灰色砂層 (Hue7.5YR5/1)
- 8' 層 にぶい褐色粘質土 (Hue7.5YR6/3) 砂粒を含む。
- 9 層 にぶい赤褐色粘質土 (Hue5YR4/4) 砂粒をやや多く含む。
- 9' 層 灰褐色粘質土 (Hue7.5YR6/2)
- 10 層 浅黄褐色シルト (Hue7.5YR8/3) しまりがあり、粘性がやや強い。

右屍床

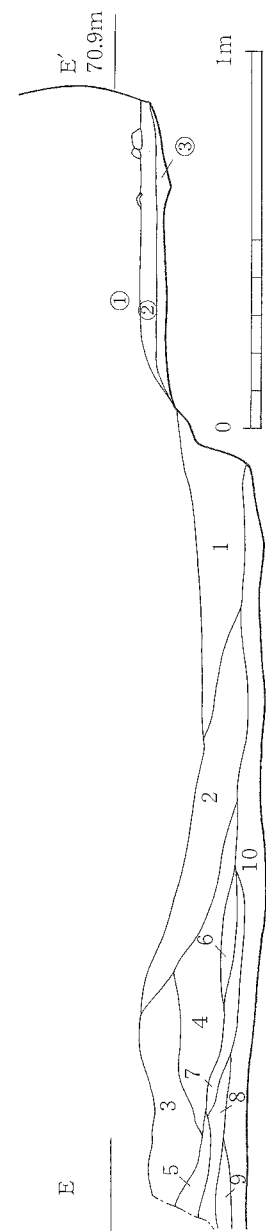
- ①層 暗褐色粘質土 (Hue7.5YR3/3) しまりはない。
- ②層 黒褐色粘質土 (Hue7.5YR3/2) キメが細かく、しまりはない。
- ③層 褐色粘質土 (Hue7.5YR4/3) しまりはなく、骨粉を多く含む。
- ④層 灰白色粘質土 (Hue7.5YR8/2) ペースト状の骨粉を含む。

左屍床

- ①層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1) 天井崩落土
 - ②層 褐色粘質土 (Hue7.5YR4/3) しまりは弱く、骨粉を含む。
 - ③層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR5/1) 骨粉が混じり、やや粘性。
 - ④層 浅黄褐色粘質土 (Hue7.5YR8/3) ペースト状の骨粉
- 奥屍床
- ①層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR5/1) 天井崩落土
 - ②層 灰褐色粘質土 (Hue7.5YR4/2) 骨粉を含み、しまりは弱い。
 - ③層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1)

0 1m

第14図 3号墓遺物出土状況・土層断面図



- 1層 褐色凝灰岩細粒層(Huc7.5YR6/1)天井崩落土
 - 2層 赤褐色砂礫層(Huc7.5YR6/3)しまりは無い
 - 3層 赤褐色粘質土(Huc7.5YR5/4)
 - 4層 明褐色シルト(Huc7.5YR7/1)
 - 5層 灰褐色粘質土(Huc7.5YR5/2)
 - 6層 灰褐色粘質土(Huc7.5YR4/2)
 - 7層 褐色粘質土(Huc7.5YR5/1)
 - 8層 褐色粘質土(Huc7.5YR4/4)砂礫をやや多く含む
 - 9層 褐色粘質土(Huc7.5YR4/2)骨粉を含む
 - 10層 浅黄褐色シルト(Huc7.5YR8/3)しまりが有り、粘性がやや強い
- 奥屍床
 ①層 褐色凝灰岩細粒層(Huc7.5YR5/1)天井崩落土
 ②層 赤褐色粘質土(Huc7.5YR4/2)骨粉を含む、しまりは無い
 ③層 褐色凝灰岩細粒層(Huc7.5YR6/1)

第15図
3号墓土層断面図

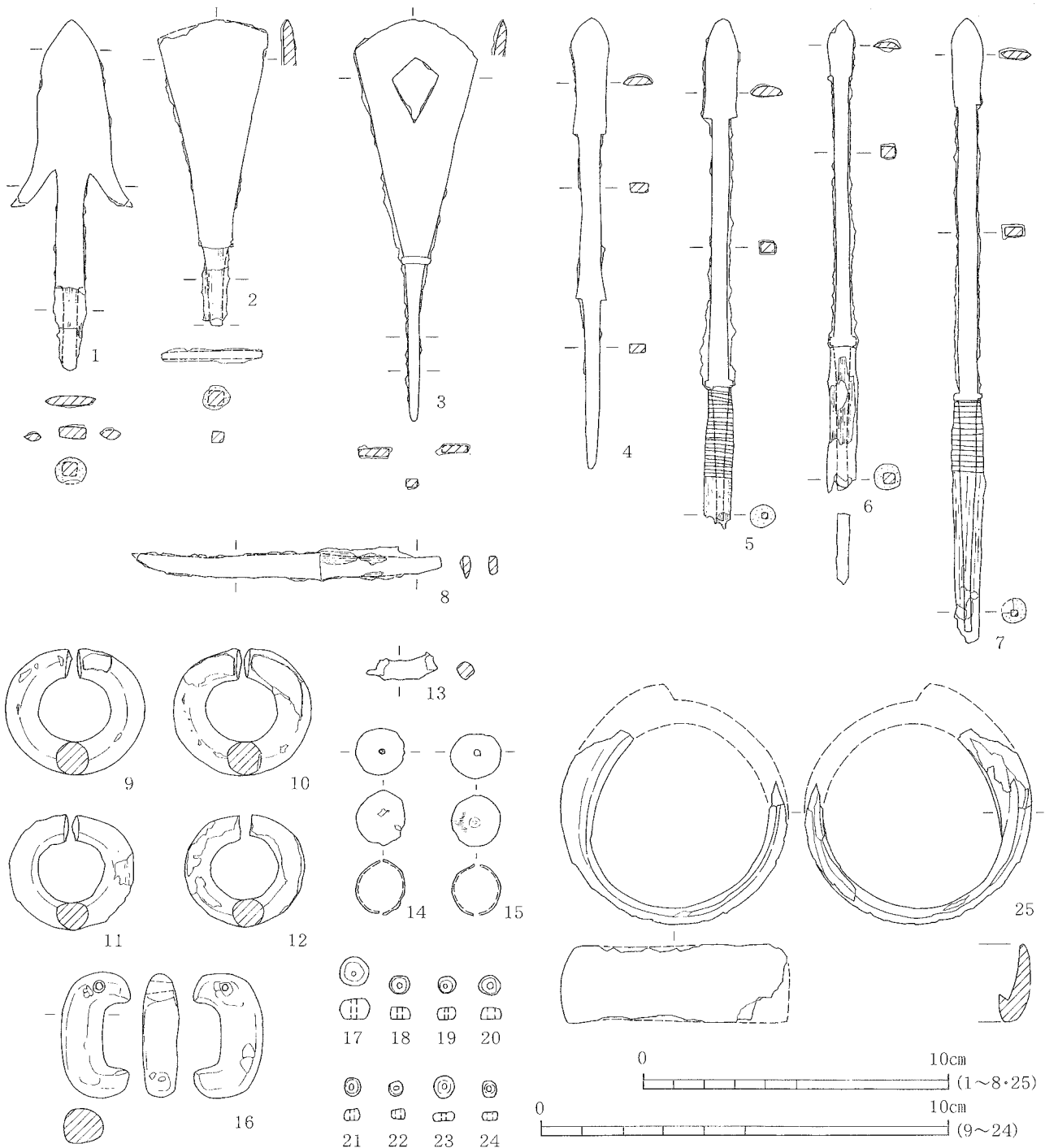
側に4箇所検出している。左屍床での鉄鏃・刀子の刃部先端の方向は一定ではない。

左屍床では玄門付近の②層中より土製玉24個、耳環32~35、刀子29~31、三角形鏃26・方頭鏃27、圭頭鏃28が出土している。耳環は頭蓋骨の近くから出土している。奥屍床において右手前の隅では環状鏡板付轡65が出土している。刀子は60・61、圭頭鏃56~59の刃部先端の方向は一定ではない。耳環63・64は左隅に出土している。各屍床部の人骨・遺物が位置する堆積土は排水溝をほとんど埋める状態にあつて排水溝がその機能を保つていたとは考え難い。屍床部ではベンガラ粒が検出されている。

羨門~玄門通路より通路部にかけては流入土及び天井崩落土が認められた。追葬面に伴う層位も含まれるものと考えられるが確実に押さえることはできなかった。通路部の堆積土は仕切りを越えず屍床部には連続しない。

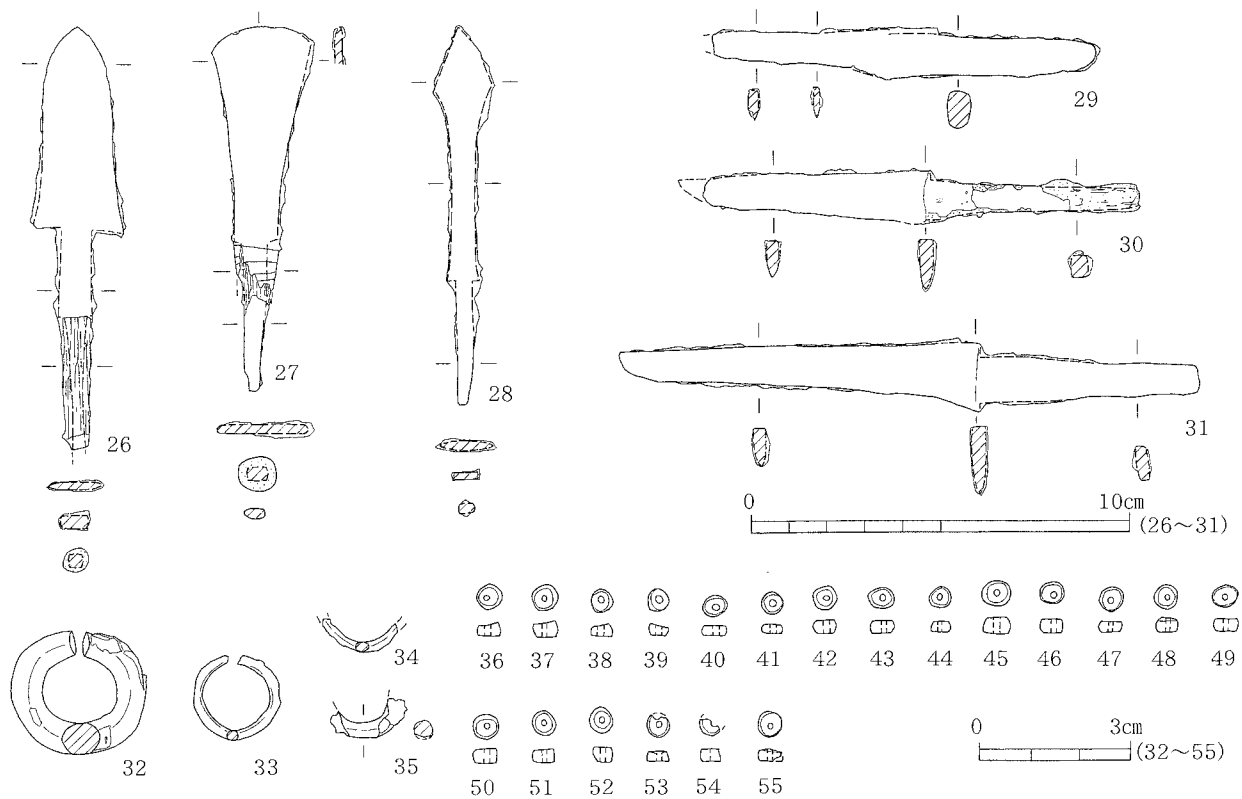
右屍床出土遺物 (第16図、第3・4表)

鉄鏃7点、刀子1点、耳環5点、空玉2点、勾玉1点、瑪瑙製丸玉1点、ガラス小玉7点、貝輪1点が出土した。1~3は平根系鉄鏃である。1は腸袂三角形鏃である。全長11.4cm、身部長6.1cm、頸部長3.8cm。身部の腸袂はやや大きく外反する。頸部の関は角関である。茎部には矢柄の木質が一部残存する。2は方頭鏃である。残存長9.9cm、身部長7.4cm。刃部のラインはやや丸みを帯びる。身部の関は残存状態が悪いものの、角関であるとみられる。茎部には矢柄の木質が残存する。3は透孔入り圭頭鏃である。全長13.0cm、身部長7.9cm。身部には縦2.0cm、幅1.5cmの菱形の透孔が入る。関は輪関である。4~7は長頸鏃である。4は全長14.6cm、身部長3.8cm、頸部長5.3cm。身部はやや柳葉形をした片丸造である。頸部は短く、関は台形関である。5は残存長16.6cm、身部長3.3cm、頸部長8.6cm。身部は三角形の片丸造である。頸部は棘関を持つ。茎部には矢柄とその上に幅2mm弱の樹皮巻きが残存する。樹皮は少しずつ端を重ねながら棘関から矢羽の方向に巻かれる。樹皮巻が残存するのは関から幅3.0cmにわたる範囲であるが、さらに0.7cmほど樹皮を巻いたような横方向の痕跡がみられる。矢柄の径は0.9cmである。6は残存長17.6cm、身部長1.8cm、頸部長8.7cm。身部はやや小型の三角形をした片丸造である。身部の関は明瞭に観察できなかった。頸部は棘関を持つ。茎部には矢柄の木質が残存する。7は残存長20.3cm、身部長2.8cm、頸部長9.6cm。身部は三角形をした両丸造である。頸部は棘関を持つ。茎部には矢柄の木質とその上に幅2mm程度の樹皮巻きが残存し、関から2.3cmの範囲に14条巻かれる。矢柄の径は1.1cmである。8は刀子である。残存長10.0cm、刃部残存長6.0cm、棟幅0.2cm、刃部先端がわずかに欠損する。サビがひどく、関の確認は出来なかった。茎部には柄装具の木質が残存する。9・10は銅芯に金薄板を被せた太型の耳環であり、セット関係を持つと考えられる。色調は金色味が強い。9は縦幅3.1cm、横幅3.3cm。10は縦幅3.1cm、横幅3.3cm。11・12は銅芯に銀薄板を被せ金メッキを施した太型の耳環であり、セット関係を持つと考えられる。全体的に残存状態が悪いが、一部にやや薄い金色の色調がみられる。11は縦幅2.8cm、横幅3.0cm。12は縦幅2.7cm、横幅3.0cm。13は錫製の耳環片である。断面径0.45cm。残存状態は悪く、元来の表面はほとんど残っていないと思われる。色調は灰色である。14・15は両端に孔をもつ銅製の空玉である。14は径1.2cm、厚さ1.4cm、孔径1mm。欠損部分で観察したところ、厚みは1mm弱であった。また、X線観察により、孔を頂点とする碗型のものを貼り合わせて作られたことがわかった。15は径1.2cm、厚さ1.3cm、孔径1mm。14と同じく、孔を頂点とする碗型のものを貼り合わせて作られる。側面には3



第16図 3号墓右屍床出土遺物

mm弱のわずかなくぼみがみられ、その周囲には数条の繊維痕が観察された。この繊維痕は毛髪の可能性も考えられる。16は碧玉製勾玉である。扁平なコの字形をしており、一方向からの穿孔が施される。縦3.0cm、横1.7cm、厚さ0.9cm。孔径0.3~0.2cm。17は瑪瑙製丸玉である。径8.0mm、厚さ5.0mm、孔径1.0mm。色調は明黄褐色である。18~24はガラス小玉である。径は4.0~6.0mm、厚さ2.0~3.0cm、孔径1.0~2.0cm。色調別に個数を挙げると、紺色2点(18・19)、水色1点(20)、緑色2点(21・22)、黄色2点(23・24)である。ガラス小玉7点をつなぐと長さ1.9cmとなる。右屍床出土玉類をすべてつないでも長さ6.0cmと短く、首飾り以外の用途に使われた可能性も考えられる。25はイモガイ製のヨコ型の貝輪である。外径7.5cm、内径5.7cm、厚さ2.5cm。残存状態は悪く、貝輪本体は半分程度しか残存していない。しかしながら、貝輪の表面が凝灰岩の膜で覆われており、内部の貝輪が欠損する部分においても凝灰岩の膜のみ残っている部分があり、全体の70%ほどの形状が観察できる。



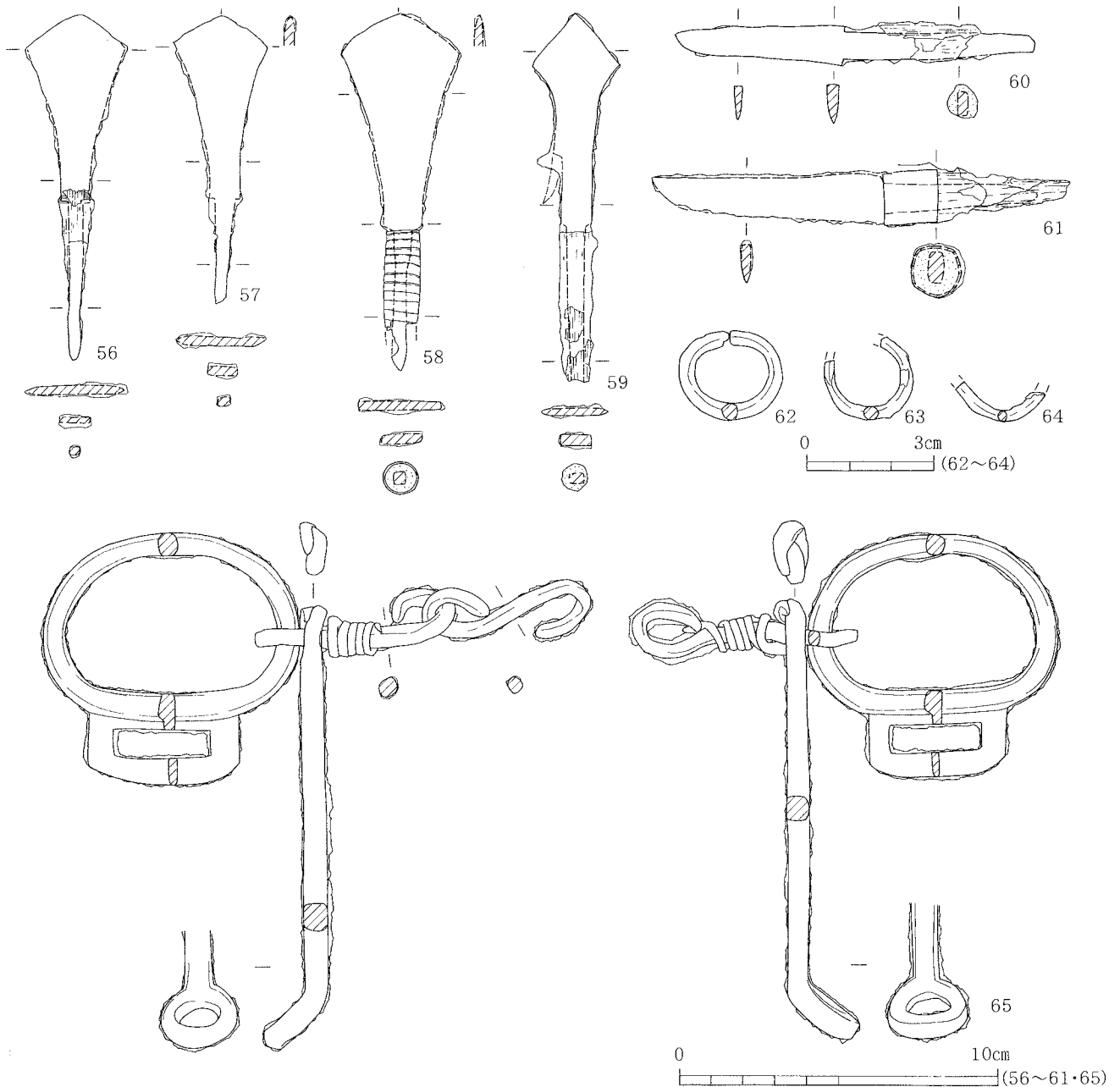
第17図 3号墓左屍床出土遺物

左屍床出土遺物 (第17図、第3・4表)

鉄鏃3点、刀子3点、耳環4点、土製小玉20点が出土した。26・27は平根系鉄鏃である。26は三角形鏃である。残存長11.2cm、身部長5.4cm、頸部長2.3cm。刃部はわずかにS字状のカーブを描き、身部の関は若干の角度をもつ角関である。頸部の関は角関で、茎部には矢柄の木質が残存する。27は方頭鏃である。残存長9.7cm、身部長5.7cm。刃部はやや丸みのあるラインをなす。身部の関は角関で、茎部には矢柄の木質と幅4mm程度の樹皮巻きが一部残存する。28は圭頭鏃である。残存長10.1cm、身部長1.7cm。刃部は幅1.5cm、長さ1.6cmの細身で鋭い形状をなす。やや台形ぎみの関をもつ。29～31は刀子である。29は残存長10.2cm、刃部残存長4.7cm、棟幅0.3cm。刃部先端が欠損する。関は片関である。30は残存長11.4cm、刃部残存長5.8cm、棟幅0.3cm。刃部先端が欠損する。茎部には鹿角製の装具がわずかに残存する。関は片関である。31は全長15.3cm、身部9.5cm、棟幅0.4cm。比較的大型の刀子である。関は両関である。32～35は耳環である。32は銅芯に銀薄板を被せ金メッキを施した大型の耳環である。色調は白味の強い金色である。縦幅2.4cm、横幅2.7cm。断面は長径0.8cmのやや楕円形をなす。33は銅芯の耳環である。縦幅1.7cm、横幅1.7cm、断面0.25cmと細型である。34は銅芯に銀装を施した細型の耳環片である。断面径0.2cmである。35は錫製の耳環片である。破片ではあるが、表面の残存状態は良く、銀色の光沢がみられる。断面径0.4cm。36～55は土製の小玉である。フルイにより検出した。側面はやや光沢のある深い茶色の色調をもつ。径5mm、厚さ2～3mmのものが多く、20点をつなぎ合わせた長さは5.15cm、後述する通路部出土の5点を含めると長さ6.65cmとなる。

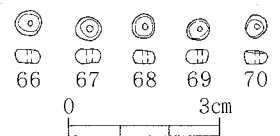
奥屍床出土遺物 (第18図、第4表)

鉄鏃4点、刀子2点、耳環3点、轡1点が出土した。鉄鏃56～59は4点全てが平根系の圭頭鏃であり、身部の関はいずれも角関である。56は全長10.8cm、身部長5.9cm。茎部には矢柄の木質が残存する。また、身部にも縦方向の木質と横方向の木質が附着している。副葬時に他の鉄鏃が重ねて置かれるなどして、その矢柄が附着した可能性も考えられる。57は全長9.0cm、身部長5.7cm。茎部先端にわずかに木質が残存する。58は全長11.2cm。身部長6.8cm。茎部には矢柄の木質と樹皮巻が残存する。樹皮巻きは幅3～4mmの樹皮を2.9cmの範囲に11条巻き付けている。矢柄部分の径は1.1cm。

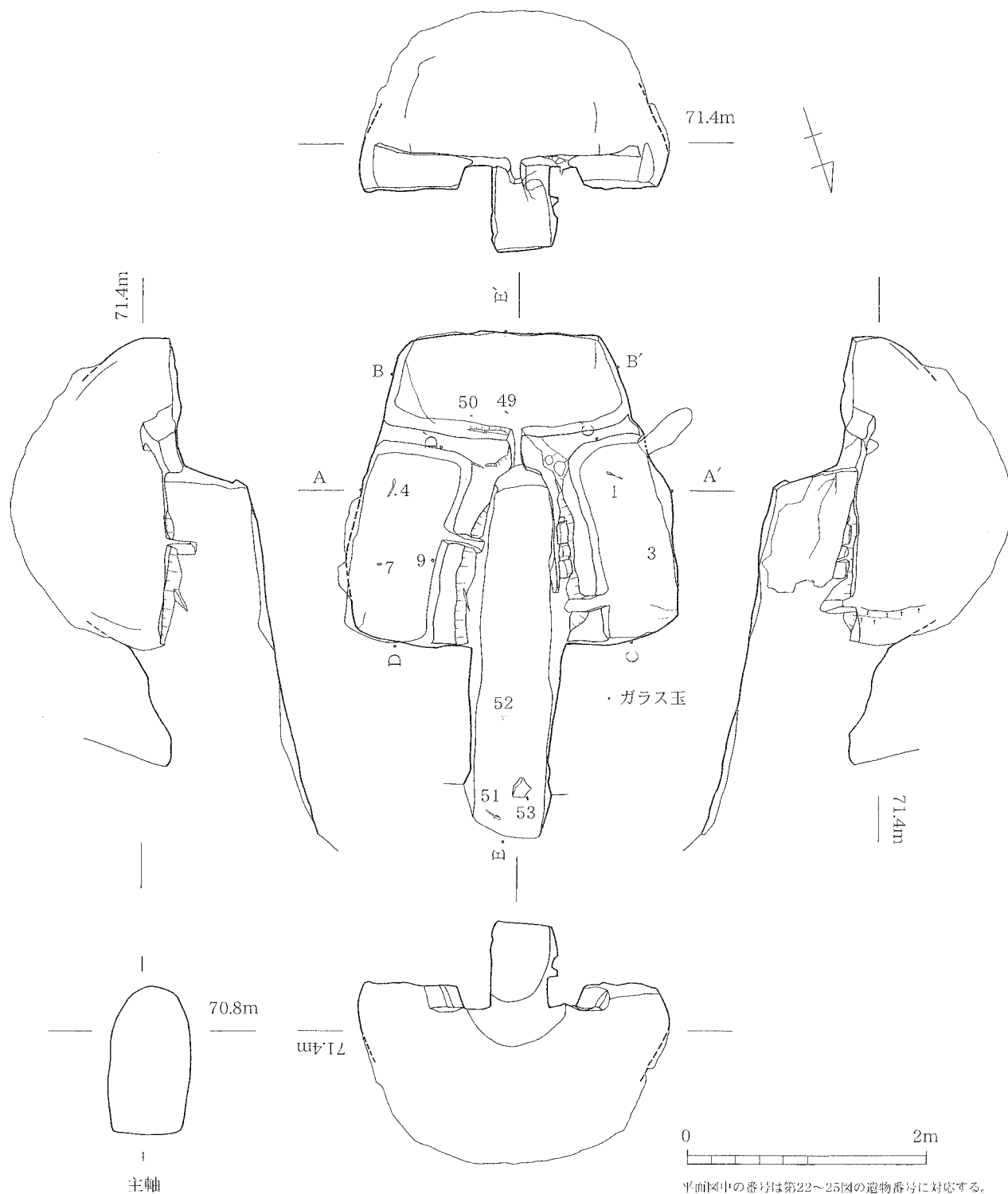


第18図 3号墓奥屍床出土遺物

59は残存長11.6cm、身部長6.7cm。56~58と若干形状が異なり、刃部が長く、刃部から基部に至るラインは刃部最大幅に近い位置で大きく内湾する。X線観察で図の左側のラインに不自然な段が見られたことから、逆刺があった可能性を考えた。基部には矢柄の木質が残存する。矢柄の径は1.0cm。60・61は刀子である。60は全長11.3cm、刃部長5.3cm、棟幅0.3cm。基部には鹿角製の柄装具の痕跡が全面にみられる。関は両関である。61は全長13.2cm、刃部長7.3cm、棟幅0.3cm。基部には木製の柄が残存し、その上に幅1.7cm、厚さ1mmの柄金具が装着される。柄金具部分の径1.7cm。関は両関である。62~64は耳環である。62は銅芯の中細の耳環である。縦幅2.1cm、横幅2.5cm、断面径0.4cm。63は銅芯に銀装を施した細型の耳環である。縦幅1.9cm、横幅2.1cm、断面0.3cm。64は銅芯の細型の耳環片である。断面径0.3cm。65は環状鏡板付轡であり、環状鏡板、銜、一本柄引手からなる。環状鏡板は単環式で、楕円形の鏡板本体に大型の板状の立間を造り付ける。図左が横幅8.0cm、縦幅7.9cm、立間幅4.8cm、長さ2.0cm。図右が横幅7.9cm、縦幅7.6cm、立間幅4.3cm、長さ2.0cm。鏡板の断面は幅0.7cm、厚さ

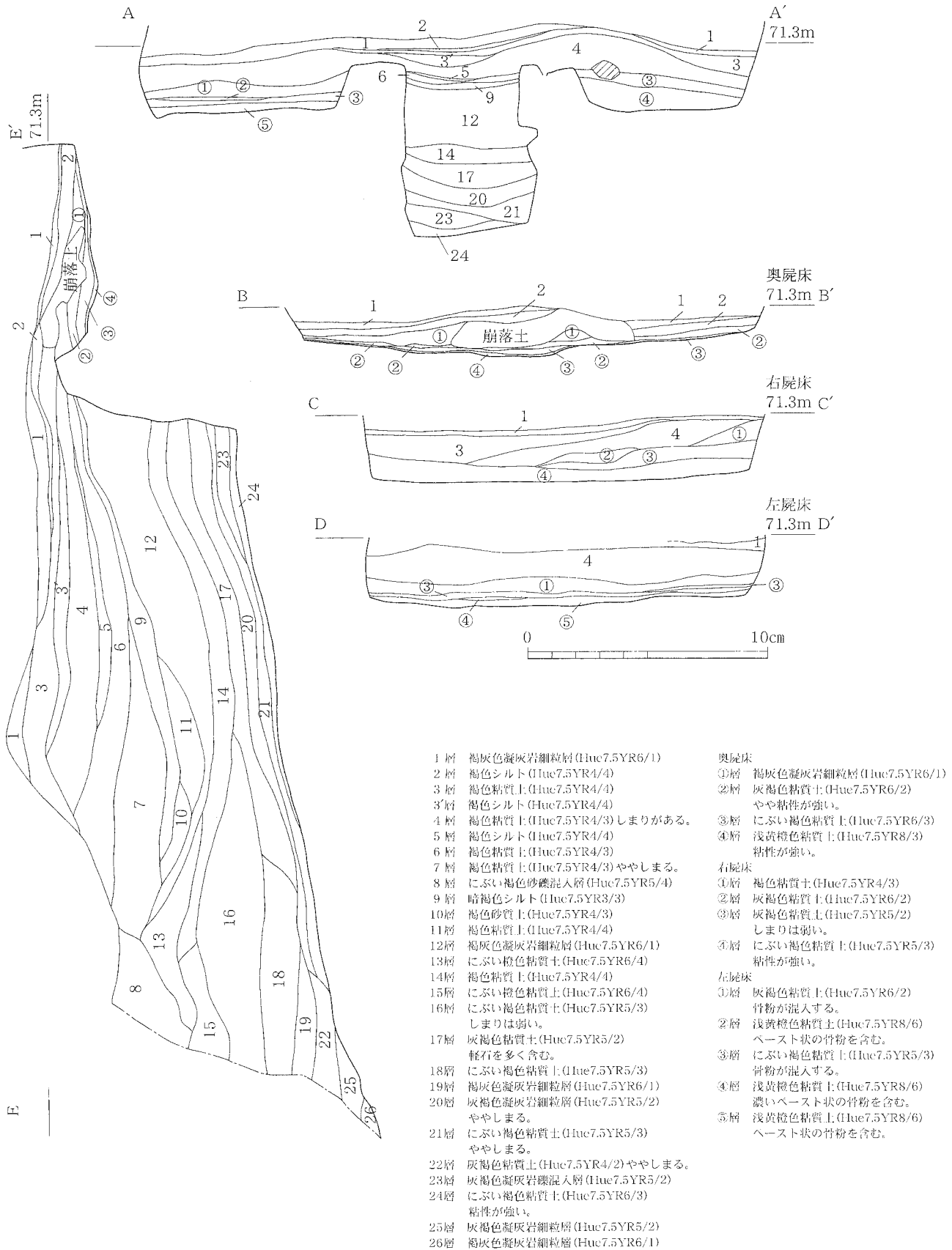


第19図 3号墓通路部出土遺物



第20図 4号墓実測図

0.5cmの隅丸方形、立聞の厚さは0.3cmである。立聞は鏡板の一方の面にそろえて作られており、他方の面は立聞と鏡板の境界に段が設けられる。銜は三連式で、左右の鏡板に連結する金具とその2つを連結する金具からなる。左右の銜金具はほぼ同じ作りで一本の鉄棒を折り曲げて作られる。鏡板に連結する端環は鉄棒を鏡板に通して輪を作り端部を鉄棒本体にコイル状に5～6回巻き付ける。内側の端環は鉄棒の端部を丸く折り曲げて作り出す。左右の銜金具とも端環の向きはほぼ90度である。中間の金具は鉄棒をS字状に折り曲げ端環を作り出す。それぞれの長さは図左から長さ6.2cm、5.3cm、7.1cmであり、銜の全長は16.8cmとなる。引手は一本柄である。引手の銜側の端環は、Y字状に作り出した端部の両端を丸く折り曲げて環を作り出す方法で、銜の端環に連結させている。手綱側の端環は精巧な環状に



第21図 4号墓土層断面図

作られ、柄本体に対し鈍角に折れ曲がる。図左で全長13.8cm、銜側の端環外径1.8cm、手綱側の端環外径2.5cm。図右で全長13.8cm、銜側の端環外径1.9cm、手綱側の端環外径2.8cm。

通路部出土遺物（第19図、第3表）

土製小玉が5点出土した（66～70）。側面はやや光沢のある深い茶色の色調で、径5.0mm、厚さ3.0mm、孔径1.0mm。個数が少なく、左屍床の玉が落ちた可能性が高い。

4号墓

規模・構造（第20図）

主軸方向はN19° Eで北北東に開口する。玄室の平面プランは台形状を呈する。規模は奥行き2.6m、幅2.6～1.6mを測る。天井部の崩壊は著しく、数箇所の礫層から水が流入したものと考えられる。奥壁の立ち上がりは側壁に比べ丸みを帯び、天井の断面形はアーチ形を呈する。壁面の四隅の境は不明瞭であるが線をわずかに確認できる。天井部は崩落しているものの寄棟の屋根型であったと推定される。天井高は推定1.8mを測る。

左右屍床の仕切り上端面は奥屍床仕切り上端面に連続し隔絶しない。奥屍床の仕切り上端面は両側壁へ緩やかに上がる。左右屍床面の高さは横断面において等しいが奥屍床側では右屍床が高い。さらに奥屍床が最も高くなっている。右屍床長軸長1.6m、短軸長0.56m、左屍床長軸長1.54m、短軸長0.75m、奥屍床長軸長1.9m、短軸長0.78mを測る。右屍床右隅には長さ約50cm、幅約20cm、高さ約35cmの細長い穴が確認されるが、人為的なものかは判断できない。右屍床の排水溝は玄門側に偏って設けられている。その位置から奥屍床にかけての通路壁面は亀裂による板石状のものがみられる。岩質の脆さを嫌い排水溝を玄門側に設けたのではなかろうか。

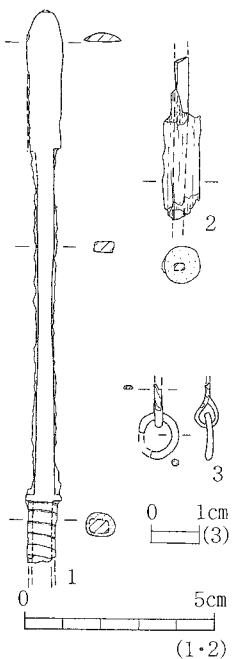
通路部は狭く傾斜し、通路基底面から仕切り上端面までの高さは0.7m～0.94mと非常に高い。壁面は直立し丁寧に造られている。羨門～玄門通路は0.95mが残存し、高さは1.04m、幅は玄門側0.78m、羨門側0.65mを測る。羨門～玄門通路の断面形は縦長の円形である。

出土状況（第21図）

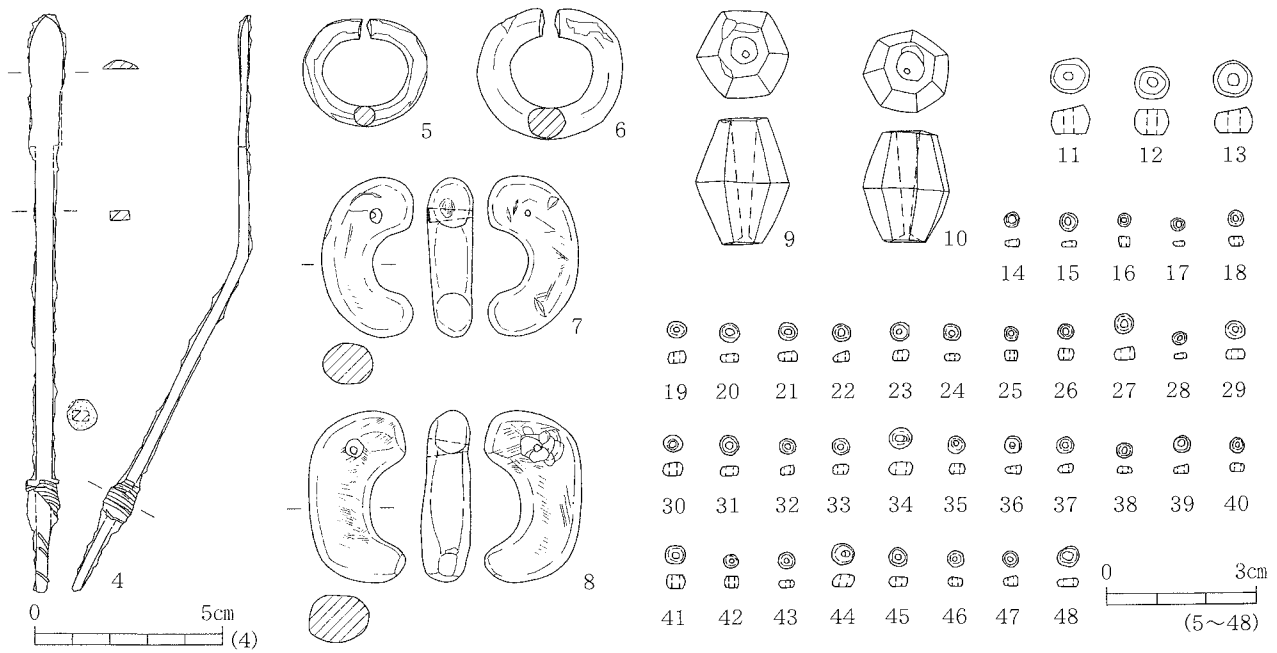
羨門～玄門通路より玄室内にかけて流入土及び天井崩落土が認められた。玄室内には水没したことを示す粘土層が計4層確認された。流入土は屍床仕切りを越え、玄室内全体に堆積していた。人骨は左屍床にペースト状の骨粉層が認められ、羨門～玄門通路で骨片が残存する。

右屍床では床面直上より青銅製金具3、③層上位より長頸鎌1が出土する。左屍床では床面直上よりガラス玉1点、切子玉9と④層上位より勾玉7、②層上位に長頸鎌4が出土している。フルイより耳環5・6、勾玉8、切子玉10や多くのガラス玉が検出された。各出土層位は耳環5・6が左屍床右区①・③層より取り上げており、勾玉8、切子玉10は①～③層において出土する。ガラス玉は屍床部の中心で4分割したうちの左手前以外から出土し、③～⑤層にかけての取り上げとなっている。屍床部を4分割し、おおまかな層位の取り上げを行った結果からは出土地点は散布していた可能性が高い。床面直上から出土した切子玉と排土出土の切子玉は層位が異なるように、他の装身具の出土層位も幅があり、1次葬における原位置は保っていないと推測される。奥屍床においては鉄鎌片49が③層、管玉50が床面直上より出土している。

羨門～玄門通路部では屍床部より移動したと考えられる遺物が出土しており、耳環52は21層中位、管玉53は25層、鉄鎌51は25層下位から出土している。25層上面では長さ15cm程の石材と骨片が検出された。羨門～玄門通路壁面及び基底面と17層下位、21層下位には粘性の強い黄白色の層が認められた。下層にあたる17層～26層は追葬時に伴う層位の可能性が考えられる。



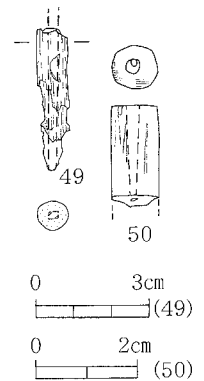
第22図 4号墓
右屍床出土遺物



第23図 4号墓左屍床出土遺物

右屍床出土遺物 (第22図)

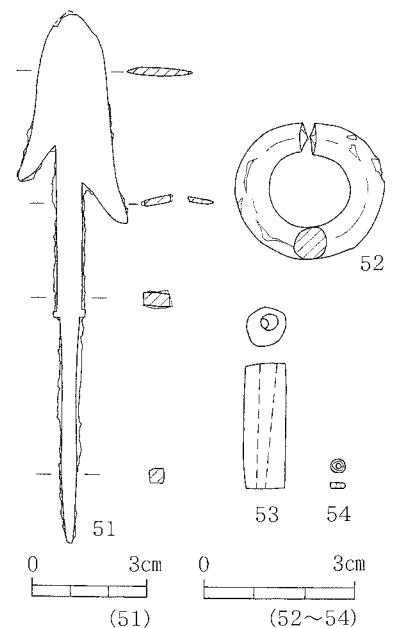
鉄鏃2点、青銅製の金具1点が出土した。1は長頸鏃である。残存長14.6cm。身部長3.6cm、頸部長9.1cm。身部は長三角形の片丸造である。頸部は棘関を持ち、茎部には矢柄の木質とその上に樹皮巻が残存する。樹皮の幅は約3mmで、残存する限りで5条巻かれている。樹皮巻き部分での矢柄の径0.7cm。2は鉄鏃の茎部と考えられる。残存長4.3cm。表面には木質が残存する。1の茎部の可能性もある。3は青銅製の2つの金具が鎖状に連結するものである。何らかの装身具の一部と考えられる。上段の金具は、断面径0.1cmの一本の細い棒の端部を折り曲げ環を作り出される。上部は欠損する。長さ0.85cm、環状部分径0.5cm。銅芯の表面には一部金メッキが残存する。下段の金具は、一部欠損するが、断面径0.1cm、縦0.9cm、横0.8cmの環状であろう。



第24図 4号墓奥屍床出土遺物

左屍床出土遺物 (第23図、第3・4表)

鉄鏃1点、耳環2点、勾玉2点、切子玉2点、ガラス小玉41点が出土した。4は長頸鏃である。頸部が折れ曲がるが、復原長16.4cm、身部長3.4cm、頸部長9.6cm。身部は長三角形の片丸造である。頸部は棘関をもち、茎部には矢柄の木質の上に幅2mmの樹皮巻が残存する。また、茎部端部には鉄地に直接巻き付けた幅1mm弱の木質の繊維が残存し、矢柄装着前の下巻きと考えられる。5・6は耳環である。5は銅芯に金メッキを施した中細の耳環である。縦幅2.1cm、横幅2.4cm、断面径0.3cm。色調は金色であるが、開口部は金をはがれている部分が多い。6は銅芯に銀薄板を被せ金メッキを施した太型の耳環である。縦幅2.6cm、横幅2.9cm、断面は長径0.9cmの楕円形である。開口部は銀薄板を折りたたむ。色調は金色である。通路部出土の52とセット関係になる可能性がある。7は碧玉製勾玉である。縦3.2cm、横1.8cm、厚さ0.9cm。孔径は1.5~3mmで一方向から穿孔される。表面には擦痕がみられる。また、製作時のものか、孔付近を中心に数カ所沈線のような傷がみられる。色調は深緑色である。8は瑪瑙製勾玉である。縦3.4cm横1.9cm、厚さ1.0cm。孔径は1.5~4mmで、一方向から穿孔される。孔径の小さい方の面に



第25図 4号墓通路部出土遺物

は孔周辺に細かい単位の剥離面がみられる。表面には研磨痕が多く認められる。色調は浅橙色である。9・10は水晶製の切子玉である。9は長さ2.5cm、最大径1.9cm、孔径1.5～5.5mm。孔は一方向から穿孔され、孔径の小さい側の面は径5mmの浅い凹みがみられる。平面形態は六角形である。10は長さ2.2cm、最大径1.7cm、孔径1～4.5mm。孔は一方向から穿孔され、孔径の小さい側の面は径5mmの浅い凹みがみられる。平面形態は七角形である。11～48はガラス玉である。出土したガラス小玉のうち3点は破片であるため図化していない。11～13は径7mm程度とやや大型で、色調はすべて青である。14～48は径2.5～4.5mmの小玉で、色調は青8点(11～18)、紺10点(19～28)、水色15点(29～43)、緑5点(44～48)である。厚みが計測できたガラス玉38点をつないだ長さは8.55cm、左屍床出土の玉類をすべてつなぐと長さは15.15cmとなる。

奥屍床出土遺物(第24図)

鉄鏃片1点、管玉1点が出土した。49は鉄鏃の茎部片と考えられる。残存長3.7cm。表面には木質が残存する。50は碧玉製管玉である。一端が欠けており、残存長2.0cm、径0.95cm、孔径1.5～3mm。孔は一方向から穿孔される。上面及び側面に研磨痕がみられる。色調は深緑色である。

通路部出土遺物(第25図、第4表)

鉄鏃1点、耳環1点、管玉1点、ガラス小玉1点が出土した。51は平根系の腸袂三角形鏃である。全長14.0cm、身部長5.5cm。腸袂は段違いに作られ、外反する。頸部は棘関を持つ。52は銅芯に銀薄板を被せた太型の耳環である。縦幅2.7cm、横幅3.0cm、断面径0.65cm。開口部は銀薄板を折りたたむ。法量は左屍床出土の6と類似し、金メッキの有無が明確ではないが、セット関係の可能性も考えられる。色調はやや金色味を帯びる。53は碧玉製管玉である。長さ2.5cm、径0.8cm、孔径2～3mm。孔は一方向から穿孔される。色調は淡い緑色である。54は青色のガラス小玉である。通路部からはこの1点のみの出土であることから、左屍床のガラス玉が流れたものと考えている。

5号墓

規模・構造(第26図)

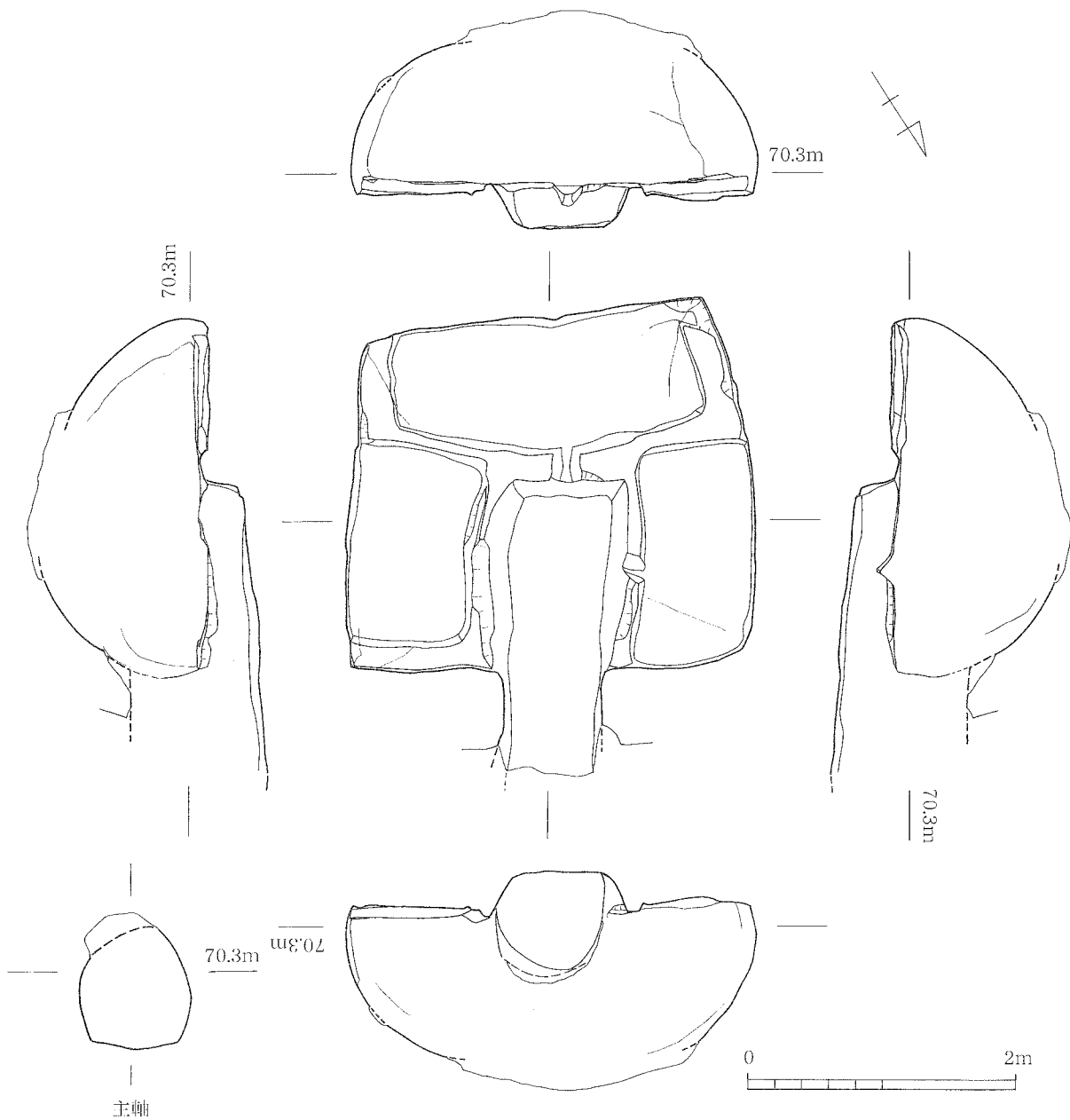
主軸方向はN36°Eで北東に開口する。玄室の平面形はやや横に長い方形プランを呈する。規模は奥行きは2.62m、幅2.7m～3.04mで、奥屍床右側壁は左に歪む。奥屍床の両端には仕切りにつながる高さで段が付き、左屍床の玄門側においても同様に段が形成される。奥屍床の段部と側壁の間には凹みが認められる。側壁は緩やかに立ち上がり天井部に続き、奥壁の立ち上がりは丸みを帯びる。天井上部は崩落しているものの天井の断面形はアーチ形を呈する。壁面の四隅の境は不明瞭であるが線をわずかに確認できる。おそらく寄棟の屋根形が崩れた形態であったと推測される。天井高は推定1.4mを測る。

奥屍床の仕切りは隔絶せず、左右屍床仕切り上端面に続く。左右屍床面の高さは他の横穴と異なりほぼ等しく、奥屍床は他の横穴と同様に最も高い。右屍床長軸長1.6m、短軸長0.81m、左屍床長軸長1.4m、短軸長0.93m、奥屍床長軸長2.38m、短軸長0.92mを測る。

通路部の幅は1.05mと広く、通路基底面から屍床仕切り上端面までの高さは0.4mと低い。床面はほぼ平坦である。羨門～玄門通路の残存長は0.55m、幅0.73m、高さ0.97mを測る。断面形は楕円形を呈する。

出土状況(第27・28図)

羨門～玄門通路及び玄室内は外部からの流入土、天井崩落土が堆積しており、各屍床を埋め尽くしていた。さらに羨門側は完全に塞がれた状態であった。各屍床からは人骨片と歯が出土しており、少なくとも各1体ずつの計3体が埋葬されたことがわかる。また各屍床面から赤色顔料が検出されており分析の結果、パイプ状ベンガラであることが判明した。通路部の流入土である5層上面では須恵器坏蓋が正置の状態で見出された。右屍床では5層の下層にあたる①



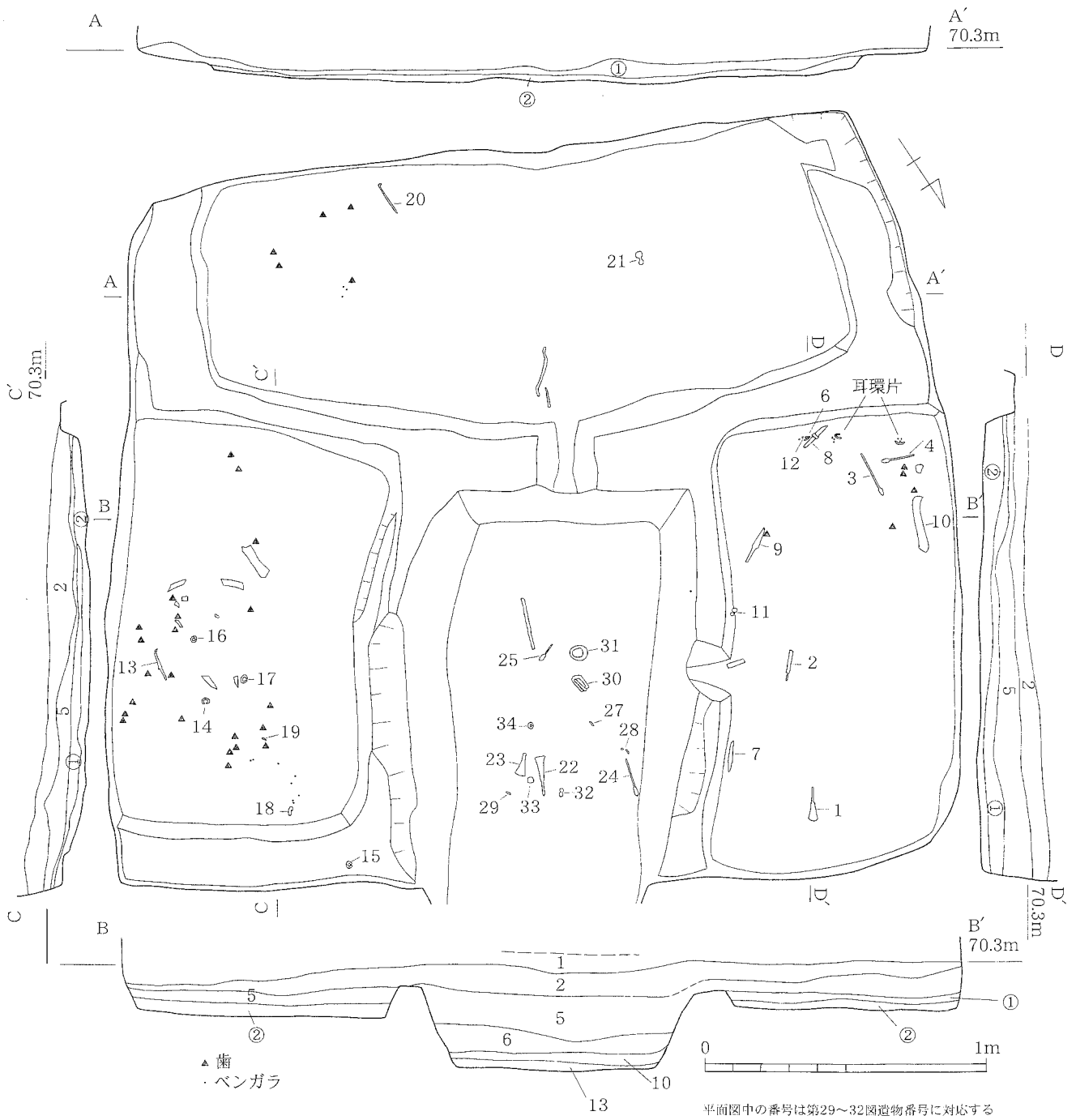
第26図 5号墓実測図

層では遺物が認められず、②層において多くの遺物が出土した。②層においては遺物を上位、下位、床面直上と分けて取り上げを行った。②層上位より方頭鎌2、長頸鎌4、鉄鎌茎部6、刀子9、②層下位より方頭鎌1、長頸鎌3、刀子7、刀子8、曲刃鎌10、床面直上より馬具の飾り金具11、耳環片12が出土している。

左屍床では①層上位より刀子13、耳環17、①層中位より耳環14、下位より耳環16、床面直上より耳環15・18が出土する。耳環17・18と耳環14・15がセットになる可能性がある。耳環17・18は①層上位と床面直上の出土であり耳環14・15においても層位的に同一ではない。①～②層では骨片、遊離歯が多く散在する。奥屍床では②層上位より馬具の可能性のある飾り金具21、②層下位より曲刃鎌20が出土した。

通路部では最下層の13層～床面直上近くにおいて方頭鎌22・23、長頸鎌24～26、鉄器片27～29、鉸具30、馬具の可能性のある環状の鉄製品31、馬具の飾り金具32・33、耳環34が出土している。通路部玄門側より羨門～玄門通路には白色の粘質土を多く含む12層が認められ、この白色粘質土は貝の成分であった可能性がある。耳環34は左屍床の耳環16とセットと思われる。

各屍床部と通路部での出土状況を見ると鉄鎌・刀子の刃部先端の方向は定まっておらず散在する。右屍床に限って



- 1層 灰褐色凝灰岩細粒層(Hue7.5YR6/2)天井崩落土
- 2層 にぶい褐色粘質土(Hue7.5YR5/3)しまりがなく、凝灰岩のブロックを含む。
- 5層 灰褐色粘質土(Hue7.5YR6/1)粘性が強い。
- 6層 褐灰色凝灰岩礫層(Hue7.5YR6/1)やや硬く、しまる。
- 10層 にぶい褐色粘質土(Hue7.5YR5/4)
- 13層 明褐灰色(Hue7.5YR7/1)粘性がやや強く、しまる。

奥屍床

①層 灰褐色凝灰岩細粒層(Hue7.5YR5/2)

②層 褐灰色粘質土(Hue7.5YR6/1)

右屍床

①層 にぶい褐色粘質土(Hue7.5YR5/3)粘性が強い。

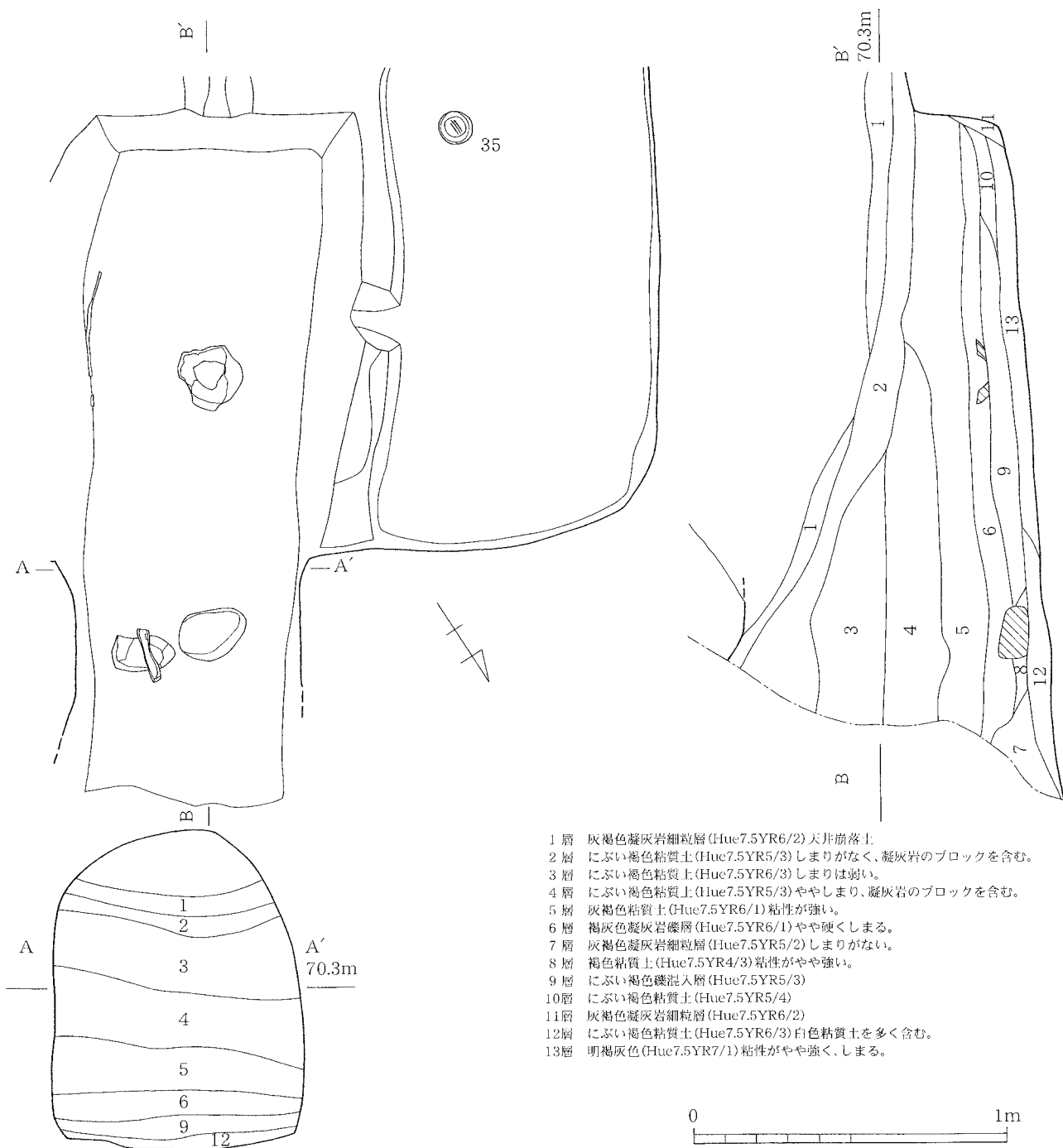
②層 褐灰色粘質土(Hue7.5YR5/1)凝灰岩細粒が主体で、粘性が非常に強い。

左屍床

①層 にぶい褐色粘質土(Hue7.5YR5/3)

②層 褐灰色粘質土(Hue7.5YR5/1)粘性が非常に強い。

第27図 5号墓遺物出土状況・土層断面図



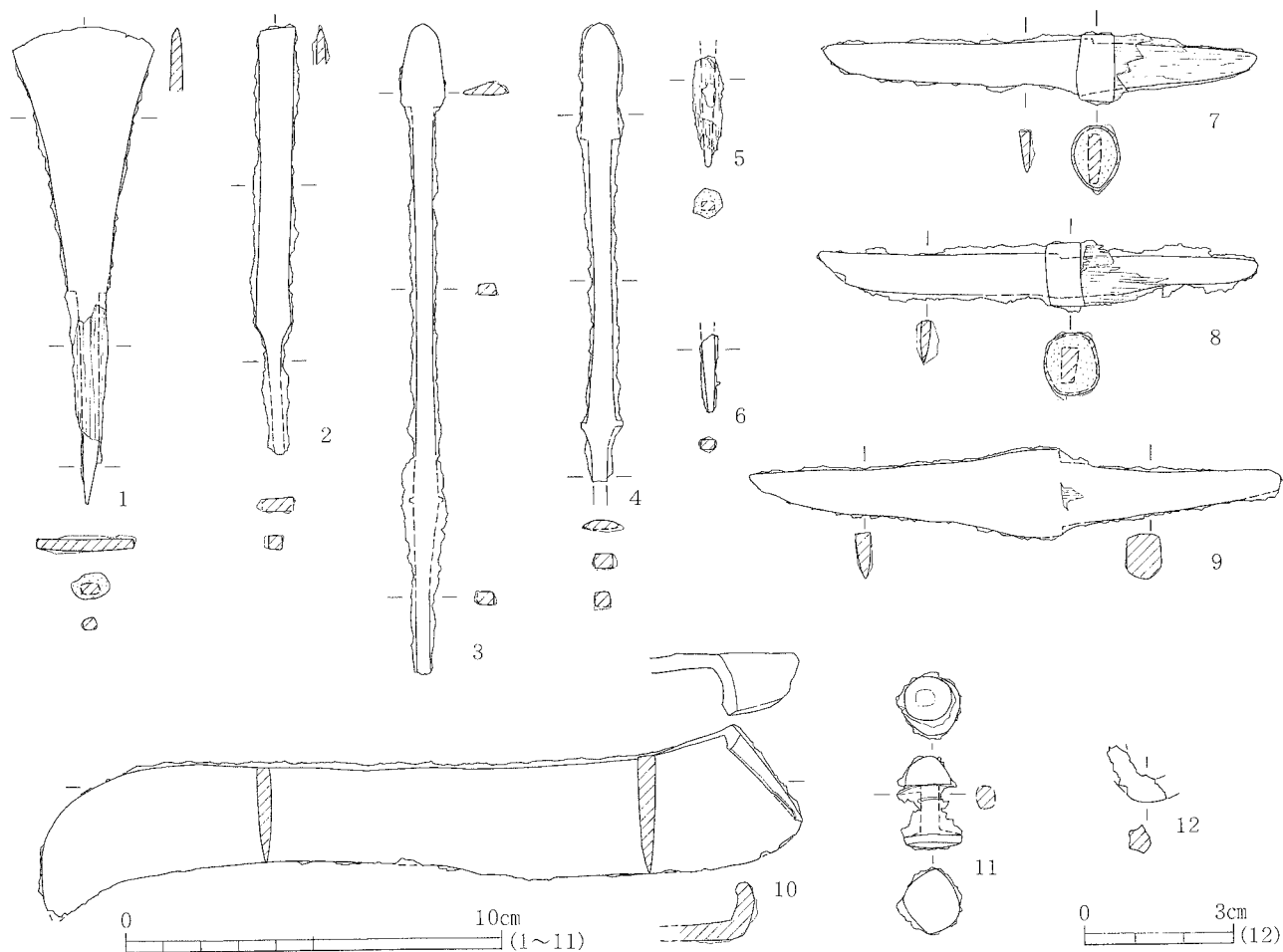
第28図 5号墓上層面出土状況・土層断面図

は屍床内において外側に遺物が分布するようにもみうけられる。各屍床とも1次葬の原位置と明確に判断されるものはない。玄門通路において12層上面では人為的に配置された石が2つ並び、12号墓でも同様に認められる。9層上面では頭骨片などの人骨が出土する。

5号墓の時間的推移は層位と遺物から、屍床部に埋葬→追葬→通路部に遺物→玄門通路に石を設置→通路部に埋葬→流入土堆積→右屍床に須恵器坏蓋となる。通路部における遺物のあり方からは自然作用の可能性は低いように思われる。また須恵器坏蓋の正置である出土状況からは最終使用時に伴う可能性も考えられる。

右屍床出土遺物（第29図、第4表）

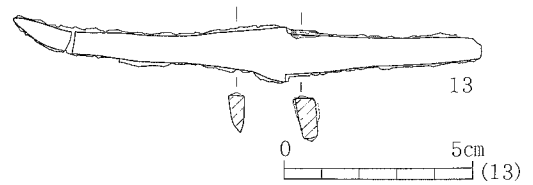
鉄鎌6点、刀子3点、鉄鎌1点、飾り金具1点、耳環3点が出土した。1は平根系の方頭鎌である。全長12.7cm、身部長7.5cm。刃部のラインは丸みを帯びる。身部の関は角関である。茎部には矢柄の木質が残存する。2は方頭鎌である。全長11.4cm、身部長7.1cm、身部幅1.0cm。身部は非常に長く、若干斜めに傾いた刃部を持つ。関は斜関である。3・4は長頸鎌である。3は全長17.3cm、身部長2.2cm、頸部長10.5cm。身部は三角形の片丸造である。頸部は長く、棘関を持つ。4は残存長12.2cm、身部長3.0cm、頸部長7.7cm。身部は長三角形の片丸造である。頸部は棘関を持つ。茎部には木質が残存する。5・6は鉄鎌茎部片と考えられる。5は残存長2.9cm。木質が残存する。6は残存長2.1cm。7～9は刀子である。7は全長11.6cm、刃部長7.2cm、棟幅0.3cm。茎部には柄の木質が残存し、木質の上には幅1.0cmの柄金具が装着される。柄金具部分径1.3～1.8cm。関は不明瞭であるが、片関と思われる。8は全長11.8cm、刃部長6.4cm、棟幅0.3cm。茎部に柄装具の木質が残存する。7と同様に幅1.0cmの柄金具が装着される。柄金具部分径1.6cm。関は片関である。9は全長14.2cm、刃部長8.3cm、棟幅0.4cm。茎部に木質が一部残存する。全体的にサビで膨れる。関は両関である。10は大型の曲刃鎌である。全長20.0cm、刃部幅3.2cm、厚さ0.5cm。基部には長さ1.6cmの折り返しがつく。折り返しは刃部を下にし、先端を左に置いたとき上方に立ち上がる。また、折り返しの角度から、柄は刃部に対し鈍角に装着される作りとなる。11は鉄製の飾り金具である。宝珠飾部分径1.2cm、厚さ0.8cm、心棒長さ1.3cm、心棒の先端は方形の鉄板をあてている。鉄板の一辺の長さ1.4cm。心棒部分には薄い白色の有機質が螺旋状にみられることより、貝製雲珠や貝製飾り金具の頂部につけられたものであったと考えられる。12は錫製の耳環片である。劣化が激しく、細かい破片が環状に残存する状態で検出された。現状での断面最大径は0.6cmであるが、ブロック状に崩壊しているため、元来の表面はほとんど残存していない。色調は灰色である。また、その他に出土した2点の耳環も錫製であり、出土時にすでに細かい破片となっていたため図示出来なかった。



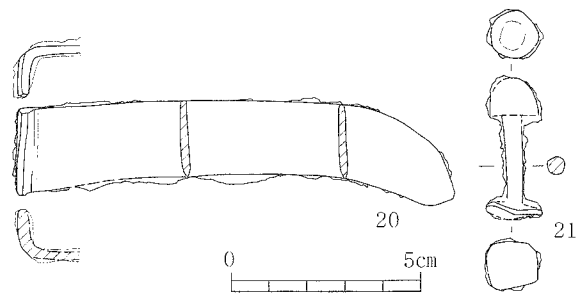
第29図 5号墓右屍床出土遺物

左屍床出土遺物 (第30図、第4表)

刀子1点、耳環6点が出土した。13は刀子である。刃部先端が折れているものの、完形である。全長12.4cm、刃部長7.2cm、棟幅0.4cm。茎部には柄の木質が残存する。関は両関である。14～19は耳環である。14～16は銅芯に銀薄板を被せメッキを施した太型の耳環である。14は縦幅2.3cm、横幅2.6cm、断面は長径0.8cmの楕円形である。開口部にはシワが観察できる。色調は金色である。15は縦幅2.3cm、横幅2.5cm、断面は長径0.8cmの楕円形であり、開口部は銀薄板を折りたたむ。色調は金色である。法量・材質から、14・15はセット関係を持つと考えられる。16は縦幅2.15cm、横幅2.3cm、断面長径0.8cmである。銀薄板部分は30%程度残存する。色調は薄い金色である。通路部出土の34とセット関係になる可能性がある。17・18は銅芯に金薄板を被せた太型の耳環で、セット関係を持つと考えられる。17は縦幅2.8cm、横幅3.1cm、断面は長径0.8cmのやや楕円形である。開口部は金薄板を折りたたむ。現状では開口部の両端の金薄板が接触し隙間がみられないが、内部の銅芯は0.3cmの開きがある。18は縦幅2.8cm、横幅3.1cm、断面径0.7cmである。開口部は金薄板を折りたたむ。金薄板は約50%残存する。19は錫製の耳環片である。ブロック状に崩壊しており、現状での断面最大径は0.4cmであるが、本来の表面は残っていない。色調は青灰色である。



第30図 5号墓左屍床出土遺物



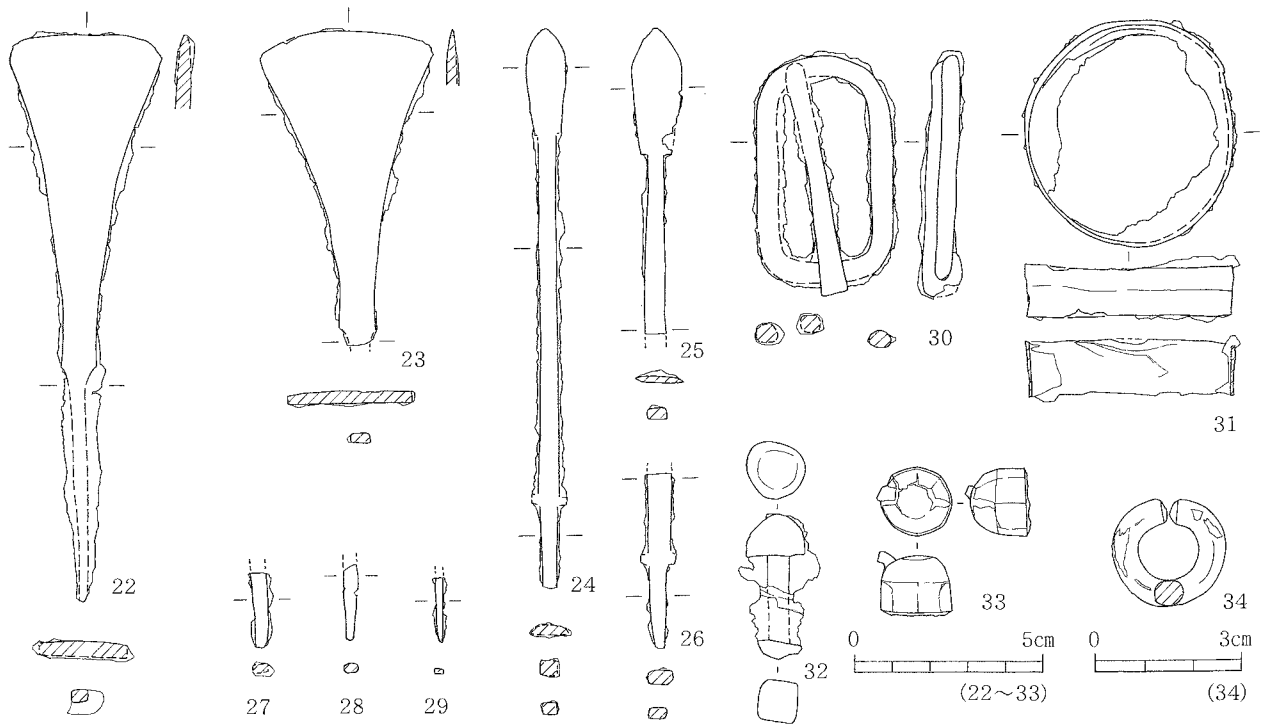
第31図 5号墓奥屍床出土遺物

奥屍床出土遺物 (第31図)

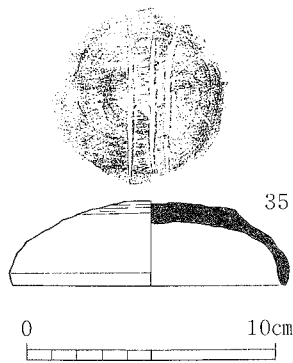
鉄鎌1点、鉄製の飾り金具1点が出土した。20は全長11.5cm、刃部幅2.0cm、厚さ0.2cmの小型の曲刃鎌である。基部には長さ1.3cmの折り返しがつく。折り返しの方向は、刃部を下にし、先端を右に置いたとき上方に立ち上がる。折り返しの角度から、柄は刃部に対し直角に装着される作りとなる。21は鉄製の飾り金具である。宝珠飾径1.25cm、厚さ1.0cm、心棒長さ2.3cm、径0.45cm。心棒先端の方形鉄板一辺1.4cm。心棒部分には貝の組織は見られなかったが、11・31と類似する形状から、貝製の雲珠や飾り金具につける飾り金具と考えられる。

通路部出土遺物 (第32図、第4表)

鉄鎌5点、鉄器片3点、鉸具1点、貝製飾り金具2点、鉄製品1点、耳環1点が出土した。22～26は鉄鎌である。22は平根系の方頭鎌である。全長15.0cm、身部長8.8cm、身部幅4.2cm。刃部のラインはやや丸みを帯びる。身部の関は斜関である。23は平根系の方頭鎌の身部である。茎部を欠損する。身部長7.9cm、身部幅4.6cm。24は長頸鎌である。残存長14.8cm、身部長2.8cm、頸部長9.8cm。身部は柳葉形の片丸造である。頸部は棘関を持つ。25は長頸鎌であり、頸部以下が欠損する。残存長8.1cm、身部長3.4cm。身部は柳葉形の薄い造りである。26は長頸鎌の頸部から茎部の破片であり、棘関を持つ。25と接合できなかったため、別図で示したが、同一個体の可能性がある。残存長4.5cm。28～29は鉄器片であるが、その形状から鉄鎌茎部片と考える。27は残存長2.0cm、断面幅4mm、厚さ2mm。28は残存長2.0cm、断面幅4mm、厚さ2.5mm。29は残存長1.7cm、断面幅2mm、厚さ1mm。30は鉸具である。輪の部分は隅丸方形を形づくり、長さ6.4cm、幅3.6cm。鉄芯部断面は楕円形で長径0.6cm、短径0.5cm。棒部分は端部を折り曲げて輪に装着される。31は薄い鉄板を環状にした鉄製品である。径6.0cm、高さ1.4cm、厚さ0.1～0.2cm。内側にはわずかに貝の組織と



第32図 5号墓通路部出土遺物



第33図 5号墓出土須恵器

みられるものが残存しており、貝製の飾り金具に装着されたものと考えられる。側面には浅い沈線が一条巡らされており、なんらかの装飾的な意図をもつと考えられる。32は鉄製の飾り金具である。宝珠飾厚さ1.1cm、径1.6cm。心棒長さ2.2cm、方形鉄板部分一辺1.0cm。心棒部分に貝と思われる白い有機質が螺旋状に残存している。33は飾り金具の宝珠飾部分の可能性のある鉄製品。銃弾のような八角形柱に半球を乗せた形をしており、鉄地の上に銅板を被せている。銅板は頂部からくるんでおり、下面は1、2mm折り込んでいる。内部の鉄部分がサビぶくれをおこし、一部銅板を割って表面にこぶを作っている。検出時は全体がサビに覆われた鉄の塊であった。34は銅芯に銀薄板を被せ金メッキを施した太型の耳環である。縦幅2.15cm、横幅2.3cm、断面0.6cm。表面の状態は悪く、わずかに金色がみえる部分がある。法量や成分から左屍床出土の耳環16とセット関係を持つ可能性も考えられる。

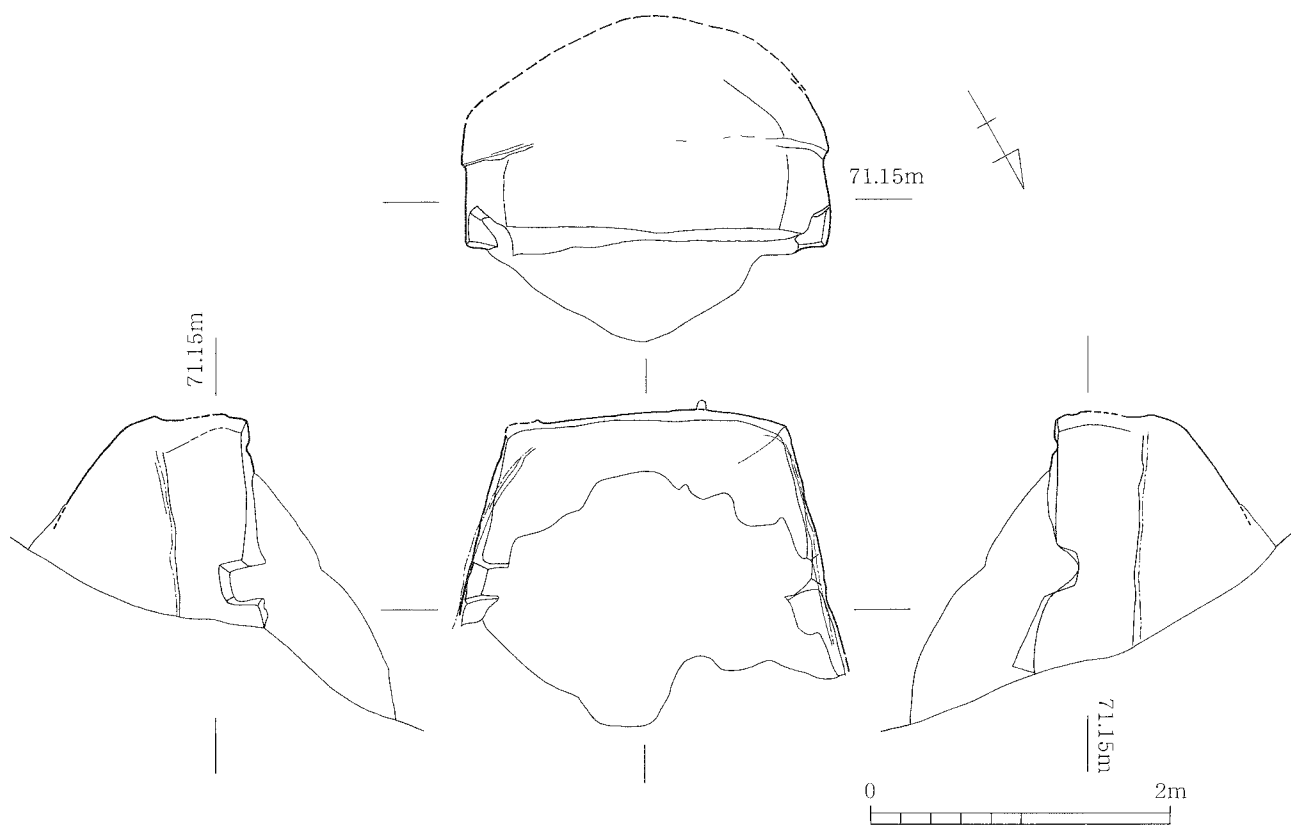
出土土器 (第33図、第4表)

35は完形の須恵器坏蓋である。口径11.0cm、器高3.3cm。天井部はやや丸みを帯び、天井部と口縁部の境界は明瞭ではない。口縁はすぼまり、口唇部は丸くおさめる。外面は強い回転ナデが施される。天井部外面は時計回りの回転ヘラ削りを施され、さらに三本の平行した直線のヘラ記号が付けられる。内面は回転ナデの後、見込みに一方向のナデを施す。色調は外面黒色、内面暗灰色である。

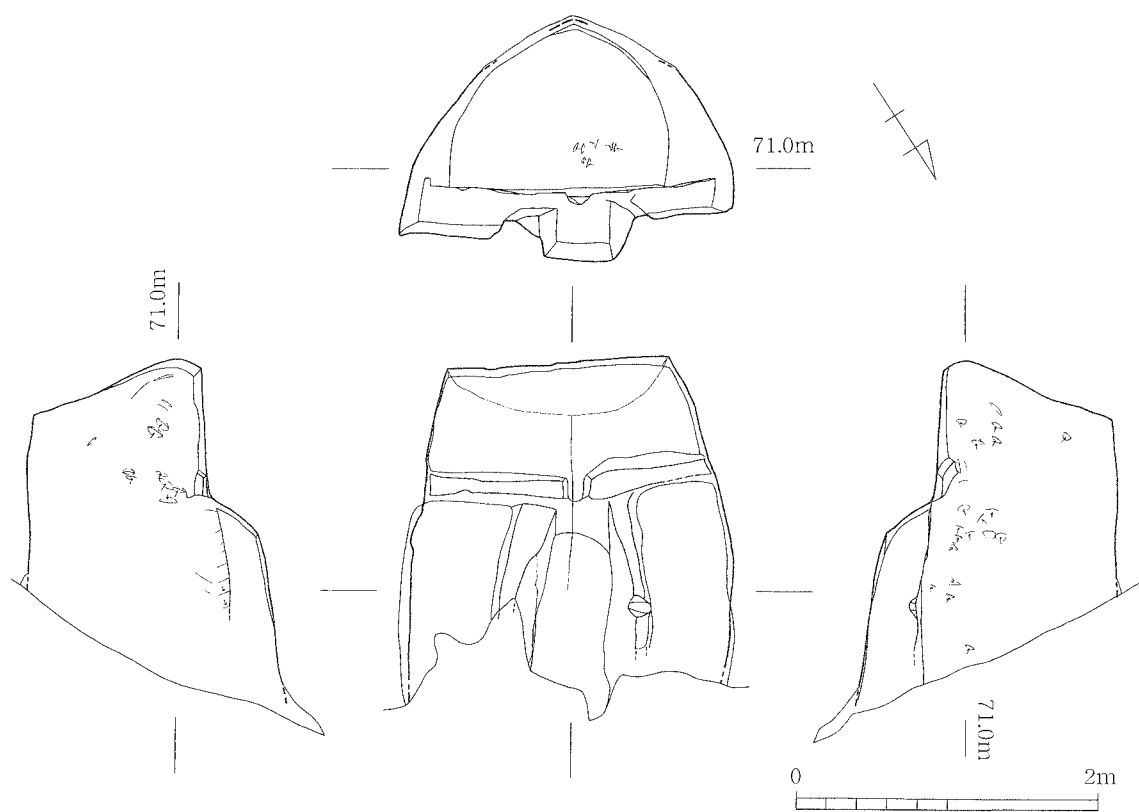
6号墓

規模・構造 (第34図)

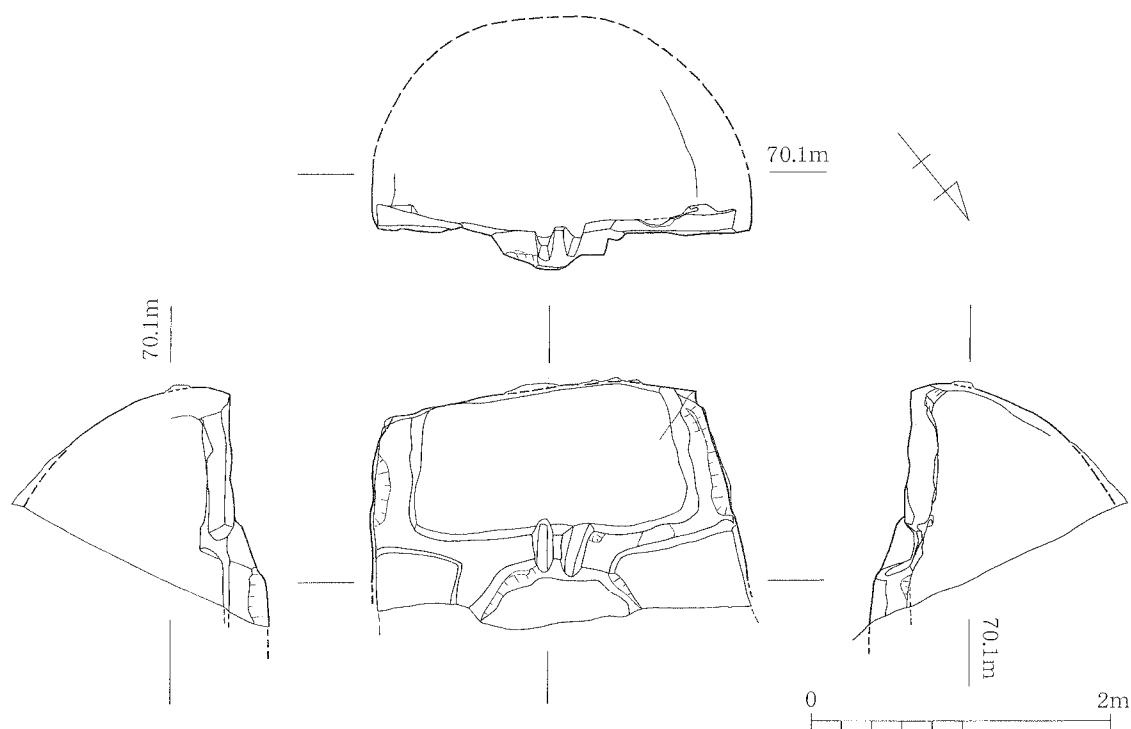
主軸方向はN29° Eで北東に開口する。大部分が削平を受け、奥屍床と仕切り両端が残存する。玄室の平面形は台形状を呈し、奥行き1.7m以上、幅約2~2.5mを測る。軒先線は深く、左側壁においてやや蛇行するが奥壁では不明瞭である。壁面は軒先線まで直立し、天井部の断面形はアーチ形である。壁面の四隅の境は不明瞭であるが、線を確認でき、寄棟の屋根型を呈していたものと推測される。



第34图 6号墓实测图



第35图 7号墓实测图



第36図 8号墓実測図

7号墓

規模・構造 (第35図)

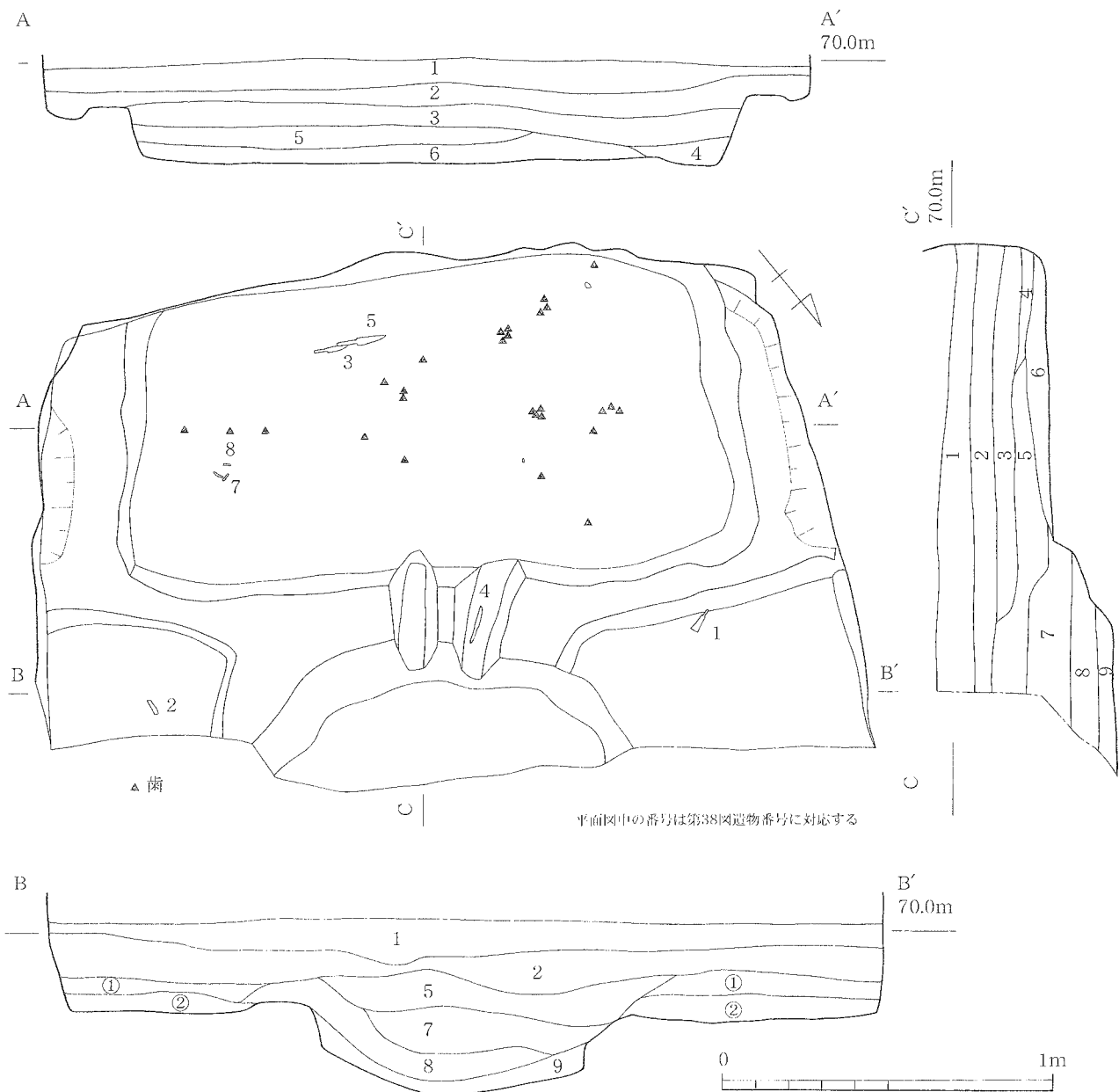
主軸方向はN32° Eで北東に開口する。玄室の平面形は中央でやや膨らみをもつ長方形を呈し、右側壁が内側に偏る。規模は奥行き約2.0m以上、幅約1.7~2.1mを測る。天井部は切妻の屋根形に近い形状をしており、棟線が認められる。天井高1.58mを測る。側壁面は内傾している。奥壁の角は明瞭に造り出され、尖頭アーチ形を呈する。奥壁面は床面より内湾し上部が内傾する。奥屍床の隔絶性は右側に認められる。奥屍床仕切りの上端面は両端に向かい若干、高くなる。通路部は「ハ」の字状に開き、玄門側に傾斜する。屍床部の高さは他の横穴と同様に左、右、奥の順に高い。右屍床長軸長1.25m以上、短軸長0.55m、左屍床長軸長1.25m以上、短軸長0.55m、奥屍床長軸長1.78m、短軸長0.72mを測る。仕切りの高さは全体的に低い。

壁面の残りは良好であり、工具痕を確認できた。幅10cm前後の「U」字状工具の痕跡が側壁において認められ、右側壁では斜め横方向で右から左方向に、左側壁では左から右方向に工具による掘削が認められる。左屍床面に近い側壁面では「U」字状工具と異なる痕跡がみられ、斜め上方より削られる。2・3号墓と同じく左右における築造形態の差が認められる。

8号墓

規模・構造 (第36図)

主軸方向はN38° Eで北東に開口する。玄室の左右屍床は工事により削平される。規模は奥行き1.6m以上、幅2.56mを測る。奥屍床の両端は5号墓と同様に仕切り上端面から連続する段が形成される。両段部は奥壁にかけて緩やかに高くなっており、奥屍床の側壁側には窪みが認められる。側壁は直立ぎみに立ち上がり、崩落する天井部に続く。天井高は推定1.8mを測る。奥壁は丸みを帯びる形状を示し、奥壁と側壁の境となる線がやや不明瞭に残存している。奥屍床長軸長1.8m、短軸長0.82mを測る。各屍床の高低差はほとんどなく奥屍床が最高とはならない。右屍床の仕切りは確認されない。奥屍床の排水溝は二本設けられ、特異である。



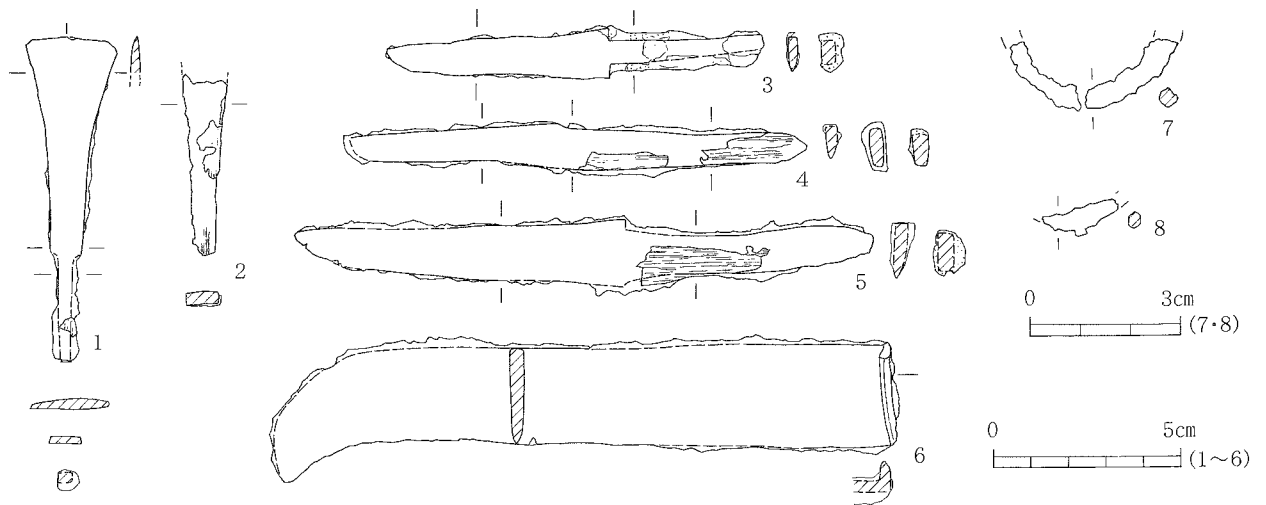
- | | |
|--|---|
| 1層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1) 天井崩落土 | 右屍床 |
| 2層 灰褐色凝灰岩礫混入層 (Hue7.5YR6/2) しまりは弱い。 | ①層 灰黄褐色粘質土 (Hue10YR5/2) ややしまり、暗赤褐色粘質土ブロックを含む。 |
| 3層 暗赤褐色粘質土混入層 (Hue5YR3/3) 凝灰岩のブロックを含む。 | ②層 にぶい褐色粘質土 (Hue7.5YR6/3) 粘性が強く、凝灰岩細粒を含む。 |
| 4層 灰褐色粘質土 (Hue7.5YR4/2) | 左屍床 |
| 5層 灰褐色粘質土 (Hue7.5YR5/2) | ①層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1) しまりは弱い。 |
| 6層 灰褐色凝灰岩礫混入層 (Hue7.5YR6/2) 凝灰岩のブロックを含む。 | ②層 にぶい褐色粘質土 (Hue7.5YR6/3) |
| 7層 灰褐色凝灰岩礫混入層 (Hue7.5YR6/2) 天井崩落土 | |
| 8層 灰褐色凝灰岩礫混入層 (Hue7.5YR6/2) しまりは弱い。 | |
| 9層 にぶい褐色粘質土 (Hue7.5YR6/3) 粘性が強い。 | |

第37図 8号墓遺物出土状況・土層断面図

出土状況 (第37図)

人骨は右屍床に骨片、奥屍床より骨片、遊離歯が出土しており、計2体が確認された。奥屍床では骨片、遊離歯が1層中位～3層上位にかけて出土している。右屍床では①層中位に暗赤褐色粘土ブロックが認められ、その上位に人骨が出土する。奥屍床3層中においても暗赤褐色粘土ブロックが認められる。

右屍床からは②層上位で方頭鏃1、左屍床では②層上位より方頭鏃片2が出土する。奥屍床では6層上位から耳環片7・8と刀子3・5が出土している。刀子3・5の出土状況からは原位置を保っている可能性がある。3層は通路部において仕切り上端面の上方まで堆積しており、屍床部が埋没したのちも使用し続けた可能性を示す。このあり方は他の横穴においても認められる。奥屍床右側の排水溝からは刀子4が出土している。



第38図 8号墓出土遺物

出土遺物（第38図、第4表）

右屍床から鉄鎌1点、左屍床から鉄鎌1点、奥屍床から刀子3点、耳環2点が出土した。また、工事で削り取られた土より鉄鎌1点が検出された。1は平根系の方頭鎌である。全長8.6cm、身部長5.7cm、身部幅2.5cm。刃部は直線的なラインをなす。身部の関は斜関である。茎部には木質が残存する。2は平根系の方頭鎌の身部破片と考えられる。残存長4.8cm、表面に木質が付着する。3～5は刀子である。3は全長10.1cm、刃部長5.9cm、棟幅0.3cm。茎部には柄装具の鹿角が残存する。関は両関である。4は全長12.2cm、刃部長5.8cm、棟幅0.3cm。茎部には柄の木質が残存する。関の形状は不明である。5は全長15.5cm、刃部長8.8cm、棟幅0.4cmの大型の刀子である。茎部には柄の木質が残存する。関は片関である。6は全長16.5cm、刃部幅2.7cm、厚さ0.4cmの曲刃鎌である。基部には長さ0.8cmの折り返しがつく。折り返しの方向は、刃部を下にし、先端を左に置いたとき上方に立ち上がる。折り返しの角度から、柄は刃部に対し直角に装着される作りとなる。7・8は耳環である。共に表面にブロック状の亀裂がみられる。3号墓出土耳環と質感が似ているため、未同定ではあるが、錫製であると考えている。色調は暗灰色。また、7・8は非常に近い位置で出土しており、同一個体の可能性も考えられる。7は断面径0.5cm。8は断面径0.4cm。

9号墓

規模・構造（第39図）

主軸方向はN45° Eで北東に開口する。大部分が削平される。小型の横穴であり、規模は残存する奥行き0.9m、幅1.48m、高さ約1mを測る。手前中央の窪みは通路部と考えられ、その位置関係から想定される仕切りは確認されない。仕切りを省略したコ字形屍床配置であったと思われる。奥壁は尖頭アーチ形を呈し、天井部は切妻の屋根形を呈していたものと推測される。奥壁の立ち上がりは屍床面より短く直立し緩やかに内傾している。奥壁には角を造り出したとみられる幅4～6cmの工具痕が一部残存する。壁面は剥落によりその他の工具痕を認めることはできない。

出土状況（第40図）

奥屍床と考えられる位置より遺存状況が良好な人骨が改葬された状態で確認された。3層上面において頭蓋骨を中央にして両側に大腿骨、脛骨などが置かれる。通路部からは奥屍床出土人骨と別個体である大腿骨が認められ、計2体が出土している。

10号墓

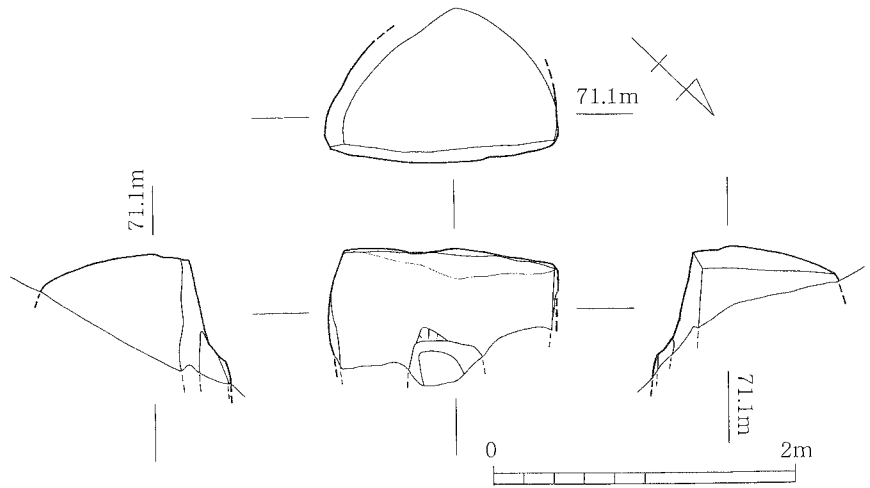
規模・構造 (第41図)

主軸方向はN40° Eで北東に開口する。玄門付近より削平され、天井部は崩落が大きく、反り上がっている。玄室の平面形はやや台形状を呈する。規模は奥行き2.5m以上、幅2.25~2.59mを測る。壁面の剥落は著しく奥壁と側壁の境となる線が不明瞭ながら残存する。奥壁の立ち上がりは短くやや内湾する。壁面はわずかに外側へ開き内傾しながら天井部に続く。天井部は崩落が著しいが土層の堆積状況より断面形はアーチ形を呈していたものと推測される。奥屍床は隔絶しており、奥屍床の仕切り上端面の両端は高くなる。右屍床長軸長1.05m以上、短軸長0.7m、左屍床長軸長1.2m、短軸長0.65m、奥屍床長軸長2.2m、短軸長0.9mを測る。各屍床部の高さは他の横穴と同様に左、右、奥の順で高くなる。通路部の幅は0.78m、壁面はほぼ直立し通路基底面から仕切り上端面まで0.56mと高い。床面は緩やかに玄門側に下がる。

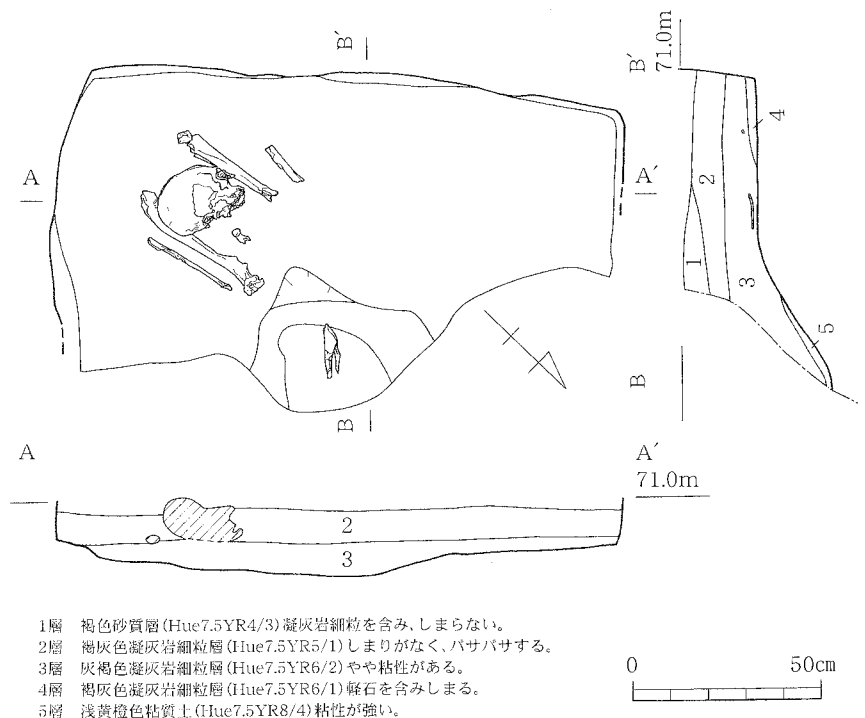
出土状況 (第42・43図)

左屍床の②層上位からは用途不明の石が検出された。その付近には頭蓋骨とみられる人骨や遊離歯が出土するが遺存状況は悪い。奥屍床の②層では長頸鎌1・2や両頭金具3~5、刀子6が出土する。

1~3層は天井崩落層であって、4層上面が本来の天井部であったことが推測される。縦断面では17層より上層が外部からの流入土が堆積した様子を窺うことができる。奥屍床の仕切り上端面の上に炭化物層(21a・b層)が一面に検出された。炭化物層は焼土や骨片を伴わない。17層からは土師器小皿8(11世紀後半~12世紀前半)と混入したと考えられる須恵器の高坏脚部7がともに出土している。横断面の22~28層の逆レンズ状堆積は天井崩落に起因するものと推測される(図版12(2))。また、21層を境としてその上は水平堆積となっている。29層の凝灰岩礫混入層は大崩落によって堆積した層とみられる。4~16層は外部からの流入土によって形成されたと考えられ、17層より下層とは縦断面の堆積状況が異なる。さらに横断面においては17~21層のレンズ状の堆積を確認できる。よって21層は17層出土の土師器

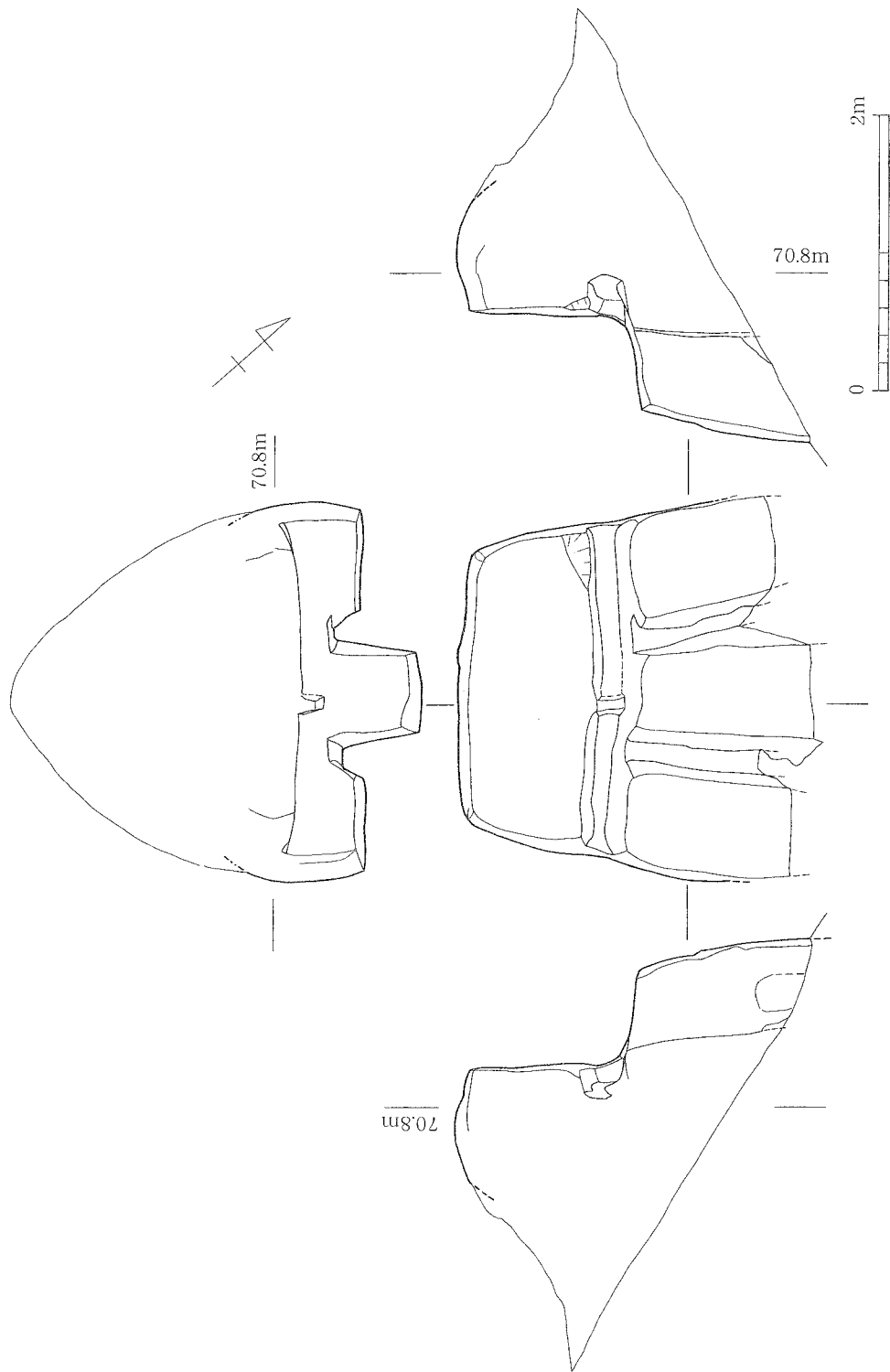


第39図 9号墓実測図



- 1層 褐色砂質層(Hue7.5YR4/3)凝灰岩細粒を含み、しまらない。
- 2層 褐色凝灰岩細粒層(Hue7.5YR5/1)しまりがなく、バサバサする。
- 3層 灰褐色凝灰岩細粒層(Hue7.5YR6/2)やや粘性がある。
- 4層 褐色凝灰岩細粒層(Hue7.5YR6/1)礫石を含みしめる。
- 5層 浅黄橙色粘質土(Hue7.5YR8/4)粘性が強い。

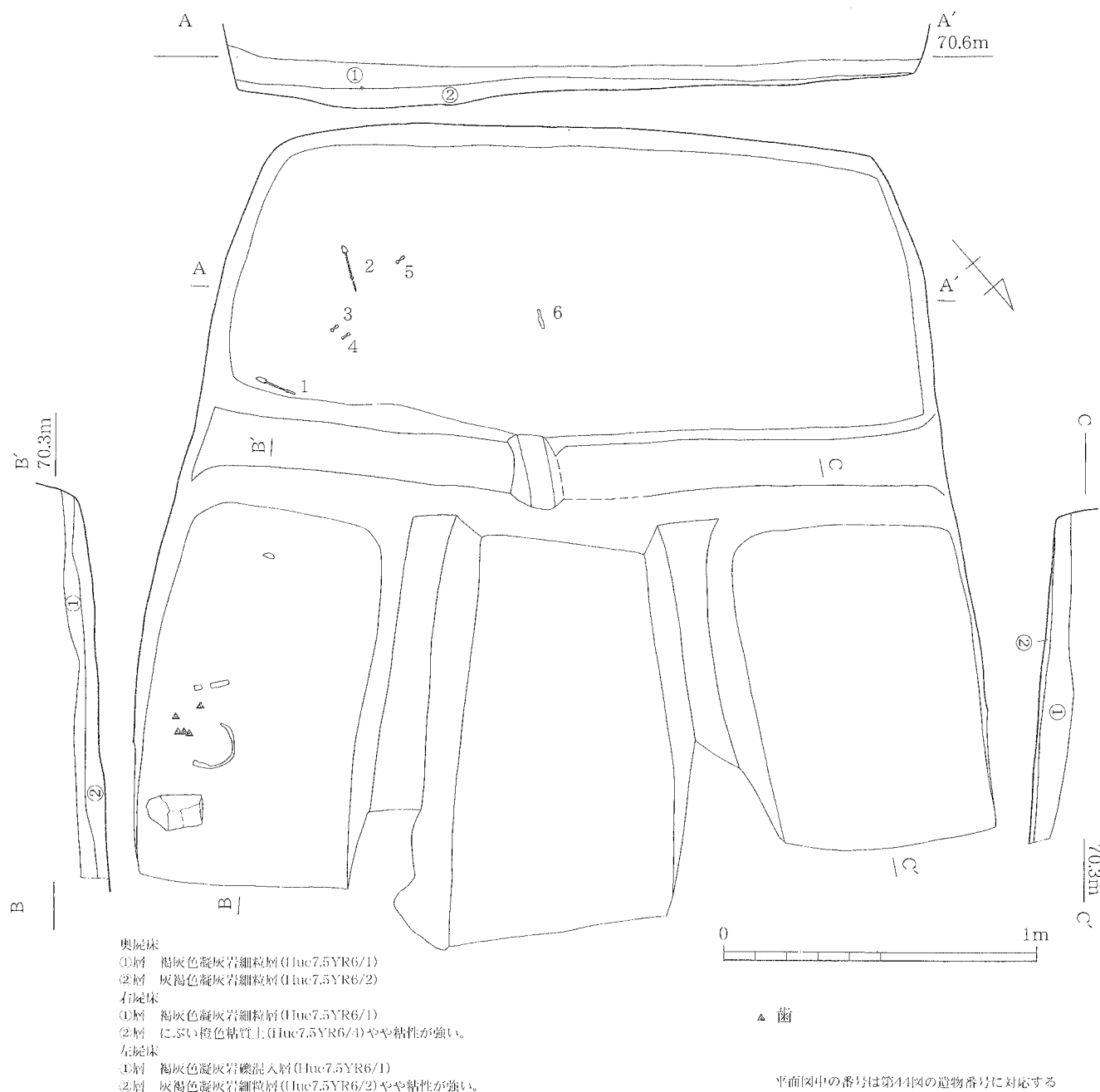
第40図 9号墓人骨出土状況・土層断面図



第41図 10号墓実測図

小皿から中世の再利用と考えられる。

この横穴のみが天井まで土が充満しており、土層の観察と全体の様子から横穴としての機能が停止したのちに大きい崩落を起こし、中世において外部から空洞がみえていたのではなかろうか。そのため10号墓のみに再利用の痕跡を認めることができ、墓室全体が埋没したと考えている。



第42図 10号墓遺物出土状況・土層断面図

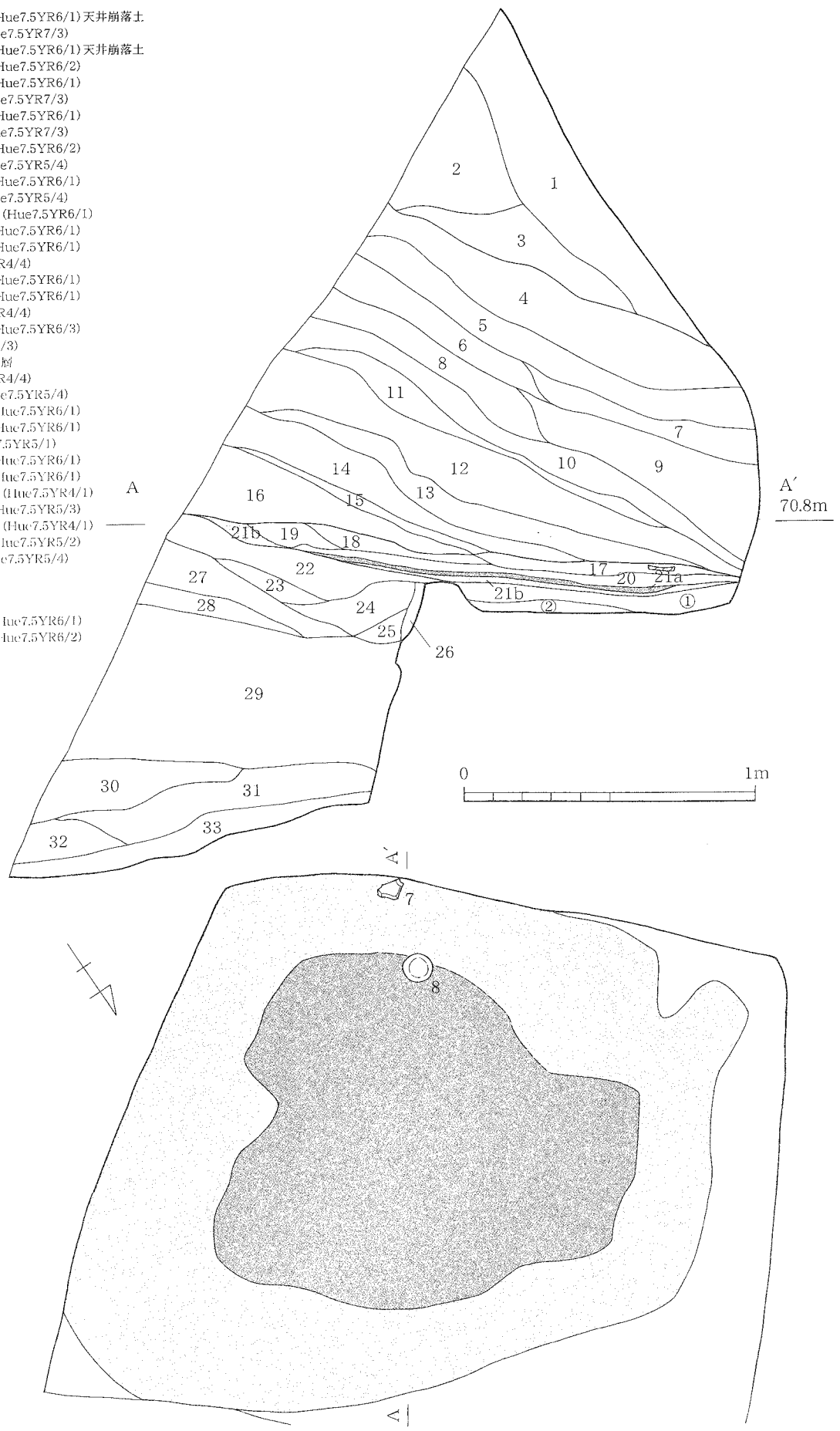
出土遺物 (第44・45図、第5表)

奥屍床から鉄鏃2点、両頭金具3点、刀子1点が出土した。1・2は長頸鏃である。1は全長13.7cm、身部長2.9cm、頸部長7.8cm。身部は三角形の片丸造で、わずかに逆刺を持つ。頸部の関は棘関である。茎部には矢柄の木質と樹皮巻の一部が残る。樹皮の幅は2~3mm。2は全長13.2cm、身部長2.4cm、頸部長6.3cm。身部は三角形の片丸造である。頸部は棘関を持つ。茎部端部近くには矢柄装着前に茎部に直接巻き付けた樹皮の繊維の痕跡がみられる。また、茎部以下は若干ねじれる。3~5は弓の弭付近に取り付けたと考えられる両頭金具である。筒状の鉄製の金具(皮金)の中に、両端に球が付いた棒(芯金)が入り、残存状態の良好なものは皮金の端に切り目を入れて花卉状に折り曲げているのが観察できる。3は芯金長2.8cm、径は0.3cm。頭部径は0.3cm、0.5cmと一方が小さくなる。皮金部長2.0cm、径0.4cm。大きい頭部側の皮金は端部を折り曲げた状態が観察でき、小さい頭部側の皮金は端部を切った切れ目が観察できる。また、皮金の表面には直角方向に繊維の痕跡がみられる。4は芯金長2.7cm、径0.2cm、頭部径0.4cm。皮金長2.0cm、径0.4cm。端部は花卉状部分が欠損するが、折り曲げ部分が残存する。皮金の表面には直角方向に繊維の痕跡がみられる。

- 1層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1) 天井崩落土
- 2層 にぶい橙色砂礫層 (Hue7.5YR7/3)
- 3層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1) 天井崩落土
- 4層 灰褐色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/2)
- 5層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1)
- 6層 にぶい橙色砂礫層 (Hue7.5YR7/3)
- 7層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1)
- 8層 にぶい橙色砂礫層 (Hue7.5YR7/3)
- 9層 灰褐色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/2)
- 10層 にぶい褐色粘礫層 (Hue7.5YR5/4)
- 11層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1)
- 12層 にぶい褐色粘礫層 (Hue7.5YR5/4)
- 13層 褐灰色凝灰岩礫混入層 (Hue7.5YR6/1)
- 14層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1)
- 15層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1)
- 16層 褐色粘質土 (Hue7.5YR4/4)
- 17層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1)
- 18層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1)
- 19層 褐色粘質土 (Hue7.5YR4/4)
- 20層 にぶい褐色シルト層 (Hue7.5YR6/3)
- 21a層 炭化物層 (Hue7.5YR1/3)
- 21b層 炭化物混入凝灰岩細粒層
- 22層 褐色粘質土 (Hue7.5YR4/4)
- 23層 にぶい褐色粘質土 (Hue7.5YR5/4)
- 24層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1)
- 25層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1)
- 26層 褐灰色シルト層 (Hue7.5YR5/1)
- 27層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1)
- 28層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1)
- 29層 褐灰色凝灰岩礫混入層 (Hue7.5YR4/1)
- 30層 にぶい褐色礫混入層 (Hue7.5YR5/3)
- 31層 褐灰色凝灰岩礫混入層 (Hue7.5YR4/1)
- 32層 灰褐色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR5/2)
- 33層 にぶい褐色粘質土 (Hue7.5YR5/4)

- 奥戻床
- ①層 褐灰色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/1)
 - ②層 灰褐色凝灰岩細粒層 (Hue7.5YR6/2)

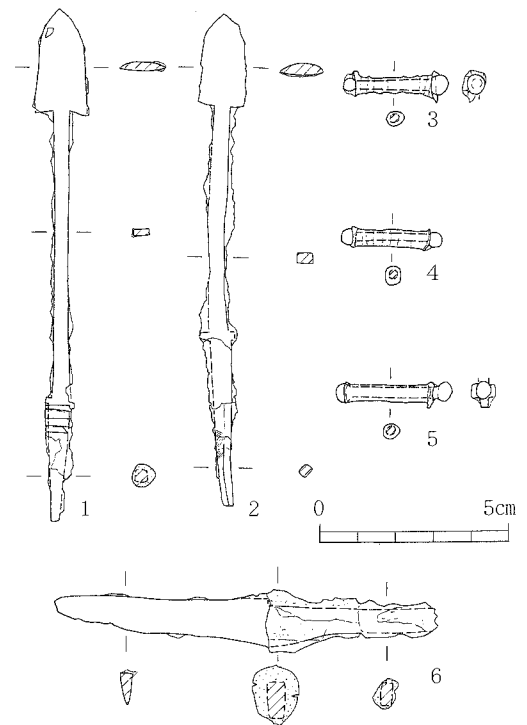
平面図中の番号は第45図の遺物番号に対応する



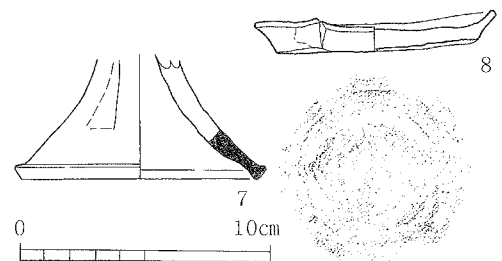
第43図 10号墓土層断面・炭化物層 (21a・b層) 及び土器出土状況図

5は芯金長3.1cm、径0.3cm、頭部径0.4cm。皮金部長2.3cm、径0.4cm。左側の芯金の頭部は半分が皮金に入り込む。皮金右側の端部は花卉状に切り込みを入れた跡がみられ、おそらく4枚の花弁を作っていたと考えられる。奥屍床の遺物出土状況では完全に原位置を保っているとは言い難いが、3・4は5cmの間隔をおいて一直線上に出土しており、同一の弓に取り付けられていた可能性が高いと考えている。また、両頭金具は一本の弓に複数個装着されることを考慮すると、30cmほど離れて出土した5も同じ弓の装着品の可能性があり、少なくとも一本の弓が副葬されたと推測される。6は刀子である。全長10.1cm、刃部長5.6cm、棟幅0.3cm。茎部には柄装具の鹿角が残存する。

7は須恵器高坏脚部片である。端部は上下をつまみ、わずかに段をなす。残存高4.9cm。底部復原径9.9cm。透孔部分で折損しており、復元径から長方形の3方向一段透孔を有したと考えられる。色調は外面暗灰色、内面灰色である。内面に灰かぶりがみられる。8は土師器小皿である。口径9.3cm、器高1.5cm。底部はヘラ切り離し技法で底部圧痕は認められない。体部はやや大きく開き、見込み部は多方向のナデを施す。底部～口縁部にかけて接合痕がみられる。色調は内外面ともにぶい橙色である。



第44図 10号墓奥屍床出土遺物

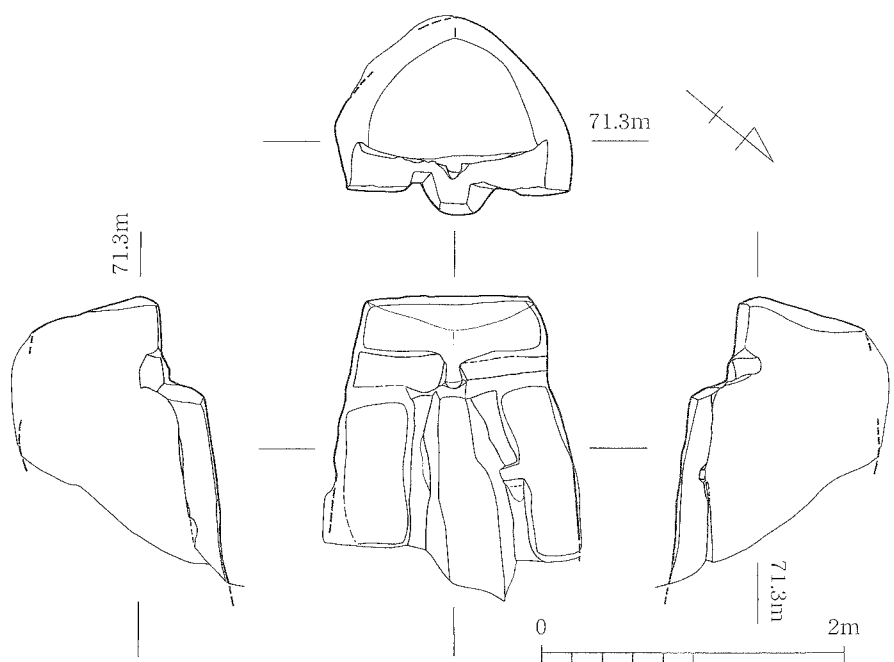


第45図 10号墓出土土器

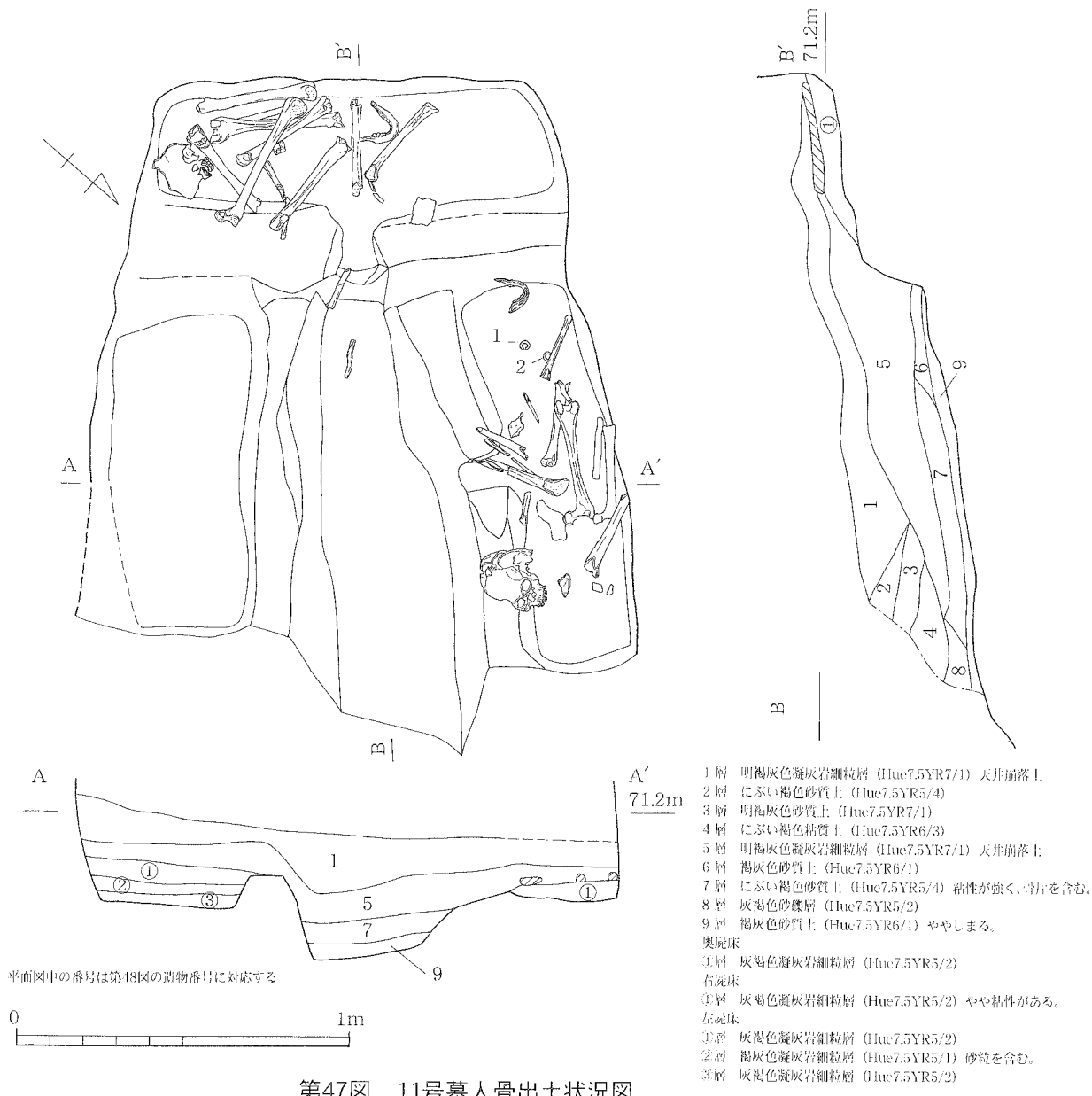
11号墓

規模・構造 (第46図)

主軸方向はN47° Eで北東に開口する。玄門付近は削平を受ける。玄室の平面形は右側壁が内側に歪む長方形プランである。規模は幅1.25~1.6m、奥行きは玄門付近で削平され約1.9mと推測でき、やや小型の横穴である。奥壁は尖頭アーチ形を呈し壁面は床面より内湾し、上部が内傾する。側壁は若干外側に開き天井部に続く。天井頂部は崩落により一部、棟線を確認できる。残存する形状から切妻の屋根型と考えられ、天井高約1.3mを測る。奥屍床は隔離し、奥屍床の仕切り上端面は両端が上がる。各屍床面の高さはほぼ等しいが、奥屍床面が最も高い。右屍床長軸長1.12m、短軸長0.32m、左屍床長軸長0.9m、短軸長0.4m、奥屍床長軸長1.17m、短軸長0.37mを測り、各屍床とも狭小である。通路部



第46図 11号墓実測図

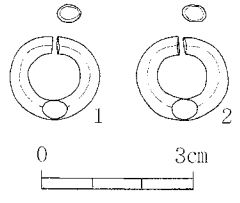


第47図 11号墓人骨出土状況図

は緩やかに玄門側に傾斜し右側に歪む。通路幅は0.47m、通路基底面から屍床仕切り上端までの高さは0.2mを測り低い。

出土状況 (第47図)

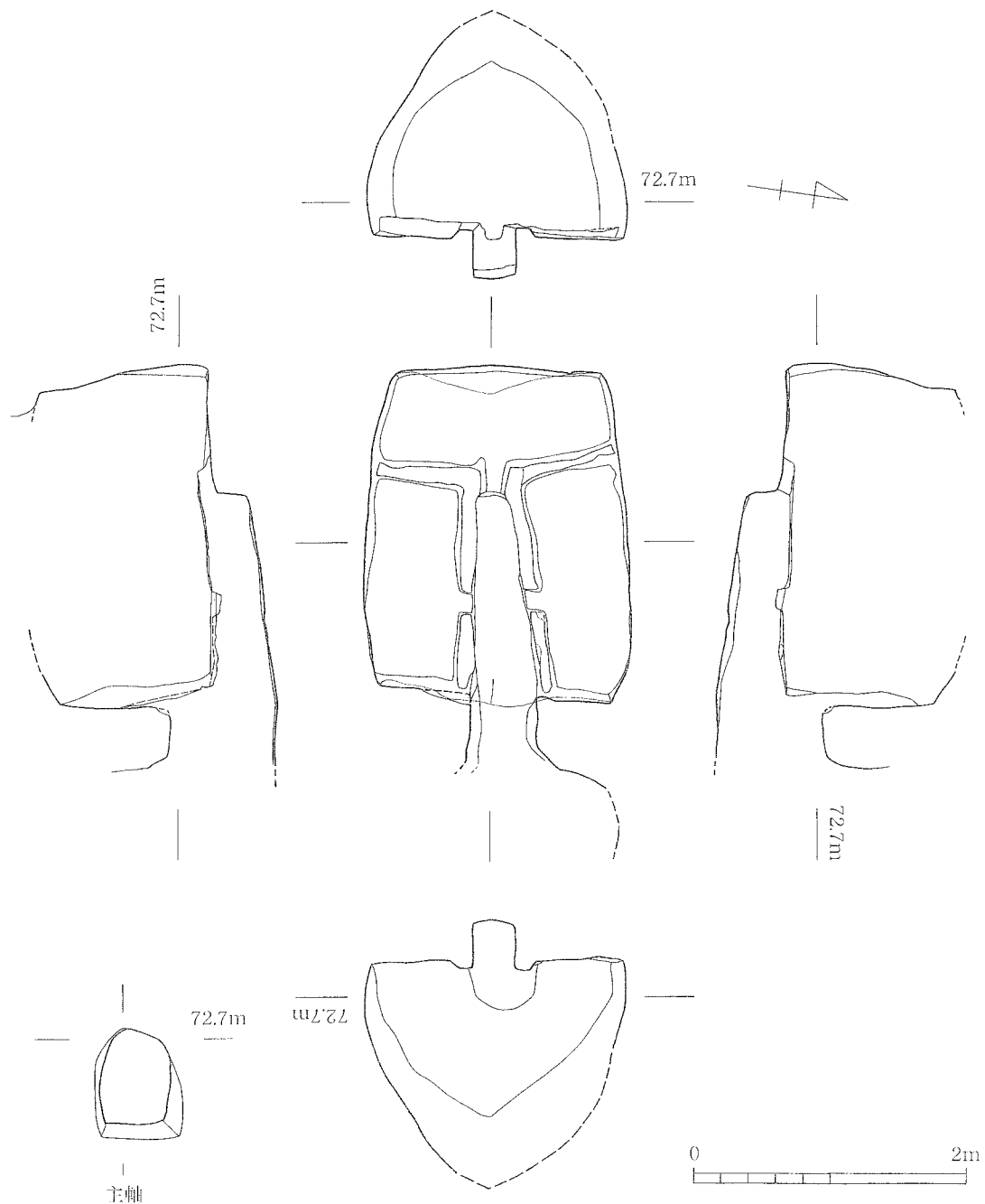
出土人骨は右屍床で4体、左屍床で1体、奥屍床4体の計9体が確認された。右屍床では、頭蓋骨が仕切り上端面の上であって他の人骨は床面より約5cm程浮いて出土する。これらの人骨は排水溝を埋める①層上面より出土した。セット関係にある耳環1・2は床面直上近くに出土しその位置から原位置を保っていると考えられる。左屍床では廃土より頭蓋骨が1体分出土する。奥屍床でも4体が①層上面に認められた。人骨は散在した状態であるが大きくそのあり方を捉えれば、右屍床においては中央に四肢骨、両端に頭骨、そして奥屍床では左側に偏る。



第48図 11号墓右屍床出土遺物

出土遺物 (第48図、第4表)

右屍床から耳環が2点出土した。1・2共に中空の銅芯に金薄板を被せた小型の耳環である。色調は黄味の強い金色である。材質、構造からセット関係にあると考えられる。開口部は端



第49図 12号墓実測図

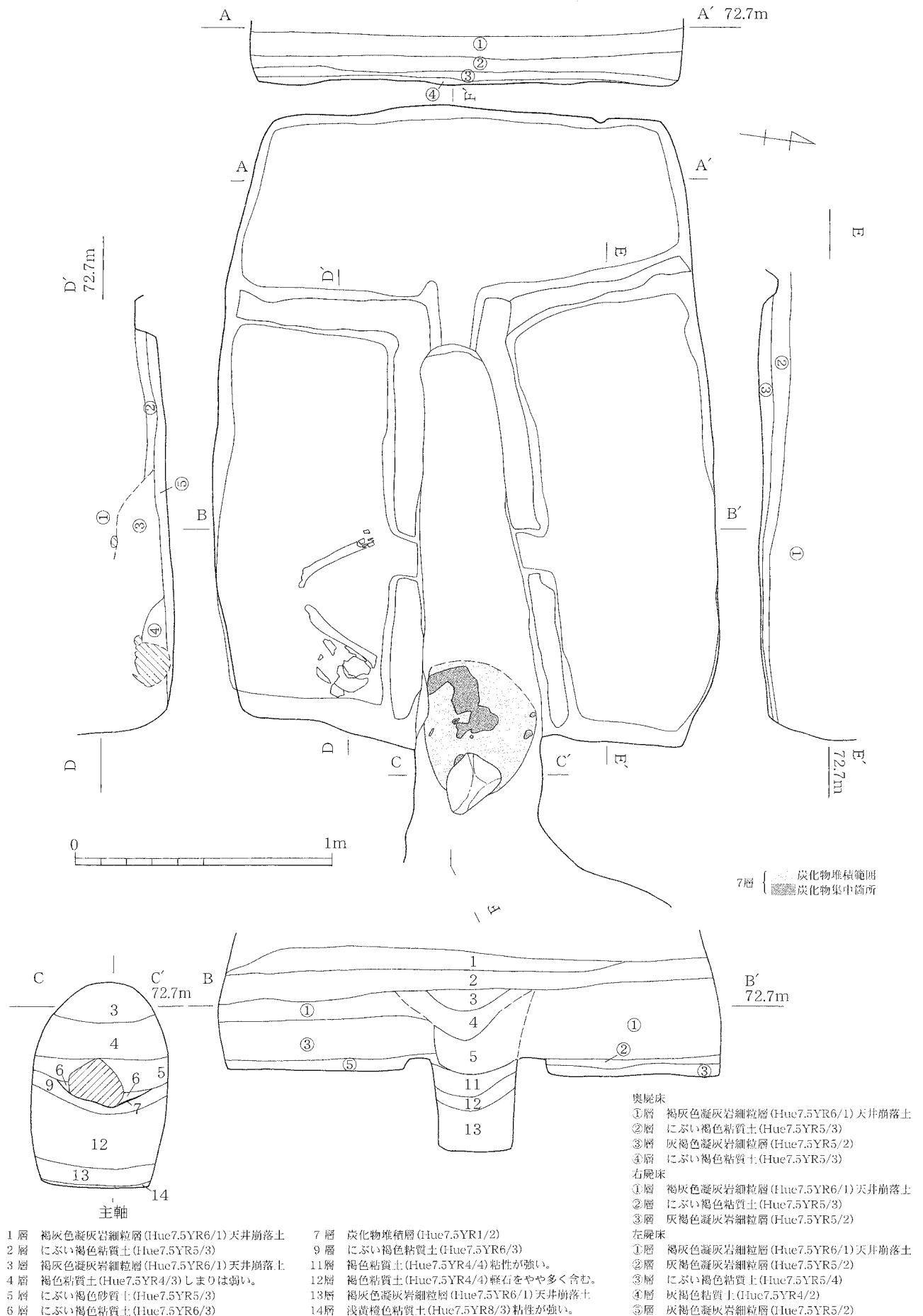
面に金薄板の別板を当て、その上に本体に被せる金薄板を1mmほど重ねており、端面に段がみられる。1は縦幅1.65cm、横幅1.7cm。断面は長径0.5cm、短径0.4cmのやや楕円形である。2は縦幅1.65cm、横幅1.8cm。断面は長径0.5cm、短径0.4cmのやや楕円形である。

12号墓

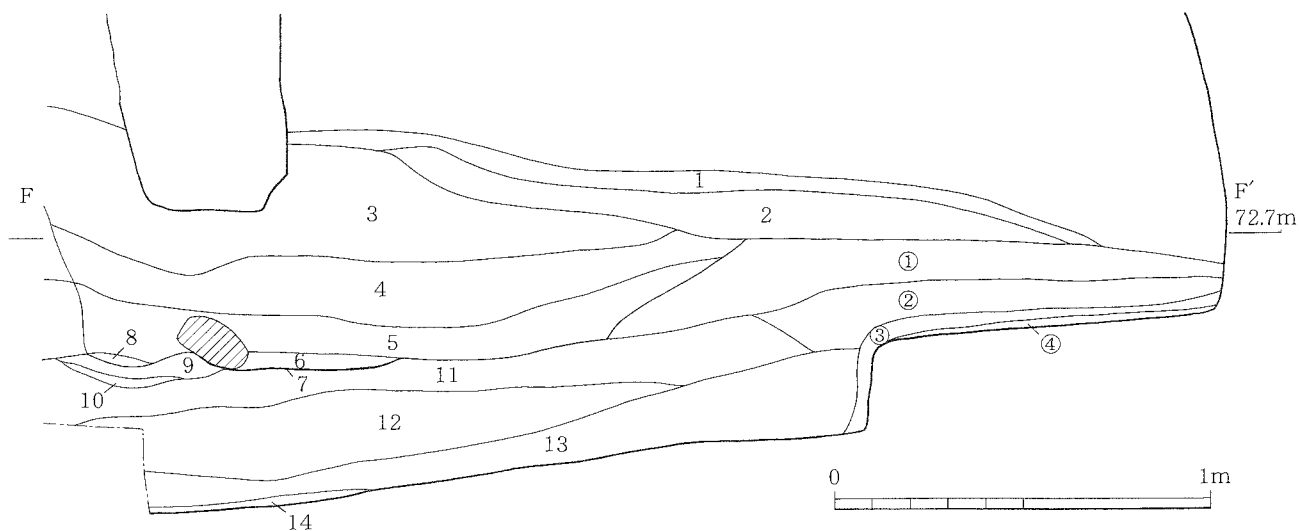
規模・構造（第49図）

主軸方向はN77° Eで東北東に開口する。調査区東端の高い位置にあり、地形の影響により開口方向は本横穴群のなかで異なる。高い位置に造営されていることから工事の掘削により天井部が上部より削平されていた。玄室内は流入土や天井崩落土さらに工事の廃土によって埋められていた。前庭部に関しては半裁された状態で残存していたが、調査区外になることから断面図のみ作成し調査は行っていない。

玄室の平面形は中央が膨らみをもつ長方形のプランであり、規模は奥行き2.48m、幅1.92mを測る。天井は切妻の



第50図 12号墓人骨出土状況・土層断面図



- | | | |
|--------------------------------|----------------------------------|---------------------------------|
| 1層 褐灰色凝灰岩細粒層(Huc7.5YR6/1)天井崩落土 | 7層 炭化物堆積層(Huc7.5YR1/2) | 13層 褐灰色凝灰岩細粒層(Huc7.5YR6/1)天井崩落土 |
| 2層 にぶい褐色粘質土(Huc7.5YR5/3) | 8層 褐灰色凝灰岩細粒層(Huc7.5YR6/1) | 14層 浅黄褐色粘質土(Huc7.5YR8/3)粘性が強い。 |
| 3層 褐灰色凝灰岩細粒層(Huc7.5YR6/1)天井崩落土 | 9層 にぶい褐色粘質土(Huc7.5YR6/3) | 奥屍床 |
| 4層 褐色粘質土(Huc7.5YR4/3)しまりは弱い。 | 10層 褐灰色凝灰岩細粒層(Huc7.5YR6/1) | ①層 褐灰色凝灰岩細粒層(Huc7.5YR6/1)天井崩落土 |
| 5層 にぶい褐色粘質土(Huc7.5YR5/3) | 11層 褐色粘質土(Huc7.5YR4/4)粘性が強い。 | ②層 にぶい褐色粘質土(Huc7.5YR5/3) |
| 6層 にぶい褐色粘質土(Huc7.5YR6/3) | 12層 褐色粘質土(Huc7.5YR4/4)軽石をやや多く含む。 | ③層 灰褐色凝灰岩細粒層(Huc7.5YR5/2) |
| | | ④層 にぶい褐色粘質土(Huc7.5YR5/3) |

第51図 12号墓土層断面図

屋根型を呈し天井高は推定約1.7mを測る。奥壁と玄門側壁面の四隅は明瞭に角が造り出されており、奥壁は尖頭ア一チ形を呈している。奥壁面は内傾し、側壁は緩やかに立ち上がる。奥屍床仕切り上端面は左右屍床仕切り上端面より続く。各屍床面の高さは左右に差は認められず、奥屍床がわずかに高い。右屍床長軸長1.6m、短軸長0.7m、左屍床長軸長1.4m、短軸長0.67m、奥屍床長軸長1.67m、短軸長0.63mを測る。

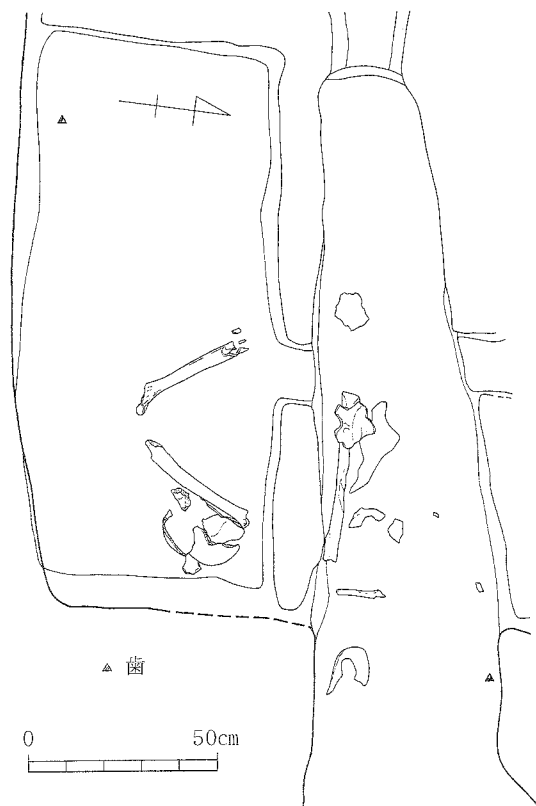
通路部壁面は直立し、幅は0.4mと狭い。通路基底面から屍床仕切り上端面までの高さは0.37mを測る。羨門～玄門通路部の長さは0.45m、高さ0.76m、幅0.5mを測る。前庭部は半壊しており、調査区外は残存するものの天井部は確認されなかった。

出土状況 (第50～52図)

埋葬人骨

人骨は左屍床1体、通路部1体の計2体が出土する。閉塞石は確認されておらず、外部からの流入土が通路部に堆積している。左屍床玄門側において同一個体と考えられる頭蓋骨と大腿骨2本が確認された。頭蓋骨は⑤層上位にあり、大腿骨は④層と③層上位からそれぞれ出土している。原位置を保っておらず、改葬された状態の可能性が考えられる。通路部では左側に偏って人骨が散在し11～13層にかけて出土する。

羨門～玄門通路では炭化物が集中する遺構が検出された。炭化物層の7層直上に人頭大の川原石が置かれた状態にあり、窪みに堆積する6層は石を安定させるための埋土と思われる。この遺構が造られる11層上面の高さは完全に通路部が埋没した状況にあり、4・5層の堆積状況から埋没後、新たに土を掻きだし通路を確保している可能性が考えられる。また5層は左屍床の大腿骨が位置する③層を掘削する層位と推測される。仮に改葬と判断すればそれに伴う遺構という関係になる。



第52図 12号墓人骨出土状況図

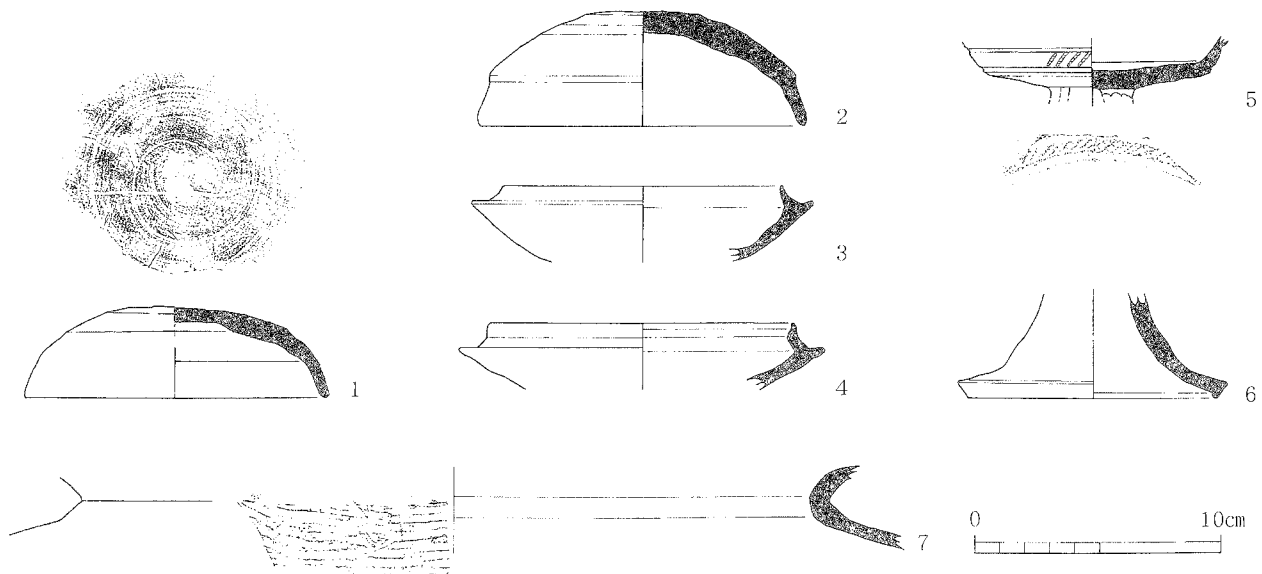
前庭部～墓道部に関してはすでに掘削され半裁状況にあったため土層の観察を行った。川原石直下で炭化物が検出された遺構は最終使用面と考えられる。その面において羨門より前庭部側約0.25m程には閉塞石を据えたと思われる幅約0.2mの掘り方が確認された。その位置では約0.8m上位に立ち上がる土層が認められることから閉塞石と羨門の隙間に流入した堆積土と判断される。

羨門から約1mの前庭部において最終使用面の下位の面に掘り込まれた幅約0.7m、深さ0.15mを測る土坑が認められた。平瓶が埋置され、約0.4mにわたり4枚の連続する板石があって口縁部に接する。平瓶は最大径となる肩部が屈曲し、頸部は直立し短い、口縁は欠損する。胴部径約19cm、器高約14cm、頸部高約3.5cm、底部径約12cmを測る。平瓶については調査区外であり現地に残す方針をとったことから作図は行っていない。

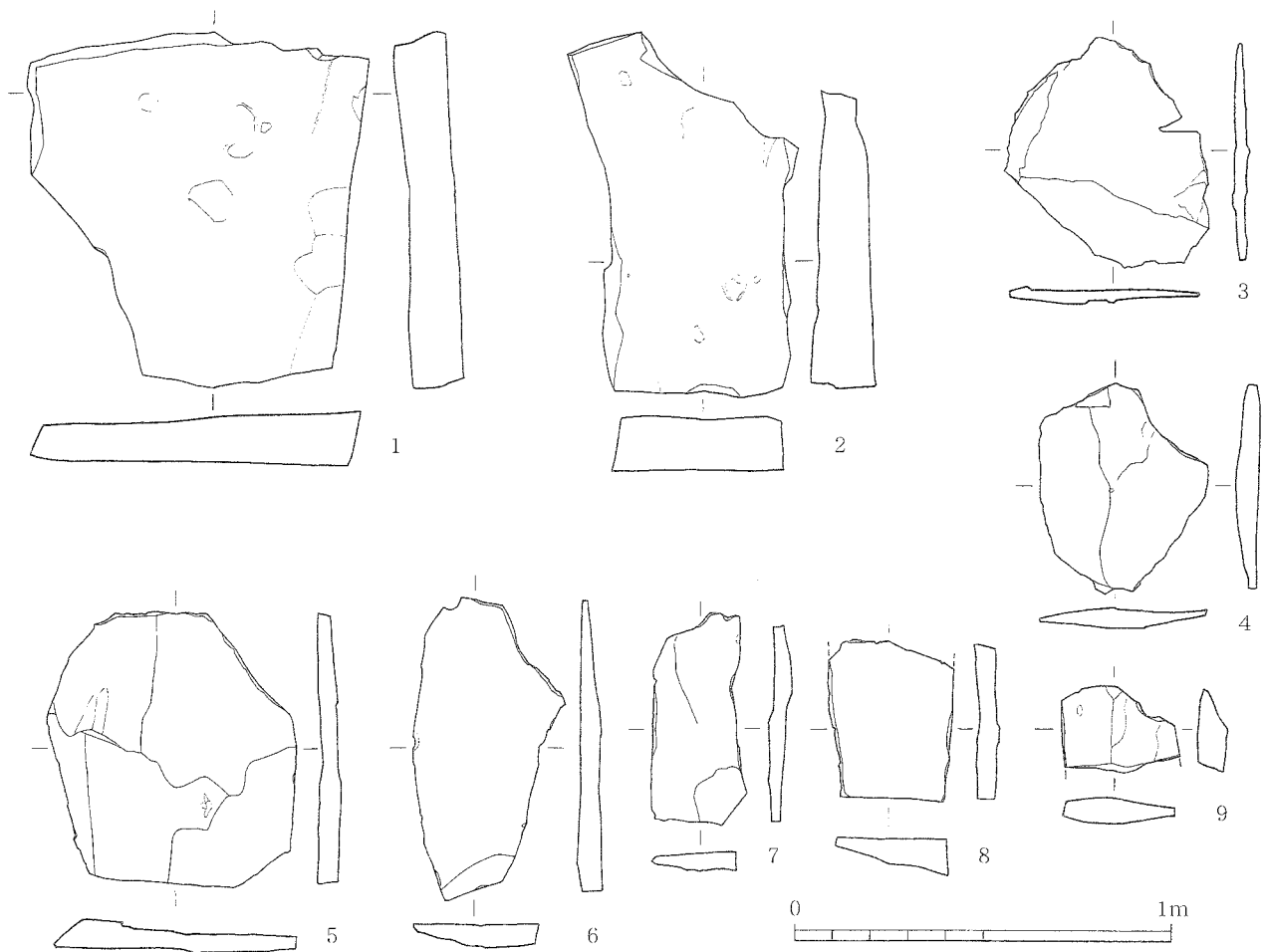
調査区東壁面は12号墓の主軸方向より斜めに振れるが初葬時と考えられる墓道基底面は羨門より約8mにかけて平坦面が認められ、その中央に緩やかな窪みもみられた（図版13（4））。

廃土出土須恵器（第53図、第5表）

崖面掘削時の廃土から須恵器7点を検出した。1は坏蓋である。復原口径12.0cm、器高3.7cm。天井部と口縁部の境界は明確でない。口唇部は丸くおさめる。天井部の回転ヘラ削りの方向は時計回りである。天井部外面には一本の直線のヘラ記号が施される。内面見込みには不定方向のナデが施される。色調は外面灰色、内面灰白色である。硬く焼成される。3とセットの可能性ある。2は坏蓋である。復原口径12.8cm、器高4.7cm。天井部はやや丸みを帯び、天井部と口縁部の境界には浅く丸みを帯びた段が設けられる。口唇部は丸くおさめる。残存率が悪いので天井部の回転ヘラ削りの方向は確認出来なかった。色調は内外面とも浅黄橙である。焼成が悪く、いわゆる生焼けである。3は坏身である。復原口径11.0cm、受部復原径13.6cm、残存高2.9cm。口縁の立ち上がりは低く、内傾する。受部はやや上向きにのびる。色調は外面オリブ灰、内面灰白色である。外面に灰かぶりがみられる。硬く焼成される。1とセットの可能性ある。4は坏身である。復原口径12.2cm、受部復原径14.6cm、残存高2.7cmのやや扁平な形をなす。口縁の立ち上がりは低く、いったん内傾したのち上方に立ち上がる。口唇部内面には段が設けられる。受部は水平にのびる。色調は外面灰オリブ、内面灰色である。5は高坏坏身部である。残存高2.5cm。外面には浅くやや不明瞭な沈線が2条施され、その沈線の間に粗い櫛描の列点文がみられる。内面見込みには多方向のナデが施される。脚部は接合部分がわずかに残存しており、3方向に透孔を有する。色調は外面暗灰色、内面灰色である。6は高坏脚部である。底部復原径10.8cm、残存高4.1cm。残存部分において透孔はなく、裾部でやや大きく広がる。脚端部は端面を作り出し、内面に段を設ける。内面にはしぼり目がみられる。透孔のない長脚の高坏脚部と考えられる。色調は外面灰色、内面



第53図 廃土出土須恵器



第54図 閉塞石実測図

灰白色である。7は甕の頸部片である。頸部復原径30.2cm。残存高3.3cm。胴部外面に格子目のタタキ目が残る。胴部内面にはヘラ削りを施す。色調は、内外面とも灰白色である。

閉塞石（第54図）

1を除いて工事廃土より検出される。1は3号墓の閉塞石であり、他は閉塞石もしくは閉塞石に伴う石材と思われる。1は凝灰岩製で台形状を呈し長さ約95cm、幅約90cm、厚さ約16cmを測る。左側面は面取りが施されている。色調は灰褐色であるが赤みを帯びている。2は凝灰岩製で長方形を呈するが片側の短辺側は三角形形状である。長さ約95cm、幅約49cm、厚さ約15cmを測る。3は安山岩製で、赤みを帯び、長さ約61cm、幅約55cm、厚さ約4cmを測り、厚みは薄い。4は3と類似する石材で安山岩製、長さ約54cm、幅約44cm、厚さ約6cmを測る。5は赤みを帯びない安山岩製で長さ約72cm、幅65cm、厚さ約8cmを測り、側面は面取りが施されている。6は5に類似する安山岩製であり細長い形状を呈し長さ約80cm、幅約40cm、厚さ約6cmを測る。表裏面いずれかは不明であるが片面は平坦である。7は5に類似する安山岩製であり、長方形を呈しており、長さ約56cm、幅約25cm、厚さ約5cmを測り横断面の片面は平坦をなす。8は凝灰岩製で表裏面、側面は丁寧に面取りが施されている。短辺側は欠損しており、長さ約41cm、幅約33cm、厚さ約10cmを測る。9は安山岩製で全体的に丁寧な面取りが施され一部に擦痕が認められる。欠損する小振りの石材である。長さ約22cm、幅約31cm、厚さ約7cmを測る。

石材については、凝灰岩では1・2・8が認められ、1は赤みを帯びる特徴を有する。安山岩製で赤みを帯びる石材は3・4があり、赤みを帯びない安山岩は5～7・9が挙げられる。これらの石材は町内では認められず遠方より持ち込まれた可能性がある。

第4節 まとめ

1. 研究史

県内の横穴の形式分類とその変遷についてはこれまで複数の論考がありそれらを概観する。西住氏は石貫ナギノ横穴墓群における天井部の形状分析及び横断形がアーチから退化する型式の変遷を示される(註1)。これを追認しコ字形屍床区画の仕切り退化、羨門の正面形が方形からアーチ形へ変化する型式を高木氏は指摘した(註2)。中村氏は仕切りの退化の実証を湯ノ口横穴群にて築造順番が押さえられる3基において行った(註3)。高木氏はコ字形屍床形態の平面形の凸字形から台形への変化、規模の縮小化を指摘した(註4)。西住氏は玄室において壁と天井の境、天井の棟線、軒先線、天井の棟から軒先へ延びる線、玄室四隅の床面から壁に延びる線、これらの箇所での簡略化現象を捉えた(註5)。美濃口氏は天井構造の変遷が明確な屋根形から崩れた屋根形さらに奥壁がアーチ状になるかまぼこ形・ドーム形への推移するとし天井形の形式を大きく5類に分類し、屍床区分などからⅠ～Ⅴ類の大分類を行い天井形態との変遷を示す。また菊池川中流域と球磨川流域の装飾文様の検討から天井形態について6世紀後半には屋根形が省略したものが現れ始め、6世紀後半～末にかけて明らかに省略した天井形が主体となり6世紀末に位置付けられるものは省略・粗雑化を指摘した。また仕切りの省略化は遺跡、群単位で検討すべきとする(註6)。帆足氏は玄室側壁が直線的に丁寧な掘削から仕上げが雑になる点、通路部が狭く深い、さらにハの字に開くのは新しい要素であり、玄室平面形は正方形から長方形になることを指摘する(註7)。中原氏は山口横穴群において内部構造の諸属性の新旧関係を玄室平面形は台形→方形、飾り縁立面形は台形→方形、通路傾斜は水平→傾斜、軒先線は断面段・直線→浅く刻む・蛇行、天井部隅線も直線→蛇行、玄室壁は垂直・平坦→内傾斜・丸み、奥屍床仕切り上端面は水平→両端上がりと示す(註8)。矢野氏は大きく属性について①奥屍床の隔絶②天井形態の形骸化③通路機能の低下を挙げる(註9)。

2. 形態と築造の変遷

以上の研究史を踏まえ、形態の分類を行い築造の変遷を試みたい。属性として天井部の形態、規模の縮小化、壁面の直立からの湾曲化、通路部の機能低下を重視する。墓室の形態は多様であるが基本的にコ字形屍床であり、奥屍床が一段高く、屍床面は左屍床に対し右屍床がわずかに高い。属性として重視される天井構造は玄室の半壊、天井の崩落により明確でないものの、推定は可能であり寄棟の屋根型と切妻の屋根型の2種となる。

- 1類 玄室の平面形が方形プランで通路幅が広く、通路基底面から仕切り上端面までの高さが低い。壁面が直立し、谷線、線刻によって四隅の境を明瞭に造り出し、天井形は寄棟の屋根型。……………3号墓
- 1^レ類 玄室の平面形が方形プランで通路幅が広く、通路基底面から仕切り上端面までの高さが低い。天井形は寄棟の屋根型。奥屍床の両側に段が付く。左右屍床面の高低差がない。……………5・8号墓
- 2類 玄室の平面形が台形プランで通路幅が狭く、通路基底面から仕切り上端面までの高さがあり、基底面は玄門側に下がる。四隅の線刻は壁面との境が明確ではなく、天井形は寄棟の屋根型。……………2・4・6・10号墓
- 3類 玄室の平面形が長方形プランでやや小規模である。奥壁が尖頭アーチ形を呈し、天井形は切妻の屋根型。……………7・9・11・12号墓
- 4類 玄室の平面形が方形に近く、天井形は寄棟の屋根型で天井が低い。……………1号墓

前庭部が失われていることから形態の分類と位置関係をもとに築造の変遷について試みた。さらに、形態の分類ごとに時期差が認められるように思われ、形態の比較を行った。1類の3号墓・1^レ類の5・8号墓において3号墓は5・8号墓に比べ、全体的に造りが丁寧であり古いことが考えられる。5・8号墓では規模の縮小化、仕切りの一部省略化、

通路部奥側の造りを壁面の湾曲化と同様の現象と捉えれば5号墓が8号墓より古相を呈すると思われる。屍床面の高さは右屍床が左屍床より高く、奥屍床が高い傾向のなかで5号墓では左右屍床が等しく、8号墓は奥屍床までもが等しくなっている。奥屍床の床面が高いという点からも5号墓から8号墓への推移が想定される。2類の2・4・6・10号墓では6・10号墓の壁面が直立ぎみであり6号墓の軒先線の存在、10号墓の奥屍床の隔絶、通路部奥側が角張る点から、2・4号に比べ古い要素として考えたい。3類の7・9・11・12号墓においては、奥屍床の隔絶という点で7・11号墓が9・12号墓に先行するものとみたい。

次に今回調査を行った横穴群の形態の比較と位置関係から築造の変遷について述べたい。本横穴群で最も古い段階と考えられる3号墓が造営され、隣接する2・4号墓は羨門～通路部が3号墓を避けるように斜行している点は後出する結果とみなされる。5号墓は4号墓に対し意識的に右側壁が偏っていることから4号墓が先行すると推測される。築造された横穴の立面配置をみると1号墓より左斜めに上り3号墓が最高位、これより6号墓まで下がりまた12号墓にかけて上がる。このようなあり方は県内の横穴群にもみられる（註10）。7号墓を境として3類は左側に築造されている。7・9・11号墓は他と異なって高い位置にあり、12号墓はさらに高くなる。3類は共通する配置であり、この現象を時間差として捉えたい。9号墓は8・10号墓の間に築造され、8号墓の側壁との距離から小型の横穴と考えられる。「瀬戸口横穴墓群・深川遺跡」報告書では寄棟の屋根型から切妻の屋根型の変遷が示される。本横穴群では3類の配置と小規模化そして切妻の屋根型の要素から3類は1・2類より後出するものと判断される。

以上から3号墓→6・10号墓→2・4号墓→5号墓→8号墓→7・11号墓→9・12号墓という試案を提示したい。分類の築造変遷は1類→2類→1^レ類→3類というおおまかな流れをみることができそうである。

3. 副葬品

本横穴群からは、鉄鏃、刀子などの鉄製品や耳環、玉類などの装身具を主とする副葬品が多く出土した。特に鉄製品については残存状態が非常に良好であった。しかしながら、大部分の横穴が工事により前庭部を削られているため、土器の出土数が少ない。したがって、横穴における被葬者の埋葬時期を特定するのは困難であった。

また、人骨の出土状況から明らかなように、各横穴では追葬や改葬がなされていた。遺物もその影響を受けて副葬当初の原位置を保っていないと考えられ、各屍床ごとの区分はできるものの、それぞれの遺物がどの段階で副葬されたものなのかを検討するにはいたらなかった。

本横穴群12基のうち、副葬品が出土したのは2～5・8・10・11号墓の7基である。まず、それらの横穴ごとに出土遺物を示しておく。

2号墓 …… 鉄鏃6、刀子4、耳環3、ガラス玉93

3号墓 …… 鉄鏃14、刀子6、耳環12、碧玉製勾玉1、青銅製空玉2、瑪瑙製丸玉1、土製小玉25、ガラス玉7、イモガイ製貝輪1、轡1

4号墓 …… 鉄鏃5、耳環3、碧玉製勾玉1、瑪瑙製勾玉1、碧玉製管玉2、水晶製切子玉2、ガラス玉42、青銅製金具1

5号墓 …… 鉄鏃14、刀子4、鉄鎌2、耳環10、飾り金具4、鉸具1、環状鉄製品1、須恵器坏蓋1

8号墓 …… 鉄鏃2、刀子3、鉄鎌1、耳環2

10号墓 …… 鉄鏃2、刀子1、両頭金具3、須恵器高坏脚部1、土師器小皿1

11号墓 …… 耳環2

なお、2・3・5号墓からはベンガラ粒が検出されている。

武器・武具では鉄鏃、両頭金具が出土した。鉄鏃は長頸鏃と広根系の方頭鏃、圭頭鏃が多い。長頸鏃はほとんどが棘関であるが、3号墓から出土した1点はやや古い形の台形関を持つ。3号墓からは儀器的な鉄鏃である透孔鉄鏃や、矢柄に糸巻きが施される長頸鏃が出土した。2号墓からは矢柄に朱が付着した長頸鏃が出土した。また、10号墓出土の両頭金具からは弓の副葬が推測される。

農工具では刀子、鉄鎌が出土した。刀子には木製柄と鹿角製柄がみられ、柄金具が残存するものもある。

装身具では耳環、玉類、貝輪が出土した。耳環は遺物出土横穴のうち10号墓を除く6基から出土した。銅芯に金薄板または銀薄板を被せたもの、銅芯に銀薄板を被せた上に金メッキを施したものが主である。11号墓出土の中空の銅芯に金板を被せた耳環は小型だが、非常に精巧な作りである。また、3・5・8号墓からは錫製の耳環が出土しており、破片ながら貴重な資料といえる。玉類は2・3・4号墓から出土した。出土位置をおさえられたものは少ないが、3号墓右屍床出土の玉類は頭蓋骨付近に位置しており、頭飾りや首飾りと推測される。2号墓右屍床出土ガラス玉は出土位置が広範囲にわたっているため、用途の特定にはいたらなかった。

3号墓右屍床からは人骨2体およびイモガイ製ヨコ型の貝輪が出土している。この種の貝輪は女性の被葬者に伴って埋葬された例が多い。本横穴では人骨の性別は特定できていないが、貝輪の出土を重視すると、右屍床の被葬者には女性が含まれていた可能性が高い。

馬具は3・5号墓から出土した。3号墓奥屍床出土の環状鏡板付轡はTK209型式の時期に相当するものと考えられる。5号墓からは鉸具や飾り金具、環状鉄製品が出土している。飾り金具、環状鉄製品は貝の組織が付着していることから、イモガイ製馬具の付属品であったと考えられる。

土器は5・10号墓から出土した。5号墓出土の須恵器坏蓋はTK217型式に相当すると考えられる（註11）。人骨の検出面より上層の面からの出土ではあるが、5号墓への最終追葬の時期を考える上で参考となる遺物である。10号墓出土の須恵器高坏脚部はTK217型式に相当すると考えられるが、中世の土師器小皿と共伴しているため、混入によるものと思われる。

また、工事廃土から検出された須恵器坏蓋・坏身・高坏脚部はTK217型式、高坏坏身はTK209型式に相当すると考えられる。これらは横穴群からの出土遺物と時期を同じくするものであり、横穴群に伴う遺物である可能性が高いと考えている。ただし、廃土出土須恵器甕は中世の遺物であるから、横穴群の位置する斜面上にある原口新城跡に関わる遺物であると考えられる。

4. 階層性

副葬品の所有量と形態の関係について触れたい。副葬品を最も所有する横穴は3・5号墓が挙げられる。3号墓は轡や貝輪が出土しており、5号墓においても馬具の一部である飾り金具や馬具に使用された可能性のある鉸具などの鉄製品が出土している。8号墓は半壊しているが奥屍床から多くの鉄製品が出土しており、所有量は3・5号墓に次ぐのではないかと思われ、さらに2・4・10号墓が8号墓に続くようである。6号墓は奥屍床のみ残存しており遺物の出土はなかった。9号墓の玄室は削平されているが、11号墓は耳環2点の出土のみであり、1・7・9・12号墓では皆無であった。

玄室が削平されている現状からの推測と未盗掘という前提に立ち副葬品の所有量と形式を比較する。1類と1'類の3・5号墓の副葬品は横穴群において量・内容とも卓越しており8号墓も所有量は豊富であったと考えられる。2類である2・4・10号墓は1・1'類に次ぐ量であり、4号墓では装身具が目立ち10号墓では弓金具が認められる。3類の7・9・11・12号墓では11号墓の耳環を除いて副葬品は皆無であった。

以上から副葬品と形態の相関関係を窺うことができそうであり、1類・1'類→2類→3類の被葬者の階層性を想定しておきたい。3類の横穴が副葬品を所有しない点は時間差と世帯差をともに含む可能性がある。

5. 埋葬様式

埋葬の方法は1次葬が横穴で行われるとは限られず1次葬が横穴で行われた場合においても、追葬行為に伴い片付けによる集骨や改葬が行われたものと考えられる。さらに、追葬回数が増せばその過程は複雑で、遺存状態が良好で、最終的に埋葬された被葬者が特定できたとしても、それまでの過程を復原するには限界がある。県下での調査例として遺存状態の良好な人骨は少ない（註12）。本来の原位置である1次葬として確実に押さえられる事例は高塚横穴群のみであり（註13）、つつじヶ丘横穴群ではB-1、C-2~4、D-4、J-1号横穴において1次葬の原位置を確認さ

れることはなく、改葬された状態と判断されている（註14）。古城横穴墓群においても1次葬は確認されておらず小型横穴を改葬の目的で造営されたと推測され、21号、38-1号横穴墓では集骨状態で検出されている（註15）。また、瀬戸口横穴墓群49号-b・cともに1次葬の出土状態は認められない（註16）。

本横穴群は12基の調査数で31体が確認され、基数の割に人骨の出土数が多い。墓庭部が失われた本横穴群では追葬回数並びに時期は不明である。さらに出土人骨の遺存状況が良好でないことから被葬者の親族関係まで迫ることはできなかった。しかしながら、遺存状態は全体として良好ではないものの、なかには状態の良い人骨も確認されており埋葬方法を垣間みれるようである。出土した人骨は遺物と乖離し散布する状態にあり、1次葬は認められずさらに最終的に葬られた被葬者を見出すことはできない（註17）。9号墓は小型横穴と推測され大腿骨の間に頭蓋骨が置かれており改葬された状態で出土している。11号墓においても高身長 of 被葬者が狭い屍床部に複数体葬られる出土状況は自然作用の有無に関わらず追葬時の集骨もしくは改葬の可能性が高い。

遺存状態の比較的良好な2・3・11号墓において埋葬形態の比較を行なった。2・3・11号墓の右屍床では四肢骨を中央とし両隅に頭蓋を配置しており、奥屍床では左側に寄せられる状況が認められる。また2・3号墓の右屍床では四肢骨が玄門側に寄っており、イゲタ状に組まれるように見受けられる。人骨の出土した2・3・9・11・12号墓において遺存状況には差があり、単純に比較は困難なもの、共通して軀幹骨（頸椎、胸椎、腰椎、仙骨、胸骨、肋骨）や肩甲骨が検出されない点が挙げられる。骨の部位によって遺存する頻度の違いはあると考えられるが11号墓では鎖骨、寛骨、尺骨が認められるなかで軀幹骨・肩甲骨がみられない。この現象は改葬の際に人骨の部位を選別された結果の可能性を挙げておきたい（註18）。

人骨の遺存状況は様々であるがその要因は温湿度の変化に拠るところが大きい。天井崩落土に覆われて遺存状態の良好であった人骨では浸水が直接的に影響を及ぼさなかったことも考えられる。今回、不時の発見となった横穴群は閉塞状況や残存状況を推測すると大方が未盗掘と判断される。屍床部において人骨が一時的な浸水や流入土により移動した場合の劣化の頻度はその後の保存状態にも影響されるものと考えられ、残存状態のみで原位置である改葬か自然作用による移動かは短絡的には判断されるものではなく、今後、保存状態の良好な事例を待たなければならない。

6. 築造時期

造墓期間の推定については遺物の少なさから困難であるが廃土出土の須恵器（TK209～217型式）、5号墓出土須恵器坏蓋（TK217型式）、3号墓出土の轡（TK209型式）や墓室の形態から推測する。3号墓は城40号墓、山口横穴群5号横穴の天井形態に類似する（註8・19）。3号墓は本横穴群で最も古い要素をもつことや屋根形において四隅の谷線が一部省略されている点から6世紀後半の時期に比定される。1^ㄊ・2類は6世紀末～7世紀初頭の前後に築造され、3類は7世紀前半以降の築造年代を提示しておきたい。

7. おわりに

6世紀中葉から後半にかけて群集墳が発達しない当該地域において横穴の数は多く、他地域と様相が異なるようである（註20）。本横穴に近接する古墳は存在せず、塩浸川上流域に中林古墳が立地する。1・1^ㄊ類の豊富な副葬品を所有する被葬者からは中林古墳の被葬者に関係した人物やこの地域の有力階層の集団墓などを想像させる。

本横穴群は過去の県内における横穴群の調査のなかでも遺存状態が比較的良好であったことから階層性や被葬者の性格、埋葬様式などについて追求が可能な遺跡であると考え、そのために築造の変遷は不可決であることから形態の分類を試みた。しかしながら、築造変遷や造営年代については前庭部や墓道が失われており、根拠が弱い点は否めない。また、集団内における血縁関係の表象とされる支群についてや追葬の使用期間の問題も残る。埋葬様式については踏み込み過ぎた感が残るが今後の調査例に期待したい。遺物についても細かい分析と検討が今後必要と考えられる。古代の合志郡内の郷の比定や周辺古墳の実態が解明されていくなかで本横穴群の位置付けはなされていくものと思われるが今後も残された課題について検討していく必要がある。

註

- (註 1) 西住欣一郎・宮本千絵1980『石貫ナギノ・石貫穴観音横穴墓群』金曜会
- (註 2) 高木正文1983「阿蘇外輪山上の城山横穴群」『えとのす第22号』・1985『福原横穴墓群』熊本県教育委員会
- (註 3) 中村幸史郎1987『城横穴群』山鹿市教育委員会
- (註 4) 高木正文1987『古城横穴墓群』熊本県教育委員会
- (註 5) 西住欣一郎1989『瀬戸口横穴墓群』熊本県教育委員会
- (註 6) 美濃口雅朗2001「地域の概要－肥後－」『九州の横穴墓と地下式横穴墓 第1分冊』九州前方後円墳研究会
- (註 7) 帆足俊文2001『瀬戸口横穴墓群』熊本県教育委員会
- (註 8) 中原幹彦2002「3色使用の装飾横穴」『季刊考古学』第81号 雄山閣出版
- (註 9) 矢野裕介2004『城ヶ鼻横穴群』熊本県教育委員会
- (註10) 西住欣一郎1991「肥後における横穴墓について」『おおいた考古』第4集 大分県考古学会
- (註11) 須恵器の型式については植木町教育委員会の中原氏にご教示を頂いた。さらに、氏より、5号墓出土坏身、10号墓出土高坏脚部は牛頭産、廃土出土の高坏脚部は宇城産と考えられるとご指摘を頂いた。
- (註12) 出土した人骨は湯の口横穴墓群の調査数183基において49体が確認され最も多い。古城横穴墓群の調査数53基14体、高塚横穴群の調査数3基人骨6体、つつじヶ丘横穴群調査数19基人骨8体、瀬戸口横穴墓群調査例23基10体である。人骨の遺存状態はあまり良好でなかったことから埋葬方法を考える良好な資料は少ない。
- (註13) 野田拓治1989『高塚横穴群の調査について』第194回肥後考古学会例会資料
- (註14) 美濃口雅朗2002『つつじヶ丘横穴群』熊本市教育委員会
- (註15) 高木正文1987『古城横穴墓群』熊本県教育委員会
- (註16) 松本健郎・西住欣一郎1989『北上原古墳・瀬戸口横穴墓群』熊本県文化財調査報告第104集 熊本県教育委員会
- (註17) 甲斐寿義2004『長湯横穴墓群 桑畑遺跡』大分県教育委員会
9基の横穴の発掘調査が行われた結果20体の人骨が確認され、本横穴群と同様に最終的に葬られた被葬者が見られないことから最終埋葬後に改葬の可能性について述べられている。
- (註18) 松下孝幸氏の本報告書の附章
- (註19) (註6) 美濃口氏の天井形による細分における2¹×3¹類
- (註20) 藤本貴仁2003「第四章古墳時代-倭王の時代-第五節古墳文化の終焉」『新宇上市史』通史編第一巻 宇上市史編纂委員会

参考文献

- 岡安光彦1984「いわゆる「素環の轡」について—環状鏡板付轡の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究』創刊号
- 杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鎌について」『橿原考古学研究所論集』第八 橿原考古学研究所
- 宮代栄一1989「いわゆる貝製雲珠について」『駿台史学』76 駿台史学会
- 中村幸史郎1990『湯の口横穴群(Ⅲ)』山鹿市教育委員会
- 小方泰宏1990「横穴墓における造墓区域配分の様相」『研究紀要』第4号(北九州教育文化事業団埋蔵文化財調査室)
- 西住欣一郎1991「肥後における横穴墓について」『おおいた考古』第4集 大分県考古学会
- 村上久和・吉留秀敏ほか1991「上ノ原横穴墓群」大分県教育委員会
- 美濃口雅朗1994「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会
- 森郁夫1998「7世紀の土器」(近畿西部編)『古代の土器5-2』古代の土器研究会
- 帆足俊文2001『瀬戸口横穴墓群・深川遺跡』熊本県文化財調査報告第193集 熊本県教育委員会
- 比佐陽一郎2002「弓金具の再検討」『考古学ジャーナル』No.496
- 比佐陽一郎2004「錫、鉛製耳環に関する基礎的研究—福岡市内の出土例を中心として—」『古文化談叢』第50集下

第3表 玉類観察表

2号墓出土玉類

| 挿図番号 | 遺物番号 | 遺物 | 色調 | 径(mm) | 厚さ(mm) | 孔径(mm) | 備考 |
|------|------|------|----|-------|--------|--------|----|
| 第9図 | 5 | ガラス玉 | 青 | 8.5 | 5.0 | 2.0 | |
| 第9図 | 6 | ガラス玉 | 緑 | 4.5 | 3.0 | 1.5 | |
| 第9図 | 7 | ガラス玉 | 緑 | 4.0 | 3.0 | 1.0 | |
| 第9図 | 8 | ガラス玉 | 緑 | 5.5 | 2.5 | 2.0 | |
| 第9図 | 9 | ガラス玉 | 緑 | 5.0 | 2.5 | 1.0 | |
| 第9図 | 10 | ガラス玉 | 緑 | 5.0 | 2.0 | 1.5 | |
| 第9図 | 11 | ガラス玉 | 緑 | 4.5 | 3.5 | 1.5 | |
| 第9図 | 12 | ガラス玉 | 緑 | 5.0 | 2.5 | 2.0 | |
| 第9図 | 13 | ガラス玉 | 緑 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | |
| 第9図 | 14 | ガラス玉 | 緑 | 4.5 | 2.5 | 2.0 | |
| 第9図 | 15 | ガラス玉 | 緑 | 5.0 | 2.0 | 1.0 | |
| 第9図 | 16 | ガラス玉 | 緑 | 5.0 | 3.0 | 2.0 | |
| 第9図 | 17 | ガラス玉 | 緑 | 5.5 | 3.0 | 1.5 | |
| 第9図 | 18 | ガラス玉 | 緑 | 5.0 | 3.0 | 1.5 | |

| 挿図番号 | 遺物番号 | 遺物 | 色調 | 径(mm) | 厚さ(mm) | 孔径(mm) | 備考 |
|------|------|-------|----|-------|--------|--------|--------|
| 第9図 | 19 | ガラス玉 | 水色 | 5.0 | 2.0 | 1.5 | |
| 第9図 | 20 | ガラス玉 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第9図 | 21 | ガラス玉 | 黄緑 | 5.0 | 2.0 | 2.0 | |
| 第9図 | 22 | ガラス玉 | 黄緑 | 5.5 | 3.5 | 2.0 | |
| 第9図 | 23 | ガラス玉 | 黄緑 | 6.0 | 3.0 | 2.0 | |
| 第9図 | 24 | ガラス玉 | 黄緑 | 5.0 | 4.0 | 1.5 | |
| 第9図 | 25 | ガラス玉 | 黄 | 3.5 | 2.5 | 1.5 | |
| 第9図 | 26 | ガラス玉 | 黄 | 3.5 | 2.5 | 1.0 | |
| 第9図 | 27 | ガラス玉 | 黄 | 4.5 | 2.5 | 1.5 | |
| 第9図 | 28 | ガラス玉 | 赤茶 | 5.5 | 2.0 | 3.0 | |
| 第9図 | 29 | ガラス玉 | 赤茶 | (7.0) | 4.0 | 1.5 | |
| 第12図 | 39 | ガラス管玉 | 青 | 5.0 | 12.5 | 1.0 | |
| 第12図 | 40 | ガラス玉 | 青 | 6.5 | 6.0 | 1.5 | |
| 第12図 | 41 | ガラス玉 | 緑 | 4.5 | 2.5 | 1.0 | 排土より検出 |

3号墓出土玉類

| 挿図番号 | 遺物番号 | 遺物 | 色調 | 径(mm) | 厚さ(mm) | 孔径(mm) | 備考 |
|------|------|-------|----|-------|--------|--------|-----------------|
| 第16図 | 14 | 銅製空玉 | | 12 | 14 | 1.0 | 銅板の厚さ1mm |
| 第16図 | 15 | 銅製空玉 | | 12 | 13 | 1.0 | 側面に繊維付着 |
| 第16図 | 16 | 碧玉製勾玉 | 緑 | | 9.0 | 0.3 | 縦幅3.0cm、横幅1.7cm |
| 第16図 | 17 | 瑪瑙製丸玉 | 黄褐 | 8.0 | 5.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第16図 | 18 | ガラス玉 | 紺 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第16図 | 19 | ガラス玉 | 紺 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第16図 | 20 | ガラス玉 | 水色 | 6.0 | 3.0 | 2.0 | |
| 第16図 | 21 | ガラス玉 | 緑 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | |
| 第16図 | 22 | ガラス玉 | 緑 | 4.0 | 3.0 | 1.0 | |
| 第16図 | 23 | ガラス玉 | 黄 | 5.0 | 2.0 | 1.0 | |
| 第16図 | 24 | ガラス玉 | 黄 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 排土より検出 |
| 第17図 | 36 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 3.0 | 1.5 | 排土より検出 |
| 第17図 | 37 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 38 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 2.5 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 39 | 土製玉 | 茶 | 4.5 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 40 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 41 | 土製玉 | 茶 | 4.5 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 42 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 2.5 | 1.0 | 排土より検出 |

| 挿図番号 | 遺物番号 | 遺物 | 色調 | 径(mm) | 厚さ(mm) | 孔径(mm) | 備考 |
|------|------|-----|----|-------|--------|--------|--------|
| 第17図 | 43 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 2.5 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 44 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 2.5 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 45 | 土製玉 | 茶 | 6.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 46 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 2.5 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 47 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 48 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 49 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 50 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 51 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 52 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 53 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第17図 | 54 | 土製玉 | 茶 | 4.0 | 3.0 | | 排土より検出 |
| 第17図 | 55 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第18図 | 66 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第18図 | 67 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第18図 | 68 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第18図 | 69 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第18図 | 70 | 土製玉 | 茶 | 5.0 | 3.0 | 1.0 | 排土より検出 |

4号墓出土玉類

| 挿図番号 | 遺物番号 | 遺物 | 色調 | 径(mm) | 厚さ(mm) | 孔径(mm) | 備考 |
|------|------|--------|----|-------|--------|--------|-----------------|
| 第23図 | 7 | 碧玉製勾玉 | 深緑 | | 9.0 | 3.0 | 縦幅3.2cm、横幅1.8cm |
| 第23図 | 8 | 瑪瑙製勾玉 | 浅橙 | | 10 | 4.0 | 縦幅3.4cm、横幅1.9cm |
| 第23図 | 9 | 水晶製切子玉 | | 19 | 25 | 5.5 | |
| 第23図 | 10 | 水晶製切子玉 | | 17 | 22 | 4.5 | |
| 第23図 | 11 | ガラス玉 | 青 | 7.0 | 6.0 | 2.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 12 | ガラス玉 | 青 | 7.0 | 5.0 | 2.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 13 | ガラス玉 | 青 | 7.5 | 5.0 | 2.5 | 排土より検出 |
| 第23図 | 14 | ガラス玉 | 青 | 3.0 | 1.5 | 1.5 | 排土より検出 |
| 第23図 | 15 | ガラス玉 | 青 | 3.5 | 1.5 | 1.5 | 排土より検出 |
| 第23図 | 16 | ガラス玉 | 青 | 2.5 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 17 | ガラス玉 | 青 | 2.5 | 1.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 18 | ガラス玉 | 青 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 19 | ガラス玉 | 紺 | 3.5 | 2.5 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 20 | ガラス玉 | 紺 | 4.0 | 1.5 | 1.5 | 排土より検出 |
| 第23図 | 21 | ガラス玉 | 紺 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 排土より検出 |
| 第23図 | 22 | ガラス玉 | 紺 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 排土より検出 |
| 第23図 | 23 | ガラス玉 | 紺 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 24 | ガラス玉 | 紺 | 3.0 | 1.5 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 25 | ガラス玉 | 紺 | 2.5 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 26 | ガラス玉 | 紺 | 3.0 | 2.5 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 27 | ガラス玉 | 紺 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 排土より検出 |
| 第23図 | 28 | ガラス玉 | 紺 | 2.5 | 1.5 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 29 | ガラス玉 | 水色 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |

| 挿図番号 | 遺物番号 | 遺物 | 色調 | 径(mm) | 厚さ(mm) | 孔径(mm) | 備考 |
|------|------|-------|----|-------|--------|--------|--------|
| 第23図 | 30 | ガラス玉 | 水色 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 排土より検出 |
| 第23図 | 31 | ガラス玉 | 水色 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 排土より検出 |
| 第23図 | 32 | ガラス玉 | 水色 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 33 | ガラス玉 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 34 | ガラス玉 | 水色 | 4.5 | 2.5 | 2.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 35 | ガラス玉 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 36 | ガラス玉 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 37 | ガラス玉 | 水色 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 38 | ガラス玉 | 水色 | 3.0 | 1.5 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 39 | ガラス玉 | 水色 | 3.0 | 1.5 | 1.5 | 排土より検出 |
| 第23図 | 40 | ガラス玉 | 水色 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 41 | ガラス玉 | 水色 | 4.0 | 3.0 | 1.5 | 排土より検出 |
| 第23図 | 42 | ガラス玉 | 水色 | 3.0 | 2.5 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 43 | ガラス玉 | 水色 | 3.0 | 1.5 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 44 | ガラス玉 | 緑色 | 4.5 | 2.5 | 1.5 | 排土より検出 |
| 第23図 | 45 | ガラス玉 | 緑色 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 46 | ガラス玉 | 緑色 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 47 | ガラス玉 | 緑色 | 3.0 | 2.5 | 1.0 | 排土より検出 |
| 第23図 | 48 | ガラス玉 | 緑色 | 4.5 | 1.5 | 2.0 | 排土より検出 |
| 第24図 | 50 | 碧玉製管玉 | 深緑 | 9.5 | (20.0) | 3.0 | 一部欠損 |
| 第25図 | 53 | 碧玉製管玉 | 淡緑 | 8.0 | 25 | 3.0 | |
| 第25図 | 54 | ガラス玉 | 青 | 3.0 | 1.5 | 1.0 | 排土より検出 |

第4表 耳環観察表

| 挿図番号 | 遺物番号 | 材質 | 法量 (cm) | | | | 蛍光X線分析 | 肉眼観察 |
|------|------|--------------|---------|-----|----------|------|---------------------|------------------------------------|
| | | | 縦幅 | 横幅 | 断面径 | 開口部幅 | | |
| 第11図 | 35 | 銅芯・銀板・(金メッキ) | 3 | 3.4 | 0.7 | 0.1 | 銅・銀・水銀・若干の金検出 | 太、開口部シワあり、表面銀色 |
| 第11図 | 36 | 銅芯・銀板・金メッキ | 2.7 | 2.9 | 0.7 | 0.15 | 銅(ヒ素・銀若干含む)・銀・金・水銀 | 太、開口部板を折りたたむ、No.37と対か? |
| 第11図 | 37 | 銅芯・銀板・金メッキ | 2.7 | 3.1 | 0.7 | 0.2 | 銅(ヒ素若干含む)・銀・金・水銀 | 太、金色に輝く部分有り、No.36と対か? |
| 第16図 | 9 | 銅芯・金板 | 3.1 | 3.4 | 0.8 | 0.15 | 銅・金(銀若干含む) | 太、No.10と対か? |
| 第16図 | 10 | 銅芯・金板 | 3.1 | 3.3 | 0.8 | 0.1 | 銅(鉛ごく微量含む)・金(銀若干含む) | 太、No.9と対か? |
| 第16図 | 11 | 銅芯・銀板・金メッキ | 2.8 | 3 | 0.7×0.8 | 0.1 | 銅(ヒ素若干含む)・銀・金・水銀 | 太、No.12と対か? |
| 第16図 | 12 | 銅芯・銀板・金メッキ | 2.7 | 3 | 0.7×0.8 | 0.2 | 銅(ヒ素若干含む)・銀・金・水銀 | 太、No.11と対か? |
| 第16図 | 13 | 錫 | | | 0.45 | | 錫(純度が高い) | 全体にブロック状に崩壊 |
| 第17図 | 32 | 銅芯・銀板・金メッキ | 2.4 | 2.7 | 0.7×0.8 | 0.15 | 銅(ヒ素若干含む)・銀・金・水銀 | 太 |
| 第17図 | 33 | 銅芯 | 1.7 | 1.7 | 0.25 | 0.2 | 銅・鉛若干含む・金微量検出 | 細、表飾見えない |
| 第17図 | 34 | 銅芯・銀装 | | | 0.2 | | 銅・銀、Pb | 細、腐食顕著 |
| 第17図 | 35 | 錫 | | | 0.3×0.4 | | 錫(純度が高い) | 表面剥離、ブロック状に崩壊 |
| 第18図 | 62 | 銅芯 | 2.1 | 2.5 | 0.4 | 0.05 | 銅 | 中細、環体内面に金の薄塗膜残存 |
| 第18図 | 63 | 銅芯・銀装 | (1.9) | 2.1 | 0.3 | | 銅・銀 | 細 |
| 第18図 | 64 | 銅芯 | | | 0.3 | | 銅・若干の銀検出 | 細、表飾見えない |
| 第23図 | 5 | 銅芯・金メッキ | 2.1 | 2.4 | 0.4 | 0.1 | 銅(ヒ素若干含む)・金・水銀 | 中細、開口部にシワなし |
| 第23図 | 6 | 銅芯・銀板・金メッキ | 2.6 | 2.9 | 0.6×0.8 | 0.2 | 銅(セレン若干含む)・銀・金・水銀 | 太、開口部板を折りたたむ、No.52と対か? |
| 第25図 | 52 | 銅芯・銀板 | 2.7 | 3 | 0.65 | 0.1 | 銅(ヒ素若干含む)・銀(金微量混じる) | 太、開口部板を折りたたむ、表面銀色、No.6と対か? |
| 第29図 | 12 | 錫 | | | 0.6×0.4 | | 錫 | ブロック状に崩壊 |
| 第30図 | 14 | 銅芯・銀板・金メッキ | 2.3 | 2.6 | 0.55×0.8 | 0.1 | 銅(銀若干含む)・銀・金・水銀 | 太、開口部シワあり、金色の薄板、緑青あり、No.15と対か? |
| 第30図 | 15 | 銅芯・銀板・金メッキ | 2.3 | 2.5 | 0.6×0.8 | 0.2 | 銅・銀・金・水銀 | 太、開口部折りたたむ、No.14と対か? |
| 第30図 | 16 | 銅芯・銀板・金メッキ | 2.15 | 2.3 | 0.5×0.8 | 0.1 | 銅(ヒ素・銀微量含む)・銀・金・水銀 | 太、金色の薄板、全体に緑青あり、No.34と対か? |
| 第30図 | 17 | 銅芯・金板 | 2.8 | 3.1 | 0.65×0.8 | 0 | 銅・金(銀若干含む) | 太、開口部折りたたむ、No.18と対か? |
| 第30図 | 18 | 銅芯・金板 | 2.8 | 3.1 | 0.7 | 0.15 | 銅・金(銀若干含む) | 太、開口部折りたたむ、No.17と対か? |
| 第30図 | 19 | 錫 | | | (0.3) | | 錫 | ブロック状に崩壊 |
| 第32図 | 34 | 銅芯・銀板・金メッキ | 2.15 | 2.3 | 0.55×0.6 | 0.05 | 銅(ヒ素・銀若干含む)・銀・金・水銀 | 太、表面状態悪い、No.16と対か? |
| | | 錫 | | | | | 錫 | ブロック状に崩壊、5号墓未掲載 |
| | | 錫 | | | | | 錫 | ブロック状に崩壊、5号墓未掲載 |
| 第38図 | 7 | 錫? | | | 0.5 | | 未検査 | ブロック状に亀裂が入る |
| 第38図 | 8 | 錫? | | | 0.4 | | 未検査 | ブロック状に亀裂が入る |
| 第48図 | 1 | 銅芯(中空)・金板 | 1.65 | 1.7 | 0.4×0.5 | 0.1 | (銅)・金(純度高い、銀ごく僅か含む) | 小、中空、開口部は丸い板をあてた上に本体を覆う金板を1mmほど被せる |
| 第48図 | 2 | 銅芯(中空)・金板 | 1.65 | 1.8 | 0.4×0.5 | 0.1 | (銅)・金 | 小、中空、開口部は丸い板をあてた上に本体を覆う金板を1mmほど被せる |

第5表 土器観察表

| 挿図番号 | 遺物番号 | 器種 | 法量 (cm) | | 色調 | 調整 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|------|------|---------------|---------|-------|---|---------------------------------|------------|----|------------------------|
| | | | 口径 | 器高 | | | | | |
| 第33図 | 35 | 坏蓋 (須恵器) | 11.0 | 3.3 | (外面)黒 N2/ (内面)暗灰 N3/ | (外面)回転ヘラ削り、回転ナデ (内面)回転ナデ | 石英少量含む | 良 | 天井部にヘラ記号 |
| 第45図 | 7 | 高坏脚部 (須恵器) | | 4.9 | (外面)暗灰 N3/ (断面)暗赤褐 2.5YR3/2 (内面)灰 N4/ | (外面)回転ナデ (内面)回転ナデ | 石英少量含む | 良 | 透かし部分で折損 底部復元径9.9cm |
| 第45図 | 8 | 小皿 (土師器) | 9.3 | 1.5 | (外面)にぶい橙 7.5YR7/4 (内面)にぶい橙 7.5YR7/4 | (外面)回転ナデのちへら切り離し (内面)回転ナデ、ナデ | 石英少量含む | 良 | |
| 第53図 | 1 | 坏蓋 (須恵器) | 12.2 | 3.7 | (外面)灰 N5/ (断面)灰白 N7/ (内面)灰白 N7/ | (外面)回転ヘラ削り、回転ナデ (内面)回転ナデ | 石英、黒色砂粒含む | 良 | 天井部にヘラ記号 |
| 第53図 | 2 | 坏蓋 (須恵器) | (12.8) | (4.7) | (外面)浅黄橙 7.5YR8/4 (断面)浅黄橙 7.5YR8/4 (内面)浅黄橙 7.5YR8/4 | (外面)回転ヘラ削り、回転ナデ (内面)回転ナデ | 石英、茶褐色砂粒含む | 不良 | |
| 第53図 | 3 | 坏身 (須恵器) | (11.0) | (2.9) | (外面)オリーブ灰 2.5GY5/1 (断面)灰白 N7/ (内面)灰白 N7/ | (外面)回転ナデ (内面)回転ナデ | 石英、黒色砂粒含む | 良 | 外面灰かぶり |
| 第53図 | 4 | 坏身 (須恵器) | (12.2) | (2.7) | (外面)灰オリーブ 7.5Y6/2 (断面)灰 N5/ (内面)灰 N6/ | (外面)回転ナデ (内面)回転ナデ | 石英含む | 良 | |
| 第53図 | 5 | 高坏坏身 (須恵器) | | (2.5) | (外面)暗灰 N3/ (断面)暗赤灰 10R4/1 (内面)灰 N4/ | (外面)回転ナデ、沈線、磨書文 (内面)回転ナデ | 石英多く含む | 良 | |
| 第53図 | 6 | 脚部 (須恵器) | | (4.1) | (外面)灰 N5/ (断面)灰白 N7/ (内面)灰白 N7/ | (外面)回転ナデ (内面)回転ナデ | 黒色砂粒微量含む | 良 | 底部復元径10.8cm |
| 第53図 | 7 | 蓋 (須恵器) | | (3.3) | (外面)灰白 N7/ (断面)灰白 N7/ (内面)灰白 N7/ | (外面)タタキ、ハケメ、ナデ (内面)ヘラ削り、ナデ | 石英、灰色砂粒含む | 良 | 頸部復元径30.2cm |

附章 熊本県合志町豊岡宮本横穴群出土の古墳人骨

*松下孝幸

【キーワード】：熊本県、古墳人骨、横穴墓、保存不良、低・広顔、高・狭顔、歯槽性突顎

はじめに

熊本県菊池郡合志町大字豊岡312-2に所在する豊岡宮本横穴群の発掘調査が2004年(平成16年)におこなわれ、複数の横穴から人骨が検出された。この横穴は崖斜面の補強工事の際に発見され、一部の横穴は重機によって部分的に破壊されたが、その他の横穴は無傷の状態での調査がおこなわれた。

筆者が調査に携わったり報告書を書いた熊本県内の古墳時代人骨については、益城町の福原横穴墓(松下・他、1985a)、玉名市小路石棺(松下、1985b)、熊本市古城横穴墓(松下・他、1985c)、鹿本町津袋大塚東側1号石棺(松下・他、1986a)、山鹿市湯の口横穴墓(松下・他、1986b、1988)と舞野遺跡(松下・他、1989c)、七城町瀬戸口横穴墓(松下・他、1989a)、中央町四十八塚5号墳(松下・他、1989b)、宇土市西潤野2号墳(松下・他、1992)、熊本市五丁中原遺跡(松下、1997)、鹿央町広諏訪原遺跡(松下、2004)があるが、横穴は盗掘を受けているものが多く、人骨の保存状態はあまりよくなかった。

本横穴でも横穴から検出された人骨の保存状態はよくなかったが、9号墓と11号墓では珍しく頭蓋がよく残っており、頭型や顔面の特徴を知ることができた。現場で人骨の出土状況を観察すれば、残存部位や個体数を推測することが可能であるので、筆者らは現場に入り、人骨の露出、実測などをおこない、出土人骨についてできる限りの観察をおこなった。大部分の人骨は保存状態が著しく悪く、取り上げることもできなかったが、なかには保存良好で、計測ができたものもある。出土人骨の人類学的観察や計測をおこなったので、その結果を報告しておきたい。

資 料

今回の調査で横穴は合計12基検出されたが、人骨や歯冠が残存していたのは、そのうちの2号、3号、4号、5号、8号、9号、10号、11号、12号墓の9基である。人骨の保存状態は各横穴によって差があり、9号、11号墓では良好であったが、その他の横穴では著しく悪かった。

今回調査された横穴から検出された人骨は、表1に示すとおり、合計で31体分であるが、4、5、9、10号横穴では遊離歯冠か、骨片しか残っていなかった。もっとも体数が多かったのは11号墓で、9体分の可能性がある。性別を推測することができた骨は少なく、男性骨は5体、女性骨は9体、幼児骨が2体で、残りの15体は性別不明である。年齢区分は表3のとおりである。なお、取り上げて、骨種を同定できた人骨には表4に示すような骨識別番号を付した。

計測方法は、Martin-Saller(1957)によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木(1963)と松下ら(1983)の方法で計測した。

* Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

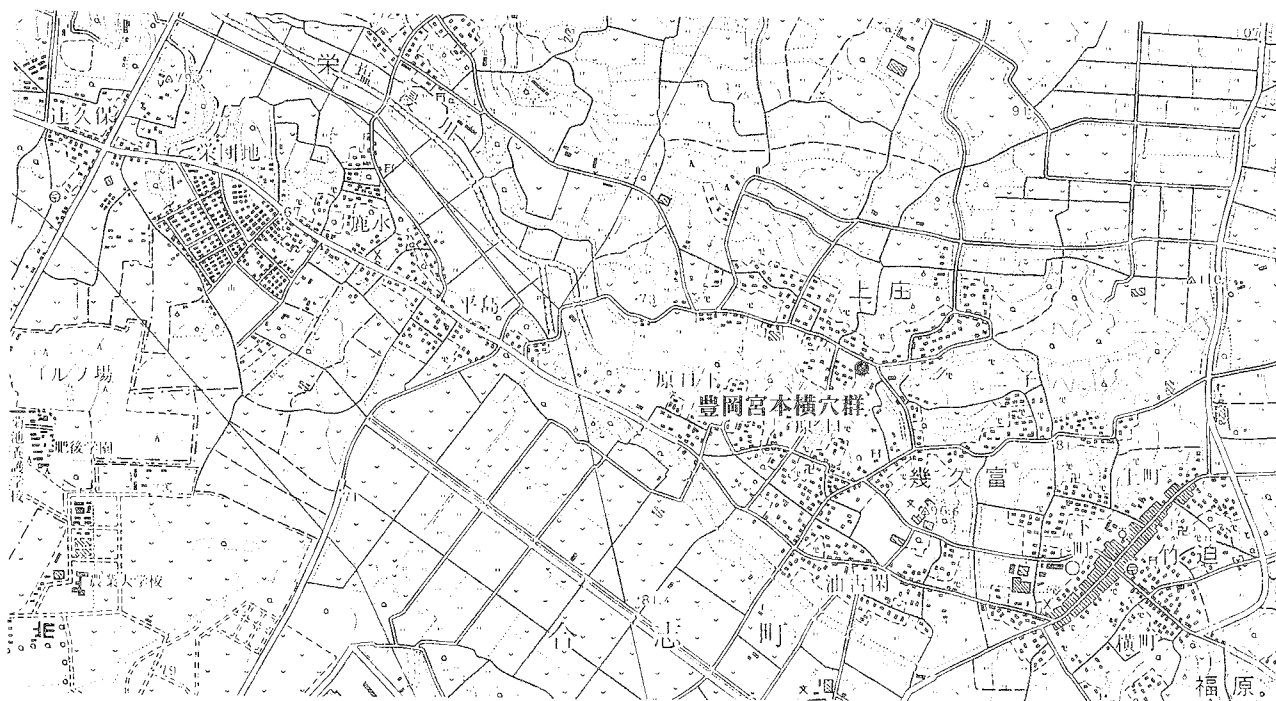
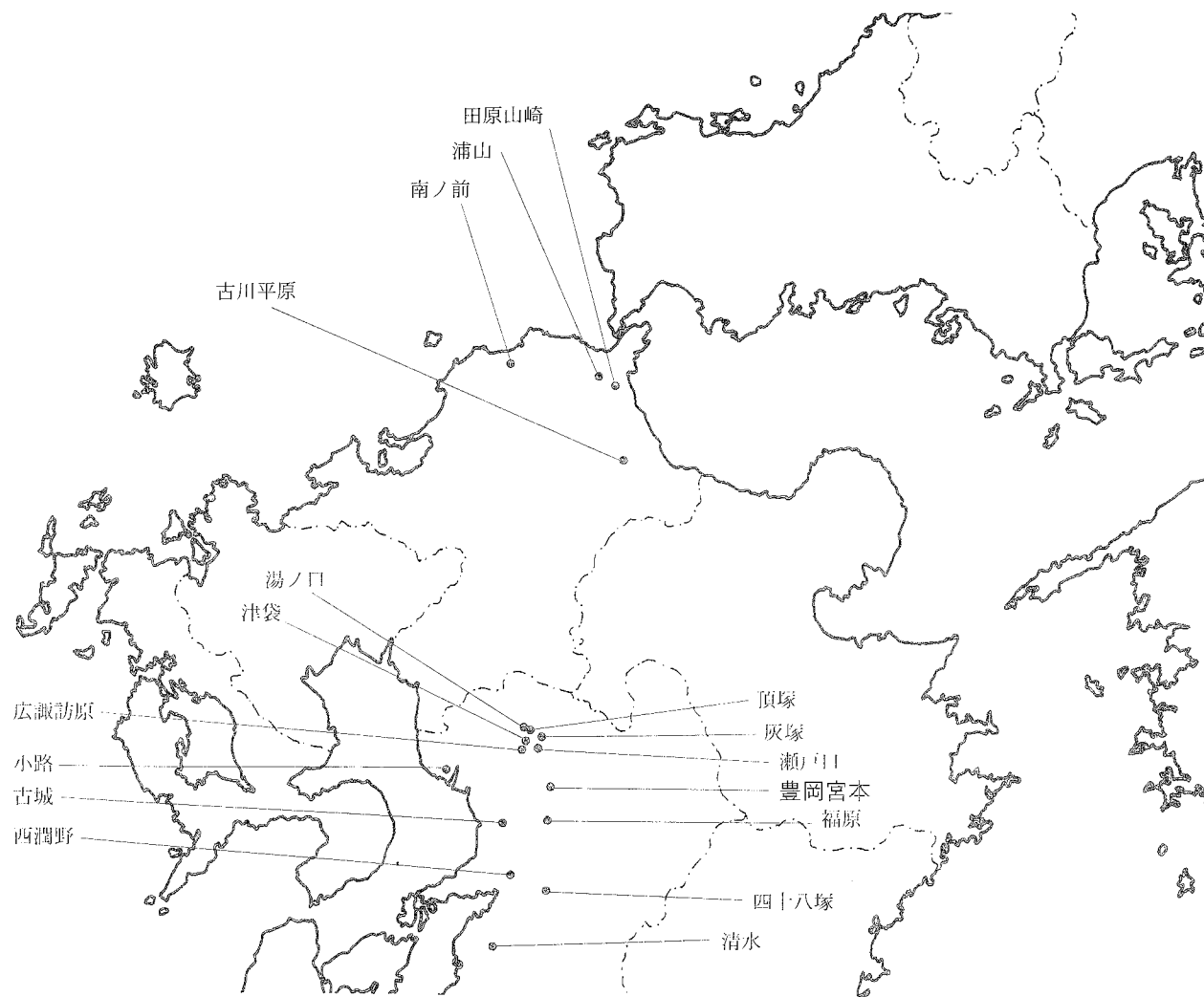


図1 遺跡の位置 (1/25000)

(Fig.1 Location of the Toyooka-Miyamoto tunnel tomb, Koshi Cho, Kumamoto Prefecture)

表1 資料数 (Table 1.Number of materials)

| 成人 | | | 幼小児 | 合計 |
|----|----|----|-----|----|
| 男性 | 女性 | 不明 | | |
| 5 | 9 | 15 | 2 | 31 |

本人骨は考古学的所見から、古墳時代後期（7世紀）に属する人骨と推測されている。

人骨の発掘調査および人骨の実測は、筆者の他に当館の職員の磯部美恵子、松下玲子、松下真実、沖田絵麻がおこない、人骨の整理・復元・計測値の計算などは、磯部美恵子、松下玲子、中野江里子が担当した。

表2 出土体数一覧 (Table 2.Number of materials)

| 墓番号 | 体数 | 備考 |
|------|---------|----------------------------|
| 2号墓 | 左屍床 2体分 | 遊離歯冠から、1体は女性骨 |
| | 右屍床 2体分 | 大腿骨から、2体とも女性骨 |
| | 奥屍床 2体分 | 脛骨から、1体は女性骨 |
| | 合計 6体分 | |
| 3号墓 | 左屍床 2体分 | 大腿骨から、1体は女性骨 |
| | 右屍床 2体分 | 大腿骨、下顎骨から、2体とも性別不明 |
| | 奥屍床 4体分 | 下顎骨から4体分 |
| | 合計 8体分 | |
| 4号墓 | 1体 | 場所不明 |
| 5号墓 | 左屍床 1体分 | 遊離歯冠から1体分 |
| | 奥屍床 1体分 | 遊離歯冠から1体分 |
| | 合計 2体分 | |
| 8号墓 | 奥屍床 1体分 | 遊離歯冠から1体分 |
| 9号墓 | 2体分 | 大腿骨から2体分 |
| 10号墓 | 左屍床 1体分 | 骨片、遊離歯冠から1体分 |
| 11号墓 | 左屍床 1体分 | 頭蓋から1体分 |
| | 右屍床 4体分 | 頭蓋、四肢骨から、男性骨1体、幼児骨1体、女性骨2体 |
| | 奥屍床 4体分 | 頭蓋、四肢骨から、男性骨1体、幼児骨1体、女性骨2体 |
| | 合計 9体分 | |
| 12号墓 | 左屍床 1体 | |

表3 年齢区分 (Table 3. Division of age)

| | 年齢区分 | 年齢 |
|-----|------|------------------------------|
| 未成人 | 乳児 | 1歳未満 |
| | 幼児 | 1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで) |
| | 小児 | 6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯根完成まで) |
| | 成年 | 16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで) |
| 成人 | 壯年 | 21歳～39歳 (40歳未満) |
| | 熟年 | 40歳～59歳 (60歳未満) |
| | 老年 | 60歳以上 |

注) 成年という用語については上井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所 見

I 人骨の体数と出土状況

2号墓

左屍床に残っていた人骨の保存状態は悪い。現場では頭蓋片、下顎骨、上腕骨、右側大腿骨、右側脛骨を確認したが、下顎骨、上腕骨、脛骨は取り上げることができなかった。人骨は1体分であるが、遊離歯冠を左右屍床から検出したので、左屍床には2体が埋葬されていた可能性が高い。そのうちの1体は、右側大腿骨から女性である。

右屍床では右側大腿骨2本、下顎骨2体分を検出した。その他、頭蓋片、脛骨や上腕骨も残存していたが、保存状態が著しく悪く、同定や取り上げは不可能であった。下顎骨は1体は女性で、大腿骨は2本とも女性骨と思われる。また、左右屍床から遊離歯冠も検出した。右屍床には女性2体が埋葬されていた可能性が高い。

奥屍床からは、頭蓋片、左側大腿骨、右側脛骨2本、その他、同定も取り上げもできない長骨片を検出した。左側大腿骨は女性骨で、2本のうち1本の右側脛骨も女性骨である。従って、奥屍床には女性1体を含む2体が埋葬されていた。

表4 出土人骨一覧 (Table 4. List of skeletons)

| 墓番号 | 人骨番号 | 性別 | 年齢 | 残存場所 | 残存骨 |
|---------|---------|----|-----|--------|--------------------|
| 2号墓 | 2-MA-1 | 女性 | 不明 | 右屍床 | 下顎骨 |
| | 2-FE-1 | 女性 | 不明 | 左屍床 | 大腿骨(右)、取り上げ不可 |
| | 2-FE-2 | 女性 | 不明 | 奥屍床 | 大腿骨(左) |
| | 2-TB-1 | 女性 | 不明 | 奥屍床 | 脛骨(右) |
| 3号墓 | 3-SK-1 | 不明 | 不明 | 左屍床 | 頭蓋 |
| | 3-MA-1 | 女性 | 不明 | 左屍床 | 下顎骨 |
| | 3-FE-1 | 女性 | 不明 | 左屍床 | 大腿骨(左) |
| | 3-SK-2 | 不明 | 不明 | 右屍床 | 頭蓋 |
| | 3-SK-3 | 不明 | 不明 | 右屍床 | 頭蓋 |
| | 3-MA-2 | 不明 | 不明 | 右屍床 | 下顎骨 |
| | 3-MA-3 | 不明 | 不明 | 右屍床 | 下顎骨 |
| | 3-HU-1 | 男性 | 不明 | 奥屍床 | 上腕骨 (左) |
| | 3-RA-1 | 男性 | 不明 | 奥屍床 | 橈骨 (左) |
| | 3-FE-2 | 男性 | 不明 | 奥屍床 | 大腿骨(左右) |
| | 3-FE-3 | 女性 | 不明 | 奥屍床 | 大腿骨(右) |
| | 3-TB-1 | 男性 | 不明 | 奥屍床 | 脛骨 (右)、3-FE-2と同一個体 |
| 3-MA-4 | 不明 | 不明 | 奥屍床 | 下顎骨 | |
| 3-MA-5 | 不明 | 不明 | 奥屍床 | 下顎骨 | |
| 3-MA-6 | 不明 | 不明 | 奥屍床 | 下顎骨 | |
| 9号墓 | 9-Y-1 | 男性 | 熟年 | | 頭蓋、大腿骨(左)、脛骨(左) |
| 11号墓 | 11-SK-1 | 男性 | 熟年 | 右屍床 | |
| | 11-SK-2 | - | 幼児 | 右屍床 | 2~3歳 |
| | 11-MA-1 | 不明 | 不明 | 右屍床 | 下顎骨 |
| | 11-CL-1 | 不明 | 不明 | 右屍床 | 鎖骨 (左右) |
| | 11-HU-1 | 不明 | 不明 | 右屍床 | 上腕骨 (右) |
| | 11-HU-2 | 女性 | 不明 | 右屍床 | 上腕骨 (左) |
| | 11-FE-1 | 女性 | 不明 | 右屍床 | 大腿骨(左右) |
| | 11-FE-2 | 女性 | 不明 | 右屍床 | 大腿骨(右) |
| | 11-TB-1 | 女性 | 不明 | 右屍床 | 脛骨 (左) |
| | 11-TB-2 | 女性 | 不明 | 右屍床 | 脛骨 (左) |
| | 11-SK-3 | 女性 | 不明 | 奥屍床 | 頭蓋 |
| | 11-MA-2 | 男性 | 不明 | 奥屍床 | 下顎骨 |
| | 11-MA-3 | - | 幼児 | 奥屍床 | 下顎骨、3歳 |
| | 11-CL-2 | 男性 | 不明 | 奥屍床 | 鎖骨 (右) |
| | 11-HU-3 | 男性 | 不明 | 奥屍床 | 上腕骨 (左右) |
| | 11-UL-1 | 男性 | 不明 | 奥屍床 | 尺骨 (左) |
| | 11-CX-1 | 男性 | 不明 | 奥屍床 | 寛骨 (右) |
| | 11-FE-3 | 男性 | 不明 | 奥屍床 | 大腿骨(左右) |
| | 11-FE-4 | 女性 | 不明 | 奥屍床 | 大腿骨(右) |
| | 11-FE-5 | 女性 | 不明 | 奥屍床 | 大腿骨(左) |
| 11-TB-3 | 女性 | 不明 | 奥屍床 | 脛骨 (右) | |
| 11-TB-4 | 男性 | 不明 | 奥屍床 | 脛骨 (左) | |
| 11-SK-4 | 女性 | 熟年 | 左屍床 | 頭蓋 | |
| 12号墓 | 12-Y-1 | 男性 | 不明 | 左屍床 | 頭蓋、大腿骨 |

3号墓

左屍床では頭蓋、下顎骨、左側大腿骨を含む大腿骨、脛骨などの長骨を検出した。しかし、保存状態が著しく悪く、大部分の骨は取り上げることができなかった。下顎骨と左側大腿骨は女性骨である。大腿骨が2体分あることや左右屍床から遊離歯冠も検出したことから、左屍床には女性1体を含む2体が埋葬されていたものと思われる。

右屍床では頭蓋、下顎骨、左側上腕骨、大腿骨、脛骨などの長骨を検出・同定したが、泥水をかぶって、保存状態が著しく悪かったために、大部分の骨は取り上げることができなかった。頭蓋は左右屍床から検出され、左側側頭骨が2体分存在する。また、下顎骨も2体分、右側大腿骨も2体分残存していたが、大腿骨は取り上げることができなかった。下顎骨および大腿骨の性別も判別することができない。右屍床にも2体分が埋葬されていたようである。

奥屍床では、頭蓋、下顎骨、上腕骨、橈骨、大腿骨、脛骨などの長骨を検出したが、やはり泥水をかぶっていたために、保存状態はかなり悪い。左側上腕骨1本、左側橈骨1本、2体分の大腿骨3本、右側脛骨1本を取り上げることができた。また、現場では下顎骨4体分を確認したが、取り上げることができたのは3体分で、いずれも性別を推測できなかった。

4号墓

土壌の水洗によって、同定不能な遊離歯冠片が1片得られている。検出場所は不明である。

5号墓

奥屍床と左屍床から遊離歯冠が検出された。通路部から脆弱化し、取り上げ不能な頭蓋と長骨が検出されたが、長骨は同定ができなかった。少なくとも奥屍床と左屍床にそれぞれ1体分は埋葬されていたようである。

8号墓

奥屍床から遊離歯冠を検出したにすぎない。少なくとも奥屍床に1体は埋葬されたものと思われる。

9号墓

玄室は狭い。向かって左側に頭蓋、左側大腿骨、左側脛骨、上腕骨、腓骨が残存していたが、上腕骨と腓骨は保存状態が著しく悪く取り上げることができなかった。これらの人骨は同一個体の男性骨(1体分)と思われる。その他に通路部に大腿骨が残っていたが、これも取り上げることができなかった。この保存不良の大腿骨は保存良好な左側大腿骨とは別個体と思われるので、9号墓には少なくとも2体分の人骨が残存していたことになる。

10号墓

左屍床に人骨片と遊離歯冠が残存していた。左屍床には少なくとも1体は埋葬されたものと思われる。

11号墓

右屍床からは頭蓋と四肢骨が検出された。下顎骨2体分、下顎骨を除く頭蓋が2体分、下顎骨は成人骨で、そのうちの1個は頭蓋と同一個体である。頭蓋2体分のうち1体は成人男性骨(11-SK-1)で、残りの1体は幼児(2~3歳)(11-SK-2)の左側側頭骨である。鎖骨は左右1個ずつ残っているが、これは同一個体なので、鎖骨は1体分である。上腕骨は左右1本ずつあるが、別個体なので、上腕骨は2体分、大腿骨は右側が2本、左側は1本であるが、対になるものがあるので、2体分である。脛骨は左側が2本で、2体分である。従って、右屍床から検出された人骨は、頭蓋(下顎骨を含む)3体分、鎖骨1体分、上腕骨、大腿骨、脛骨がそれぞれ2体分であるが、頭蓋3体分のうち1体は男性骨、四肢骨は2体とも女性骨と思われるので、幼児骨1体を含めると合計4体ということになる。

奥屍床からも、頭蓋と四肢骨が検出された。頭蓋1体分、下顎骨2体分で、頭蓋は女性骨、下顎骨は男性と3歳ぐらいの幼児の下顎骨で、頭蓋(下顎骨を含む)は3体分である。鎖骨は右側1本で、男性鎖骨、上腕骨は左右それぞれ1本ずつ2本であるが、同一個体、尺骨は男性の左側が1本残存していた。寛骨は右側が1個で、男性骨。大腿骨は左右それぞれ2本ずつであるが、そのうち対をなすものが1組あるので、3体分。脛骨は左右1本ずつであるが、対をなさないもので、2体分である。従って、奥屍床からは、頭蓋は3体分(男：1、女：1、幼児：1)で、鎖骨、上腕骨、尺骨、寛骨はそれぞれ1体分(すべて男性)、大腿骨は3体分(男：1、女：2)、脛骨は2体分(男：1、女：1)であるから、男性1体、女性2体、幼児1体の合計4体が検出されたことになる。

左屍床からは1体分の頭蓋が検出された。また、通路部から大腿骨が検出されたが、保存状態が悪く、左右の判別ができなかったので、個体数には入れないことにする。

12号墓

左屍床と通路部に人骨が残存していた。残存状態は悪く、埋葬状態は保っていない。1体分の頭蓋、大腿骨が散乱状態で残っていた。男性骨である。少なくとも1体は埋葬されていた。

II 人骨の形質

1. 頭蓋

9-Y-1 (男性・熟年)

(1) 脳頭蓋

左側の側頭部を欠損しているが、その他の保存状態は良好である。骨壁はやや厚く、堅牢である。外後頭隆起はやや発達し、乳様突起は大きい。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は左右とも認められない。縫合は、三主縫合とも内板は癒合閉鎖しているが、外板はまだ癒合していない。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が187mm、頭蓋最大幅は〔75mm×2=150mm〕、バジオン・ブレグマ高は139mmである。頭蓋長幅示数は〔80.21〕、頭蓋長高示数は74.33、頭蓋幅高示数は〔92.67〕となり、頭型はbrachy-ortho-,metriokran(短、中、中頭型)に属している。また、正中矢状弧長は387mmである。

(2) 顔面頭蓋

右側の頬骨弓と左側頬骨を欠損している。眉上弓は強く隆起している。鼻骨の隆起はかなり弱く、鼻根部は幅広く、また著しく扁平である。頬骨も外側に張り出している。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が109mm、頬骨弓幅は〔73mm×2=146mm〕、中顔幅は〔52mm×2=104mm〕、上顔高は64mmであるが、顔高は計測できない。高径は低く、幅径が広いので、上顔示数は〔43.84〕(K)、〔61.54〕(V)と、かなり小さな示数値となり、顔面には著しい低・広顔傾向が認められる。

眼窩幅は44mm(右)、眼窩高は32mm(右)で、眼窩示数は72.73(右)となり、右側はchamaekonch(低眼窩)に属している。

鼻幅は30mm、鼻高は49mmで、鼻示数は61.22となり、hyperchamaerrhin(過低鼻)に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が24mm、鼻根横弧長は26mm、鼻根彎曲示数は92.31となり、鼻根部は著しく扁平である。鼻骨最小幅は12mmで、前頭突起水平傾斜角は147度を示し、前頭突起の向きは前額方向である。鼻根角は134度と小さいが、これは眉間の隆起が強いからであり、決して鼻骨の尖端が隆起しているわけではない。鼻根陥凹示数は17.86と、かなり小さく、鼻骨の隆起はきわめて小さい。

側面角は、全側面角が80度、鼻側面角が85度、齒槽側面角は59度で、齒槽性突顎の傾向が強い。

下顎骨は大きく、頑丈である。下顎枝は幅広く、下顎切痕は浅い。

(3) 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と齒槽の状態を齒式で示すと、次のとおりである。

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|--|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 8 | 7 | ⑤ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | | 1 | / | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | / | | / | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | / | / |

【●:齒槽閉鎖 ○:齒槽開存 /:不明 ▽:先天性欠損、番号は齒種】

[1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小白歯、5:第二小白歯、6:第一大白歯、7:第二大白歯、8:第三大白歯]

咬耗度はBrocaの2度(咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ)である。また、風習的抜歯は認められない。

(4) 性別・年齢

性別は、眉上弓が強く隆起していることから、男性と推定した。年齢は、三主縫合とも内板は癒合閉鎖し、外板はまだ癒合していないことから、熟年と思われる。

11-SK-1 (男性・熟年)

(1) 脳頭蓋

左右の側頭骨と左側頭頂骨の一部を欠損している以外はほぼ完全である。骨壁は比較的堅牢である。外後頭隆起の発達良好で、乳様突起も大きい。両側の外耳道には骨腫は認められない。縫合は、三主縫合とも内板は癒合閉鎖しており、外板でも矢状縫合の一部にも癒合が認められる。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が180mm、頭蓋最大幅は128mm、バジオン・プレグマ高は132mmである。頭蓋長幅示数は71.11、頭蓋長高示数は73.33、頭蓋幅高示数は103.13となり、頭型はdolicho,ortho-akrocran(長、中、尖頭型)に属している。また、頭蓋水平周は503mm、横弧長は(290mm)、正中矢状弧長は368mmである。

(2) 顔面頭蓋

右側の頬骨の一部を欠損している以外はほぼ完全である。眉上弓と眉間はやや隆起し、前頭鱗は後方へ傾斜している。鼻根部は狭く、あまり扁平ではない。また、頬骨の外側への張り出しは弱い。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が105mm、頬骨弓幅は〔68mm×2=136mm〕、中顔幅は103mm、上顔高は72mmであるが、顔高は計測できない。上顔示数は〔52.94〕(K)、69.90(V)となり、顔面には著しい高・狭顔傾向が認められる。

眼窩幅は45mm(右)、44mm(左)、眼窩高は35mm(右)、35mm(左)で、眼窩示数は77.78(右)、79.55(左)となり、両側ともmesokonch(中眼窩)に属している。

鼻幅は26mm、鼻高は53mmで、鼻示数は49.06となり、mesorrhin(中鼻)に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が13mm、鼻根横弧長は15mm、鼻根彎曲示数は86.67となり、鼻根部は扁平ではない。鼻骨最小幅は7mmで、前頭突起水平傾斜角は98度を示し、前頭突起の向きは矢状方向である。鼻根角は148度、鼻根陥凹示数は12.00と、かなり小さく、鼻骨の隆起そのものはきわめて弱い。

側面角は、全側面角が77度、鼻側面角が82度、齒槽側面角は59度で、齒槽性突顎の傾向が強い。

(3) 齒

上下両顎には齒が釘植していた。残存齒と齒槽の状態を齒式で示すと、次のとおりである。

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|--|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ／ | ／ | 6 | ⑤ | 4 | 3 | 2 | ① | | 1 | 2 | ③ | 4 | 5 | ⑥ | ／ | ／ |
| ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ⑥ | ⑦ | ／ |

〔●:齒槽閉鎖 ○:齒槽開存 /:不明 ∇:先天性欠損、番号は齒種〕

〔1:中切齒、2:側切齒、3:犬齒、4:第一小臼齒、5:第二小臼齒、6:第一大臼齒、7:第二大臼齒、8:第三大臼齒〕

咬耗度はBrocaの2度(咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ)である。また、風習的抜齒は認められない。

(4) 性別・年齢

性別は、外後頭隆起の発達良好で、前頭鱗は後方へ傾斜していることから、男性と推定した。年齢は、三主縫合とも内板は癒合閉鎖し、矢状縫合の外板の一部にも癒合が認められることから、熟年と思われる。

11-SK-4 (女性・熟年)

(1) 脳頭蓋

残存していたのは、前頭骨、右側頭頂骨および右側側頭骨のみで、頭型も外後頭隆起の様態も不明であるが、乳様突起は小さい。観察できた右側外耳道には骨腫は存在しない。縫合は矢状縫合と冠状縫合が観察できた。両縫合とも内板は癒合閉鎖しているが、外板はまだ開離している。

(2) 顔面頭蓋

上顎骨と左側頬骨の一部を欠損している。眉上弓から眉間にかけての隆起は弱い。鼻根部は狭く、鼻根部と鼻骨の形態は11-SK-1に酷似している。頬骨の外側への張り出しもそれほど強くない。

顔面頭蓋の計測はほとんどできない。眼窩幅は41mm(右)、眼窩高は31mm(左)である。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が15mm、鼻根横弧長は18mm、鼻根彎曲示数は83.33となり、鼻根部は扁平ではない。鼻骨最小幅は7mmで、鼻頬骨角は155度、顔面扁平示数は11.11である。

(3) 性別・年齢

性別は、眉上弓から眉間にかけての隆起は弱いことから、女性と推定した。年齢は、観察できた矢状縫合と冠状縫合の内板が癒合閉鎖し、外板はまだ開離していることから、熟年と思われる。

2. 四肢骨

(1) 上肢骨

①上腕骨

上腕骨は計測ができたのはわずか男女各1体ずつ、合計2体分である。

11-HU-2 (女性)

計測値は、中央最大径が20mm(左)、中央最小径は15mm(左)で、骨体断面示数は75.00(左)となり、骨体の扁平性はあまり強くない。骨体最小周は55mm(左)、中央周は60mm(左)で、骨体は女性としてはやや大きい。

11-HU-3 (男性)

計測値は、中央最大径が21mm(右)、22mm(左)、中央最小径は17mm(右)、16mm(左)で、骨体断面示数は80.95(右)、72.73(左)となり、左側骨体は扁平である。骨体最小周は61mm(右)、60mm(左)、中央周は64mm(右)、62mm(左)で、骨体は大きい。

(2) 下肢骨

①大腿骨

大腿骨は男性4体分、女性5体分の計測ができた。

男性の計測値は、骨体中央矢状径が29mm(右)(1例)、30.33mm(左)(3例)、横径は31mm(右)(1例)、28.00mm(左)(3例)で、骨体中央断面示数は93.55(右)(1例)、108.53(左)(3例)となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は比較的良好である。骨体中央周は94mm(右)(1例)、91.00mm(左)(3例)で、骨体はかなり太い。また、上骨体断面示数は80.90(右)(2例)、78.11(左)(3例)となり、骨体上部は扁平なものとそうでないものが混在する。

一方、女性の計測値は、最大長が380mm(左)(1例)、骨体中央周は79.00mm(右)(2例)、82.00mm(左)(2例)で、長厚示数は21.93(左)となり、骨体はやや頑丈である。骨体中央矢状径は25.50mm(右)(2例)、24.50mm(左)(2例)、横径は25.00mm(右)(2例)、28.00mm(左)(2例)で、骨体中央断面示数は102.08(右)(2例)、87.50(左)(2例)となり、左側の粗線や骨体両側面の後方への発達はあまりよくはない。また、上骨体断面示数は79.13(右)(3例)、70.64(左)(3例)となり、左側には骨体上部が扁平なものがみられる。

②脛骨

脛骨は男性3体分、女性3体分の計測ができた。

男性の計測値は、中央最大径が33mm(右)(1例)、30.00mm(左)(2例)、中央横径は21mm(右)(1例)、21.50mm(左)(2例)で、

中央断面示数は63.64(右)(1例)、71.67(左)(2例)となり、扁平脛骨が1例みられるが、あとの2例には扁平性は認められない。骨体周は87mm(右)(1例)、82.50mm(左)(2例)、最小周は76.00mm(左)(2例)で、骨体は太い。

一方、女性の計測値は、中央最大径が25mm(右)(1例)、25.00mm(左)(2例)、中央横径は17mm(右)(1例)、17.00mm(左)(2例)で、中央断面示数は68.00(右)(1例)、68.00(左)(2例)となり、骨体は古墳人としてはやや扁平である。骨体周は67mm(右)(1例)、67.50mm(左)(2例)、最小周は63.50mm(左)(2例)で、骨体はやや太い。

3. 推定身長値

長骨の最大長が計測できたのは女性の左側大腿骨(11-FE-1)のみであるが、現場で最大長を計測できた大腿骨もある。大腿骨最大長から、Pearsonおよび藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、女性では146.75cm(Pearson、左)、146.38cm(藤井、左)となり、低身長である。一方、男性の大腿骨最大長(11-FE-3、右)の推定値は440mmだったが、この推定値からは164.03cm(Pearson、右)、163.58cm(藤井、右)となり、この男性例は高身長である。

考 察

男性頭蓋と四肢骨について、周辺地域の古墳人との検討をおこなってみた。

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

まず頭型を検討してみることにした。表5は男性の脳頭蓋の比較表である。表5-1では熊本県内での比較を、表5-2では近隣の横穴出土人骨との比較をおこなってみた。一般的に古墳人の頭型は中世の長頭型に向かって、中頭型か、長頭型に傾く傾向がみられる。熊本県内の古墳人骨のうち頭型が明らかになっている例は少なく、筆者が調査した古墳人骨でも、中央町四十八塚5号墳、鹿本町津袋大塚東側1号石棺、玉名市小路石棺、助吉古墳、西潤野2号墳ぐらいである。豊岡宮本9-Y-1の頭蓋長幅示数は〔80.21〕となり、短頭型であるが、11-SK-1は71.11となり、長頭型で、両者で頭型がまったく異なっている。古墳人で短頭型は珍しいが、まったくないわけではなく、四十八塚2号人骨の頭蓋長幅示数は81.01、西潤野では(81.97)となり、両者は短頭型で、9-Y-1の示数値はこれに近い。一方、11-SK-1の示数値は助吉の(72.73)に最も近い。同じ形式の横穴出土人骨をみても(表5-2)、福岡県竹並古墳人と広島県八鳥矢内迫古墳人は中頭型で、山口県朝田古墳人も示数値は中頭型を示しているが、計測できない例を含めると示数値以上に長頭型に傾いていた。

表5-1 脳頭蓋計測値(男性、mm)(Table5-1 Comparison of male calvarial measurements and indices)

| | 豊岡宮本 | | 四十八塚 | | 四十八塚 | | 西潤野 | | 津袋 | | 小路 | | 助吉 | |
|-----------------|---------|---------|--------|--------|-------|---------|-----|-------|-----|--------|-----|---------|-----|---|
| | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | |
| | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | |
| | 9-Y-1 | 11-SK-1 | 2号人骨 | 5号人骨 | 6号人骨 | 2号墳 | n | M | n | M | n | M | n | M |
| 1. 頭蓋最大長 | 187 | 180 | 179 | 172 | 170 | (183) | 1 | 181 | 1 | 190 | 1 | 187 | | |
| 8. 頭蓋最大幅 | [150] | 128 | 145 | 135 | - | 150 | | - | 1 | 147 | 1 | (136) | | |
| 17. バジオン・プレグマ高 | 139 | 132 | 135 | 132 | 136 | - | 1 | 140 | 1 | 132 | | - | | |
| 8/1 頭蓋長幅示数 | [80.21] | 71.11 | 81.01 | 78.49 | - | (81.97) | | - | 1 | 77.37 | 1 | (72.73) | | |
| 17/1 頭蓋長高示数 | 74.33 | 73.33 | 75.42 | 76.74 | 80.00 | - | 1 | 77.35 | 1 | 69.47 | | - | | |
| 17/8 頭蓋幅高示数 | [92.67] | 103.13 | 93.10 | 87.78 | - | - | | - | 1 | 89.80 | | - | | |
| 1+8+17/3 頭蓋モズルス | - | 146.67 | 153.00 | 146.33 | - | - | | - | 1 | 156.33 | | - | | |
| 23. 頭蓋水平周 | - | 503 | 525 | 501 | - | (525) | | - | | - | | - | | |
| 24. 横弧長 | - | (290) | 307 | 295 | - | 316 | 1 | 316 | 1 | 298 | | - | | |
| 25. 正中矢状弧長 | 387 | 368 | 374 | 365 | - | - | 1 | 375 | | - | 1 | 389 | | |

表5-2 脳頭蓋計測値(男性、mm)(Table5-2 Comparison of male calvarial measurements and indices)

| | | 豊岡宮本 | | 南ノ前 | | 竹並 | | 朝田 | | 八鳥矢内迫 | | |
|----------|------------|---------|---------|------|----------|--------|-------|--------|--------|---------|----------|----------|
| | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 |
| | | 熊本県 | | 福岡県 | | 福岡県 | | 山口県 | | 山口県 | | 広島県 |
| | | (松下) | | (松下) | | (九州大学) | | (松下・他) | | (松下・他) | | |
| | | 9-Y-1 | 11-SK-1 | n | M | n | M | n | M | 頭蓋IV | 頭蓋V | 頭蓋VII |
| 1. | 頭蓋最大長 | 187 | 180 | 1 | 174 | 7 | 180.0 | 4 | 183.00 | 186 | 186 | 183 |
| 8. | 頭蓋最大幅 | [150] | 128 | 2 | 140.50 | 8 | 141.8 | 2 | 143.00 | [146] | [142] | [146] |
| 17. | バジオン・ブレグマ高 | 139 | 132 | 2 | 131.50 | 5 | 133.0 | 2 | 130.00 | - | 139 | 128 |
| 8/1 | 頭蓋長幅示数 | [80.21] | 71.11 | 1 | (78.16) | 7 | 78.7 | 2 | 76.71 | [78.49] | [76.34] | [79.78] |
| 17/1 | 頭蓋長高示数 | 74.33 | 73.33 | 1 | 74.14 | 4 | 73.7 | 2 | 73.93 | - | 74.73 | 69.95 |
| 17/8 | 頭蓋幅高示数 | [92.67] | 103.13 | 1 | (97.81) | 5 | 94.6 | 1 | 92.25 | - | [97.89] | [87.67] |
| 1+8+17/3 | 頭蓋モズルス | - | 146.67 | 1 | (146.33) | - | - | 1 | 151.6 | - | [155.67] | [152.33] |
| 23. | 頭蓋水平周 | - | 503 | 1 | 500 | 7 | 523.7 | 1 | 525 | - | - | - |
| 24. | 横弧長 | - | (290) | 1 | 303 | 8 | 317.5 | 1 | 306 | - | - | - |
| 25. | 正中矢状弧長 | 387 | 368 | 1 | 349 | 3 | 368.0 | 2 | 359.00 | - | - | 347 |

(2) 顔面頭蓋

表6-1、6-2は男性の顔面頭蓋の比較表である。計測ができた2例は顔面の形態がまったく異なっており、9-Y-1は低・広顔、11-SK-1は高・狭顔である。前者の頬骨弓幅は表6では最大値となり、中顔幅は四十八塚5号人骨、西潤野、津袋、助吉、舞野、竹並、朝田と大差ない。上顔高は八鳥矢内迫よりは大きい、その計測値は小さく、四十八塚5号人骨に比較的近い。コルマンの上顔示数は表6では最小値となり、ウィルヒョウーの上顔示数も八鳥矢内迫頭蓋Vについて小さく、四十八塚5号人骨、津袋に近い。後者の頬骨弓幅は八鳥矢内迫頭蓋IV、頭蓋V、舞野について小さく、中顔幅は9-Y-1と大差ない。上顔高は表6では最大値となり、竹並の平均値を超える。コルマンの上顔示数もウィルヒョウーの上顔示数もともに表6では最大値となり、顔の高径が高いことがわかる。

表6-1 顔面頭蓋(男性、mm、度)(Table 6-1 Comparison of male facial measurements and indices)

| | | 豊岡宮本 | | 四十八塚 | 四十八塚 | 西潤野 | 津袋 | 助吉 | | 舞野 | |
|------------|---------|----------|---------|----------|-------|----------|----------|--------|--------|--------|---------------|
| | | 古墳人 | | 古墳人 | 古墳人 | 古墳人 | 古墳 | 古墳人 | 古墳人 | 古墳人 | |
| | | 熊本県 | | 熊本県 | 熊本県 | 熊本県 | 熊本県 | 熊本県 | 熊本県 | 熊本県 | |
| | | | | (松下) | (松下) | (松下) | (松下・他) | (松下・他) | (松下・他) | (松下・他) | |
| | | 9-Y-1 | 11-SK-1 | 2号人骨 | 4号人骨 | 5号人骨 | 2号墳 | n | M | n | M |
| 40. | 顔長 | 109 | 105 | 104 | - | 98 | - | 1 | 99 | - | - |
| 45. | 頬骨弓幅 | [146] | [136] | [142] | - | - | 141 | - | - | - | 1 [134] |
| 46. | 中顔幅 | [104] | 103 | [102] | 99 | [104] | 105 | 1 | 105 | 1 | [104] |
| 47. | 顔高 | - | - | 118 | - | 111 | (115) | 1 | 115 | - | - |
| 48. | 上顔高 | 64 | 72 | 68 | - | 65 | 68 | 1 | 66 | 1 | 66 |
| 47/45 | 顔示数(K) | - | - | (83.10) | - | - | (81.56) | - | - | - | - |
| 48/45 | 上顔示数(K) | [43.84] | [52.94] | [47.89] | - | - | 48.23 | - | - | - | - |
| 47/46 | 顔示数(V) | - | - | (115.69) | - | (106.73) | (109.52) | 1 | 109.52 | - | - |
| 48/46 | 上顔示数(V) | [61.54] | 69.90 | [66.67] | - | 62.50 | 64.76 | 1 | 62.86 | 1 | [63.46] |
| 40+45+47/3 | 顔面モズルス | - | - | [121.33] | - | - | - | - | - | - | - |
| 50. | 前眼窩間幅 | 24 | 13 | - | - | - | 20 | 1 | 18 | - | 1 16 |
| 44. | 両眼窩間幅 | - | 97 | - | - | - | 103 | 1 | 104 | 1 | 108 |
| 50/44 | 眼窩間示数 | - | 13.40 | - | - | - | 19.42 | 1 | 17.31 | - | - |
| 51. | 眼窩幅(左) | 44(右) | 44 | 44 | 44 | - | 44 | 1 | 46 | 1 | 40 1 43 |
| 52. | 眼窩高(左) | 32(右) | 35 | 33 | 31 | - | 34 | 1 | 33 | 1 | 35 1 35 |
| 52/51 | 眼窩示数(左) | 72.73(右) | 79.55 | 75.00 | 70.45 | - | 77.27 | 1 | 71.74 | 1 | 87.50 1 81.40 |
| 54. | 鼻幅 | 30 | 26 | 28 | 27 | - | 26 | 1 | 26 | 1 | 26 1 24 |
| 55. | 鼻高 | 49 | 53 | 50 | 54 | 49 | 51 | 1 | 49 | 1 | 50 1 52 |
| 54/55 | 鼻示数 | 61.22 | 49.06 | 56.00 | 50.00 | - | 50.98 | 1 | 53.06 | 1 | 52.00 1 46.15 |
| 72. | 全側面角 | 80 | 77 | 78 | - | 80 | 88 | 1 | 82 | - | - |
| 73. | 鼻側面角 | 85 | 82 | 82 | - | 81 | 87 | 1 | 85 | - | - |
| 74. | 齒槽側面角 | 59 | 59 | 64 | - | 74 | 89 | 1 | 70 | - | - |

表6-2 顔面頭蓋(男性、mm、度)(Table 6-2 Comparison of male facial measurements and indices)

| | | 豊岡宮本 | | 南ノ前 | | 竹 並 | | 朝 田 | | 八鳥矢内迫 | | |
|------------|---------|---------|---------|-----|-------|-----|-------|-----|----------|--------|---------|---------|
| | | 古墳人 | 熊本県 | 古墳人 | 福岡県 | 古墳人 | 福岡県 | 古墳人 | 山口県 | 古墳人 | 広島県 | 頭蓋IV |
| | | 9-Y-1 | 11-SK-1 | n | M | n | M | n | M | (松下・他) | | |
| 40. | 顔長 | 109 | 105 | 1 | 102 | - | - | 3 | 93.33 | - | 94 | 97 |
| 45. | 頬骨弓幅 | [146] | [136] | 1 | 141 | 3 | 137.3 | 1 | (140) | [132] | [134] | - |
| 46. | 中顔幅 | [104] | 103 | 1 | 100 | 6 | 105.2 | 3 | 104.67 | - | 107 | [94] |
| 47. | 顔高 | - | - | - | - | 3 | 121.0 | 3 | 118.00 | - | - | - |
| 48. | 上顔高 | 64 | 72 | 1 | 66 | 6 | 69.7 | 5 | 67.60 | - | 62 | 61 |
| 47/45 | 顔示数(K) | - | - | - | - | 2 | 86.4 | 1 | (85.00) | - | - | - |
| 48/45 | 上顔示数(K) | [43.84] | [52.94] | 1 | 46.81 | 3 | 52.2 | 1 | (48.57) | - | [46.27] | - |
| 47/46 | 顔示数(V) | - | - | - | - | 3 | 110.5 | 2 | 115.86 | - | - | - |
| 48/46 | 上顔示数(V) | [61.54] | 69.90 | 1 | 66.00 | 6 | 66.2 | 3 | 66.59 | - | [57.94] | [64.89] |
| 40+45+47/3 | 顔面モズルス | - | - | - | - | - | - | 1 | (118.00) | - | - | - |
| 50. | 前眼窩間幅 | 24 | 13 | 2 | 15.50 | - | - | 5 | 19.60 | 16 | 17 | 18 |
| 44. | 両眼窩幅 | - | 97 | 1 | 100 | - | - | 2 | 106.00 | - | 97 | - |
| 50/44 | 眼窩間示数 | - | 13.40 | 1 | 14.00 | - | - | 2 | 18.88 | - | 17.53 | - |
| 51. | 眼窩幅(左) | - | 44 | 1 | 46 | 7 | 41.7 | 3 | 45.67 | - | 42 | - |
| 52. | 眼窩高(左) | - | 35 | 1 | 32 | 7 | 32.9 | 3 | 36.67 | - | 35 | - |
| 52/51 | 眼窩示数(左) | - | 79.55 | 1 | 69.57 | 7 | 78.8 | 3 | 80.41 | - | 83.33 | - |
| 54. | 鼻幅 | 30 | 26 | 1 | 24 | 5 | 26.0 | 4 | 27.25 | - | 25 | 23 |
| 55. | 鼻高 | 49 | 53 | 1 | 53 | 6 | 48.2 | 5 | 52.40 | - | 48 | 48 |
| 54/55 | 鼻示数 | 61.22 | 49.06 | 1 | 45.28 | 5 | 54.6 | 4 | 51.44 | - | 52.08 | 47.92 |
| 72. | 全側面角 | 80 | 77 | 1 | 82 | 3 | 81.7 | 5 | 87.60 | - | 88 | 90 |
| 73. | 鼻側面角 | 85 | 82 | 1 | 84 | 3 | 87.0 | 5 | 86.60 | - | 89 | 92 |
| 74. | 齒槽側面角 | 59 | 59 | 1 | 75 | 3 | 67.3 | 5 | 69.40 | - | 75 | 80 |

(3) 鼻根部

表7は男性の鼻根部の比較表である。鼻根部も9-Y-1と11-SK-1では著しく異なり、前者は広くて扁平であるが、後者は狭くあまり扁平ではない。9-Y-1の鼻根彎曲示数は四十八塚4号人骨について大きく、11-SK-1は八鳥矢内迫頭蓋IV、西潤野、四十八塚5号人骨、津袋について小さい。また、11-SK-1の前眼窩間幅は表7では最小値で、鼻根部の幅が著しく狭いことがわかる。9-Y-1の前頭突起水平傾斜角は表7では最大値となり、前頭突起の向きは前額方向で、このことが鼻根部の扁平性を一層強めている。

表7 鼻根部(男性、mm、度)(Table 7 Comparison of male nasal root measurements and indices)

| | | 豊岡宮本 | | 四十八塚 | | 四十八塚 | | 西潤野 | | 津 袋 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | |
|---------|-----------|-------|---------|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|--------|-------|-------|--------|-----|-------|
| | | 古墳人 | 熊本県 | 古墳人 | 熊本県 | 古墳人 | 熊本県 | 古墳 | 熊本県 | 古墳人 | 熊本県 | 福岡県 | (松下) | 古墳人 | 山口県 | (松下・他) | 古墳人 | 広島県 |
| | | 9-Y-1 | 11-SK-1 | 2号人骨 | 4号人骨 | 5号人骨 | 2号墳 | n | M | n | M | n | M | n | M | 頭蓋IV | 頭蓋V | 頭蓋VII |
| 50. | 前眼窩間幅 | 24 | 13 | 18 | 18 | 18 | 20 | 1 | 18 | 2 | 15.50 | 5 | 19.60 | 16 | 17 | 18 | | |
| 50A. | 鼻根横弧長 | 26 | 15 | 20 | 19 | 21 | 24 | 1 | 21 | 2 | 17.00 | 5 | 22.00 | 22 | 19 | 21 | | |
| 50/50A | 鼻根彎曲示数 | 92.31 | 86.67 | 90.00 | 94.74 | 85.71 | 83.33 | 1 | 85.71 | 2 | 91.00 | 5 | 88.98 | 72.73 | 89.47 | 85.71 | | |
| 57. | 鼻骨最小幅 | 12 | 7 | 9 | - | 9 | 9 | 1 | 8 | 2 | 5.00 | 5 | 8.80 | 9 | 8 | 8 | | |
| 44. | 両眼窩幅 | - | 97 | - | 100 | 97 | 103 | 1 | 104 | 1 | 100 | 2 | 106.00 | - | 97 | - | | |
| 50/44 | 眼窩間示数 | - | 13.40 | - | 18.00 | 18.56 | 19.42 | 1 | 17.31 | 1 | 14.00 | 2 | 18.88 | - | 17.53 | - | | |
| a. | 前頭突起上幅(右) | 13 | 8 | 9 | 11 | 12 | 11 | 1 | 11 | 2 | 13.00 | 5 | 9.60 | 7 | 9 | 11 | | |
| | (左) | 13 | 9 | 10 | - | 11 | 12 | 1 | 11 | 2 | 11.00 | 5 | 9.60 | - | 10 | 10 | | |
| b. | 前頭突起水平傾斜角 | 147 | 98 | 85 | - | 90 | 79 | 1 | 104 | 1 | 95 | 4 | 113.75 | - | 67 | - | | |
| c. | G-N投影距離 | 4 | 1 | 2 | - | 2 | 3 | 1 | 4 | 1 | 2 | 1 | 2 | - | 2 | - | | |
| d. | 鼻根角 | 134 | 148 | 121 | - | 133 | 143 | - | - | 1 | -137 | 4 | 144.75 | - | 150 | - | | |
| e. | G-R距離 | 28 | 25 | 30 | - | 27 | 30 | - | - | 1 | 28 | 4 | 28.75 | - | 30 | - | | |
| f. | 垂線高 | 5 | 3 | 8 | - | 5 | 5 | - | - | 1 | 5 | 4 | 3.75 | - | 4 | - | | |
| f/e | 鼻根陥凹示数 | 17.86 | 12.00 | 26.67 | - | 18.52 | 16.67 | - | - | 1 | 17.86 | 4 | 13.08 | - | 13.33 | - | | |
| 77. | 鼻頬骨角 | - | 153 | - | - | - | - | - | - | 1 | 147 | - | - | - | - | - | | |
| F a | f mo間距離 | - | 93 | - | - | - | - | - | - | 1 | 99 | - | - | - | - | - | | |
| F h | 垂線高 | - | 11 | - | - | - | - | - | - | 1 | 14 | - | - | - | - | - | | |
| F h/F a | 顔面扁平示数 | - | 11.83 | - | - | - | - | - | - | 1 | 14.14 | - | - | - | - | - | | |

2. 四肢骨

(1) 上肢骨

①上腕骨

表8は男性上腕骨の比較表である。中央周で骨体の太さを比較してみると、本例の中央周は、南の前、四十八塚よりは大きいが、小路、助吉、福原、朝田、清水よりも小さく、西潤野に一致し、津袋にも近く、骨体はあまり太くない。骨体断面示数は福原について大きく、骨体には扁平性はみられない。

表9は女性上腕骨の比較表である。女性例は保存状態が悪いものが多く、比較資料は少ない。中央周は表9では最大値となり、骨体は太い。骨体断面示数は朝田よりはわずかに小さいが、南ノ前よりは大きく、骨体の扁平性は弱い。

表8 上腕骨計測値(男性、右、mm)(Table8 Comparison of measurements and indices of male right humeri)

| | 豊岡宮本 | | 四十八塚 | | 清水 | | 西潤野 | | 津袋 | | 福原 | | 小路 | | 助吉 | | 南の前 | | 朝田 | | |
|------------|--------|---|-----------|---|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|------|-------|--------|-------|------|-------|--------|-------|---|
| | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | |
| | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 福岡県 | | 山口県 | | |
| | (松下・他) | | (内藤・他) | | (松下・他) | | (松下・他) | | (松下・他) | | (松下・他) | | (松下) | | (松下・他) | | (松下) | | (松下・他) | | |
| | 11+U-3 | | n | M | n | M | 2号墳 | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M |
| 5. 中央最大径 | 21 | 4 | 21.00 (左) | 1 | 23 | 22 | 1 | 22 | 1 | 22 | 1 | 22 | 1 | 25 | 1 | 23 | 5 | 21.00 | 3 | 23.00 | |
| 6. 中央最小径 | 17 | 4 | 16.50 (左) | 1 | 17 | 16 | 1 | 17 | 1 | 19 | 1 | 19 | 1 | 19 | 1 | 17 | 5 | 15.80 | 3 | 17.67 | |
| 7. 骨体最小周 | 61 | 4 | 60.00 (左) | 1 | 61 | 59 | 1 | 60 | 1 | 63 | 1 | 64 | 1 | 64 | 1 | 64 | 3 | 65.33 | 1 | 62 | |
| 7(a). 中央周 | 64 | 4 | 62.25 (左) | 1 | 67 | 64 | 1 | 63 | 1 | 69 | 1 | 72 | 1 | 70 | 5 | 61.40 | 3 | 68.00 | | | |
| 6/5 骨体断面示数 | 80.95 | 4 | 78.61 (左) | 1 | 73.91 | 72.73 | 1 | 77.27 | 1 | 83.36 | 1 | 76.00 | 1 | 73.91 | 5 | 75.04 | 3 | 76.84 | | | |

表9 上腕骨計測値(女性、右、mm)(Table 9 Comparison of measurements and indices of female right humeri)

| | 豊岡宮本 | | 小路 | | 南ノ前 | | 朝田 | |
|------------|-----------|--|------|----|------|-------|--------|-----------|
| | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | |
| | 熊本県 | | 熊本県 | | 福岡県 | | 山口県 | |
| | (松下) | | (松下) | | (松下) | | (松下・他) | |
| | 11+U-2 | | n | M | n | M | n | M |
| 5. 中央最大径 | 20(左) | | 1 | 19 | 1 | 19 | 2 | 19.50 (左) |
| 6. 中央最小径 | 15(左) | | 1 | 14 | 1 | 13 | 2 | 15.00 (左) |
| 7. 骨体最小周 | 55(左) | | 1 | 51 | 1 | 51 | 2 | 53.00 (左) |
| 7(a). 中央周 | 60(左) | | 1 | 56 | 1 | 54 | 2 | 57.50 (左) |
| 6/5 骨体断面示数 | 75.00 (左) | | - | - | 1 | 68.42 | 2 | 76.84 (左) |

(2) 下肢骨

①大腿骨

表10は男性大腿骨の比較表である。骨体中央周で骨体の大きさを検討してみると、本例は3例の平均値が91.00mmと、90mmを超える。この平均値は清水、西潤野よりは小さいが、四十八塚、小路、朝田、津袋よりも大きく、骨体は明らかに太い。骨体中央断面示数は四十八塚よりは小さいが、西潤野、清水、小路、朝田よりは大きく、津袋、助吉と大差なく、骨体両側面の後方への発達は良好である。上骨体断面示数の平均値は西潤野、助吉、小路よりは大きいが、津袋、朝田、四十八塚よりは小さく、骨体上部は扁平傾向を示している。

表11は女性大腿骨の比較表である。最大長は南ノ前、津袋、朝田よりも小さく、長さは短い。骨体中央周の平均値は、清水よりは小さいが、小路、八鳥矢内迫、古城、福原、朝田よりは大きく、南ノ前に近く、骨体は太い方である。骨体断面示数は津袋、古城、南ノ前よりは小さいが、小路、福原、朝田、八鳥矢内迫よりは大きく、骨体の後方へやや発達している。上骨体断面示数は八鳥矢内迫、小路、南ノ前、福原、清水よりは大きいが、古城よりは小さく、朝田と大差なく、骨体上部は扁平である。

表10 大腿骨計測値(男性、右、mm)(Table10 Comparison of measurements and indices of male right femora)

| | 豊岡宮本 | | 豊岡宮本 | | 四十八塚 | | 清水 | | 西潤野 | | 津袋 | | 小路 | | 助吉 | | 朝田 | |
|--------------|--------|--------|--------|---|------------|---|------------|---|-----------|-----------|-----|--------|-----|-------|-----|--------|-----|------------|
| | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | |
| | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | |
| | 3FE-2 | 9-Y-1 | 11FE-3 | n | M | n | M | n | M | 2号墳 | n | M | n | M | n | M | n | M |
| 1 最大長 | - | - | - | - | - | 1 | 389 (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | 410.00 |
| 6. 骨体中央矢状径 | 31 | 31 | 29 | 3 | 30.33 (左) | 3 | 29.00 (左) | 1 | 29 (左) | 27 (左) | 1 | 27 | 1 | 26 | 1 | 30 | 6 | 27.17 (左) |
| 7. 骨体中央横径 | 30 | 28 | 26 | 3 | 28.00 (左) | 3 | 25.00 (左) | 1 | 32 (左) | 33 (左) | 1 | 25 | 1 | 28 | 1 | 28 | 6 | 26.67 (左) |
| 8. 骨体中央周 | 95 | 92 | 86 | 3 | 91.00 (左) | 3 | 86.00 (左) | 1 | 95 (左) | 93 (左) | 1 | 81 | 1 | 86 | 1 | 91 | 6 | 85.17 (左) |
| 9. 骨体上横径 | 33 | 32 | 31 | 3 | 32.00 (左) | 2 | 29.00 (左) | 1 | 35 (左) | 39 (左) | 1 | 27 | 1 | 32 | 1 | 34 | 6 | 30.17 (左) |
| 10. 骨体上矢状径 | 25 | 27 | 23 | 3 | 25.00 (左) | 2 | 23.50 (左) | - | - | 23 (左) | 1 | 24 | 1 | 24 | 1 | 25 | 6 | 24.50 (左) |
| 6/7 骨体中央断面示数 | 103.33 | 110.71 | 111.54 | 3 | 108.53 (左) | 3 | 116.00 (左) | 1 | 90.63 (左) | 81.82 (左) | 1 | 108.00 | 1 | 92.86 | 1 | 107.14 | 6 | 102.03 (左) |
| 10/9 上骨体断面示数 | 75.76 | 84.38 | 74.19 | 3 | 78.11 (左) | 2 | 81.19 (左) | - | - | 58.97 (左) | 1 | 88.89 | 1 | 75.00 | 1 | 73.53 | 6 | 81.29 (左) |

表11 大腿骨(女性、右、mm)(Table11 Comparison of measurements and indices female right femora)

| | 豊岡宮本 | | 豊岡宮本 | | 津袋 | | 湯の口 | | 古城 | | 福原 | | 清水 | | 小路 | | 南ノ前 | | 朝田 | | 八鳥矢内迫 | | | |
|--------------|--------|--------|--------|---|-----------|---|--------|---|-------|--------|-------|-------|-------|------------|-------|-------|-------|--------|------------|-------|-------|--------|-------|--------|
| | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | | |
| | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 福岡県 | | 山口県 | | 広島県 | | | |
| | 11FE-1 | 11FE-2 | 11FE-4 | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | |
| 1. 最大長 | 380 | - | - | 1 | 380 (左) | 1 | 392 | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 416 | 2 | 386.00 (左) | - | - | - | - | |
| 6. 骨体中央矢状径 | 26 | - | 25 | 2 | 25.50 | 1 | 26 | - | 1 | 25 | 1 | 24 | 3 | 26.50 (左) | 1 | 21 | 1 | 26 | 7 | 24.00 | 2 | 24.00 | 2 | 24.00 |
| 7. 骨体中央横径 | 26 | - | 24 | 2 | 25.00 | 1 | 24 | - | 1 | 24 | 1 | 26 | 3 | 26.00 (左) | 1 | 25 | 1 | 25 | 7 | 25.29 | 2 | 24.00 | 2 | 24.00 |
| 8. 骨体中央周 | 82 | - | 76 | 2 | 79.00 | 1 | 78 | - | 1 | 77 | 1 | 77 | 3 | 81.00 (左) | 1 | 72 | 1 | 80 | 7 | 77.43 | 2 | 75.00 | 2 | 75.00 |
| 9. 骨体上横径 | 31 | 26 | 28 | 3 | 28.33 | 1 | 28 | 1 | 28 | 1 | 26 | 1 | 30 | 2 | 29.00 | 1 | 27 | 2 | 29.50 | 4 | 28.75 | 2 | 28.50 | |
| 10. 骨体上矢状径 | 23 | 22 | 22 | 3 | 22.33 | 1 | 22 | 1 | 22 | 1 | 22 | 2 | 22.50 | 1 | 19 | 2 | 21.50 | 4 | 22.75 | 2 | 20.00 | 2 | 20.00 | |
| 8/2 長厚示数 | 21.93 | - | - | 1 | 21.93 (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 19.32 | 1 | 20.52 (左) | - | - | - | - | |
| 6/7 骨体中央断面示数 | 100.00 | - | 104.17 | 2 | 102.08 | 1 | 108.33 | - | 1 | 104.17 | 1 | 92.31 | 3 | 100.10 (左) | 1 | 84.00 | 1 | 104.00 | 7 | 95.47 | 2 | 100.35 | 2 | 100.35 |
| 10/9 上骨体断面示数 | 74.19 | 84.62 | 78.57 | 3 | 79.13 | 1 | 78.57 | 1 | 78.57 | 1 | 84.62 | 1 | 73.33 | 2 | 77.50 | 1 | 70.37 | 2 | 72.93 | 4 | 79.15 | 2 | 70.20 | |

②脛骨

表12は男性脛骨の比較表である。骨体周で骨体の大きさを比較してみると、助吉、小路、清水よりは小さいが、四十八塚、津袋、南ノ前、八鳥矢内迫よりは大きく、最小周は小路について大きく、骨体は太い方である。中央断面示数は助吉、四十八塚について大きく、骨体は扁平ではない。

表13は女性脛骨の比較表である。骨体周は清水について小さい。最小周は小路、清水よりは大きいが、古城、朝田、津袋よりは小さく、南ノ前と大差なく、女性骨体は細い。中央断面示数は表13では最小で、古墳人としては扁平である。

表12 脛骨(男性、右、mm)(Table12 Comparison of measurements and indices male right tibiae)

| | 豊岡宮本 | | 豊岡宮本 | | 四十八塚 | | 清水 | | 津袋 | | 小路 | | 助吉 | | 南ノ前 | | 八鳥矢内迫 | |
|--------------------|-------|--------|------|-----------|------|-------|-----|-------|-----|--------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-------|-----------|
| | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | |
| | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 福岡県 | | 広島県 | |
| | 9 Y-1 | 11TB-4 | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M |
| 8 中央最大径 | 30 | 30 | 2 | 30.00 (左) | 3 | 27.67 | 2 | 32.00 | 1 | 29 | 1 | 30 | 1 | 32 | 4 | 28.50 | 2 | 29.00 (左) |
| 8 a. 栄養孔位最大径 | 35 | 33 | 2 | 34.00 (左) | 3 | 30.67 | - | - | - | - | - | - | 1 | 37 | 2 | 28.50 | 2 | 34.00 |
| 9. 中央横径 | 22 | 21 | 2 | 21.50 (左) | 3 | 20.00 | 2 | 21.00 | 1 | 19 | 1 | 20 | 1 | 24 | 4 | 20.00 | 2 | 19.50 (左) |
| 9 a. 栄養孔位横径 | 25 | 23 | 2 | 24.00 (左) | 3 | 20.67 | - | - | - | - | 1 | 24 | 1 | 24 | 2 | 20.50 | 2 | 23.50 |
| 10. 骨体周 | 85 | 80 | 2 | 82.50 (左) | 3 | 76.00 | 2 | 83.50 | 1 | 76 | 1 | 85 | 1 | 86 | 4 | 76.75 | 2 | 78.00 (左) |
| 10 a. 栄養孔位周 | 98 | 92 | 2 | 95.00 (左) | 3 | 81.67 | - | - | - | - | - | - | 1 | 97 | 2 | 77.00 | 2 | 90.00 |
| 10 b. 最小周 | 78 | 74 | 2 | 76.00 (左) | 3 | 68.67 | - | - | 1 | 68 (左) | 1 | 80 | - | - | 4 | 70.25 | 1 | 74 (左) |
| 9/8 中央断面示数 | 73.33 | 70.00 | 2 | 71.67 (左) | 3 | 72.72 | 2 | 65.69 | 1 | 65.52 | 1 | 66.67 | 1 | 75.00 | 4 | 70.18 | 2 | 67.27 (左) |
| 9 a / 8 a 栄養孔位断面示数 | 71.43 | 69.70 | 2 | 70.56 (左) | 3 | 67.57 | - | - | - | - | - | - | 1 | 64.86 | 2 | 72.23 | 2 | 69.28 |

表13 脛骨(女性、右、mm)(Table13 Comparison of measurements and indices female right tibiae)

| | 豊岡宮本 | | 豊岡宮本 | | 津袋 | | 古城 | | 小路 | | 清水 | | 南ノ前 | | 朝田 | | 八鳥矢内迫 | |
|--------------------|--------|--------|------|-----------|-----|-------|-----|-----------|-----|-------|-----|-------|-----|-----------|-----|-------|-------|-----------|
| | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | |
| | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 福岡県 | | 山口県 | | 広島県 | |
| | 11TB-1 | 11TB-2 | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M |
| 8. 中央最大径 | 25 | 25 | 2 | 25.00 (左) | 1 | 25 | 1 | 25 (左) | 1 | 24 | 1 | 24 | 2 | 24.00 (左) | 6 | 26.00 | 1 | 25 (左) |
| 8 a. 栄養孔位最大径 | 30 | 26 | 2 | 28.00 (左) | 1 | 29 | 1 | 30 (左) | 1 | 27 | - | - | 2 | 26.00 (左) | 7 | 29.57 | 1 | 30 (左) |
| 9. 中央横径 | 17 | 17 | 2 | 17.00 (左) | 1 | 19 | 1 | 18 (左) | 1 | 18 | 1 | 18 | 1 | 18 | 7 | 19.14 | 1 | 19 (左) |
| 9 a. 栄養孔位横径 | 18 | 19 | 2 | 18.50 (左) | 1 | 21 | 1 | 21 (左) | 1 | 18 | - | - | 2 | 20.00 (左) | 7 | 21.43 | 1 | 19 (左) |
| 10. 骨体周 | 68 | 67 | 2 | 67.50 (左) | 1 | 71 | 1 | 71 (左) | 1 | 68 | 1 | 67 | 2 | 69.00 (左) | 6 | 71.33 | 1 | 70 (左) |
| 10 a. 栄養孔位周 | 80 | 74 | 2 | 77.00 (左) | 1 | 81 | 1 | 80 (左) | 1 | 73 | - | - | 2 | 74.50 (左) | 6 | 79.17 | 1 | 77 (左) |
| 10 b. 最小周 | 63 | 64 | 2 | 63.50 (左) | 1 | 64 | 1 | 65 | 1 | 60 | 1 | 61 | 2 | 63.00 (左) | 4 | 65.00 | - | - |
| 9/8. 中央断面示数 | 68.00 | 68.00 | 2 | 68.00 (左) | 1 | 76.00 | 1 | 72.00 (左) | 1 | 75.00 | 1 | 75.00 | 2 | 79.17 (左) | 6 | 75.19 | 1 | 76.00 (左) |
| 9 a / 8 a 栄養孔位断面示数 | 60.00 | 73.08 | 2 | 66.54 (左) | 1 | 72.41 | 1 | 70.00 (左) | 1 | 70.37 | - | - | 2 | 77.19 (左) | 7 | 72.61 | 1 | 63.33 (左) |

3. 推定身長値

男性は現場で大腿骨の最大長が計測できた1例しか算出できない。この推定値は(164.03cm)となり、かなりの高身長値である。近県でこの値に匹敵する例を探してみたところ表14に示しているように宮崎市の柿木原古墳人が165.56cmで、本例にもっとも近い。ちなみにこの例は地下式横穴墓の単体埋葬例である。一方、女性の推定身長値の比較を表15に示した。本例の身長値は146.75cmで、小路、朝田よりも小さく、また瀬戸口よりもわずかに低く、低身長値である。

表14 推定身長値(男性、右、cm) (Table14 Comparison of estimated male statures)

| | 豊岡宮本 | | 瀬戸口 | | 竹並 | | 汐汲 | | 朝田 | | 柿木原 | |
|-----------|---------|----------|--------|----|--------|--------|--------|--------|--------|----------|--------|---|
| | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | |
| | 熊本県 | | 熊本県 | | 福岡県 | | 山口県 | | 山口県 | | 宮崎県 | |
| | (松下・他) | | (九州大学) | | (松下・他) | | (松下・他) | | (松下・他) | | (松下・他) | |
| | 11-FE-3 | 49b-FE-1 | n | M | n | M | n | M | n | M | n | M |
| Pearsonの式 | 上腕骨 | - | - | - | 1 | 153.41 | 1 | 157.17 | 1 | (161.51) | - | - |
| | 橈骨 | - | - | - | 1 | 159.85 | - | - | - | - | - | - |
| | 大腿骨 | (164.03) | 160.27 | 19 | 160.8 | 2 | 159.51 | 2 | 158.39 | 1 | 165.56 | - |
| | 脛骨 | - | - | - | - | 1 | 160.64 | - | - | 1 | 166.81 | - |
| 藤井の式 | 上腕骨 | - | - | - | 1 | 153.04 | 1 | 156.66 | 1 | (160.85) | - | - |
| | 橈骨 | - | - | - | 1 | 157.98 | - | - | - | - | - | - |
| | 大腿骨 | (163.58) | 158.56 | - | - | 2 | 157.65 | 2 | 156.18 | 1 | 165.56 | - |
| | 脛骨 | - | - | - | - | 1 | 156.50 | - | - | 1 | 165.64 | - |

表15 推定身長値(女性、右、cm) (Table15 Comparison of estimated female statures)

| | 豊岡宮本 | | 瀬戸口 | | 小路 | | 朝田 | | |
|-----------|------------|----------|--------|---|--------|---|--------|---|---|
| | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | 古墳人 | | |
| | 熊本県 | | 熊本県 | | 熊本県 | | 山口県 | | |
| | (松下・他) | | (松下) | | (松下) | | (松下・他) | | |
| | 11(右)F E-2 | 49b-FE-2 | n | M | n | M | n | M | |
| Pearsonの式 | 上腕骨 | - | - | 1 | 146.11 | 1 | 144.18 | - | - |
| | 橈骨 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| | 大腿骨 | 146.75 | 147.70 | 1 | 149.87 | 3 | 148.31 | - | - |
| | 脛骨 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 藤井の式 | 上腕骨 | - | - | 1 | 145.8 | 1 | 144.48 | - | - |
| | 橈骨 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| | 大腿骨 | 146.38 | 148.40 | 1 | 150.11 | 3 | 148.14 | - | - |
| | 脛骨 | - | - | - | - | - | - | - | - |

要 約

熊本県菊池郡台志町大字豊岡312-2にある豊岡宮本横穴群の発掘調査が2004年(平成16年)におこなわれ、横穴から人骨が検出された。人骨の保存状態は悪かったが、なかには観察や計測に耐えられるものが存在し、以下の興味ある所見を得ることができた。

1. 今回の調査で横穴は合計12基が検出されたが、人骨が残存していたのは2号、3号、4号、5号、8号、9号、10号、11号、12号墓の8基である。
2. 埋葬状態を保ったものはまったく存在しておらず、人骨はすべて散乱状態で出土した。
3. 検出された人骨は合計で31体分であるが、なかには遊離歯冠か、骨片しか残っていなかったものもある。もっとも体数が多かったのは11号墓で、9体分の可能性がある。性別を推測することができた骨は少なく、男性骨は5体、女性骨は9体、幼児骨が2体で、残りの15体は性別不明である。
4. 本人骨の所属時期は、考古学的所見から、古墳時代後期(7世紀)と推測されている。
5. 頭型や顔面の形態を知ることができたのは2体の男性のみである。両者はまったく対照的な形態をしており、1体は短頭型(頭蓋長幅示数 [80.21])で、もう1体は長頭型(頭蓋長幅示数71.11)であり、しかも前者は、低・広顔で鼻根部が著しく扁平であるが、後者は高・狭顔で、鼻根部は狭く、あまり扁平ではない。しかし両者には共通して、かなり強い歯槽性突顎がみられる。
7. 上腕骨は、男性ではあまり大きいものではないが、女性骨体は大きい。大腿骨は、男性では骨体がかかなり太いが、女性は細く、男女とも骨体両側面の後方への発達と比較的良好で、骨体上部には扁平性がみられる。脛骨は男性では骨体大きい、女性は細く、また、男女ともに扁平性が認められるものが存在する。
8. 大腿骨最大長からの推定身長値は、男性が164.03cm(Pearson式、右)(1体)で、高身長であるが、女性は146.75cm(Pearson式)(1体)となり、低身長である。
10. 11号墓からもう1体頭蓋(11-SK-4)が出土しており、この頭蓋の鼻根部の形態が11-SK-1に酷似することから、両者の間には血縁関係が存在したと思われる。
11. 横穴から検出される人骨には埋葬状態を保った人骨がみられないということと、保存状態が著しく悪いという特徴がみられるが、本例も埋葬状態を保った人骨がまったく存在しなかった。すなわち、最後に埋葬された被葬者の人骨を特定できないのである。しかし、わずか2例ではあるが、頭型と顔面の形態を明らかにすることができるといって保存良好な人骨が残存していた。しかも大腿骨最大長が計測できるものもあり、身長値を算出することもできた。2例の頭蓋は頭型も顔面の形態も全く対照的であり、1例(9-Y-1)は、短頭型、低・広顔で、扁平な鼻根部であるが、もう1体(11-SK-1)は長頭型、高・狭顔で、鼻根部は狭く、扁平ではなかった。両個体に共通していたのはともに強い歯槽性突顎が認められることであった。観察や計測ができる頭蓋があまりにも少ないので、どちらの特徴が本横穴群に埋葬された被葬者集団の特徴なのかを推測することもできないが、人骨の人類学的研究から、形質的には異なる特徴をもつ集団が豊岡宮本横穴群を営んでいたことは確実であろう。

謝 辞

《摺筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県台志町教育委員会の皆様方に感謝致します。》

参考文献

1. 九州大学医学部解剖学第二講座、1988：日本民族・文化の生成、2、九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成。六興出版、東京。
2. Martin-Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fisher Verlag, Stuttgart：429-597.
3. 松下孝幸、1982：山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨。朝田墳墓群Ⅴ(山口県埋蔵文化財調査報告64)：179-206.
4. 松下孝幸・他、1983：山口県山口市朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨－総括篇－。朝田墳墓群Ⅵ(山口県埋蔵文化財調査報告69)：219-242.
5. 松下孝幸・他、1985a：熊本県益城町福原横穴墓群出土の古墳時代人骨。福原横穴墓群(熊本県文化財調査報告第77集)：29-42.
6. 松下孝幸、1985b：玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨。滑石小路箱式石棺・本堂山遺跡(玉名市文化財調査報告第6集)：32-48,57-61.
7. 松下孝幸・他、1985c：熊本市古城横穴墓群出土の古墳時代人骨。古城横穴墓群(熊本県文化財調査報告第74集)：129-146.
8. 松下孝幸・他、1986a：熊本県鹿本町津袋大塚東側1号石棺出土の古墳時代人骨。津袋大塚東側1号石棺出土人骨研究報告書(鹿本町文化財調査研究報告第2集)：5-33.
9. 松下孝幸・他、1986b：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(1)(山鹿市立博物館調査報告書第5集)：111-122.
10. 松下孝幸・他、1988：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群(Ⅱ)菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(3)(山鹿市立博物館調査報告書第8集)：53-63.
11. 松下孝幸・他、1989a：熊本県七城町瀬戸口横穴墓出土の古墳時代人骨。北上原古墳・瀬戸口横穴墓群(熊本県文化財調査報告第104集)：97-107.
12. 松下孝幸・他、1989b：熊本県下益城郡中央町四十八塚5号墳出土の古墳時代人骨。堅志他城跡・四十八塚古墳(熊本県下益城郡中央町文化財調査報告第1集)：77-114.
13. 松下孝幸・他、1989c：熊本県山鹿市舞野遺跡出土の古墳時代人骨。錢亀塚古墳ほか(菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(4)(山鹿市立博物館調査報告書第9集)：71-82.
14. 松下孝幸・他、1990：広島県西城町八鳥矢内迫横穴墓群出土の古墳時代人骨。西城町教育委員会文化財報告書第2集：33-65.
15. 松下孝幸・他、1992：熊本県宇土市西潤野2号墳出土の古墳時代人骨。立岡古墳群(宇土市埋蔵文化財調査報告書第19集)：71-84.
16. 松下孝幸・他、1994：北九州市浦山古墳出土の人骨。南方浦山古墳(北九州市文化財調査報告書第58集)：13-17.
17. 松下孝幸、1997：熊本市五丁中原遺跡群第1次調査区3号墳周溝内墓壙出土の古墳時代人骨。五丁中原遺跡(五丁中原遺跡第1次調査区発掘調査概要報告書)：25-26.
18. 松下孝幸、1997：福岡県犀川町吉川平原古墳出土の古墳時代・近世人骨。吉川平原古墳群(犀川町文化財調査報告書第5集)：82-98.
19. 松下孝幸、2000：福岡県岡垣町南ノ前墳墓群出土の古墳時代人骨。南ノ前古墳群(岡垣町文化財報告書第18集)：1-24.
20. 松下孝幸、2004：「自然人類学」『環境考古学ハンドブック』：444-454. 朝倉書店
21. 松下孝幸、2004：熊本県鹿央町広諏訪原遺跡出土の古墳人骨。鹿央町文化財報告書広諏訪原遺跡(町民テニスコート新設工事及び農村総合整備事業農道7号工事に伴う埋蔵文化財調査報告書)：27-34.
22. 内藤芳篤・他、1980：清水1号古墳出土の人骨。清水古墳・野寺遺跡・林源衛門墓(熊本県文化財調査報告書第41集)：22-28.
23. 分部哲秋・他、1991：熊本県菊鹿町灰塚古墳出土の人骨。灰塚古墳(県営畑地帯総合土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査)(熊本県文化財調査報告第114集)：49-59.

表16 脳頭蓋(mm)(Calvaria)

| | | 豊岡宮本 | | 豊岡宮本 | | | | | 豊岡宮本 |
|----------|------------|---------|---------|------|----------|---------|---|---------|---------|
| | | 9-Y-1 | 11-SK-1 | 平均値 | | Min. | - | Max. | 11-SK-4 |
| | | 男性 | 男性 | n | M | | | | |
| 1. | 頭蓋最大長 | 187 | 180 | 2 | 183.50 | 180 | - | 187 | - |
| 8. | 頭蓋最大幅 | [150] | 128 | 2 | [139.00] | 128 | - | [150] | - |
| 17. | バジオン・ブレグマ高 | 139 | 132 | 2 | 135.50 | 132 | - | 139 | - |
| 8/1 | 頭蓋長幅示数 | [80.21] | 71.11 | 2 | [75.66] | 71.11 | - | [80.21] | - |
| 17/1 | 頭蓋長高示数 | 74.33 | 73.33 | 2 | 73.83 | 73.33 | - | 74.33 | - |
| 17/8 | 頭蓋幅高示数 | [92.67] | 103.13 | 2 | [97.90] | [92.67] | - | 103.13 | - |
| 1+8+17/3 | 頭蓋モズルス | - | 146.67 | 1 | 146.67 | | | | - |
| 5. | 頭蓋底長 | 104 | 99 | 2 | 101.50 | 99 | - | 104 | - |
| 9. | 最小前頭幅 | - | 79 | 1 | 79 | | | | - |
| 10. | 最大前頭幅 | - | - | | - | | | | - |
| 11. | 両耳幅 | 133 | - | 1 | 133 | | | | - |
| 12. | 最大後頭幅 | 111 | 112 | 2 | 111.50 | 111 | - | 112 | - |
| 13. | 乳突幅 | - | - | | - | | | | - |
| 7. | 大後頭孔長 | 34 | 34 | 2 | 34.00 | 34 | - | 34 | - |
| 16. | 大後頭孔幅 | 28 | - | 1 | 28 | | | | - |
| 16/7 | 大後頭示数 | 82.35 | - | 1 | 82.35 | | | | - |
| 23. | 頭蓋水平周 | - | 503 | 1 | 503 | | | | - |
| 24. | 横弧長 | - | (290) | 1 | (290) | | | | - |
| 25. | 正中矢状弧長 | 387 | 368 | 2 | 377.50 | 368 | - | 387 | - |
| 26. | 正中矢状前頭弧長 | 119 | 118 | 2 | 118.50 | 118 | - | 119 | 121 |
| 27. | 正中矢状頭頂弧長 | 133 | 128 | 2 | 130.50 | 128 | - | 133 | - |
| 28. | 正中矢状後頭弧長 | 135 | 122 | 2 | 128.50 | 122 | - | 135 | - |
| 29. | 正中矢状前頭弦長 | 105 | 107 | 2 | 106.00 | 105 | - | 107 | 107 |
| 30. | 正中矢状頭頂弦長 | 119 | 116 | 2 | 117.50 | 116 | - | 119 | - |
| 31. | 正中矢状後頭弦長 | 109 | 100 | 2 | 104.50 | 100 | - | 109 | - |
| 29/26 | 矢状前頭示数 | 88.24 | 90.68 | 2 | 89.46 | 88.24 | - | 90.68 | 88.43 |
| 30/27 | 矢状頭頂示数 | 89.47 | 90.63 | 2 | 90.05 | 89.47 | - | 90.63 | - |
| 31/28 | 矢状後頭示数 | 80.74 | 81.97 | 2 | 81.35 | 80.74 | - | 81.97 | - |

表17 顔面頭蓋(mm、度) (Facial skeleton)

| | | 豊岡宮本 | | 豊岡宮本 | | | | 豊岡宮本 | |
|------------|---------|---------|---------|------|----------|---------|---|---------|---------------|
| | | 9-Y-1 | 11-SK-1 | 平均値 | | Min | - | Max. | 11-SK-4 女性 |
| | | 男性 | 男性 | n | M | | | | |
| 40. | 顔長 | 109 | 105 | 2 | 107.00 | 105 | - | 109 | - |
| 41. | 側顔長 | - | 72 | 1 | 72 | | | | - |
| 42. | 下顔長 | - | - | | | | | | - |
| 43. | 上顔幅 | - | 100 | 1 | 100 | | | | 100 |
| 45. | 頬骨弓幅 | [146] | [136] | 2 | [141.00] | [136] | - | [146] | - |
| 46. | 中顔幅 | [104] | 103 | 2 | [103.50] | 103 | - | [104] | - |
| 47. | 顔高 | - | - | | | | | | - |
| 48. | 上顔高 | 64 | 72 | 2 | 68 | 64 | - | 72 | - |
| 47/45 | 顔示数(K) | - | - | | | | | | - |
| 48/45 | 上顔示数(K) | [43.84] | [52.94] | 2 | [48.39] | [43.84] | - | [52.94] | - |
| 47/46 | 顔示数(V) | - | - | | | | | | - |
| 48/46 | 上顔示数(V) | [61.54] | 69.90 | 2 | [65.72] | [61.54] | - | 69.90 | - |
| 40+45+47/3 | 顔面モズルス | - | - | | | | | | - |
| 50. | 前眼窩間幅 | 24 | 13 | 2 | 18.50 | 13 | - | 24 | 15 |
| 44. | 両眼窩幅 | - | 97 | 1 | 97 | | | | - |
| 50/44 | 眼窩間示数 | - | 13.40 | 1 | 13.40 | | | | - |
| 51. | 眼窩幅(右) | 44 | 45 | 2 | 44.50 | 44 | - | 45 | 41 |
| | (左) | - | 44 | 1 | 44 | | | | - |
| 52. | 眼窩高(右) | 32 | 35 | 2 | 33.50 | 32 | - | 35 | - |
| | (左) | - | 35 | 1 | 35 | | | | 31 |
| 52/51 | 眼窩示数(右) | 72.73 | 77.78 | 2 | 75.25 | 72.73 | - | 77.78 | - |
| | (左) | - | 79.55 | 1 | 79.55 | | | | - |
| 54. | 鼻幅 | 30 | 26 | 2 | 28.00 | 26 | - | 30 | - |
| 55. | 鼻高 | 49 | 53 | 2 | 51.06 | 49 | - | 53 | - |
| 54/55 | 鼻示数 | 61.22 | 49.06 | 2 | 55.14 | 49.06 | - | 61.22 | - |
| 55(1). | 梨状口高 | 29 | 37 | 2 | 33.00 | 29 | - | 37 | - |
| 56. | 鼻骨長 | 20 | 18 | 2 | 19.00 | 18 | - | 20 | - |
| 57. | 鼻骨最小幅 | 12 | 7 | 2 | 9.50 | 7 | - | 12 | 7 |
| 57(1). | 鼻骨最大幅 | - | - | | | | | | - |
| 60. | 上顎齒槽長 | 59 | - | 1 | 59 | | | | - |
| 61. | 上顎齒槽幅 | 69 | - | 1 | 69 | | | | - |
| 62. | 口蓋長 | 49 | 47 | 2 | 48.00 | 47 | - | 49 | - |
| 63. | 口蓋幅 | 40 | - | 1 | 40 | | | | - |
| 64. | 口蓋高 | - | - | | | | | | - |
| 61/60 | 上顎齒槽示数 | 116.95 | - | 1 | 116.95 | | | | - |
| 63/62 | 口蓋示数 | 81.63 | - | 1 | 81.63 | | | | - |
| 64/63 | 口蓋高示数 | - | - | | | | | | - |
| 72. | 全側面角 | 80 | 77 | 2 | 78.50 | 77 | - | 80 | - |
| 73. | 鼻側面角 | 85 | 82 | 2 | 83.50 | 82 | - | 85 | - |
| 74. | 齒槽側面角 | 59 | 59 | 2 | 59.00 | 59 | - | 59 | - |

表18 鼻根部(mm、度) (Nasal root)

| | | 豊岡宮本 | | 豊岡宮本 | | | | 豊岡宮本 | |
|---------|-----------|-------|---------|------|--------|-------|---|-------|---------------|
| | | 9-Y-1 | 11-SK-1 | 平均値 | | Min | - | Max. | 11-SK-4 女性 |
| | | 男性 | 男性 | n | M | | | | |
| 50. | 前眼窩間幅 | 24 | 13 | 2 | 18.50 | 13 | - | 24 | 15 |
| 50A. | 鼻根横弧長 | 26 | 15 | 2 | 20.50 | 15 | - | 26 | 18 |
| 50/50A. | 鼻根彎曲示数 | 92.31 | 86.67 | 2 | 89.49 | 86.67 | - | 92.31 | 83.33 |
| 57. | 鼻骨最小幅 | 12 | 7 | 2 | 9.50 | 7 | - | 12 | 7 |
| 44. | 両眼窩幅 | - | 97 | 1 | 97 | | | | - |
| 50/44 | 眼窩間示数 | - | 13.40 | 1 | 13.40 | | | | - |
| a. | 前頭突起上幅(右) | 13 | 8 | 2 | 10.50 | 8 | - | 13 | 8 |
| | (左) | 13 | 9 | 2 | 11.00 | 8 | - | 13 | 8 |
| b. | 前頭突起水平傾斜角 | 147 | 98 | 2 | 122.50 | 98 | - | 147 | - |
| c. | G-N投影距離 | 4 | 1 | 2 | 2.50 | 1 | - | 4 | - |
| d. | 鼻根角 | 134 | 148 | 2 | 141.00 | 134 | - | 148 | - |
| e. | G-R距離 | 28 | 25 | 2 | 26.50 | 25 | - | 28 | - |
| f. | 垂線高 | 5 | 3 | 2 | 4.00 | 3 | - | 5 | - |
| f/e | 鼻根陥凹示数 | 17.86 | 12.00 | 2 | 14.93 | 12.00 | - | 17.86 | - |
| 77. | 鼻頬骨角 | - | 153 | 1 | 153 | | | | 155 |
| F a | f m o間距離 | - | 93 | 1 | 93 | | | | 90 |
| F h | 垂線高 | - | 11 | 1 | 11 | | | | 10 |
| F h/F a | 顔面扁平示数 | - | 11.83 | 1 | 11.83 | | | | 11.11 |

表19 下顎骨(男性、mm、度) (Mandibula)

| | | 豊岡宮本 豊岡宮本 豊岡宮本 | | | 平均値 | | Min. | Max. |
|-------------|-----------|----------------|---------|---------|-----|-------|------|------|
| | | 9-Y-1 | 11-SK-1 | 11-MA-2 | n | M | | |
| 65. | 下顎関節突起幅 | - | - | - | - | - | - | - |
| 65(1). | 下顎筋突起幅 | - | - | - | - | - | - | - |
| 66. | 下顎角幅 | - | - | - | - | - | - | - |
| 67. | 前下顎幅 | - | - | 43 | 1 | 43 | - | - |
| 68. | 下顎長 | - | - | - | - | - | - | - |
| 68(1). | 下顎長 | - | - | - | - | - | - | - |
| 69. | オトガイ高 | - | - | 32 | 1 | 32 | - | - |
| 69(1). | 下顎体高(右) | - | - | 30 | 1 | 30 | - | - |
| | (左) | - | - | 29 | 1 | 29 | - | - |
| 69(2). | 下顎体高(右) | - | - | 26 | 1 | 26 | - | - |
| | (左) | - | - | 25 | 1 | 25 | - | - |
| 70. | 枝高(右) | - | - | - | - | - | - | - |
| | (左) | - | - | - | - | - | - | - |
| 70(1). | 前枝高(右) | - | - | - | - | - | - | - |
| | (左) | - | - | - | - | - | - | - |
| 70(2). | 最小枝高(右) | - | - | - | - | - | - | - |
| | (左) | - | 44 | - | 1 | 44 | - | - |
| 70(3). | 下顎切痕高(右) | - | - | - | - | - | - | - |
| | (左) | - | - | - | - | - | - | - |
| 71(1). | 下顎切痕幅(右) | - | - | - | - | - | - | - |
| | (左) | - | - | - | - | - | - | - |
| 71. | 枝幅(右) | 38 | - | - | 1 | 38 | - | - |
| | (左) | 38 | 37 | - | 2 | 37.50 | 37 | 38 |
| 71 a. | 最小枝幅(右) | 37 | - | - | 1 | 37 | - | - |
| | (左) | 38 | 37 | - | 2 | 37.50 | 37 | 38 |
| 79. | 下顎枝角(右) | - | - | - | - | - | - | - |
| | (左) | - | - | - | - | - | - | - |
| 66/65 | 下顎幅示数 | - | - | - | - | - | - | - |
| 68/65 | 幅長示数 | - | - | - | - | - | - | - |
| 68(1)/65 | 幅長示数 | - | - | - | - | - | - | - |
| 69(2)/69 | 下顎高示数(右) | - | - | 81.25 | 1 | 81.25 | - | - |
| | (左) | - | - | 78.13 | 1 | 78.13 | - | - |
| 71/70 | 下顎枝示数(右) | - | - | - | - | - | - | - |
| | (左) | - | - | - | - | - | - | - |
| 71 a /70(2) | 下顎枝示数(右) | - | - | - | - | - | - | - |
| | (左) | - | 84.09 | - | 1 | 84.09 | - | - |
| 70(3)/71(1) | 下顎切痕示数(右) | - | - | - | - | - | - | - |
| | (左) | - | - | - | - | - | - | - |

表20 鎖骨(mm) (Clavicula)

| | | 豊岡宮本 | |
|--------|------------|---------|----|
| | | 11-CL-2 | 男性 |
| 1. | 鎖骨最大長(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 2 a | 骨体彎曲高(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 2(1) | 肩峰端彎曲高(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 4. | 中央垂直径(右) | 11 | - |
| | (左) | - | - |
| 5. | 中央矢状径(右) | 12 | - |
| | (左) | - | - |
| 6. | 中央周(右) | 40 | - |
| | (左) | - | - |
| 6/1 | 長厚示数(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 2 a /1 | 彎曲示数(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 4/5 | 鎖骨断面示数(右) | 91.67 | - |
| | (左) | - | - |
| 2(1)/1 | 肩峰端彎曲示数(右) | - | - |
| | (左) | - | - |

表21 上腕骨(mm) (Humerus)

| | | 豊岡宮本 豊岡宮本 | |
|--------|--------------|-----------|---------|
| | | 11-HU-2 | 11-HU-3 |
| | | 女性 | 男性 |
| 1. | 上腕骨最大長(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 2. | 上腕骨全長(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 3. | 上端幅(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 3(1). | 横上径(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 4. | 下端幅(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 5. | 中央最大径(右) | - | 21 |
| | (左) | 20 | 22 |
| 6. | 中央最小径(右) | - | 17 |
| | (左) | 15 | 16 |
| 7. | 骨体最小周(右) | - | 61 |
| | (左) | 55 | 60 |
| 7(a). | 中央周(右) | - | 64 |
| | (左) | 60 | 62 |
| 8. | 頭周(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 9. | 頭最大横径(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 10. | 頭最大矢状径(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 11. | 滑車幅(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 12. | 小頭幅(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 12(a). | 滑車幅および小頭幅(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 13. | 滑車深(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 14. | 肘頭窩幅(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 15. | 肘頭窩深(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 6/5 | 骨体断面示数(右) | - | 80.95 |
| | (左) | 75.00 | 72.73 |
| 7/1 | 長厚示数(右) | - | - |
| | (左) | - | - |

表22 尺骨(mm) (Ulna)

| | | 豊岡宮本 豊岡宮本 | |
|-------|-----------|-----------|---------|
| | | 11-UL-1 | 11-UL-1 |
| | | 男性 | 男性 |
| 1. | 最大長(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 2. | 機能長(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 2(1). | 肘頭尺骨頭長(右) | - | S |
| | (左) | - | - |
| 3. | 最小周(右) | - | L |
| | (左) | 37 | - |
| 6. | 肘頭幅(右) | - | C |
| | (左) | - | - |
| 6(1). | 上幅(右) | - | 3/2 |
| | (左) | - | - |
| 7. | 肘頭深(右) | - | 11/12 |
| | (左) | - | - |
| 8. | 肘頭高(右) | - | S/L |
| | (左) | - | - |
| 11. | 尺骨矢状径(右) | - | - |
| | (左) | - | 13 |
| 12. | 尺骨横径(右) | - | - |
| | (左) | - | 17 |
| S | 中央最小径(右) | - | - |
| | (左) | - | 13 |
| L | 中央最大径(右) | - | - |
| | (左) | - | 17 |
| C | 中央周(右) | - | - |
| | (左) | - | 50 |
| 3/2 | 長厚示数(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 11/12 | 骨体断面示数(右) | - | - |
| | (左) | - | 76.47 |
| S/L | 中央断面示数(右) | - | - |
| | (左) | - | 76.47 |

表23 大腿骨(男性,mm) (Femur)

| | 豊岡宮本 3-FE-2 | 豊岡宮本 9-Y-1 | 豊岡宮本 11-FE-3 | 豊岡宮本 12-Y-1 | 平均值 | | Min. | - | Max. |
|-----------------|----------------|---------------|-----------------|----------------|-----|--------|--------|---|--------|
| | | | | | n | M | | | |
| 1 最大長(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 2 自然位全長(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 3 最大転子長(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 4 自然位転子長(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 6 骨体中央矢状径(右) | 29 | - | - | - | 1 | 29 | - | - | - |
| (左) | 31 | 31 | 29 | - | 3 | 30.33 | 29 | - | 31 |
| 7 骨体中央横径(右) | 31 | - | - | - | 1 | 31 | - | - | - |
| (左) | 30 | 28 | 26 | - | 3 | 28.00 | 26 | - | 30 |
| 8 骨体中央周(右) | 94 | - | - | - | 1 | 94 | - | - | - |
| (左) | 95 | 92 | 86 | - | 3 | 91.00 | 86 | - | 95 |
| 9 骨体上横径(右) | - | - | 31 | 32 | 2 | 31.50 | 31 | - | 32 |
| (左) | 33 | 32 | 31 | - | 3 | 32.00 | 31 | - | 33 |
| 10 骨体上矢状径(右) | - | - | 24 | 27 | 2 | 25.50 | 24 | - | 27 |
| (左) | 25 | 27 | 23 | - | 3 | 25.00 | 23 | - | 27 |
| 15 頸垂直径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 16 頸矢状径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 17 頸周(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 18 頭垂直径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 19 頭横径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 20 頭周(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 21 上顆幅(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 8/2 長厚示数(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 6/7 骨体中央断面示数(右) | 93.55 | - | - | - | 1 | 93.55 | - | - | - |
| (左) | 103.33 | 110.71 | 111.54 | - | 3 | 108.53 | 103.33 | - | 111.54 |
| 10/9 上骨体断面示数(右) | - | - | 77.42 | 84.38 | 2 | 80.90 | 77.42 | - | 84.38 |
| (左) | 75.76 | 84.38 | 74.19 | - | 3 | 78.11 | 74.19 | - | 84.38 |

表24 大腿骨(女性,mm) (Femur)

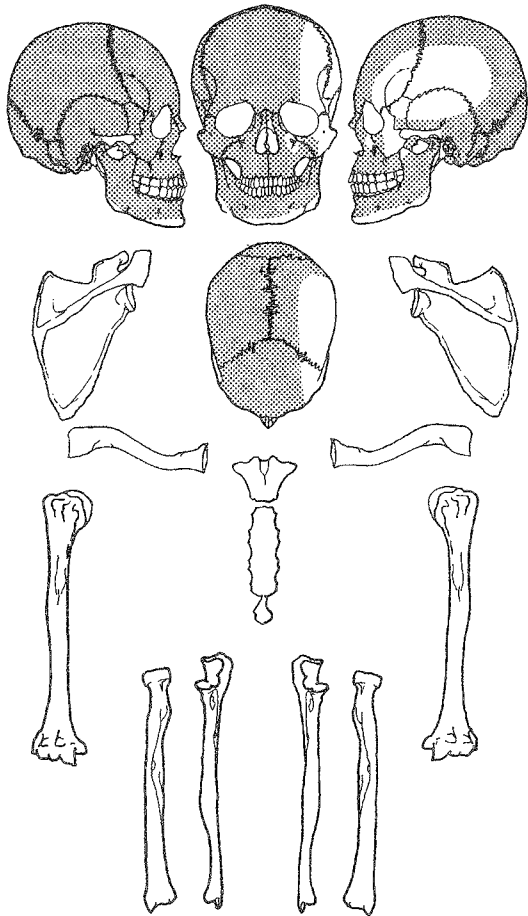
| | 豊岡宮本 3-FE-1 | 豊岡宮本 11-FE-1 | 豊岡宮本 11-FE-2 | 豊岡宮本 11-FE-4 | 豊岡宮本 11-FE-5 | 平均值 | | Min. | - | Max. |
|-----------------|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----|--------|--------|---|--------|
| | | | | | | n | M | | | |
| 1 最大長(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | 380 | - | - | - | 1 | 380 | - | - | - |
| 2 自然位全長(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | 374 | - | - | - | 1 | 374 | - | - | - |
| 3 最大転子長(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | 371 | - | - | - | 1 | 371 | - | - | - |
| 4 自然位転子長(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | 354 | - | - | - | 1 | 354 | - | - | - |
| 6 骨体中央矢状径(右) | - | 26 | - | 25 | - | 2 | 25.50 | 25 | - | 26 |
| (左) | - | 25 | - | - | 24 | 2 | 24.50 | 24 | - | 25 |
| 7 骨体中央横径(右) | - | 26 | - | 24 | - | 2 | 25.00 | 24 | - | 26 |
| (左) | - | 28 | - | - | 28 | 2 | 28.00 | 28 | - | 28 |
| 8 骨体中央周(右) | - | 82 | - | 76 | - | 2 | 79.00 | 76 | - | 82 |
| (左) | - | 82 | - | - | 82 | 2 | 82.00 | 82 | - | 82 |
| 9 骨体上横径(右) | - | 31 | 26 | 28 | - | 3 | 28.33 | 26 | - | 31 |
| (左) | 29 | 33 | - | - | 32 | 3 | 31.33 | 29 | - | 33 |
| 10 骨体上矢状径(右) | - | 23 | 22 | 22 | - | 3 | 22.33 | 22 | - | 23 |
| (左) | 24 | 22 | - | - | 20 | 3 | 22.00 | 20 | - | 24 |
| 15 頸垂直径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | 29 | - | - | - | 1 | 29 | - | - | - |
| 16 頸矢状径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | 21 | - | - | - | 1 | 21 | - | - | - |
| 17 頸周(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | 85 | - | - | - | 1 | 85 | - | - | - |
| 18 頭垂直径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 19 頭横径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 20 頭周(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 21 上顆幅(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 8/2 長厚示数(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | 21.93 | - | - | - | 1 | 21.93 | - | - | - |
| 6/7 骨体中央断面示数(右) | - | 100.00 | - | 104.17 | - | 2 | 102.08 | 100.00 | - | 104.17 |
| (左) | - | 89.29 | - | - | 85.71 | 2 | 87.50 | 85.71 | - | 89.29 |
| 10/9 上骨体断面示数(右) | - | 74.19 | 84.62 | 78.57 | - | 3 | 79.13 | 74.19 | - | 84.62 |
| (左) | 82.76 | 66.67 | - | - | 62.50 | 3 | 70.64 | 62.50 | - | 82.76 |

表25 脛骨(mm) (Tibia)

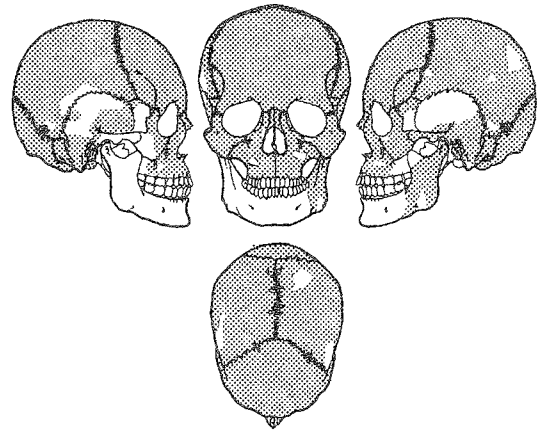
| | 豊岡宮本豊岡宮本豊岡宮本 | | | | | | 豊岡宮本豊岡宮本豊岡宮本 | | | | | | | | | |
|-------------------|--------------|-------|---------|-----|-------|-------|--------------|---------|---------|---------|-----|-------|-------|-------|---|-------|
| | 3-TB-1 | 9-Y-1 | 11-TB-4 | 平均値 | | Min. | Max. | 11-TB-1 | 11-TB-2 | 11-TB-3 | 平均値 | | Min. | Max. | | |
| | 男性 | 男性 | 男性 | n | M | | | 女性 | 女性 | 女性 | n | M | | | | |
| 1. 最大長(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| 1 a. 自然位全長(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| 1 b. 最大転子長(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| 2. 自然位転子長(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| 3. 骨体中央矢状径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| 3 a. 骨体中央横径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| 3 b. 骨体中央周(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| 4 a. 骨体上横径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| 4 b. 骨体上矢状径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| 6. 頸垂直径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| 7. 頸矢状径(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| (左) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| 8. 頸周(右) | 33 | - | - | 1 | 33 | - | - | - | - | 25 | 1 | 25 | - | - | | |
| (左) | - | 30 | 30 | 2 | 30.00 | 30 | - | 30 | 25 | 25 | - | 2 | 25.00 | 25 | - | 25 |
| 8 a. 頭垂直径(右) | 36 | - | - | 1 | 36 | - | - | - | - | 27 | 1 | 27 | - | - | - | - |
| (左) | - | 35 | 33 | 2 | 34.00 | 33 | - | 35 | 30 | 26 | - | 2 | 28.00 | 26 | - | 30 |
| 9. 頭横径(右) | 21 | - | - | 1 | 21 | - | - | - | - | 17 | 1 | 17 | - | - | - | - |
| (左) | - | 22 | 21 | 2 | 21.50 | 21 | - | 22 | 17 | 17 | - | 2 | 17.00 | 17 | - | 17 |
| 9 a. 頭周(右) | 23 | - | - | 1 | 23 | - | - | - | - | 21 | 1 | 21 | - | - | - | - |
| (左) | - | 25 | 23 | 2 | 24.00 | 23 | - | 25 | 18 | 19 | - | 2 | 18.50 | 18 | - | 19 |
| 10. 上顆幅(右) | 87 | - | - | 1 | 87 | - | - | - | - | 67 | 1 | 67 | - | - | - | - |
| (左) | - | 85 | 80 | 2 | 82.50 | 80 | - | 85 | 68 | 67 | - | 2 | 67.50 | 67 | - | 68 |
| 10 a. 長厚示数(右) | 98 | - | - | 1 | 98 | - | - | - | - | 77 | 1 | 77 | - | - | - | - |
| (左) | - | 98 | 92 | 2 | 95.00 | 92 | - | 98 | 80 | 74 | - | 2 | 77.00 | 74 | - | 80 |
| 10 b. 骨体中央断面示数(右) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| (左) | - | 78 | 74 | 2 | 76.00 | 74 | - | 78 | 63 | 64 | - | 2 | 63.50 | 63 | - | 64 |
| 9/8. 上骨体断面示数(右) | 63.64 | - | - | 1 | 63.64 | - | - | - | - | 68.00 | 1 | 68.00 | - | - | - | - |
| (左) | - | 73.33 | 70.00 | 2 | 71.67 | 70.00 | - | 73.33 | 68.00 | 68.00 | - | 2 | 68.00 | 68 | - | 68 |
| 9 a /8 a | 63.89 | - | - | 1 | 63.89 | - | - | - | - | 77.78 | 1 | 77.78 | - | - | - | - |
| | - | 71.43 | 69.70 | 2 | 70.56 | 69.70 | - | 71.43 | 60.00 | 73.08 | - | 2 | 66.54 | 60.00 | - | 73.08 |
| 10 b /1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |

表26 推定身長値(cm) (Stature)

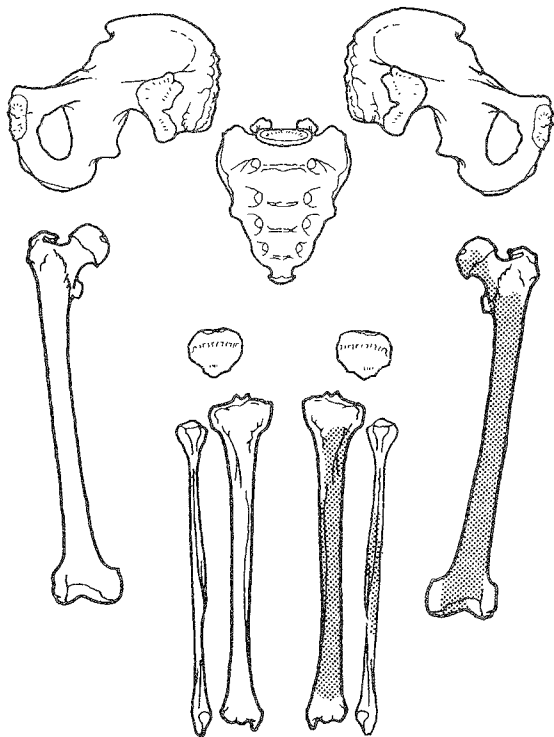
| | | 豊岡宮本 | |
|-----------|--------|---------|----------|
| | | 11-FE-1 | 11-FE-3 |
| | | 女性 | 男性 |
| Pearsonの式 | 上腕骨(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| | 橈骨(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| | 大腿骨(右) | - | (164.03) |
| | (左) | 146.75 | - |
| | 脛骨(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| 藤井の式 | 上腕骨(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| | 橈骨(右) | - | - |
| | (左) | - | - |
| | 大腿骨(右) | - | (163.58) |
| | (左) | 146.38 | - |
| | 脛骨(右) | - | - |
| | (左) | - | - |



豊岡宮本9-Y-1(男性・熟年)

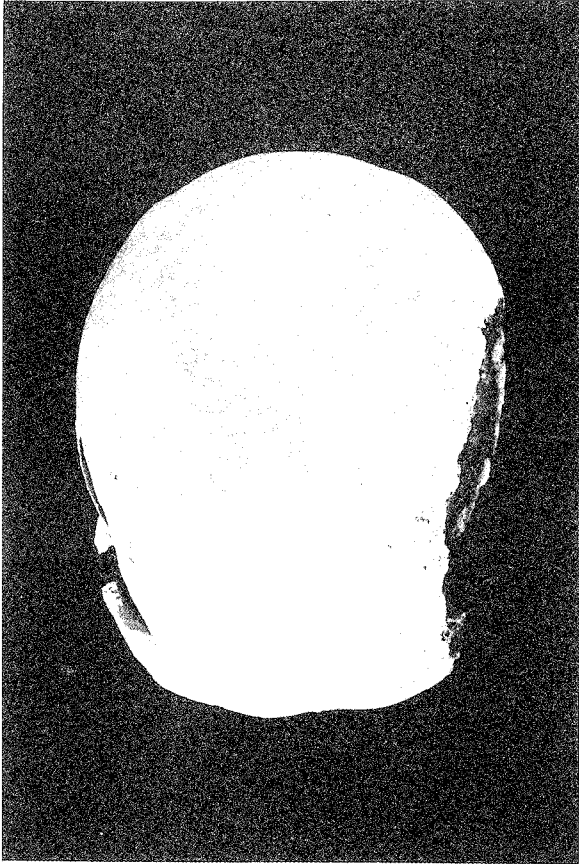


豊岡宮本11-SK-1(男性・熟年)

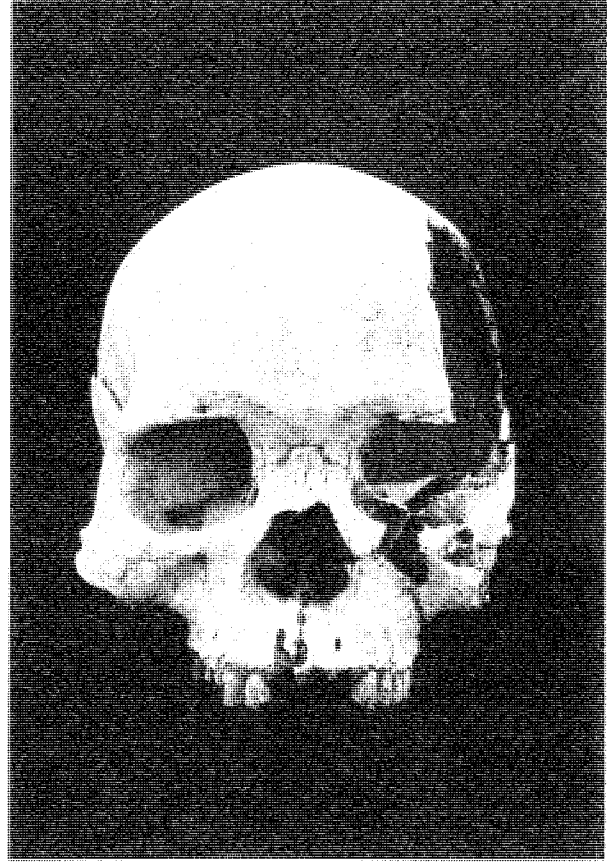


豊岡宮本11-SK-4(女性・熟年)

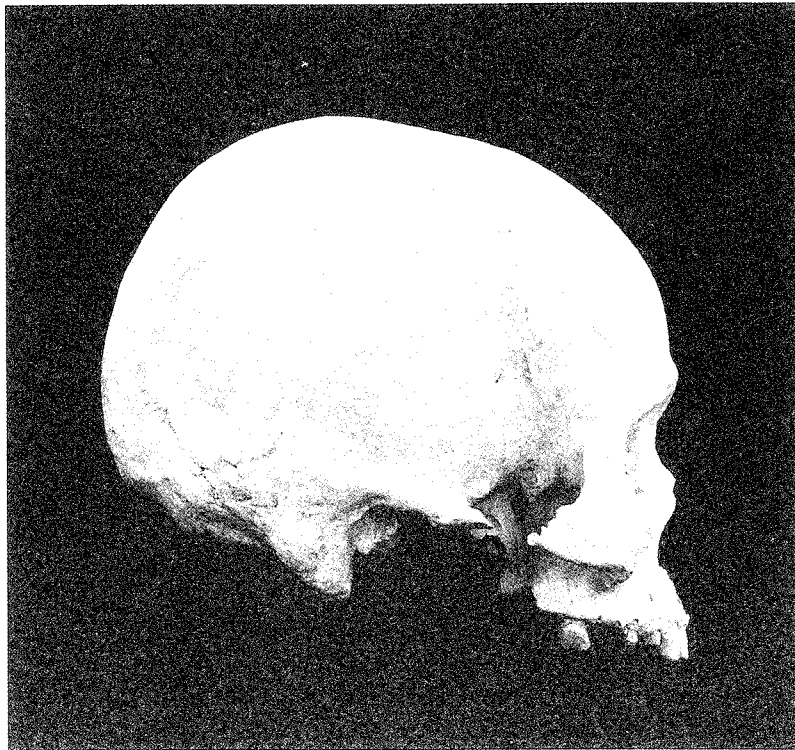
図2 人骨の残存図(アミかけ部分)
(Fig.2 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



頭蓋上面 (Superior view of the Skull)

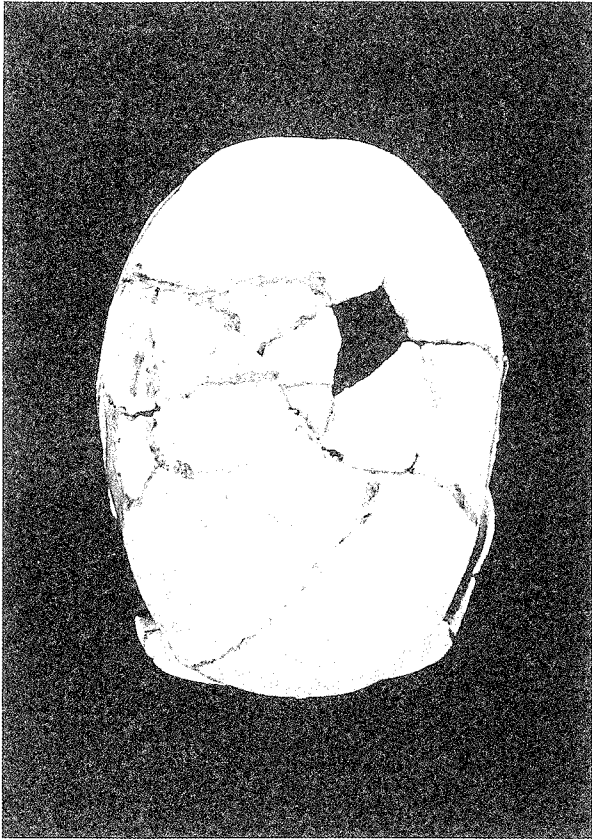


頭蓋正面 (Frontal view of the Skull)

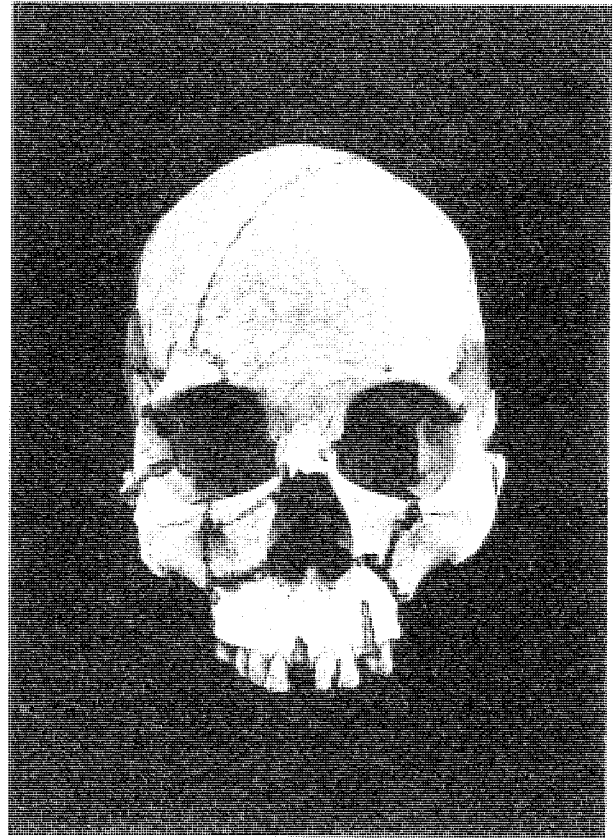


頭蓋側面 (Lateral view of the Skull)

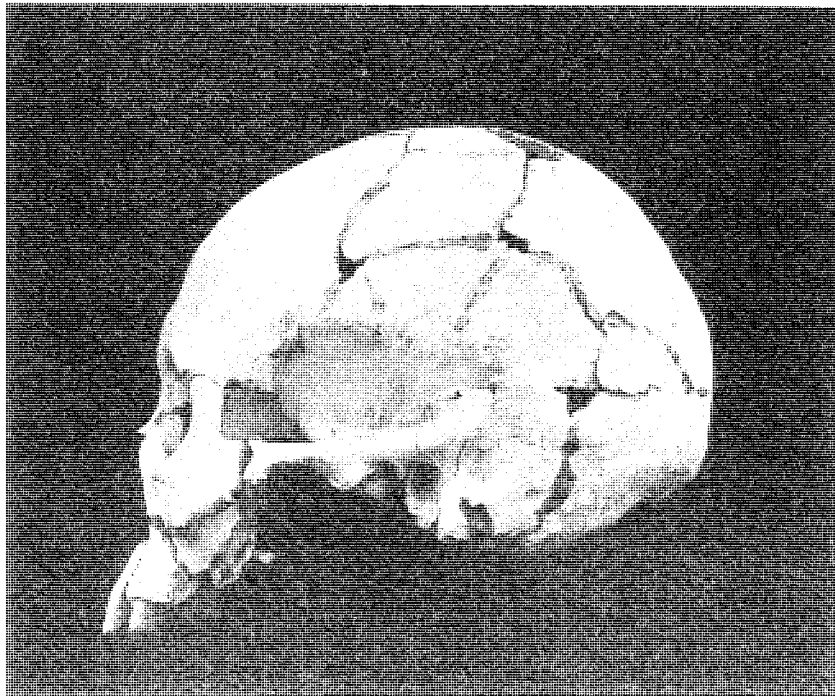
豊岡宮本9-Y-1(男性・熟年) (The Toyooka-Miyamoto 9-Y-1, mature male)



頭蓋上面 (Superior view of the Skull)



頭蓋正面 (Frontal view of the Skull)

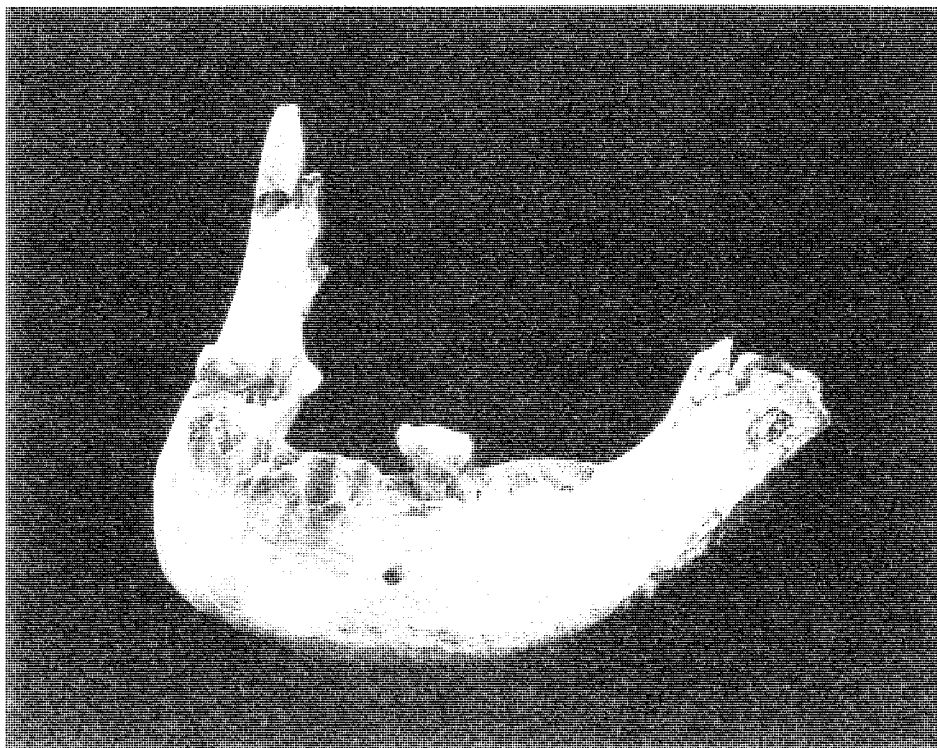


頭蓋側面 (Lateral view of the Skull)

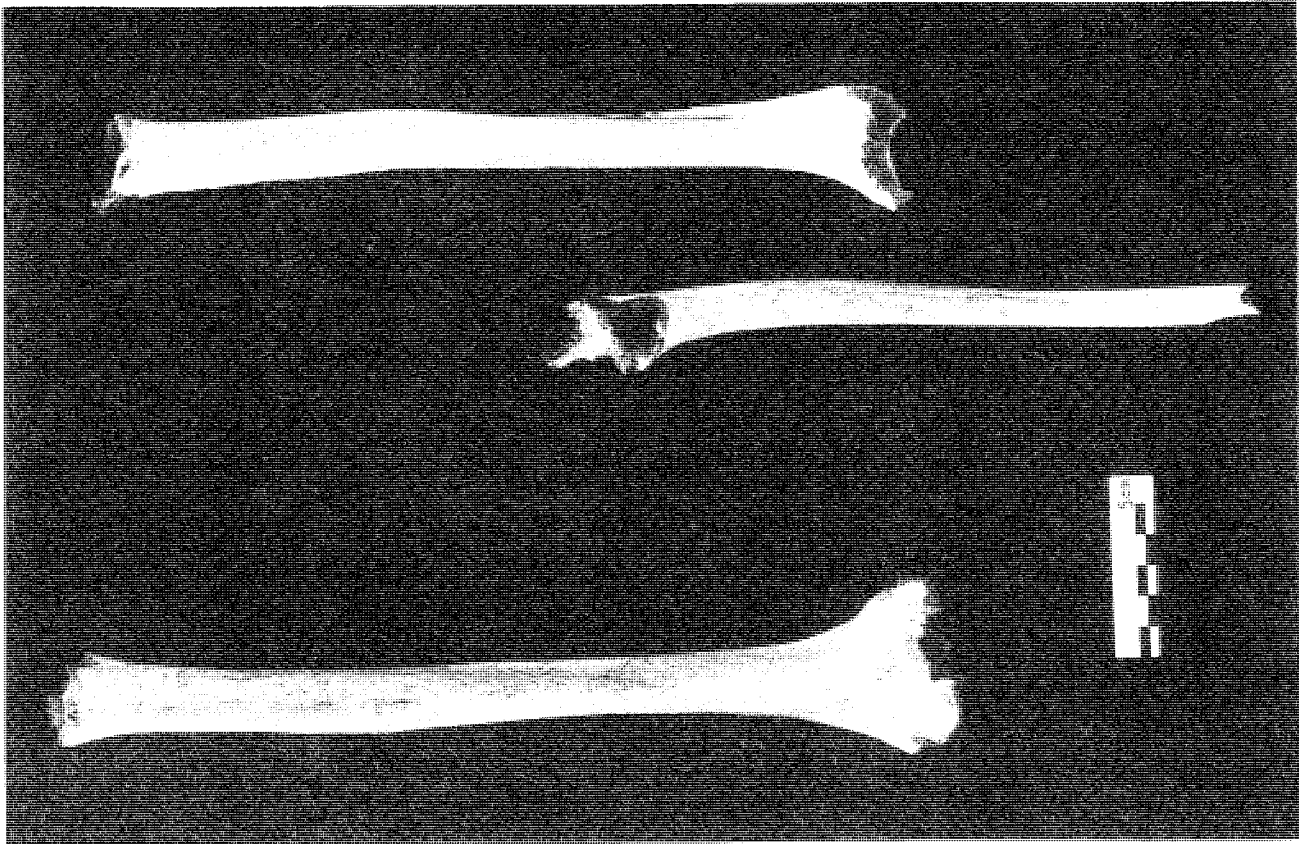
豊岡宮本11-SK-1(男性・熟年) (The Toyooka-Miyamoto 11-SK-1, mature male)



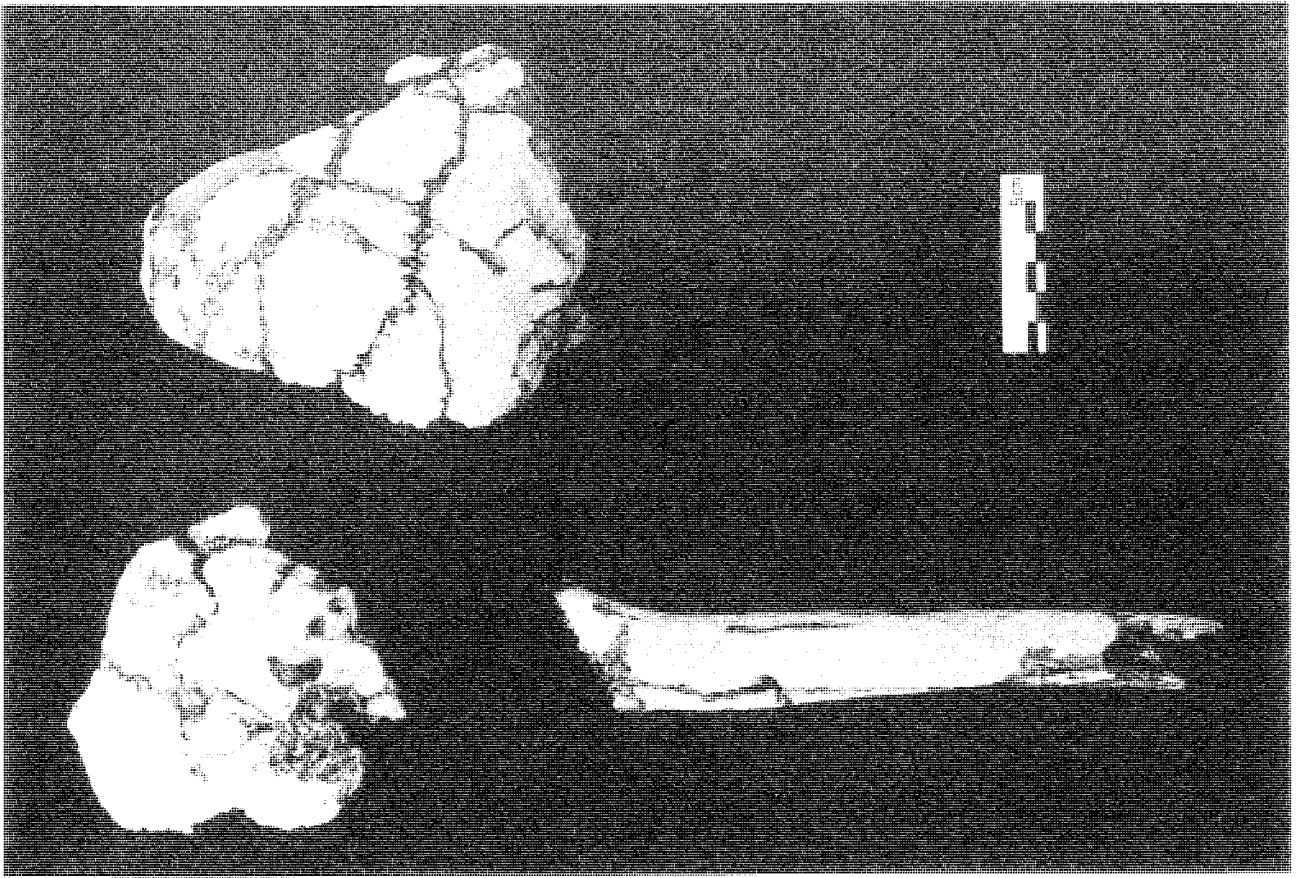
頭蓋正面 (Frontal view of the Skull)
豊岡宮本11-SK-4(男性・熟年) (The Toyooka-Miyamoto 11-SK-4, mature male)



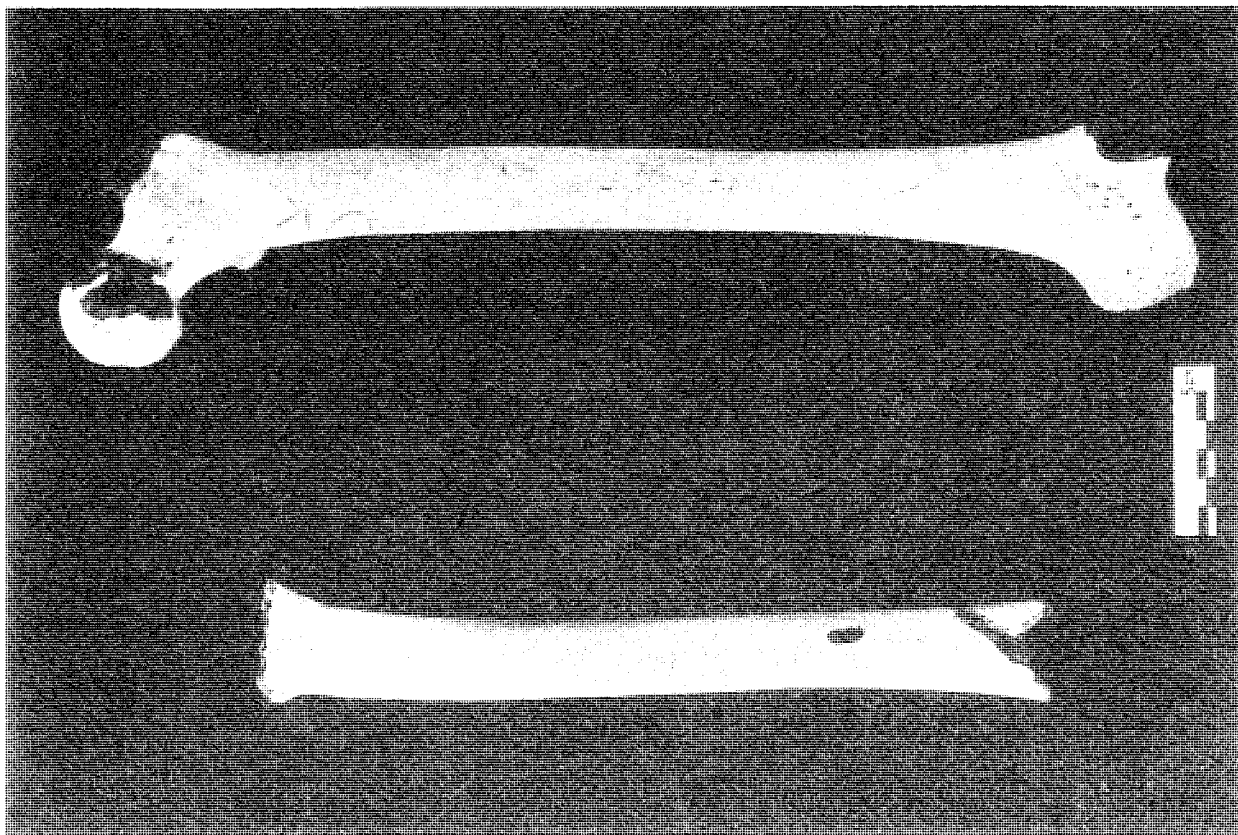
下顎骨 (The mandible)
豊岡宮本11-MA-2(男性) (The Toyooka-Miyamoto 11-MA-2, male)



上腕骨・左尺骨 (The humerus, the left ulna)
 豊岡宮本11-HU-3 (男性)・11-UL-1 (男性)、(同一個体)
 (The Toyooka-Miyamoto 11-HU-3, 11-UL-1, male)

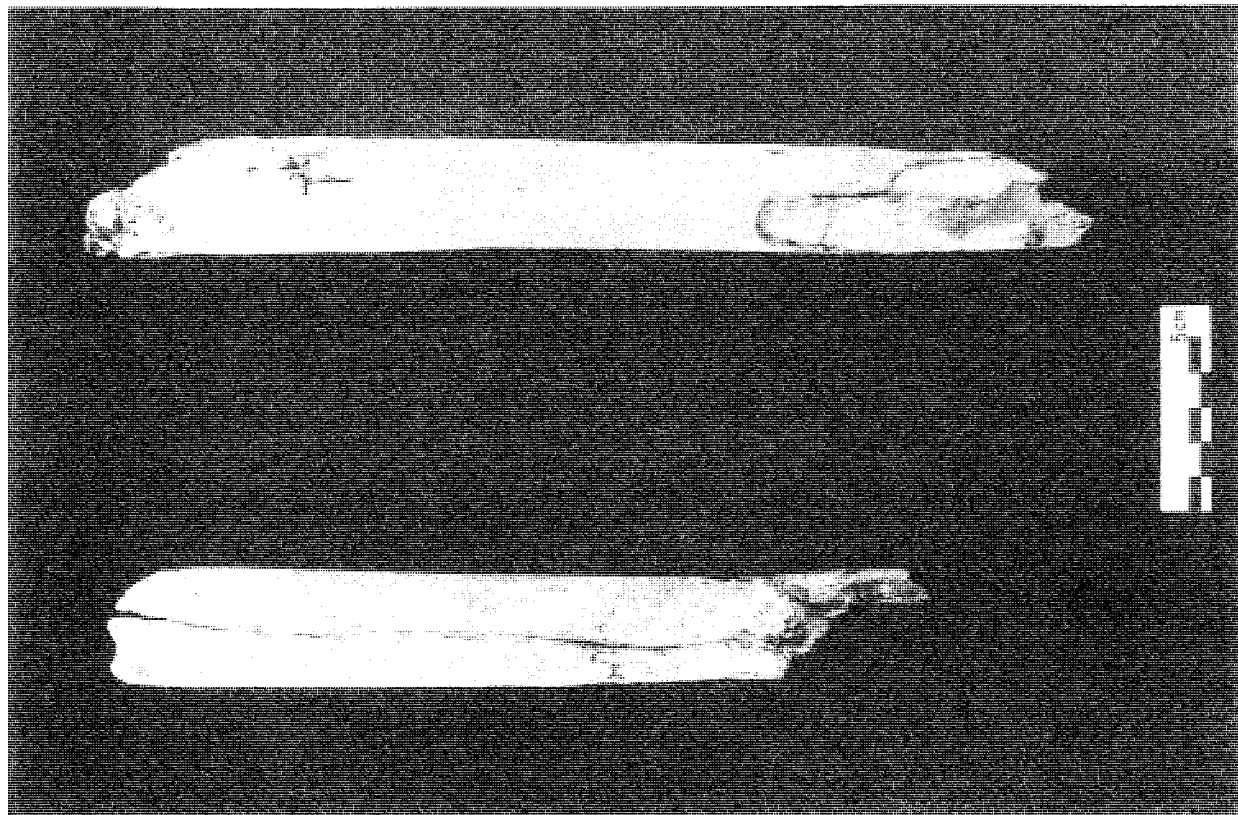


頭蓋・右大腿骨 (The skull, the right femur)
 豊岡宮本12-Y-1 (男性・壮年)
 (The Toyooka-Miyamoto 12-Y-1, young adult male)



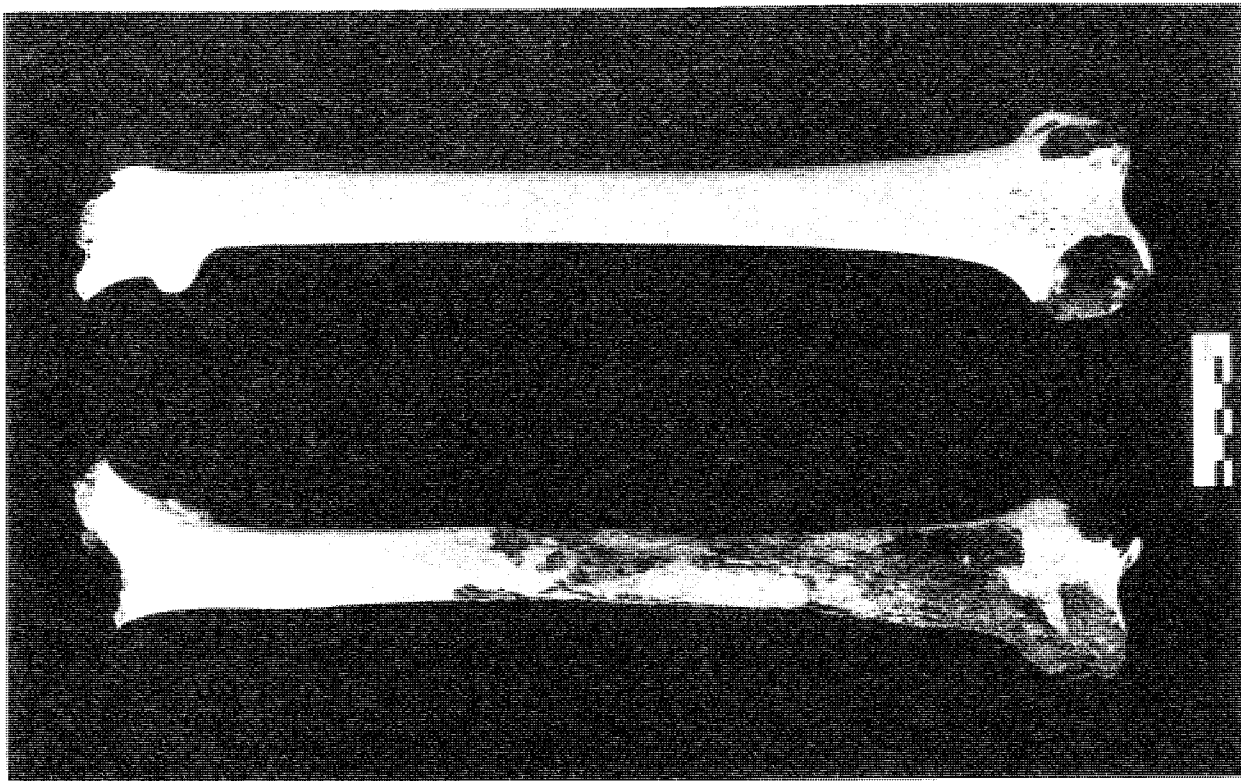
大腿骨 (The femur)

豊岡宮本11-FE-1 (女性) (The Toyooka-Miyamoto 11-FE-1, female)

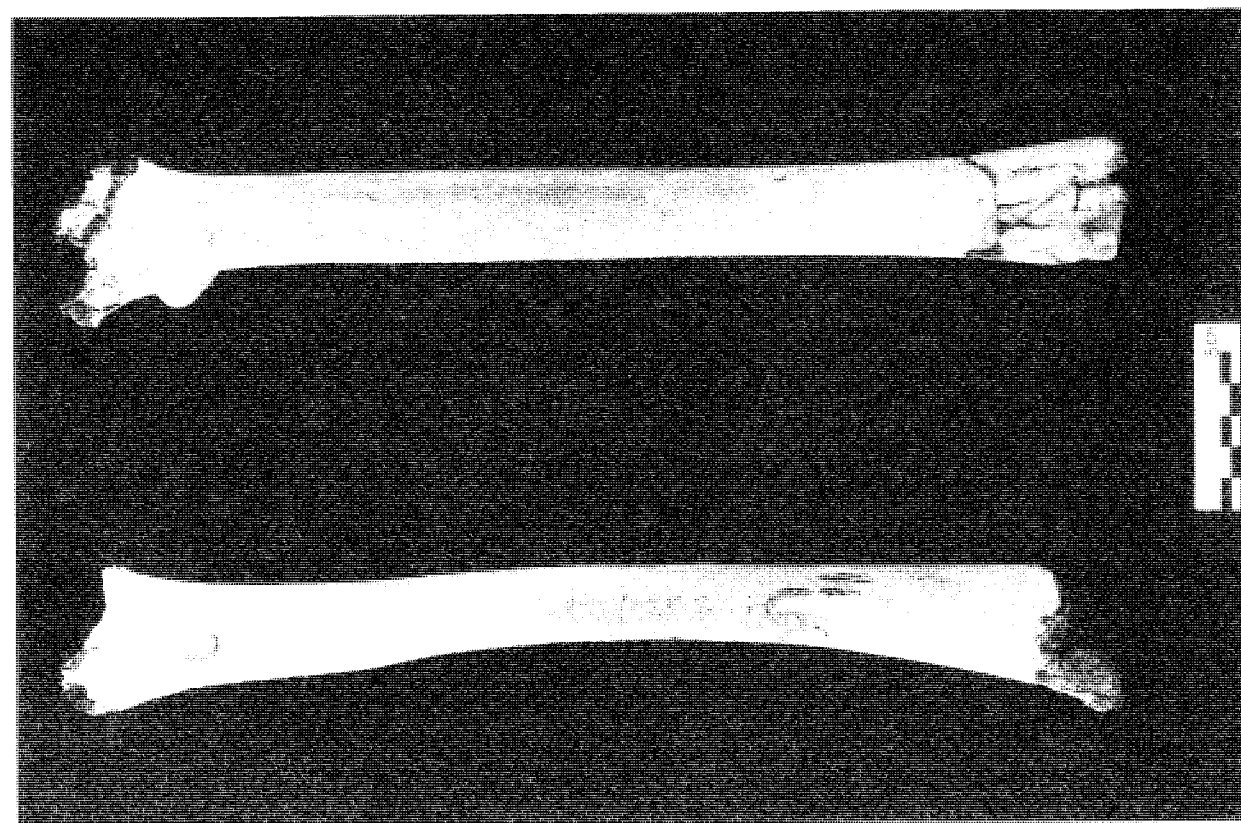


大腿骨 (The femur)

豊岡宮本3-FE-2 (男性) (The Toyooka-Miyamoto 3-FE-2, male)



大腿骨 (The femur)
 豊岡宮本11-FE-3 (男性) (The Toyooka-Miyamoto 11-FE-3, male)



大腿骨 (The femur)
 豊岡宮本11-FE-4 (女性) (The Toyooka-Miyamoto 11-FE-4, female)
 豊岡宮本11-FE-5 (女性) (The Toyooka-Miyamoto 11-FE-5, female)

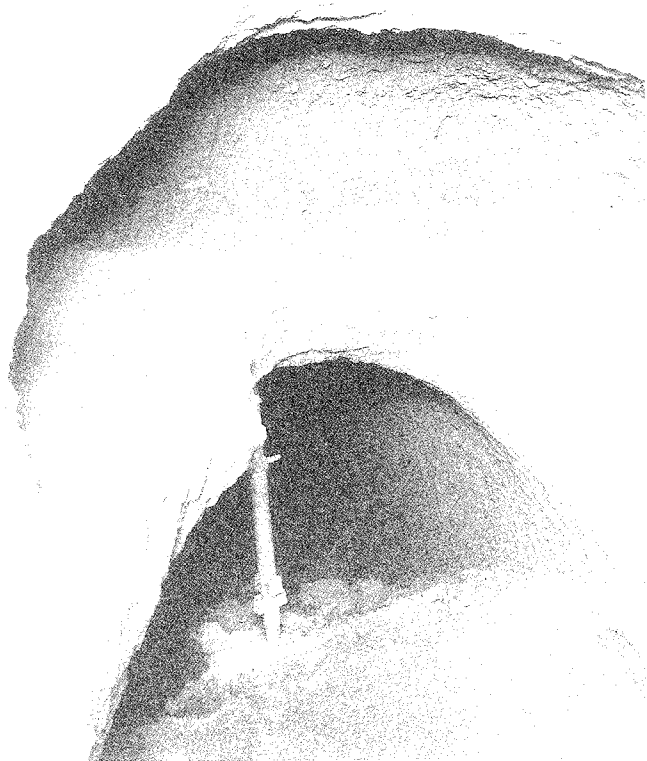
写真図版



(1) 上空より合志町を望む



(2) 豊岡宮本横穴群遠景



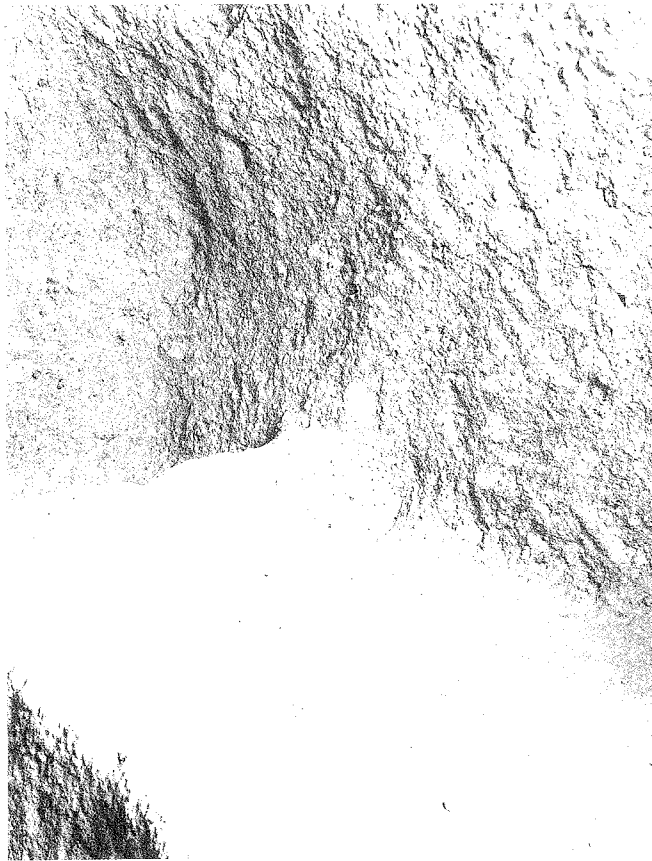
(1) 1号墓



(2) 2号墓羨門側から玄室を覗く



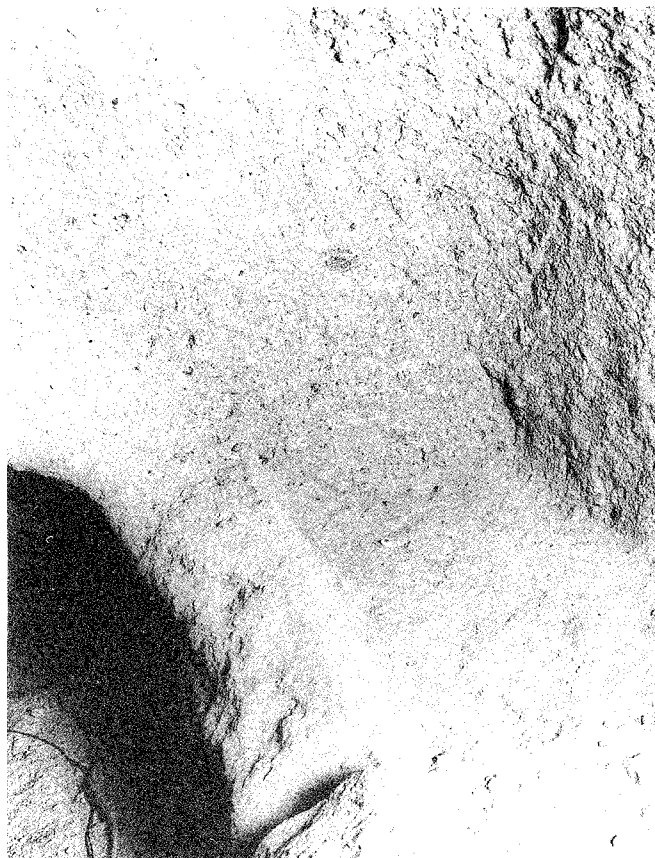
(3) 2号墓左屍床奥側・奥屍床左隅



(4) 2号墓右屍床奥側・奥屍床右隅



(1) 2号墓右屍床・玄門



(2) 2号墓左屍床・玄門



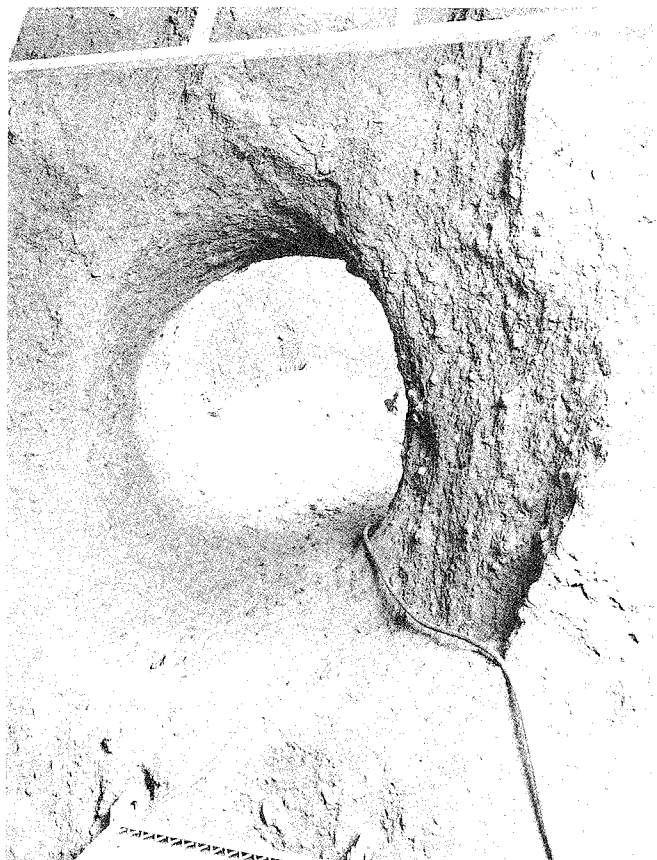
(3) 2号墓右屍床人骨出土状況



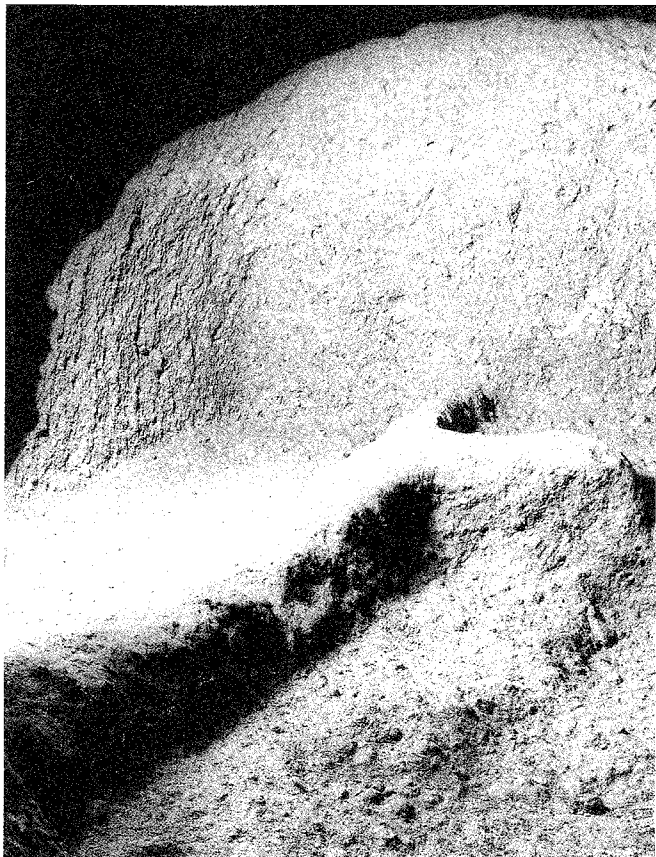
(4) 2号墓左屍床人骨出土状況



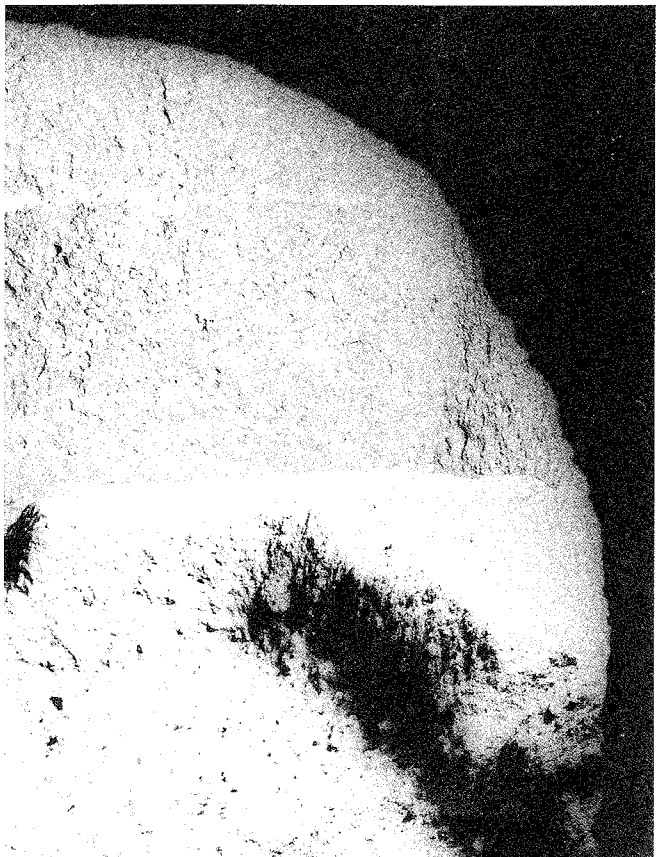
(1) 2号墓奥屍床人骨出土状況



(2) 3号墓前庭部側から玄室を覗く



(3) 3号墓玄室左側



(4) 3号墓玄室右側



(1) 3号墓右屍床玄門付近



(2) 3号墓左屍床玄門付近



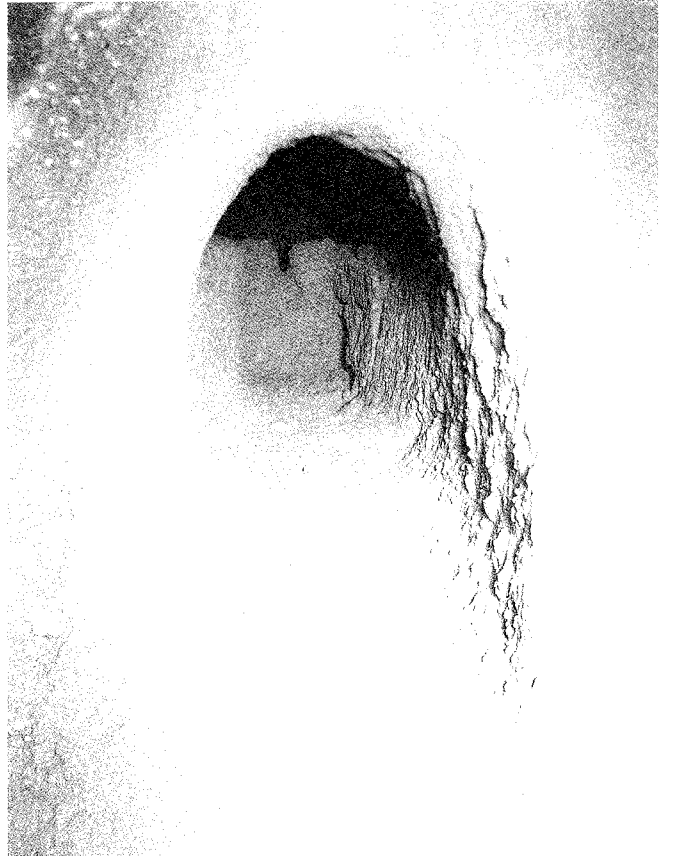
(3) 3号墓右屍床人骨・貝輪出土状況



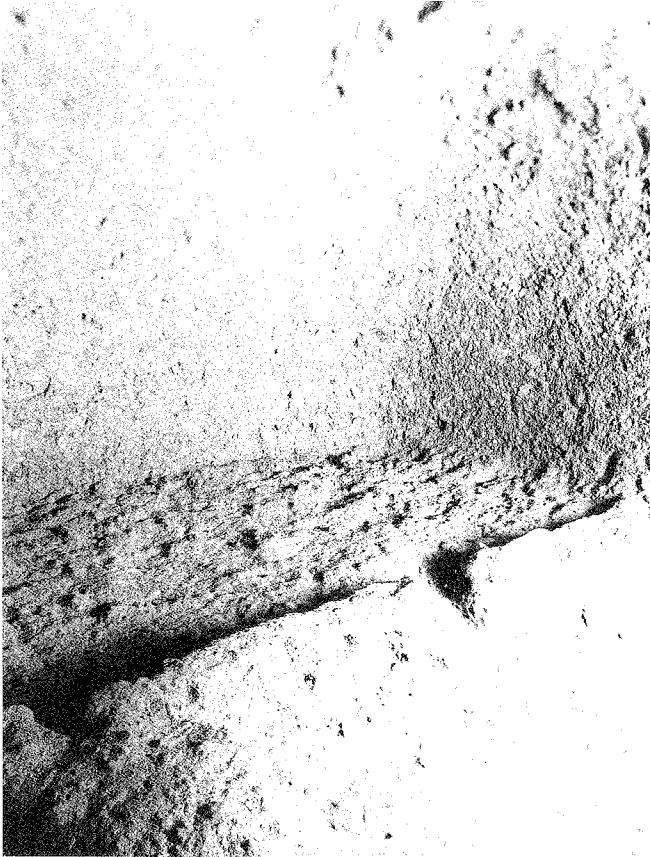
(4) 3号墓左屍床人骨・遺物出土状況



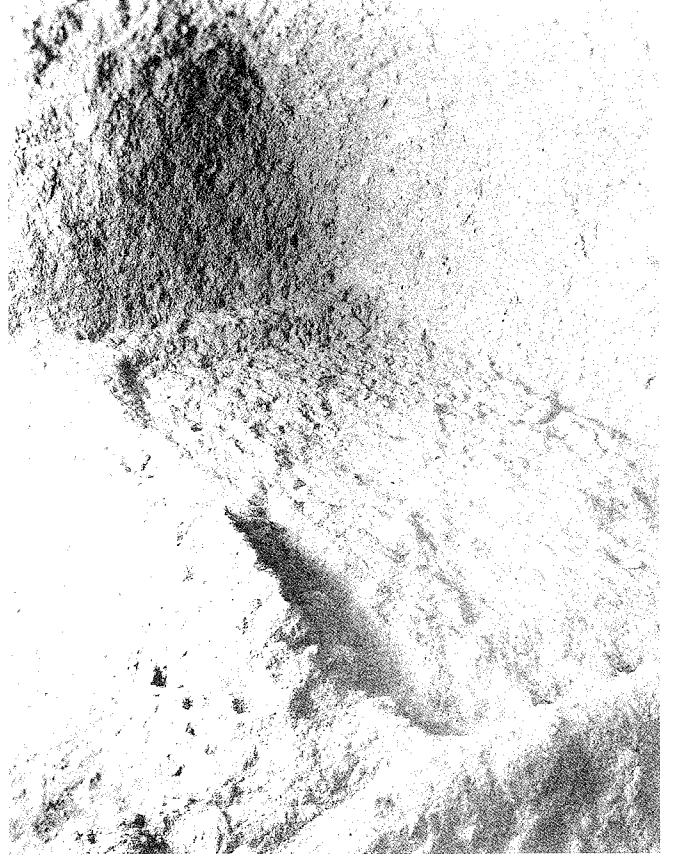
(1) 3号墓奥屍床左側人骨出土状況



(2) 4号墓羨門～通路部



(3) 5号墓右屍床



(4) 5号墓左屍床



(1) 5号墓通路部遺物出土状況



(2) 6号墓



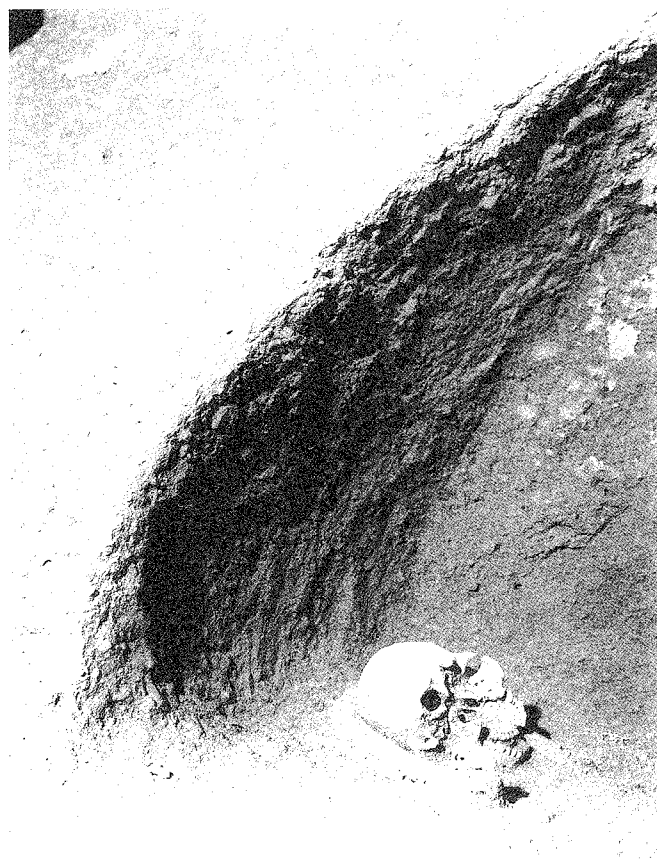
(3) 7号墓



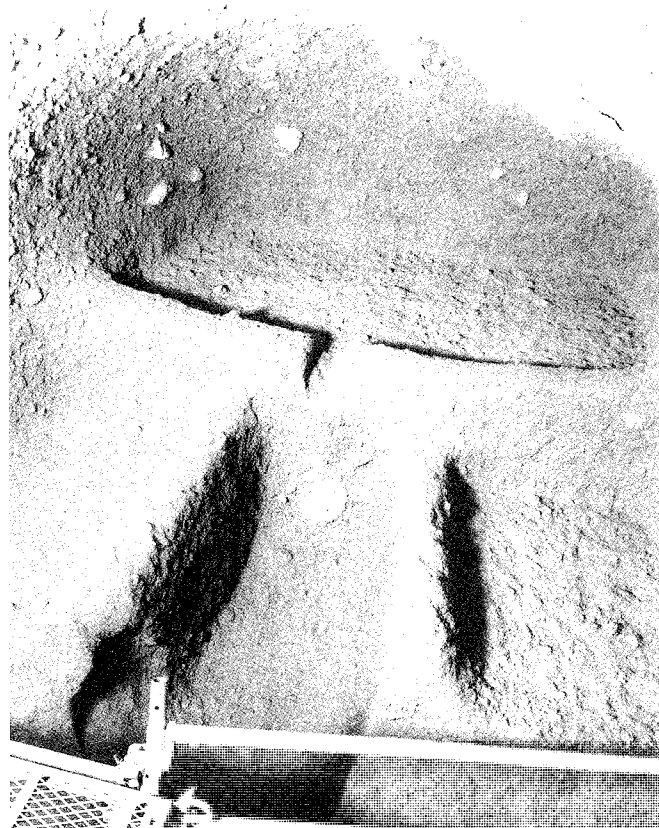
(4) 8号墓



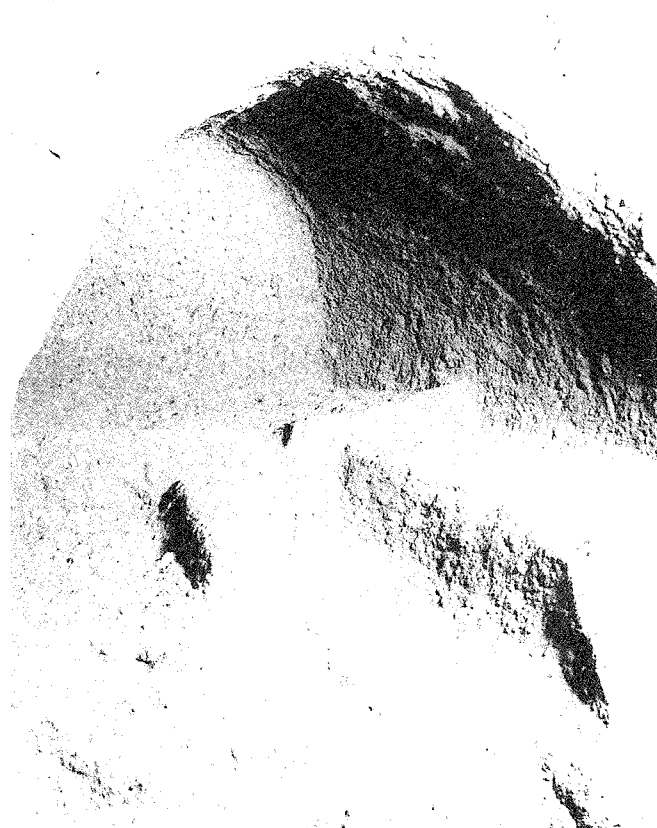
(1) 9号墓



(2) 9号墓人骨出土状况



(3) 10号墓



(4) 11号墓



(1) 11号墓人骨出土状况



(2) 12号墓



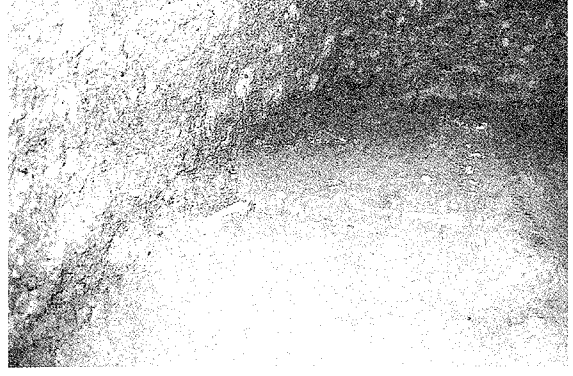
(3) 12号墓右屍床



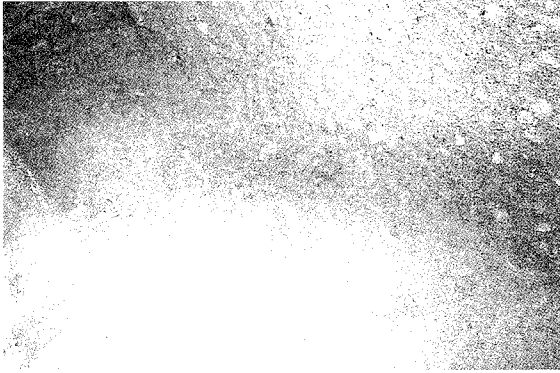
(4) 12号墓左屍床



(1) 2号墓右屍床人骨·遺物出土狀況



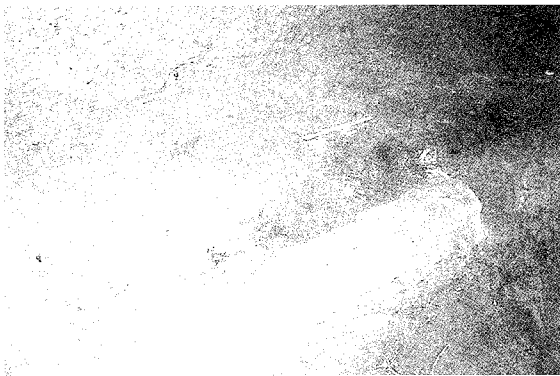
(2) 2号墓右屍床遺物出土狀況



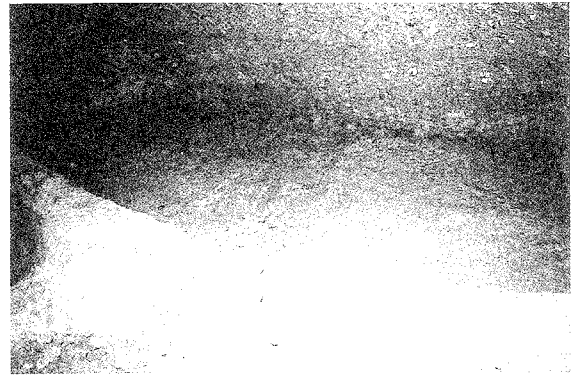
(3) 2号墓左屍床人骨出土狀況



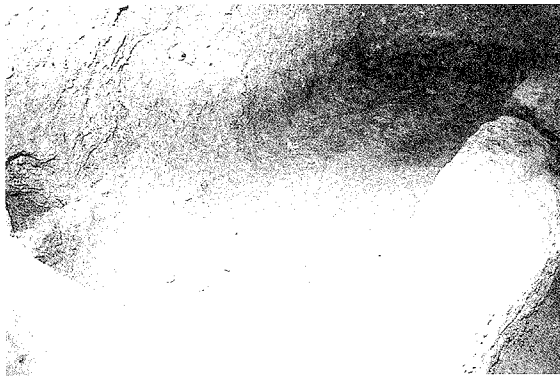
(4) 2号墓奥屍床人骨·遺物出土狀況



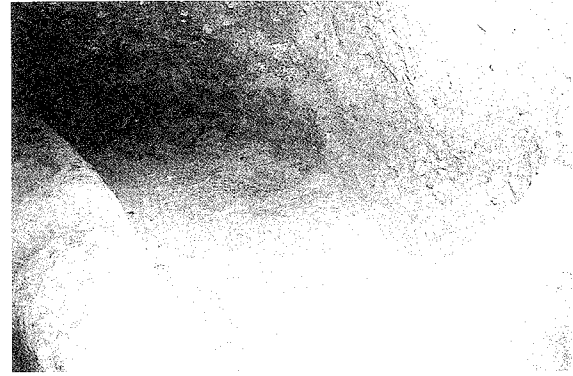
(5) 3号墓右屍床遺物出土狀況



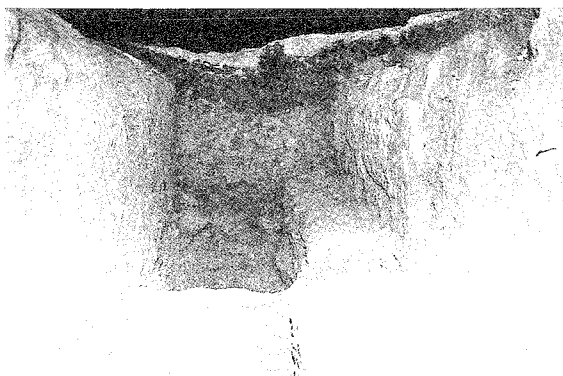
(6) 4号墓奥屍床遺物出土狀況



(7) 4号墓右屍床出土狀況



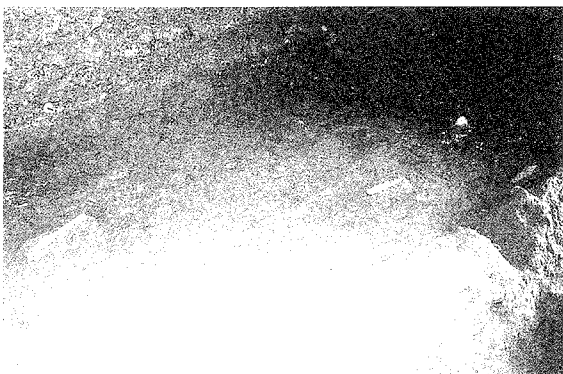
(8) 4号墓左屍床遺物出土狀況



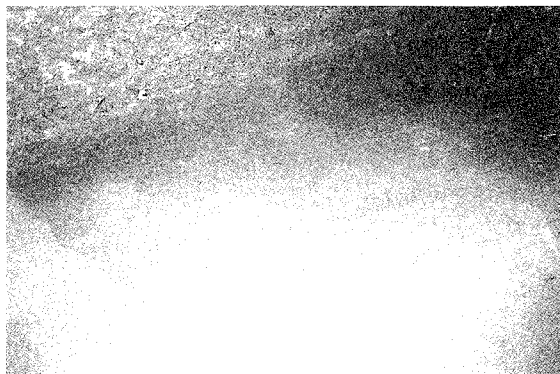
(1) 4号墓通路部土層堆積状況



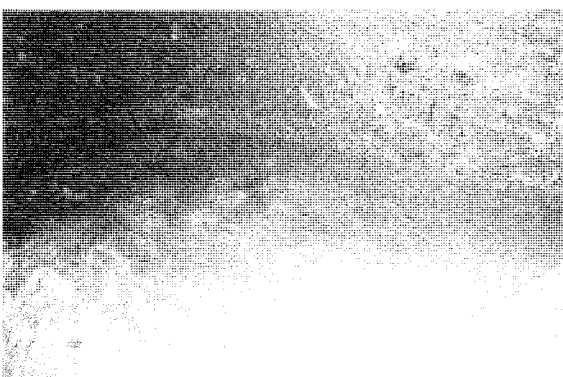
(2) 5号墓右屍床5層上面須恵器出土状況



(3) 5号墓右屍床遺物出土状況



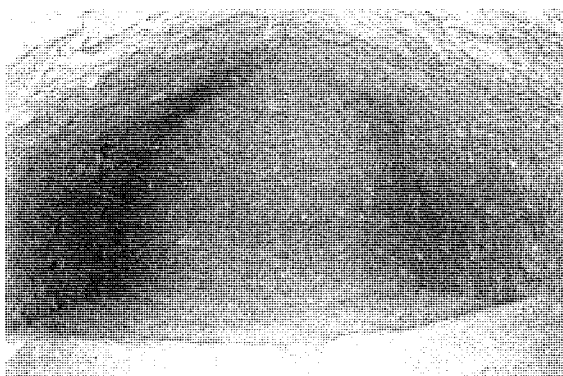
(4) 5号墓右屍床遺物出土状況



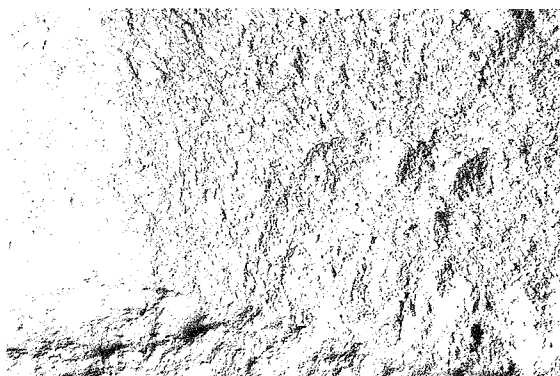
(5) 5号墓左屍床人骨・遺物出土状況



(6) 5号墓羨門～玄門通路に設置された石



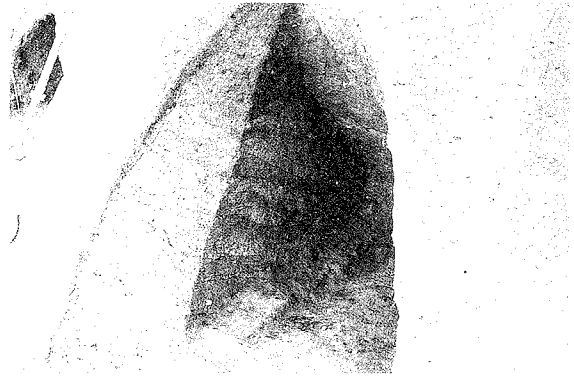
(7) 7号墓奥屍床



(8) 7号墓側壁工具痕



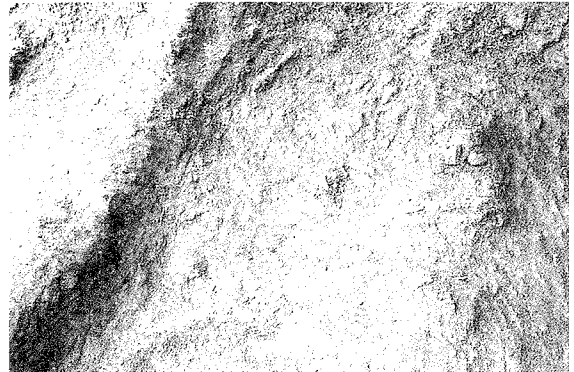
(1) 8号墓奥屍床人骨・遺物出土状況



(2) 10号墓土層堆積状況



(3) 10号墓21層検出状況



(4) 10号墓奥屍床遺物出土状況



(5) 11号墓右屍床人骨出土状況



(6) 11号墓右屍床人骨・遺物出土状況



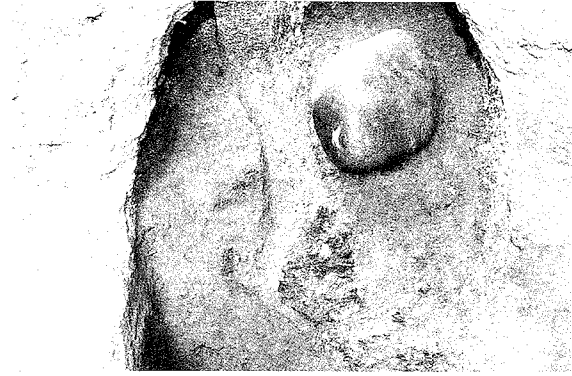
(7) 11号墓奥屍床人骨出土状況



(8) 11号墓人骨取り上げ風景



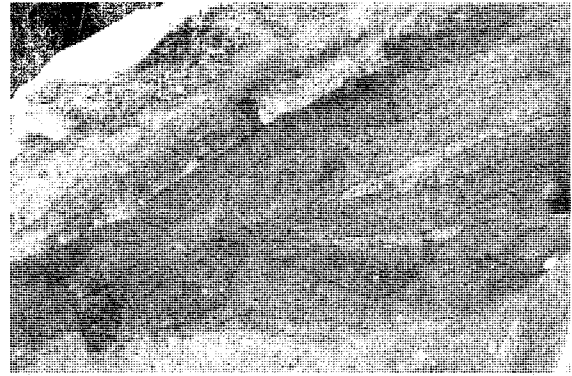
(1) 12号墓左屍床人骨出土状況



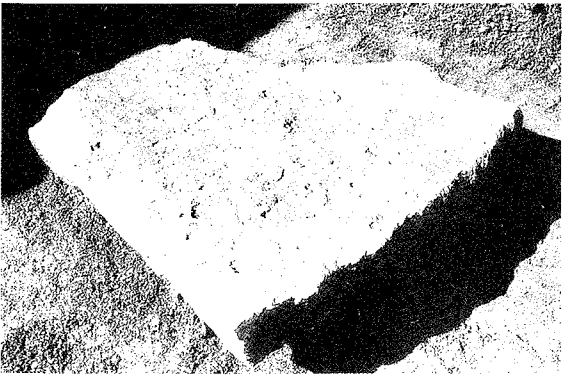
(2) 12号墓羨門～玄門通路炭化物・石出土状況



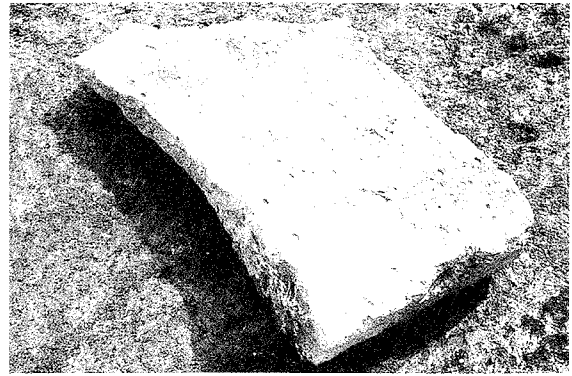
(3) 12号墓通路部人骨出土状況



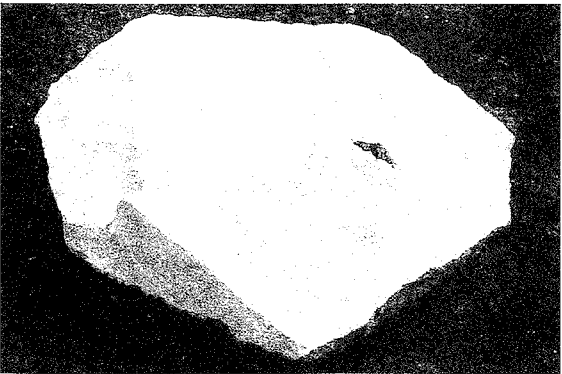
(4) 12号墓前庭部～墓道部土層堆積状況



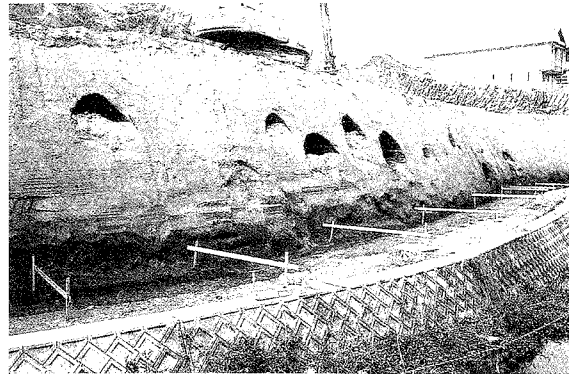
(5) 3号墓出土閉塞石1



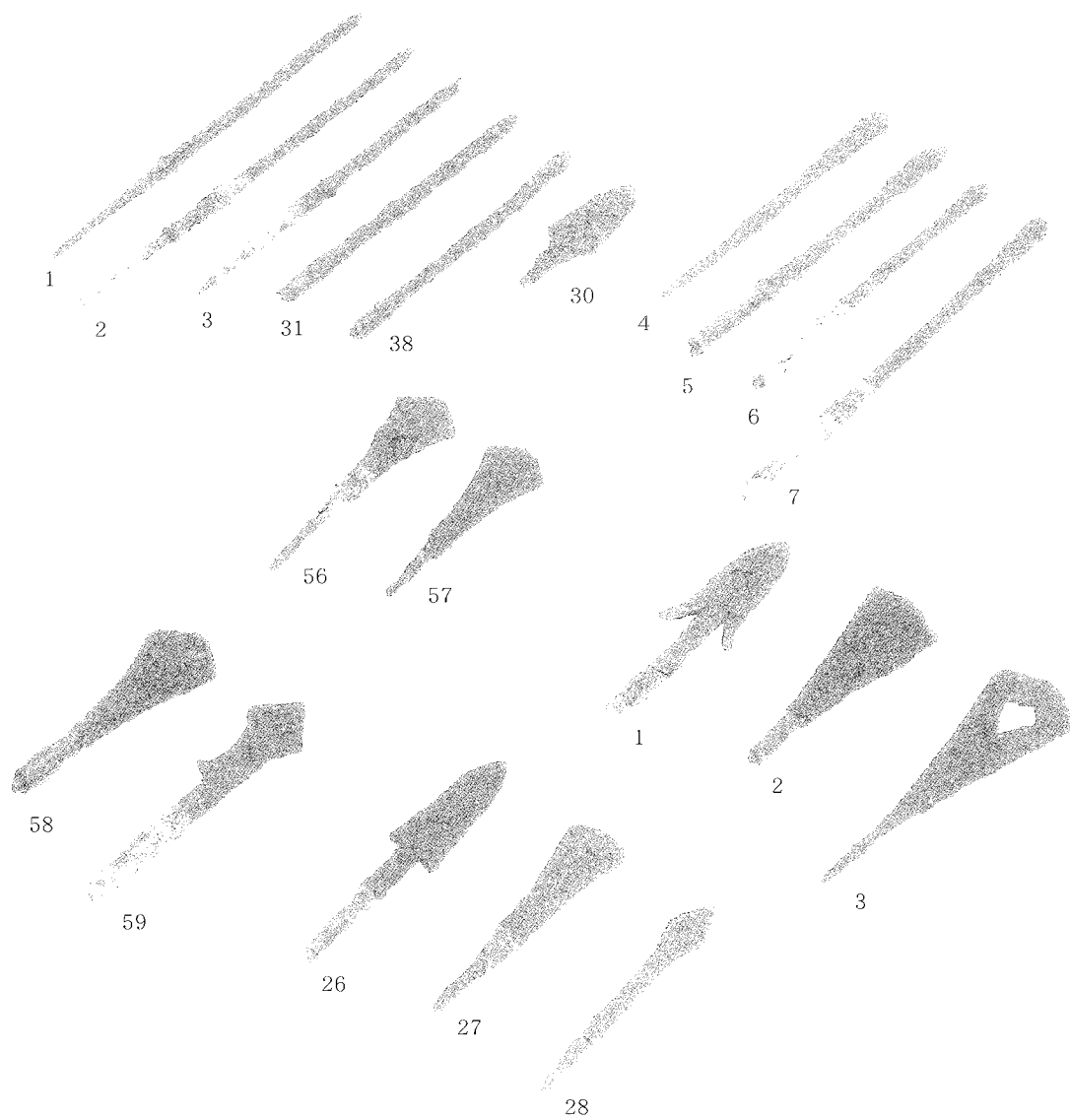
(6) 廃土出土石材2



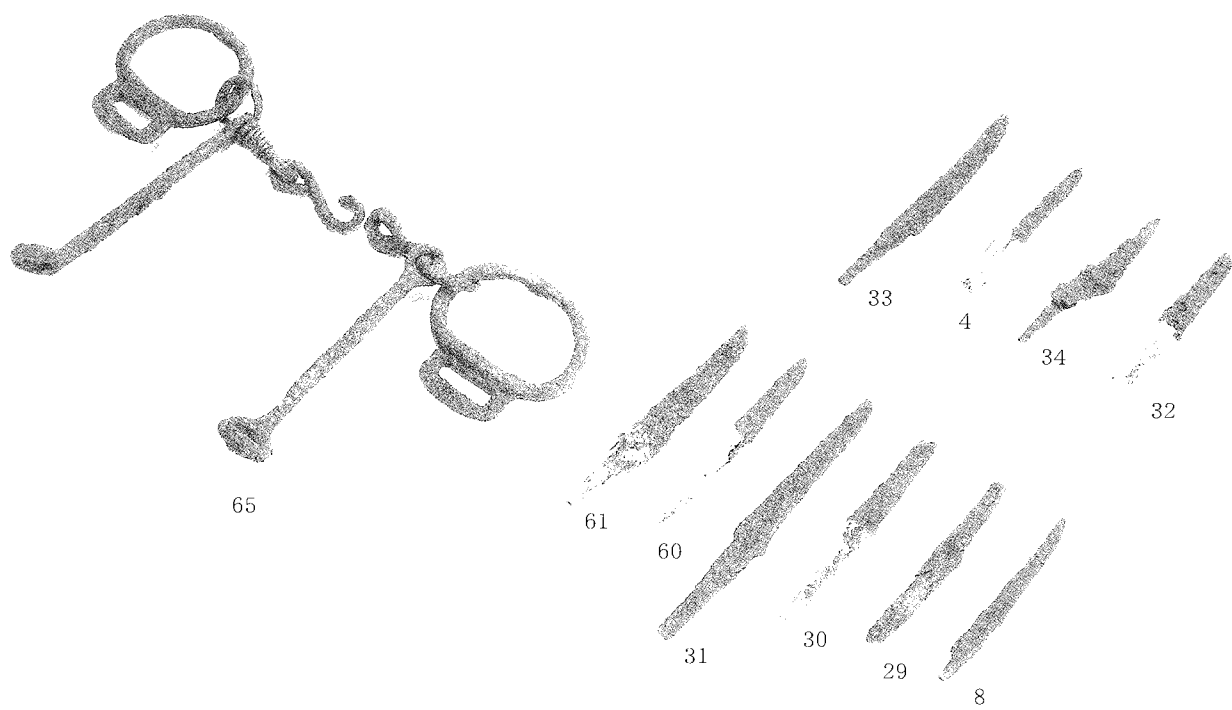
(7) 廃土出土石材3



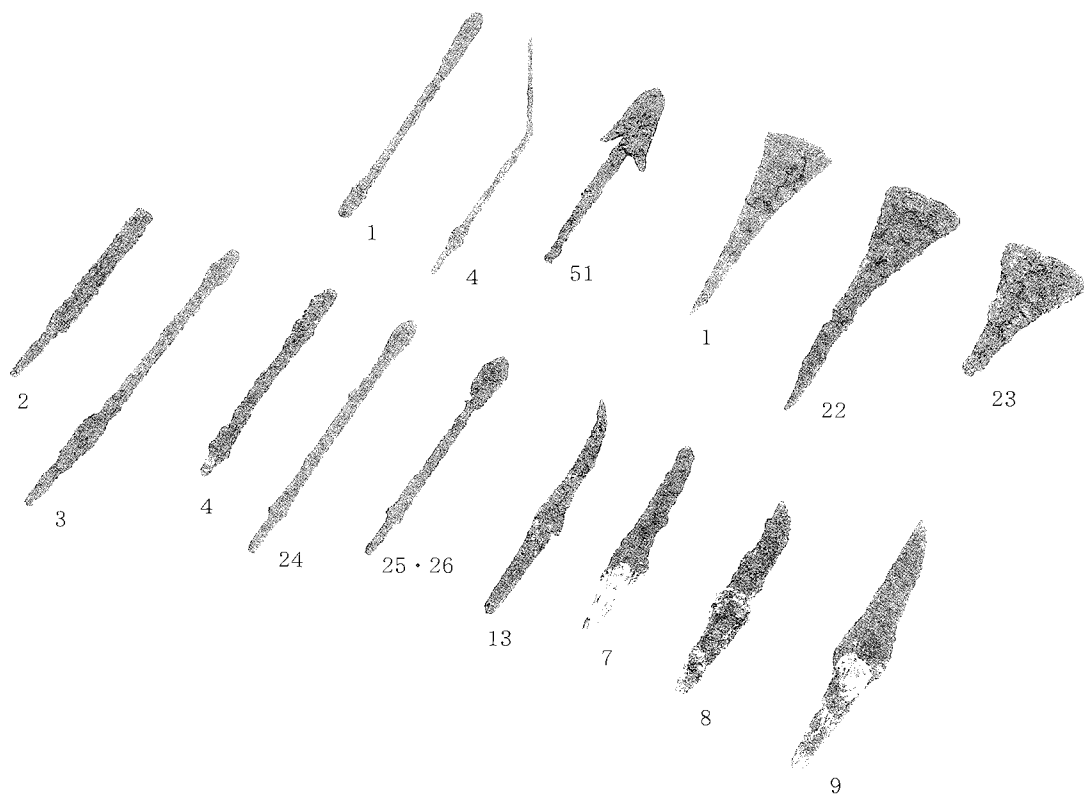
(8) 横穴群発見時全景



(1) 2·3号墓出土鉄鏃



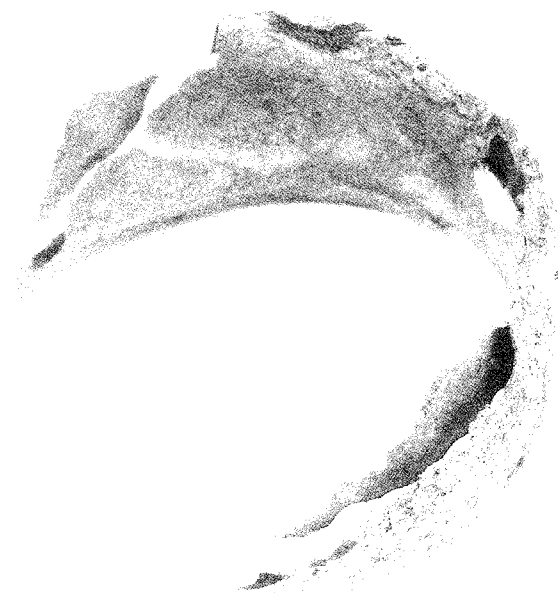
(1) 2·3号墓出土刀子、3号墓出土轡



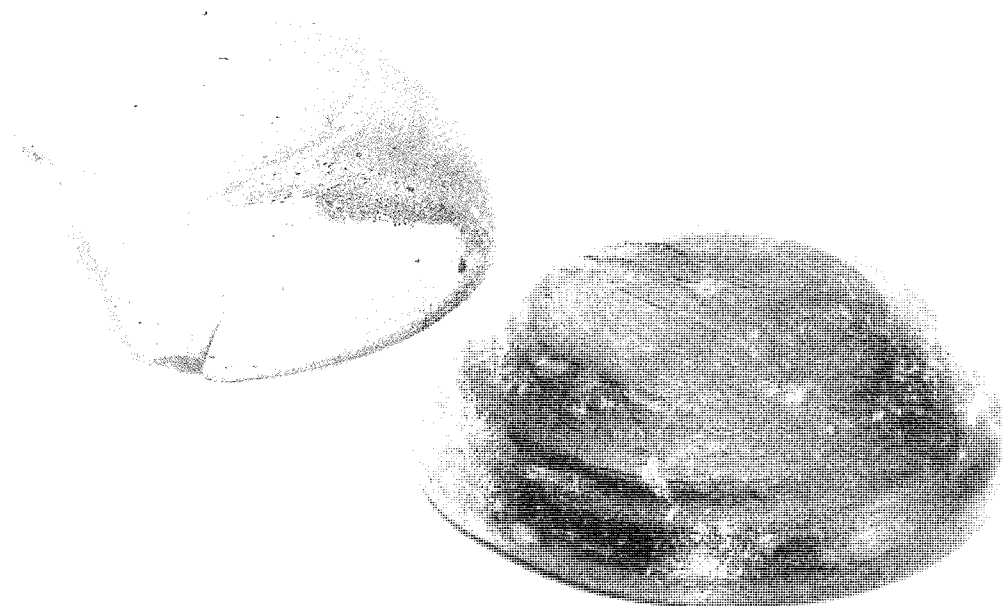
(2) 4·5号墓出土铁铍、5号墓出土刀子



(1)5・8・10号墓出土鉄製品



(1) 3号墓出土貝輪



(2) 5号墓・廃土出土須恵器

あ と が き

平成16年3月から10月まで豊岡宮本横穴群の発掘調査を行った成果をこの報告書にまとめることができました。これも一重に危険な足場での作業と暗闇での投光器によって蒸し風呂状態のなか作業をして頂いた方々のおかげであり、大変お世話になりました。

本横穴群は周辺の地形から調査対象となった12基以外にも埋没した状態で残っていることが推測されます。それらの現状の保存と今後、保存が決定した12基も含め、この報告書が遺跡の活用に寄与することを願います。

報告書抄録

| | |
|-------|---------------------------|
| ふりがな | とよおかみやもとよこあなぐん |
| 書名 | 豊岡宮本横穴群 |
| 副書名 | 豊岡小学校跡地法面保護工事 |
| シリーズ名 | 合志町文化財調査報告に伴う埋蔵文化財発掘調査 |
| シリーズ号 | 第2集 |
| 編著者 | 米村 大・杉井 涼子 |
| 編集機関 | 合志町教育委員会 |
| 所在地 | 〒861-1195 熊本県菊池郡合志町福原2922 |
| 発行年月日 | 2006年2月15日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---------|----------|-----|------|-------------------|--------------------|----------------------|-------|------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 豊岡宮本横穴群 | 菊池郡合志町豊岡 | 405 | 25 | 32° 53' 40" | 130° 47' 39" | 平成16年3月1日 ～10月29日 | 1000㎡ | 法面工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---------|----|------|------|---------------|------|
| 豊岡宮本横穴群 | 墳墓 | 古墳時代 | 横穴 | 鉄鏃、馬具、耳環、ガラス玉 | |

合志町文化財調査報告第2集
豊岡宮本横穴群
豊岡小学校跡地法面保護工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査

発行年月日 平成18年2月15日

編集・発行 合志町教育委員会

〒861-1195 熊本県菊池郡合志町福原2922

Tel (096) 248-5555

印刷／株式会社 キヨタ創研

〒861-1113 熊本県菊池郡合志町栄3415-26 (栄工業団地内)

Tel (096) 249-2722



